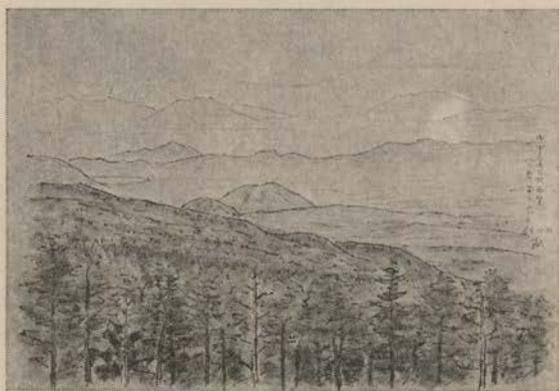


山 岳



No.82/1987



エーデルワイス・マークの

好日山莊®

全日本登山とスキー用品専門店協会加盟

- 東京銀座店 東京都中央区銀座3-5-7〒104 ☎03(561)3600・スキーショップ☎03(561)0966
■大阪店 大阪市北区曾根崎1-2-8〒530 ☎06(364)0933市 ■梅田店 大阪市北区曾根崎2-7-2〒530 ☎06(315)7985代
■セルシー店 豊中市千里中央(セルシー1階)〒565☎06(833)0123 ■大塚三越店 大塚・北区三越新館2F ☎06(203)1331代
■福岡店 福岡市博多区須崎町1-1☎092(281)3440・(291)6211

山
岳

一九八七年

山 岳 一 九 八 七 年 目 次

今日の自然保護の諸問題——いま改めて考える——	沼田 眞	7
外苑コーポ時代と錦町向井ビル時代——クラブ・ルームの変遷その三——	松田 雄一	17
クーラ・カンリ初登頂と横断山脈学術調査（一九八六年）	平井 一正	32
東京農大崑崙七一九七 ^{トモ} 峰	早坂 敬二郎	43
マシャブルム北西壁（初登攀）からブロード・ピーク（アルパイン・スタイル）へ	賀集 信	53
シャーンリッドク一九八七	根深 誠	61
昭和初期の「慶応の山」——当時在部した一部員の極めて個人的な回想より——	谷口 現吉	66
山崎安治さんと『日本登山史』	近藤 信行	75
*		
辻村伊助とその周辺	辻村 克良	103
木暮碑以前	小野 幸	110

図書紹介

* 望月達夫『忘れえぬ山の人々』(安間 莊)、中島正文『北アルプスの史的研究』(廣瀬 誠)、西堀栄三郎ほか編『加納 一郎著作集』(安藤久男)、本多勝一編『知床を考える』(関塚貞章)、藤本一美・田代 博編著『展望の山旅 山から見る山・町から見る山』(宮下啓三)、W・ウェストン、長岡祥三訳『ウェストンの明治見聞記―知られざる日本を旅して』(水野 勉)、田淵行男『山の手帖』(蜂谷 緑)、堀田 弥一『ヒマラヤ初登頂』(坂下直枝)
会報「山」図書紹介一欄……101

追 悼

* 山本吉之助氏(川崎泰男)、三谷孝二氏(西沢健二)、村井米子氏(山口節子)、中 屋健次氏(渡辺兵力)、辻 莊一氏(堀田弥一、中村太郎)、早川義郎氏(坂江善 治、谷口現吉)

支部だより

会務報告(一九八六年六月〜一九八七年五月)

△W・ウェストン来日一〇〇年記念▽

ウェストン年譜の作成について

島 田 巽 A 38

W・ウェストン年譜(文久元年・一八六一〜明治二十九年・一八九六)

川 村 宏
三 井 嘉 雄 A 41
安 江 安 宣

国際アルピニスト・シンポジウム(86松本)

日本山岳会信濃支部 A 78

英文梗概……………A 21

△編集後記V……………卷末

口 絵

目でみる自然保護の諸問題……………16 } 17

海外登山の記録……………16 } 17

秋の横尾谷（早川義郎・画）……………16 } 17

日本山岳写真の源流（杉本 誠）……………80 } 81

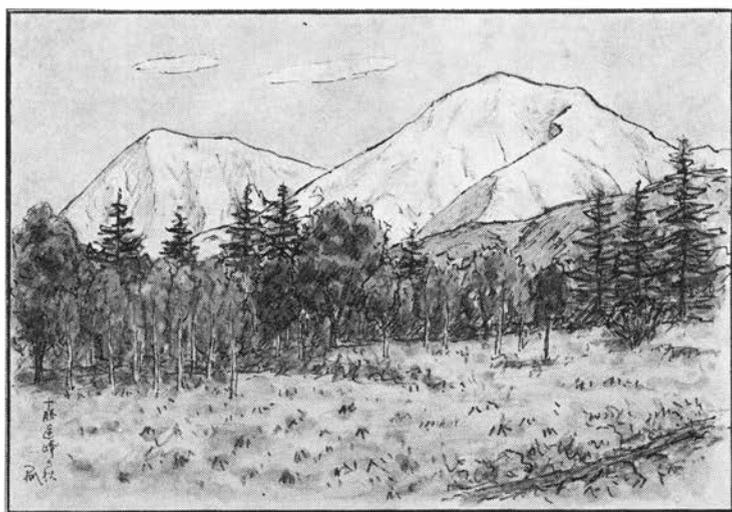
クラブ・ルームの変遷……………80 } 81

追 悼……………128 } 129

表紙挿画（富士山五合目より） 早川義郎

本文挿画 早川義郎

本文カット 牧 潤一



十勝連峰の秋／早川義郎

今日の自然保護の諸問題

——いま改めて考える——

沼田 眞

一、自然保護活動の流れ

今日いう自然保護の概念や考え方には長い歴史があり、ニコルソン (Max Nicholson)、かつてイギリスの自然保護庁長官であり、国際生物学事業計画 I B P が行われたころの自然保護部門の責任者の書いた “The Environmental Revolution” (1970) のような本にくわしく論じられている。その古い方の流れについてはここではふれないこととし、今日の考え方に直接つなぐるところをとりあげることとした。

生物学は一九世紀前半の細胞説いらい、よりミクロな対象にとりくみ、野外から実験室にこもってしまった。そのため生物学を生みだした長い伝統のある自然誌 (ナチュラル・ヒストリー) と野外生物学は衰微の方向に向った。その中で自然誌学の新しい成果としてダーウインの進化論があらわれ、これをてことして生態学という新しい分野が生まれ、野外の生物的な自然を広く見直そうという機運が生まれた。ダーウインの歴史的 (時間的) 視点に対して、地理的 (空間的) 視点から世界の生物的な自然に対した A・フォン・フンボルト (一八〇七、文化四) の使った天然記念物 (monument de la nature) という言葉があるが、この言葉は具体的に自然保護をめざした最初のものである。

ダーウィンと同じころに文学の世界で活動し、「森の生活」などでよく知られるソー（一八六〇、万延一）は、今日使われる自然保護に当る conservation of nature をはじめて使った。彼は都会から逃避した生活の中で森林の遷移を観察し、早い時期に循環遷移の考え方を提唱している。

わが国に直接大きな影響を与えたのはドイツのコンベンツ（一九〇〇、明治三十三年）で、天然記念物のほかに自然保護にあたる Naturschutz や Heimatschutz という言葉を使っている。このコンベンツが論陣をはっていたのは一九〇〇年から一九一〇年くらいであるが、その頃、ドイツで生態学を学んできた三好学がさかんに天然記念物の考え方を提唱していたし、一方国会の方では、一九一一年に、「史跡及び天然記念物保存に関する決議案」が貴族院で提出されている。こうした動きをうけて、大正八年（一九一九）に「天然記念物保存法」ができた。フンボルトからコンベンツに至るまで、自然保護の中心思想は天然記念物であり、引きつづいて大正十四年（一九二五）に山林局長通牒の形で出た「保護林設定に関する件」があるが、これは「国有林内に限って行う天然記念物保存事業」と規定されており、それは今日まで学術参考保護林の形で継承されている。今は天然記念物は文化庁、保護林は林野庁と所管が分れているが、考え方としては一つのものであった。その後、昭和二十五年（一九五〇）の「文化財保護法」に天然記念物保護も含まれたが、用語的にはべつのものである自然を文化に含ませるといふことで若干の混乱を招いた。

一九世紀の後半には、天然記念物とはちがった自然景観の美しい広大な地域を国立公園に指定し、公園的な利用をはかるとともに自然保護にも役立たせようとする考え方が生まれた。イエローストーンの国立公園（一八七二年指定）はそのほしりであった。一八九〇年に三十歳の時「デンマーク旅行用植物誌」を書いた生態学者のラウンケアは、「デンマークの自然保護」という雑誌に論陣をはり、保護地域の指定をよびかけている。イギリス生態学会は一九一二年に設立されているが、その推進者であったタンスレーは、「植物生態学と学校教育」、「わが野生的自然の遺産」といった本を専門書の他に書き、自然保護思想をよびかけた。戦後一九四九年に自然保護庁が発足した時、初代の運営委員長になっている。

わが国では、自然公園に關してはずっとおくれて、昭和六年（一九三一）に「国立公園法」が厚生省時代にでき、のちに昭和三十二年（一九五七）に「自然公園法」となり、環境庁設置後（昭和四十八年、一九七三）には「自然環境保全法」という公園的利用とは切り離したべつの法律ができた。

一方、民間の動きとしては、戦後、尾瀬ガ原の電力開發問題を契機として昭和二十四年に尾瀬保存期成同盟ができ、これが発展して日本自然保護協会が昭和二十六年（一九五一）に発足した。その後各地におこった自然破壊に対して警告や要望を行なったが、中でも異色であったのは、昭和三十七年（一九六二）に協会から文部省に対し自然保護教育の要望をしたことであつた。すなわち学校のカリキュラムの中に、明確な目的と方法をそなえた自然保護に関する内容が、たんに理科教育だけでなく、社会科、国語科、道徳教育などにも必要であることを述べているのであるが、これは非常に卓見であつたと思う。文部省は一向にとり合わなかつたが。

この間に昭和二十九年（一九五四）には日本生態学会ができ、昭和三十四年（一九五九）には「原生林保護についての声明書」が出された。これとともに学会では全国の各地域を代表する原生林もしくはそれに近いものを十か所選定し、「原生林保護地域案」として日本学術会議にもちこみ、それを契機として自然保護研究連絡委員会ができ（一九六二）。そこでの論議の結果、昭和四十年（一九六五）に「自然保護について」という勧告文を同会議会長から内閣総理大臣に提出し、十か所の自然林保護地域案が資料として附された。さらに六年後には「自然保護法の制定について」という同様の勧告を提出したが、これが後に結実して「自然環境保全法」となり、われわれがかつて選定した場所のいくつかが、原生自然環境保全地域などに指定された。この他にも大山で行われた国立公園大会で発議された「自然保護憲章」が長期の討論の末、昭和四十九年（一九七四）の環境デーに當つて発表された。

イエローストーン国立公園ができてから、自然保護に関する國際的連繫の機運が高まり、一九五七年になつて、今日のかたちの國際自然保護連合（自然および自然資源の保全のための國際連合、IUCN）が発足した。その前身のIUPN（自然の保護のための國際連合）が成立したのは戦後間もない一九四七年であつたが、その場合の狭義の保

護（PN）と広義の保護Ⅱ保全（CN）を区別したところに新しい連合の行き方の特色がある。すなわち「自然保護Ⅱ保全とは、自然および自然資源を賢明にかつ合理的に利用することである」とした。自然や自然資源を使わしてもらうことなしにはわれわれ人間の生活もなりたたないので、いかに上手に使うかということが、保全の意味での自然保護であるとしたのである。

しかし地球上の人口はどんどんふえるし、その生活を支える生物生産は果して足りるのかどうかを憂えた人たちが、国際生物学事業計画（IBP）を発足させ、約八年間にわたる国際的共同研究を行った。その中に自然保護部門（CT）があつて、世界的に重要な種や生物群集をチェックシートに記載し、保護地域の戸籍作りを行った。わが国の成果については「自然保護ハンドブック」（東大出版会）に収録されている他、英文の報告書二篇（同じく東大出版会）として刊行されている。現在また世界野生生物基金日本委員会（WWFJ）と日本自然保護協会で、植物の種と群落のレッドデータブックを準備している。国際的にはIUCN、WWFが中心になって、これらに関するキャンペーンならびに実務を行ってきた。

昭和四十七年（一九七二）にはストックホルムで国連人間環境会議が開かれたが、その時にIBPを引きつぐ形で、しかも人間（M）にウエイトをおいたMAB（人間と生物圏）計画が提唱され、ユネスコがこれを推進することになり、今日に至っている。その基本的な考え方は、人間活動によって地球上の各種生態系がいかに影響をうけるかを明らかにし、これに適切に対処していこうというところにある。文部省でもこれに対応し、「人間生存にかかわる自然環境に関する基礎的研究」という特定研究を設けて、研究の推進をはかり、後にこれは環境科学特別研究という形に拡大された。

昭和五十五年（一九八〇）にはUNEP（人間環境会議を契機としてナイロビにできた国連の環境計画事務局）、WWF、IUCNが協力して、世界保全戦略（WCS）をまとめ各国政府に送った。その中心思想は、生態的持続的開発であるが、今年（一九八七年）の二月に最終会の世界環境特別委員会が日本で開かれて、東京宣言が発せられた

が、その考え方はWCSと殆んど同じといってよいであろう。

以上が自然保護の考え方や活動のごく大まかな流れであるが、狭義の保護から保全へ、さらに持続的開発へという方向をたどってきたとみてよいであろう。

二、自然保護の具体的な問題

規模からいった場合、地球的規模（グローバル）の問題と局地的な問題とにわけることがある。チェルノブイリの事故でみられた放射能汚染のような例がグローバルな問題であることは誰でもよくわかる。ところがサンゴ礁とかマングローブの問題は地域的に局限されているようにみえるが、同じような問題がべつのサンゴ礁やマングローブでもみられることからすると、やはりかなりグローバルだといえないこともない。都市化、工業化に伴う開発による自然破壊といったことも、局地的であると同時にグローバルな問題といってもよいであろう。熱帯林の伐採は大きな問題になっているが、熱帯林の減少による酸素量の減少のようなことはさし当り問題にならないものの、わが国がそれらの木材を大量に買い付けるといった面からみれば、やはりグローバルな側面をもっているといわねばなるまい。

こうして環境問題は多かれ少なかれグローバルな性格をもっているが、ここではわが国の自然保護問題に焦点を当ててみよう。

目下のその最大の問題は森林に関するものであろう。わが国の森林面積は二五〇〇万ヘクタールで国土の約七〇％に相当するので、外国の人と話していてその話をするといいたい驚く。中国のそれは一二％、パキスタンは五％といった数字と比較するとたしかに森林国だが、そのうちの四〇％、一〇〇〇万ヘクタールが人工林なのである。県によっては五〇％、六〇％が人工林というところもある。戦争中にも森林の濫伐はあったが、戦後独立採算制の林野庁が発足し、いわゆる拡大造林政策を実行に移すことによって森林（自然林）の荒廃は一挙にすんだ。拡大造林というのは自然林の拡大伐採を意味し、その大きな標的にされたのはブナ林であった。ブナ林退治をする営林署長が榮転

するといわれたものだ。そのあとにはカラマツ、スギ、ヒノキがうえられ、四十年の短伐期で回転させることになった。前に祖母山、傾山の地域を国定公園に指定するための調査に出向いたことがあったが、祖母山では一番下の照葉樹林帯はもちろんこわれていたが、その上のツガ林帯とブナ林帯はきれいに成層していて、このようなすばらしい垂直分布帯をぜひ残したいと思った。しかし営林局の説明では四〇年伐期で回転させるのには、登山道の両側をふくめて一〇〇^{メートル}幅しか残せない、「でも、それだけあれば透けて見えないから大丈夫ですよ」というので、嘔然としたことがある。私が生態学の野外実習で学生と行ったことのある長野県の本島平とか秋田県の森吉山などのすばらしいブナ林もその後みな伐られてしまった。

昭和六十年六月には秋田市でブナ・シンポジウムを行ったが、七〇〇名もの人が全国から集って、皆の関心がいかに高いかを知り、かつ心強く思った。この時は白神山地の、最後に残された広大なブナ林に手をつけることの是非がきっかけとなって論議がまき起っていた。北海道では知られていたクマガラが本州側にはいないとされていたのに、この地域に発見された。そのことがこのブナ林の保護の必要性の一つの要素であったが、そればかりでなく広大なブナ林生態系を分断しないで、手をつけないで残すことに最大の意義がある。林野庁では調査の結果にもとづいて五年間は伐採しないことになったが、県の開発する道路の造成は予定通り行うというのは、何とも理解しがたいことである。国の方では伐採をとりやめることにしたのであるから、県にもその線で協力を求めるべきであろう。県の林道工事に関しては、それにひっかかる水源涵養保安林解除の申請が青森営林局長から青森県知事らの同意書をそえて農水省に上申され、近く工事にゴーサインが出るというのも何とも割りきれない話である。

じつは道路建設が自然破壊のきっかけになった例は多く、富士山のスバルラインの建設に当って捨土が林内にほうりこまれたり、風道ができたりで林縁の木が沢山枯れ、大分片づけた今でもその残骸をみることが出来る。道路に関しては、大台が原、石鎚山、蔵王山、秩父連峰などのスカイライン、ピーナスラインの美が原への延長問題など数多くあり、白神山も結局春秋林道問題がきっかけであった。南アルプスのスーパールイン道も、本来この道路の必要性の是

非論があったにも拘らず強行され、管理責任者となった地元が毎年の崩壊に悩んでいることはよく知られている通りである。

拡大造林で多くの失敗をしているのに、さらに似た考え方にたつて大規模草地造成がすすめられ、これを大畜産基地にしようとするのが列島改造論らしい行われた。地表をブルドーザーではがし、飛行機から種子や肥料をまくやり方であるが、地形が必ずしも平坦ではないので、土壌侵食のひどいところがおきた。もともと雑木のあったところなのでそれを残しておけばよいのに、全部はがして侵食がおきてからまた木を等高線状にうえるといった無駄なことをしている。

加藤清正の頃から行われているという阿蘇山の放牧地でも人工草地化がすすみ、自然の草原景観を特色とする国立公園地域で残念なことだと思っていたが、そこではまだ大規模の人工草地ができていないのはせめてもの救いだと思う。これは入会地で多くの地権者がかかわっているためということであるが、この場合は入会権が草原景観を守っているという皮肉な結果となっている。

知床の自然林伐採問題は最近の自然保護の一つの焦点であった。日本自然保護協会でも「国有林における森林管理のあり方を考える——いま知床で何が求められているか」というシンポジウムを三月八日に行ったところであるが、その後伐採は強行され、五月十六日には伐採木が高値でせりうりされる状況がテレビなどで報道された。林野庁ではこの伐採は法的には何ら問題がないといっているが、それは国立公園の地域区分（第二種と第三種）について環境庁と合意していることをいうのだが、それは役所どうしの話し合いであって、一般住民は関知しないことである。また人間のやることだから間違いもあるうし、適切でないこともあるう。自然保護団体や住民その他からあれだけの反対があるのを法的に問題がないといって強行するのは典型的な官僚主義といわざるをえない。問題がおこったらもう一度見直すといった謙虚さと柔軟性がほしい。

知床の原生林といっても、前に伐つたことがあるから決して原生林ではないというのも、伐採の理由にはならな

い。地球上至るところに人間の住む今日、文字通りの原生林は極めて少ないが、原生林に近い自然林はかけがえのないものである。日本のように狭い国土でかつて手が入っているから伐ってよいというなら、どこにもこの論法が適用されよう。ピーナスラインの延長線上にあったシラビソの林も原生林なら自然度9だが、一度伐つたことがあるので、自然度は7だとして道路を通す根拠にしたことがあるが、そこでは自然度を自然の価値判断に使うという二重の誤りを犯している。

北海道の大半は故館脇教授の研究によれば、亜寒帯の針葉樹林帯と冷温帯の落葉広葉樹林帯の移行帯に当たるところで、針広混交林がその特色とされるのであるが、知床はまさに、そうした北海道の特色をのこす自然遺産というべきものである。それを今回の伐採は僅かに五百三十本にすぎないとし、値段のよい広葉樹の壮齢木を統一地方選挙のさ中に伐採を強行した。チブコ運動も何のそので、メンツのためには伐らざるをえなかったようだが、とり返しのつかない愚行は今後永久に指弾されるであろう。

林野庁が派遣した調査団によれば問題のシマフクロウは伐採予定地にいなかったというが、だから伐つてもよいという論法はエコロジカルにナンセンスである。シマフクロウ、クマガエラ、オジロワシなどの重要性はいうまでもないが、その他さまざまな動物、植物、微生物を含めた生態系として手をつけないでのこすことが重要なのである。林野庁でも、最近遣伝子保存林ということをしているが、そういう考え方はMAB計画でも、つとにいられているところである。そのためにはその木は大事だがこれは伐つてもよいというのではなく、多様性をもった生態系全体を手つかずに自然の状態で維持することが必要なのである。新聞の社説でさえ、「一ヘクター五、六本程度なら切った方が森はかえって活気づく」という説明も一般論としてはうなずけよう」(朝日新聞 六十二、四、二十五)というが、ここには施業の対象として考える森林と厳正な保護区として残す森林との混同がみられる。

問題の場所は、二種、三種だからというのではなく、MAB計画でいう生物圏保護区の核心部(コアエリア)として改めて指定し、施業地域とは画然と区別すべきなのである。老齢木の伐採による森林の若返り論も戦前からいわれ

ているところであるが、今回のような伐採は、まさに羊頭を掲げて狗肉を売る類いであることは多くの人の指摘しておりである。

生物圏保護区では日本の法律の保護がないので、もう一步すすめて、世界自然文化遺産条約（やはりユネスコが推進していて、すでに九十か国くらいが加盟しているが、わが国ではまだ批准していない）によって指定することが望ましい。この種のものではラムサール条約による釧路湿原などの指定があるだけである。

三、今なぜ自然保護か

藩政時代に、それぞれの藩ごとにきめ細かな自然保護が工夫され実施されていたのに、明治になってしばらく自然保護の無法時代を迎え、日本の自然は急激に荒廃した。それが明治末年から徐々に法的にも整備されてきた。ところが第二次世界大戦前後は自然保護どころではなかった。戦争が最大の自然破壊をもたらすことはいままでもない。

戦後、その被害から立ち直り、経済的にも力がつくに従って、自然に配慮する余裕もでき、自然保護に関する調査研究とともに、法体系も整備され、施策も進められてきた。七〇年代前半が一つのピークであったといえよう。ところがその後オイルショックがあったり、経済優先の空気が強くなると自然保護は二の次になり、ツンドラや大型野生動物に対する悪影響の予測から建設にストップがかけられていたアラスカパイプラインにゴーサインが出されるといふように風向きが変ってきた。米国では、さらに軍事費優先という事態になると、科学研究費全体がカットされるばかりではなく、その中で環境関係の研究費が削られて、研究論文も急激に減るようになった。経済と軍事によって自然保護が抑えこまれた格好になっているのが現在の状況であると思う。

わが国の状況は右の米国の場合と同じではないが、ともすれば経済優先の考え方によって自然保護が抑えこまれることは同じである。昭和四十二年（一九六七）公害対策基本法が制定された頃は、経済との調和条項は削られたのであるが、その後、保全の中でも利用優先の考え方が台頭し、世界保全戦略の生態的開発でも、今年の世界環境特別委

員会の持続的開発でも開発優先思想がちらつき、将来への不安を抱かせるのである。開発と保護の調和とかバランスというのは、言うは易く行うは難しで、ちょっと油断をすると経済の方に傾斜してしまう。

ここで自然保護のありようやあるべき姿をもう一度顧みてみたい。サケ、マス、カニのような自然資源については、とりすぎれば資源が枯渇してしまうので分りやすい。捕鯨論争では日本側はつねに資源論として最大持続収量(MSY)を論拠にかかげたのであるが、大きな智慧のある動物を惨忍なやり方で殺すと非難されると、資源論も色あせてしまう。この線をすすめた生物倫理(バイオエシックス)、つまり人間対生物の倫理的規範をかざされると、資源論も立つ瀬がない。これと、やむにやまれず(自然に)生物が好きだというナチュラリスト的視点が結びつくと、自然保護としては百万の味方を得ることになる。

一方、種の絶滅によって遺伝子資源が失われることへの危惧や、捕鯨をつづけるなら米国の二〇〇カイリ内の漁獲を禁止するといった力の論理も援軍として強力である。

結局のところは、広い面積を占めた、多様性(種や群集や立地の)をもった生態系を、細切れにしないで、かつ経済の論理によらずに、長期的に維持することが大事なのである。そして、人間と野生生物、人間と自然が共存できる道をさぐらねばならない。そのような中でこそ、本当の、経済と環境の調和、保護と開発のバランスが可能となるであろう。

以上に述べたような諸問題を解決し、世の中がよい方向に向かうためには、一番の基本は教育であろう。学校教育はもちろんのこと、社会教育、生涯教育の中での自然保護教育こそがそのきめ手になるであろう。生態系の多様性やその遺伝子資源、絶滅に瀕した生物やその生息地、原始地域や景観の保護、自然資源の総合的管理、人間と自然とのかかわり、生物倫理など諸般の問題が自然保護教育においてとりあげられるべきであろう。これらをとおして人間と自然がよい形で共存できるようになることを期待したい。

目で見える自然保護の諸問題

— 白神山地の場合 —



赤石川流域、櫛石山の伐採地

ブナの巨木の切株



黄瀬川（秋田県側）伐開地。
斜面を横切るのは青秋林道



赤石川源流域。川岸まで美しい樹林が迫る



豊かに茂るブナの森



立枯れのブナについたナメコ

(白神山地／1983～1986年撮影・根深 誠)

— 知床の
場合 —

切りとられて積み
まれているB級の材。
A級はルベシベに
運ばれて売られた



切り倒された古木の
切株

(知床／1987年6月
撮影・渡辺正臣)





海外登山記録

マシャブルム Masherbrum 7821m
イエルマネンド氷河出合付近より

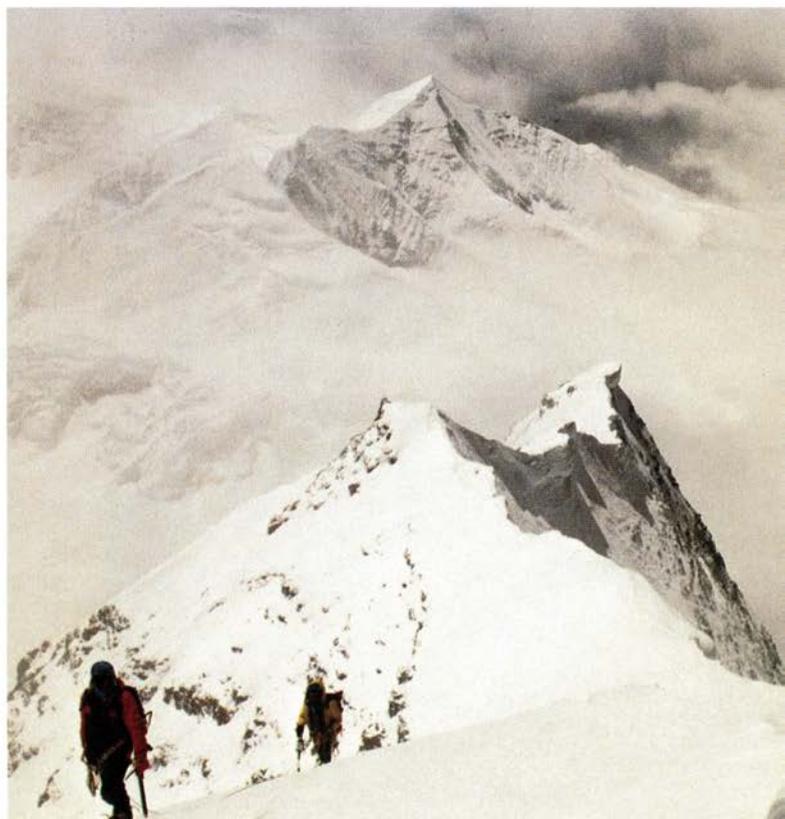


頂上稜線よりマシャブルム南西峰
Masherbrum Southwest Peak
7806m

(撮影・提供 賀集 信)

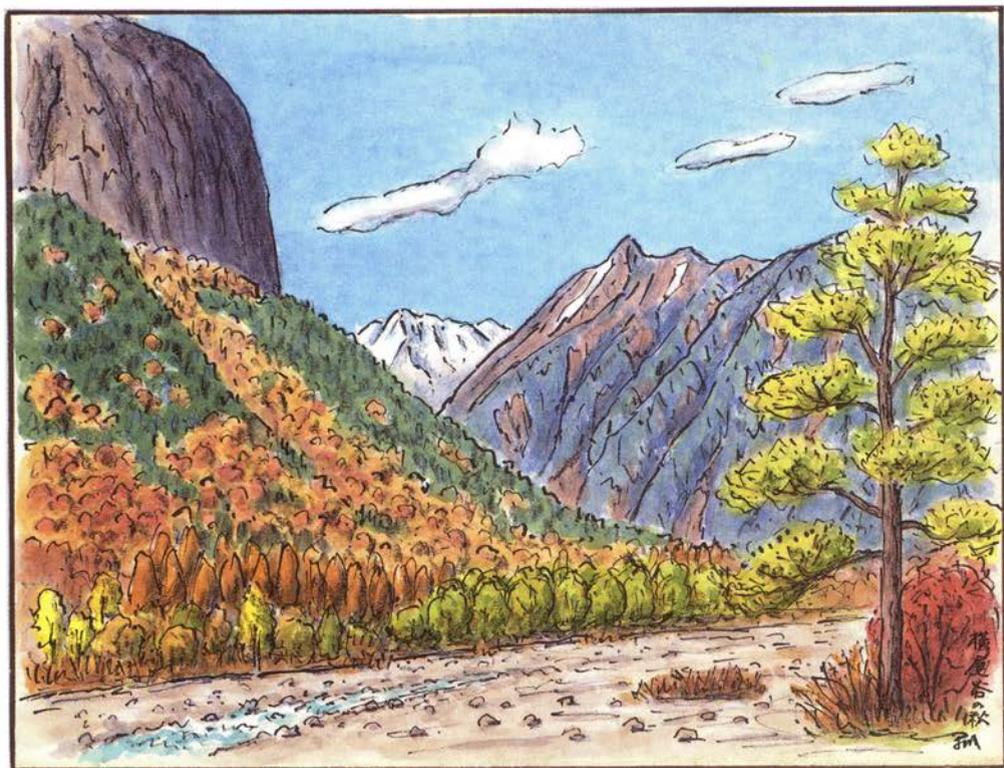


↑クーラ・カンリ Kula
Kangri 7554m。正面右
の稜線がルート。
→クーラ・カンリの頂
上直下
(提供 平井一正)



↘崑崙 Kunlunshanmai
7167m峰
(提供 早坂敬二郎)
←シャハーン=ドク
Shahan Dok 6237m
(提供 根深 誠)





横尾谷の秋 早川義郎（本文133頁参照）

《クラブ・ルームの変遷 その三》

外苑コーポ時代と錦町向井ビル時代

—クラブ・ルーム流浪の旅—

松田 雄一

本稿は 山岳第八十年に掲載された、島田巽氏による「虎ノ門時代十五年」、織内信彦氏による「お茶の水時代十五年」につづく九年間のクラブ・ルームの歴史である。

虎の門時代が戦災により終焉をとげたのに対し、楽しい思い出の多かったお茶の水ルームから離れなければならない原因は、東京オリンピックを前に日本体育協会が渋谷の神南町へ移転することになったことによる。

お茶の水ルーム の土地はもともと体協より借地する際、体協の都合が必要が生じた場合には、いつでも立ち退くことを条件にしていたことでもあり、移転後の土地が日立製作所に売却されることになったため、無条件で立ち退かざるを得なくなったわけである。

ところで移転の話がいつ頃から話題になったかについて、会報で調べてみると、早くも昭和三十六年（一九六一）一月の理事会の席上、神谷評議員により、次のようにとりあげられている。

「戦前の山岳会には基金があった。なにか行事をするためには、基金が必要である。さしあたり一九六四年の東京

オリンピック開催に伴い、体協事務室が、現在敷地内に於て拡張されることになれば、本会ルームを移転することを考える必要あり、そのためにも基金を用意しておきたい」旨の発言があり、最低五〇〇万円程度の基金を必要とすることが確認されている。この点については、昭和三十六年四月の総会において、神谷評議員より緊急動議として提出され、承認可決されている。

これに基づき五月の理事会に於て、移転に関する実行委員会が設けられ、左記十四名が委員に委嘱されている。

日高信六郎、松方三郎、渡辺公平、浜野正男、松本熊次郎、折井健一、交野武一、太田敬、石原憲治、神谷恭、藤島敏男、野口衛、松田雄一、竹田寛次。

七月の理事会に於て昭和三十七年秋に入居可能な第一青山ビルに物件も見つかり、この線にそって九月の理事会で、募金委員会を作ることが提案され、さらに十月の理事・評議員会で、クラブ・ルーム移転費用として二二〇万円、上高地山荘の建設資金として二八〇万円、総額五〇〇万円の募金を行うことが決定されている（会報二一八号）。

この募金は昭和三十七年六月末日をもって仮締切を行ったところ、四六〇口、二五五万円の申込みがあったことが報告されている（会報二二二号）。

しかしながら、その後体協の事務所がお茶の水の敷地に建てかえられるのではなく、代々木に移転することに変更になったこともあって、急いで転居する必要がなくなったためか、第一青山ビルへの入居は見送られている。その後、お茶の水の体協敷地が日立製作所に売却されるとの情報も入ったが、日立製作所としても、JACのルームの建っている三角形の敷地は利用価値がないので、お願いすれば立退かなくても済むのではないかとの希望的観測もあり、折井常務理事が一人で心配している割には、会全体のムードとしては切実感のないまま昭和三十八年の夏を迎えた。七月の理事会では、折井理事はふたたびこの問題にふれ、九月の理事会でも、「早ければ十月、おそくとも十二月には体協自体が代々木の新事務所（現在の渋谷区神南町の岸記念体育会館）に移転するので、本会としては、どうしても他に事務所を求める必要がある」ということを発言している（体協内の事務所の入居権利は日山協にあるため）。

こうして迎えた昭和三十九年四月の総会の席上、松方会長は、六月末までに立退きせざるを得なくなったルームの移転問題にふれ、会員各位に対し、強く協力方を要請している。

なにぶんにも時間もなく、資金も充分にない状況で移転先を探さなければならぬことでもあり、担当の折井理事の心労はなみ大抵のものではなかったと推察される。幸いにその方面に詳しい沼倉寛二郎東京支部委員長（当時興和不動産）の協力により候補物件が見つかった。六月四日開催の理事・評議員会においては「候補となった五ヶ所について、検分の結果、渋谷区原宿一丁目一〇四番地*の外苑コーポの地下一階（事務所二十坪、倉庫五坪）を移転先として決定したい」旨を提案し了承されている。

*その後、地番変更により渋谷区神宮前三丁目三十一番になった。

それからの一ヶ月間、東京支部委員を中心にあわただしく移転準備が行われたが、内装工事に時間がかかり、六月末の立ち退き期限までに引越すことがむずかしくなったので、二週間移転を遅らすことで、日体協ならびに日立製作所の諒承を得、実際の引越しは昭和三十九年七月十二日に実施された。

当時の記録によれば、移転準備委員会の出席者名簿には次の方々の名前が見られる。

折井健一、沼倉寛二郎、網倉志朗、竹田寛次、芳野尠夫、関口周也、小味秀純、君島久登、中保、鈴木郭之、富田美知子。

引越し作業は、東京支部委員ならびに学生部有志の絶大な協力を得て実施され、ともかく移転は約束の日に完了することが出来た。

当時の記録によれば契約ならびに改装工事については、沼倉寛二郎、松本熊次郎、牧野衛、青木昇の諸氏の格別の配慮に与った旨の記録が見られるが、このほかに折井健一氏の知らない苦労を忘れることは出来ない。

今思いかえしてみてもこの移転は、本当にあわただしく行われ、引越し後、しばらくの間は梱包も解かれぬままの仮住まいのようなものであった。

しかし、契約した時は、コンクリートの外壁のままであった室も、当時竹中工務店に勤務しておられた、前記松本、牧野氏らの協力によって両側の壁には書棚が据えつけられ、柱の部分にも木製のパネルが張られ、まがりなりにもルームらしい形が整えられた。八月十九日には新装なったルームで新ルーム披露のビールパーティーが行われ、以後三年間の外苑コーポ時代がはじまったのである。

さてお茶の水を出てから、現在のサンビュールハイツの自前のルームを持つまでの間、会は、外苑コーポ三年、向井ビル六年、さくらビル五年というように、ふたたび流浪の旅にでることとなったのである。

ふたたびというのは、戦前にも虎の門の「不二屋ビル」に落ちつくまで、横浜の高野鷹蔵氏宅……品川八ツ山の鳥山悌成氏宅……と、転々と事務所を変えていたことがあるからである。

このことについて榎有恒氏は、昭和三十九年六月十七日のお茶の水ルーム・お別れパーティーの席上、次のように述べられている。

「山岳会はなかなか流浪の旅に出るのが好きでありまして、ルームの方も転々としてまいりましたけれども、転々とするたびに、会員も増え、ルームも立派になっています。今回もその中に立派なものをお建てになるだろうと思います。」

外苑コーポ時代

の三年間の思い出には、明るく楽しい話題はなかった。一部屋しかなかったため、クラブ・ルームとしての機能を発揮することができず、図書室としても中途半端であり、集会も思うようにならなかった。また、場所が不便なこともあって来会者数もめっきり減ってしまった。オリンピックを機に来日した諸外国の山岳会の賓客をルームに案内しても、肩身の狭い思いをしなければならなかった。

なにぶん地下一階（もつとも半分はオープンになっていたが、ここは浄化槽の上であった）ということもあって、湿度も高く、部屋が狭いために梱包を解かず倉庫にしまっていた図書や、貴重な資料、絵画、装備（ヒマラヤ登山記念品）などが、雨漏りと湿気で被害を受けたこともあった。あげくの果ては、管理人としてここに住まわられてい



外苑コーポ 付近略図(会報No. 233より)

た書記の吉野昇氏が病気で倒れるという有様で、誰しもの願いは、一刻も早く、地下室から脱出したいということであった。一方会務の方も忙しくなっていた。移転早々であったが、一九六三年の五月に登山許可を取得していたエベレスト登山計画の実施も一年後に迫っていた。創立六十周年記念行事も行わなければならず、スポーツ外貨の問題も、日山協問題も解決を迫られていた。

こうして迎えた昭和四十年年度の理事会は、エベレスト登山の実施を考えて、松方会長、三田・渡辺両副会長のもと、加藤泰安、深田久弥、辰沼広吉、村木潤次郎、大塚博美、松田雄一、飯野亨の七名を加えて強力な常務理事会が編成された。

ところが、
新年度に入る直前の三月十九日、ネパール

政府は突如として登山禁止令を発表した。

そこで会は、現地調査を行うなどして状況判断の結果、当分の間、ヒマラヤ登山の実施は困難であるとの結論に達し、六月九日にエベレスト委員会を開催して、計画の延期を決定した。しかしながら、解禁になった場合には、いつでも出かけられるようにと、エベレスト体制のまま、その全エネルギーを会の内部の充実に向けることになった。

こうして、十月十四日には、創立六十周年記念の祝賀パーティーを盛大に行つた他、各種六十周年の記念事業も行われた。また会務運営上必要な各種規程の見直し整備を行い、事務態勢も強化した。因みに復活会員制度が制度化されたのもこの年であつたし、会員サービスの観点から会報も吉沢編集長の努力により月刊になった。

一方かねてから懸案であつた日本山岳協会の組織改正についても、積極的に働きかけ、松方構想として、四十六都道府県岳連（協会）の積み上げ方式により新構想がまとめられた。この推進のために各支部は、当該県の岳連に加盟する形をとることになり、四十一年五月には、東京支部も東京都岳連に加入した。しかしながらその後、それでは支部に加入していない会員が未組織登山者になるという意見も出たので、四十二年四月には、東京支部を發展的に解散し、本会そのものが、東京都岳連に加入することになり今日に至っている。

昭和四十一年五月の理事・評議員会では、松方会長より、「本年度は会員相互の親睦、会員に対するサービスの重点をおくことと、現在のルームは、あくまで仮事務所のつもりであるので、便利がよく、しかも環境のよい所へルームを移転することを提案したい。このための委員としてとりあえず、加藤、飯野両理事により原案を作成してもらいたい」旨の積極的発言があり、ただちに具体的な検討に着手した。早速、外苑コーポの一階および二階に空室があるので、一室（十七坪）三五〇万円で買取ることにしてはどうかとの情報もたらされたが、改装に多額の経費を要することが判つたのでこの件は見送られることになった。その後加藤泰安理事の尽力により、神田錦町の向井ビル五階に約四十坪の適当な空室が好条件で借りられることになったので、翌四十二年三月の理事会で検討の結果、移転する方向で準備をすすめることになった。

昭和四十二年度　の総会は、四月二十二日、ドイツ東アジア研究協会講堂に於て開催されたが、冒頭の松方会長の

挨拶で「かねてよりよい環境のクラブ・ルームをもちたいという希望をもっていたが、このほど適当な場所が見つかったので、六月末を目標に移転の準備をすすめている。できるだけ立派なルームとするため、今後の大きな問題として、会員各位のご協力をえて募金を行ない、ルームを整備したい」旨の発言があり、移転作戦が

具体的に開始された。会報「山」二六四号の巻頭には「新ルームへの期待」と題して次のような松方会長の言葉が残されている。

「よいルームを持ちたい。この希望は、ほとんど日本山岳会の歴史と同じくらいに古い希望だ。……（中略）……お茶の水時代は十余年続いた。しかし地主さんの体協が代々木に移ってしまったので、われわれも撤収の余儀なきに至った。

日本山岳会はいよいよこれで路頭に迷うのかと心配していた矢先に現われたのが、今の神宮前のルームだった。いやも応もない、有難いと思って引越したのだったが、これについては、随分、会員、会友各方面にご厄介になり好意をうけた。だがなんとといっても地下室なので、書物その他の保管には支障があり、早晚ほかに移らねばならない運命にあった。

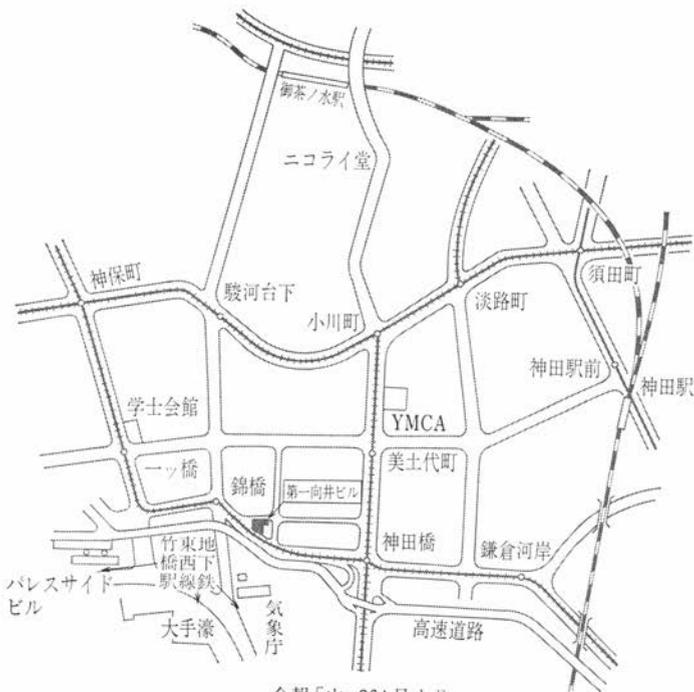
神田の新しいルームに移る決心をしたのは以上のような事情によるのだが、なにはともあれ、わが山岳会も、これで地上に這い出ることが出来るわけだ。……（中略）……

この際一躍して五階の楼上に登ろうというのである。今度は図書室も、談話室も、小さいながら四、五十人の集会室もできる。アルパインクラブなみの高望みをしない限り、いろいろ多角的に会のルームとして活用されることは間違いない。会の事務もこれとほかどることは確かだ。

しかし先立つものは、いつの世の中でもお鳥目である。幸い当面のところは、引越してできるだけだけの資金ぐりはつくそうだ。だがいずれは、大いに会員諸兄の喜捨を仰がねばならない。」

ここで ルーム基金の募金についてふれておきたい。今回の募金目標額は八〇〇万円であり、その使途は権利金六〇〇万円、内装及び備品費として二〇〇万円、一口千円としてあるが、ルーム利用者としての頻度の高

い、東京、神奈川、千葉、埼玉県在住会員には三口以上をお願いすることにした。募金委員は松方会長を委員長として、委員には過去に役員、評議員等をつとめられた長老を含め三十七名が委嘱された。



会報「山」264号より

募金申込み締切りは当初六月末としたが、募金依頼状の発送がおくれたこともあって七月五日現在で二、八一三、〇〇〇円にしか達することができず、目標額を達成するまで延期せざるを得なかった。なおこの募金は昭和四十四年三月三十一日を以て、総申込件数一、三八三件、総申込口数八、〇〇五口に達し目標を達成している。

さて新ルームの概要であるが、

〔所在地〕 千代田区錦町三ノ二三 向井ビル

五階（約四十坪）

〔位置〕 地図に示した通り、神田錦町河岸に

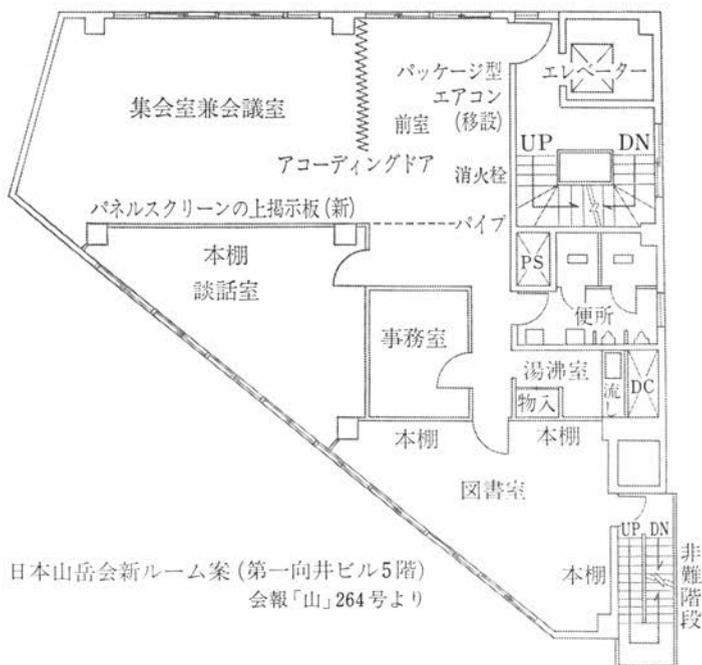
あり、高速道路をへだてて、気象庁と向い

あう位置にある

〔所有者〕 向井組

〔借用契約期間〕 五年間

入居に先立ち、四月の理事会で選ばれたリフォーム改装委員会、深田委員長以下、小林義正、牧野衛、佐藤久一朗、松田雄一、飯野亨、関口周也により、設計者である竹中工務店山岳部の中川氏の協力を得て別記配置図のような改装案が



日本山岳会新ルーム案 (第一向井ビル5階)
会報「山」264号より

まとめられた。

すなわちこの案によれば、三角形に近い建物を二本の柱を利用して、(A)集会兼会議室、(B)会談室、(C)図書室の三室に分け、それらの三室をつなぐ扇の要の位置に事務室のスペースがとられている。このレイアウトはなによりも機能を考えての設計であっただけに、非常に使い易く好評であった(会報二六四号)。

新ルームの改装は、契約後急ピッチですすめられ、内装について佐藤久一朗評議員(談話室内の陳列棚、ウエストン・レリーフの取付け、各種記念品の取付け等)、写真・絵画の取付けについては関口周也理事、電気照明関係については小味秀純氏の協力を得て行われた。松本熊次郎監事からは、各種内装用金物類、講演用テーブル、映写機用台、署名机等の寄贈をいただいた他、工事全般について監修してもらった。その他会員の池田光二氏からは書棚のガラス等の寄贈をいただいたし、瞬間湯沸し器、ステンレスシンク、FRP応接セット等については、

佐藤テル、川森左智子、松本態次郎氏らの協力で、メーカーより寄贈していただいた。

その他、多くの会員から物品、図書等の寄贈をいただいたが、なかでも、松方三郎氏からは、同氏愛蔵のシユラギントワイトの作品、「カンチエンジュンガ」のプリント画、山里寿男画伯からは、「ユングフラウ」の油絵、「湊沢より北穂高」の水彩画の寄贈を受けたことは、何よりの贈りものであった。

今回の新ルームで

思いきって予算をかけたのは図書室の充実であった。そのために、移動レール付書架コンパックを購入したほか、図書用ラック、雑誌架、マップロッカー、閲覧用テーブル等の購入が出来たことは、特筆に値する。

新ルームの引越しは、例によって各大学山岳部OB・現役の協力を得て昭和四十二年六月十八日、三十日の両日に行われたが、東大山の会の山上良夫氏（中央運輸）には、トラック輸送の面で多大の協力を得た。参加した諸兄の氏名は紙面の関係で省略するが、会報「山」二六八号に詳しく出ているので参照いただきたい。

ルーム移転の問題でもう一つの問題は、外苑コーポの所有者、日本建設協会より、権利金を有利な条件で返却してもらえるか否かの問題があった（中途解約であるため）。この点については、吉野氏の後任として書記に採用された川瀬伊三郎氏により好条件で六月末日を以て解約できることになったことを付記しておきたい。

さて新ルーム

の印象はどのようなものであったのだろうか。この点について会報「山」二六六号に島田巽氏が、「新ルームのために」と題して書かれているので引用させていただく。

引越も無事に完了したので、七月に入って早々、日本山岳会の本拠をはじめ訪れたが、新ルームの初印象はなかなかよかった。

専用の表玄関というわけには、部屋借りの身分だからゆかないが、それでも五階まで自動式エレベーターで直行すると、この階、約四十坪の全床面積がわがJACの領域なので、これまでの狭い地下生活の仮住まいにくらべると大違いである。スチール書架の並んだ図書室、ソファアのある静かな談話室、四、五十人は大丈夫という集会室が、そ

れぞれ独立して配置され、会の生活水準もだいぶ向上したことになる。

その上、この新ルームからの眺めは、「都会的山頂からのパノラマ的展望」としてちよつとしたもので、初訪問の私などいささか驚かされたのである。南から西へと広く横長に開かれた窓からは、首都高速道路が見おろされ、その彼方には皇居の森が一面に拡っている。私が訪れたのは日没時であったが、巨大な二条のコンクリートの自動車路のこちらへ向ってゆつたりと傾斜しているさまは、あたかも、氷河のうねりを連想させ、そのハイウェイに接しているパレスサイド・ビルは、まさに氷河の側壁を形づくっているし、さらに右手にはコニーデ型の武道館のシルエットも望見される。皇居の緑は森林限界のように見え、遠くその上には霞ヶ関ビルという独立峰が地平にそびえ立っている。——これはまあ私個人の幻想的印象に過ぎないが、ともあれ一見に値する景観であることには間違いない。……(後略)

*

ルーム移転

の記念パーティーは九月八日夜、一一八名の参加者を得て盛大に行われた。夜の会合にはほとんど姿を見せない田部重治、近藤茂吉両名蒼会員も出席され、また久しく病を得て臥しておられた加藤泰安常務理事も新ルームに初めて姿を見せた。この新ルームは加藤泰安氏の絶大な援助によって持つことが出来ただけに、お元気になるだけで出席されたことは何よりであった。また川森左智子評議員の努力で念願のクラブタイが、この前日に出来上り、お揃いのクラブタイを着用して集まる事が出来たことは、クラブライフの充実を目標にしていた当時の会にとってまことにタイムリーというべきことであった。なお新ルームの披露は、翌年の三月八日にも、報道・出版関係者、会員外での募金協力者を集めて行われたことも併せて付記しておきたい。新ルームに移ってから、川瀬氏に代って会員永原輝雄氏が書記に就任されたほか、新たにライブラリアンとして、大越聡子さんが就任され、図書室の機能は急速に充実していった。年末には、当時丸善で開催された「世界の山岳地図と本・即売展」に出品された地図一揃え一三四点も購入したほか、地図については武田満子さん(国土地理院)に担当委員をお願いして充実をはかったことも記録にとどめたい。

会報二七三号には、永原書記により「山小屋繁盛記」と題して、外苑コーポ時代とくらべて向井ビルになってからの来会者が、いかに多くなつたかを比較したデータが記録されているが、年間来室者二、九六三名のうち、前半一と六月中の外苑コーポ時代が合計六八四名、後半向井ビルになってからの七、十二月が二、二七九名で実に七七〇を占めていることからみてもいかに増えているかがよくわかる。この原因として同氏は、交通の便、施設の優秀さに加えて、居心地のよいことを上げているが、移転計画を推進した当事者として、ホツとしたことはいうまでもない。

向井ビル時代

で特筆すべきことに、昭和四十四年三月一日、秩父宮妃殿下が、ルームへお立寄りになられるという光栄に浴したことである。

この日妃殿下は、銀行クラブで行われた第五回秩父宮記念学術賞授賞式にご臨席の帰路、本会の招きに応じられて、お気軽にお立寄りになられ、榎、松方氏の案内で、図書室、談話室、会議室などをご覧になられた。

アルプスにおける若き日の宮様のお写真の前では、榎氏のご来訪は、本会の歴史に残る、光栄の一時間であった。しげなお時間をお過しになられたとのことである。妃殿下のご来訪は、本会の歴史に残る、光栄の一時間であった。

さて向井ビルに移った昭和四十二年は、本会にとって国際的にも記念すべき年となった。本会がジュネーブに本部をもつUIAA（国際山岳協会連合）の総会で日本を代表する山岳団体として、加盟を承認されたのである。翌年のロンドンでの総会には、吉沢副会長を派遣して、謝意を表した。一方国内においては、谷川岳遭難防止条例が施行され、文部省の登山研修所が立山の千寿ヶ原に開設されている。

昭和四十三年の二月には、故磯野計蔵氏のご遺族より、同氏の蔵書三四五冊の一括寄贈の申し出を受けた。本会はこのことを、「磯野記念文庫」として、従来の所蔵本とは区別して保管することにした（会報「山」二七五号）。

昭和四十三年四月

の総会で、松方会長より三田幸夫氏に会長のバトンが渡され、三田会長、吉沢、深田両副会長による新しい体制に変わった。エベレスト体制を解いて、これからは本来のクラブライフの充実に当てようとした途端、八月十九日のカトマンズ発の外電は、ネパール政府がネパール・ヒマラヤの三十八座につい

外苑コーポ時代と錦町向井ビル時代



(上) お茶の水ルームのあたり
(下・左) 外苑コーポ
(下・右) 錦町向井ビル
(いずれも 1987 年夏撮影)

て解禁するというニュースを報じた。

そのために、ルームはにわかには忙しくなった。翌四十四年の四月には、第一次のエベレスト偵察隊を急拠派遣することになり、それからのルームは、エベレスト登山一色に塗りつぶされていった。七月一日には向井ビルの四階の会議室を借用して、エベレスト登山の準備事務所を開設した。こうしてエベレスト登山の残務が終了する翌年の十二月末日までの間、向井ビルの四・五階は本会が使用することになった。この間の向井ビルの想い出も多いが紙面の関係もあるのでここでは割愛する。

エベレスト登山の騒ぎが一段落して、ふたたびルームにも静かな日が訪れた。昭和四十六年度こそ、支部との関係を中心に会の内部の充実を計ろうとしていた矢先の三月二十一日、深田久弥副会長が茅ヶ岳で急逝するという事故に直面し、会は深い悲しみに包まれた。この年の四月の総会では深田副会長の後任として成瀬岩雄氏が選任された。

昭和四十七年度の総会では、三田会長より、上高地に山岳研究所を建設する計画が公表され、総予算一〇〇〇万円の中の五〇〇万円を会員から募集することになった(会報「山」三二五号)。

この年の六月をもって早くも、向井ビルとの間の賃貸借契約期間の五年間が経過した。本会としては、さらに五年間の契約更改を希望したが、向井ビルの都合もあって契約更改はむずかしいことになった。そこでとりあえず向う一年間の延長を認めてもらい、この間に移転先を探すことになった。

ここでも自前のルームを持たない悲しさが、現実の問題となった。そのため昭和四十八年三月の理事・評議員会で、交野武一、沼倉寛二郎、松本熊次郎、板倉勝正、伊倉剛三の五名よりなる「ルーム移転準備委員会」が組織され、この年の四月の総会で改選された今西錦司会長、中屋健次、織内信彦両副会長の体制に代った直後の五月六日・十四日、住み持のよかった向井ビルに別れを告げ、本郷湯島のさくらビルへと、ふたたび流浪の旅に立ったのであった。

〔付記〕

この原稿をまとめてみて気がついたことですが、お茶の水——外苑コーポの引越しについては、ほとんどすべてを今は亡き折井健一氏がひとりで行っていたため、事実関係の確認には、大変手間どりました。なかでも、青山第一ビルの申込みをキャンセルした経緯などについては、当時の役員や関係者に尋ねてみましたが、どなたからも、明確な情報は得られませんでした。なせもっと早く折井氏に原稿をお願いしなかったかと悔まれた次第です。本稿を見て、お気付きの点があれば教示いただきたく存じます。

なお、参考までに外苑コーポ時代の入会者の会員番号は五七六三番から六二九七番までの五三四名であり、向井ビル時代の入会者は六二九八番から七五八八番までの一、二九〇名です。従って七五八九番以降の会員にとっては、今回紹介した二つのルームは歴史の中のルームである訳であります。

当時をふりかえる意味で、今年の初夏の一日、外苑コーポと向井ビル、それになつかしのお茶の水のルームの跡を訪れてみました。

外苑コーポの周辺は、かなりビルが建て込んでおりましたが、外苑コーポの建物そのものは、二十年前のままでした。当時ルームがあった地下一階には、K・T・R（株）香取という会社の看板がかかっていましたが、繊維会社の倉庫・作業場に使われている感じで不在でした。向井ビルの方は周囲の環境はほとんど変わっておらず、なつかしい姿で私を迎えてくれました。一方お茶の水のルームの跡は、二十九ページの写真の通りで、日立製作所本社の白亜の高層ビルは、さしづめ、松方氏のいわれるコンコルディア氷河の奥の巨峰そのものの感じでした。

両クラブ・ルームの内部の写真（口絵ページ参照）については、適当なものがなくて苦労しましたが、牧野衛氏の協力を得てどうにか揃えることができました。記して謝意を表します。

クーラ・カンリ初登頂と横断山脈学術調査（一九八六年）

平井 正

はじめに

一九八六年三月から六月にかけて、神戸大学は、中国の東チベット、四川地域に、日中合わせて四十二名からなる学術登山隊を派遣した。登山隊は、神戸大学山岳部とそのOBら一二名からなり、プータンとチベットの国境近くにそびえる世界第二の処女峰、クーラ・カンリ（七五五四¹⁾）の初登頂に成功した。一方、学術隊は神戸大学の専門の教官八名からなり、クーラ・カンリ周辺および学術の宝庫といわれる東チベットから四川省にかけて、昆虫、植物、地形、地質、社会、民族、文化、医学などの分野で、外国人として世界で初めて学術調査を行い、多大の成果をあげた。

登山は五人の中国人高処協力員の支援のもとに、また学術調査は中国科学院の四人の研究者との共同研究によって行われ、日中友好にもいささかの貢献をした。以下にその概要を報告する。

*

クーラ・カンリは一九二二年、インド測量局のミード (Meade) 少佐とベイリー (Bailey) 大尉によってはじめて測量され、その存在が世に知られた⁽¹⁾。しかし、その神々しいまでに荘嚴な姿を我々に見せてくれたのは、一九五八年、単身プータンに入った中尾佐助氏の写真が最初である⁽²⁾。さらに一九六三年、スイスの地質学者、A・ガンサーが、中尾氏と同じくプータン側からこの山の写真をとり、世に紹介した⁽³⁾。天を制するかのようにそびえるこの独立峰は、世界中の探検家、登山家の胸をゆさぶったが、この山はプータン国境から北へ離れ、中国チベット自治区に位置していたため、何びともその山のふもとまですら近づくことを許されず、幻の山として長い間孤高を保っていたのである。

神戸大学山岳部、山岳会はシエルピ・カンリ（七三八〇⁴⁾）の初登頂（一九七六年⁽⁴⁾）のあと次の目標をチベットにおいた。そして一九七八年、ナムチャバルワを第一希望、クーラ・カンリを第二希望

として、中国に申請書を提出した。しかし、当時、中国は未知の国であり、手紙はすべてなしのつづでであった。一九八〇年、私は機会を得て訪中し、中国登山協会に史占春氏をたずねた。これ以後、度重なる訪中の機会と、史占春氏らの訪日の機会をうまくつかんで、何回となく交渉を続けた。交渉は難航し、目標も二転三転したが、決してあきらめなかつた粘りと、幸運と、そして多くの人々の支援のおかげで、とうとうクラー・カンリの許可がおりた。一九八四年十二月の末であった。

クラー・カンリもそうだが、その周辺の地域は、いまだ外国人の目にふれたことのない地域である。そして、さらに東、横断山脈をこえて四川省に至る地域は、いまだ外国人による學術調査がいつさいなされておらず、學術研究の宝庫といわれ、関係者にとつて垂涎の地である。⁽⁵⁾

クラー・カンリの許可をてこに、この東チベットから四川に至る學術調査の許可をとるための交渉が、中国登山協会の支援のもと、中国科学院と始められた。そして、これも幸運が手伝つてちょうど一年後、一九八五年十二月、待望の許可がおりた。これら二つの許可は、いずれも世界中から殺到していた申請をさばいての結果であり、中国登山協会および中国科学院のなみなみならぬ配慮によるものであつて、感謝にたえない。

横断山脈ごえの交渉と並行して、偵察隊派遣、組織作り、準備などがすすめられた。

クラー・カンリは、前述したように、南面からの写真があるだけに、北面からの情報は全くなかつた。一九八五年四月、三名からな

る偵察隊（緒方俊治、長谷川浩、尾崎久純）が派遣された。⁽⁶⁾ 彼らは少ない日数をフルにいかして、五七〇〇メートルまで登り、登路を探つた。彼らの結果を検討し、登路は西尾根と決定した。ただ上部七千メートル付近に黒々とした岩壁があり、これが最後まで懸案として残つた。

神戸大学には、神戸商大の伝統を引きついでいる神戸大学山岳部、およびそのOB団体である山岳会があり、登山と探検の分野では輝かしい足跡を世界に残している。このたびの計画でも、山岳部、山岳会がその中心になって推進役をつとめてきた。しかし、學術隊組織の関係もあり、計画の母体としては、神戸大学が大学全体の計画としてとりくむという形になった。

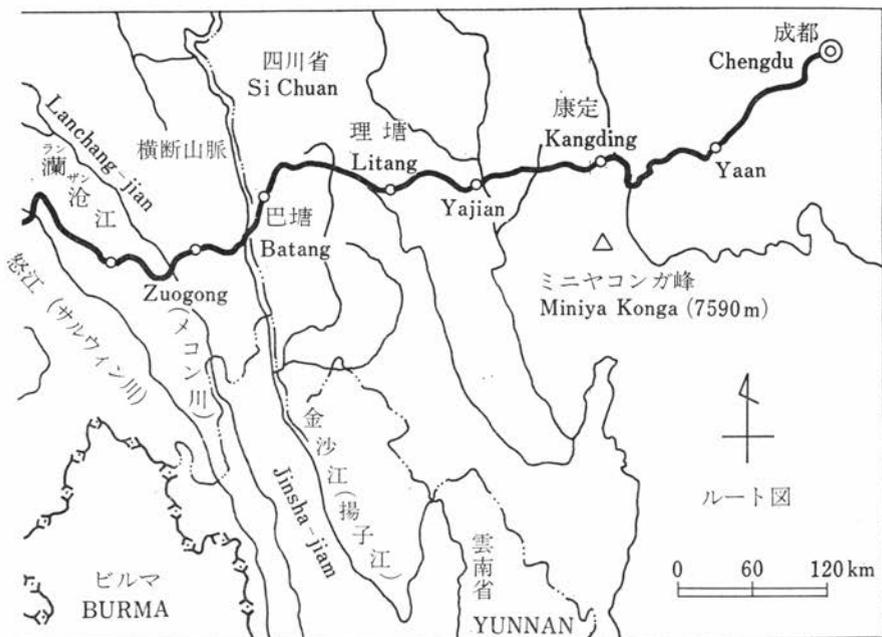
神戸大学としては史上最大規模の學術登山隊が組織された。世界中の関係者の注目する検舞台での活躍にふさわしい陣容が整つた。朝日新聞、テレビ朝日の同行取材もきまつた。

やり残したことは何ひとつなく、栄光の帰国を心に念じて日本を出発したのは、一九八六年三月九日であった。

ベースキャンプ

三月十二日、北京、成都を経由して、空路ラサに着いた。何年も夢にみたチベットの大地をふむ。

海路上海を経由して先発していた登山隊、青海を越えて北京からトラック、ジープなどを運転してきた運転手などを含めて、四十二名全員がここで始めて顔をあわす。広いラサ飯店の食堂もせまく感じるほどの、それはもう大変な数であった。計画の成功と日中友好を祈つてビールで乾杯しながら、私はあらためて自分の責任を痛



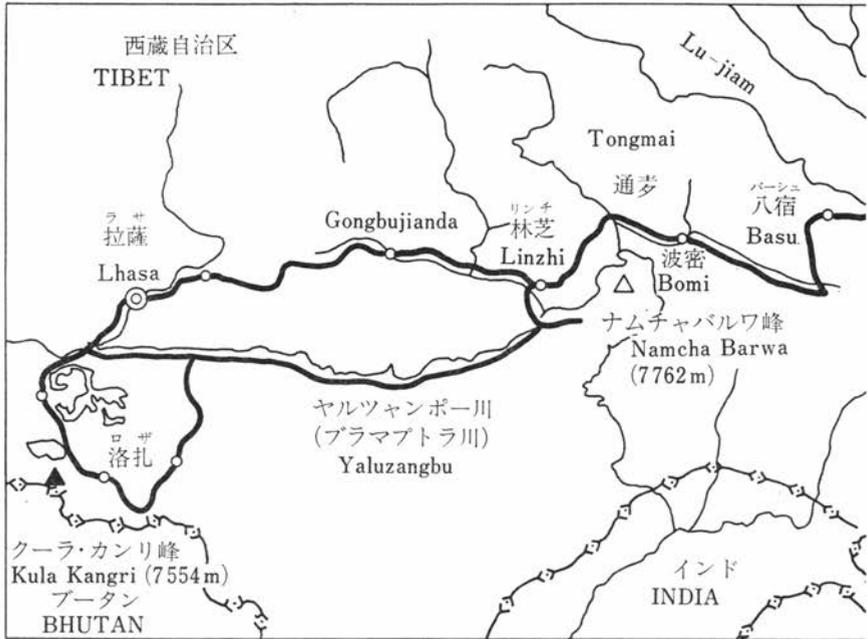
感じ、全員の無事を神に祈った。

三月十五日、トラック2台、ジープ1台、マイクロバス1台の本隊がラサを出発する。すでに一昨日、トラック1台と共に出発した先発隊を追う形となる。出発がおくれたのと、途中1台のトラックが路肩をはずし、転落寸前になったトラブルのため、この日は浪カ子に泊る。その翌日、クーラ・カンリは、蒙達拉(五二六六)で完全に我々を圧倒した。衛星峰チュビエソン(カルジャンとも言う、七二六五)を従え、山頂から雪煙をふきあげ、堂々たる姿でそこにあった。この山は、ラサをとりまく四つの聖なる山のひとつで、神のすむ山——天帝の峰という意味である。ふもとの哈龍寺には、一五〇年前この山に登った聖僧の足跡が残されていることから、信仰の対象であったことが考えられる。「天帝の峰」にふさわしい、すばらしい独立峰であった。

洛扎(三八〇〇)で一泊し、BCに入ったのは三月十七日であった。広大な扇状地の末端にあり、高度四五〇〇。気温は低く、風が強い。砂嵐の日が続いた。夜、ハレー彗星を見る。

学術隊は、BCを中心に、各専門分野に応じて調査活動を開始した。昆虫・植物班は拉康に、地質・地形班は曲水、沢当、措美の一周へ、人文・社会班はBC近くの村落調査に、それぞれ展開した。調査旅行から帰ってきた学術隊員は、料理、天気予報など、いろいろな面で登山活動を助けた。ABCまで新鮮な肉や野菜を荷上げした学術隊員もいるなど、登山隊とのチームワークがよくとれた。

第一キャンブ



登路を予定しているクーラ・カンリの西尾根末端までは、直線距離にして約一五*あり、まだABCとC1の二つのキャンプを必要とする。

ABCまでは、六日間、のべ六三頭の馬とヤクを使い荷上げした。三月三十日、ABC(五三〇〇)が、大きな氷河湖の近くにたてられた。ここまではチベット人が、放牧のためにあがってくる。石囲いの泊り場もある。隊員は、BCとABCの間を何度も往復して順応につとめた。

ABCから約一*の凍結した氷河湖を渡り、セラック帯をぬけ、約一〇*の長大な氷河をひたすら登りつめたコルに、三月二十五日、C1(五七〇)が建設された。ABCからC1への荷上げは、中国高処協力員五人の力に負うところが大きかった。いずれも武漢地質学院の山岳協会から派遣された若者で、このうちの二人、李致新と王勇峰はナムナニ隊員でもあった。単調な、つらい荷上げに彼らはよく耐えた。とくに李と王はC2までも登った。

カラコルムの氷河とちがって、この氷河には積雪がほとんどない。歩くところはすべてむき出しの水である。したがって、ヒドンクレパスをおそれてのアンザイレンも必要がない。コルのC1の周辺のみ雪におおわれているが、カラコルムでよく見たスノーレックには程遠い。強風と乾燥気候と、少ない積雪量のため、氷河は乾燥地帯特有の様相を呈している。

C1は昨年の偵察隊の最高到達点である。ここから氷河は、コルを境に流れの方向をかえて、ゆるやかにブータン側に流れている。昔ここがチベットとブータンの交易路のひとつであったようで、タ

ルチヨ（チベットの祈禱の旗）の残がいやヤクの頭骨が見られた。

風との闘い

C1からいよいよ本格的な登攀が開始される。まず、西尾根上部に出るためには、約四〇〇呎の水壁を突破しなければならぬ。この水壁は約六十度から七十度にも及ぶ傾斜が続き、低温と強風のため、ルート工作は遅々として進まなかった。

BCから仰ぎ見るクーラ・カンリは、雲ひとつない快晴に輝いているが、C1からの無線で、風が強くて動けない、テントの中で待機している、と知らせってくる。風が弱くなる正午近くになって、やっとルート工作隊が出發する。その頃BCは砂嵐に包まれ、テントの中は砂だらけになり、息もできない。このような日が何日も続いた。おそく出發したルート工作隊は、少しでもルートをのぼさうと日暮れまで水壁にかじりつき、テント帰着はおそくなり、苦しい日が続いた。

四月一日、C2（六二〇〇呎）が建設された。西尾根は、支尾根が複雑に派生していて、クレバスや、ステップ状の、短い急峻な水壁から成っている。C2への荷上げと並行して、強風について西尾根上部へのルート工作が続けられた。

北京気象庁発表の高層気象図のファックスを毎日受電しているが、なかなか好天のきざしがみえない。モンスーンの前の好天はいつくるのか。たまりかねて、BC近くの村の長老をたずねて、天気に関する村の伝承をきく。

「ブータン側から、頭の赤い小さい鳥（チャマという）の群れが村

に來たら、風は弱まり天気はよくなる。そのときを狙って種まきをする」。

渡り鳥がヒマラヤ山脈をこえるときは、高層気象が安定しているという事実と、この伝承は相通するものがある。早速上部テントにチャマの動向に注意せよと伝える。

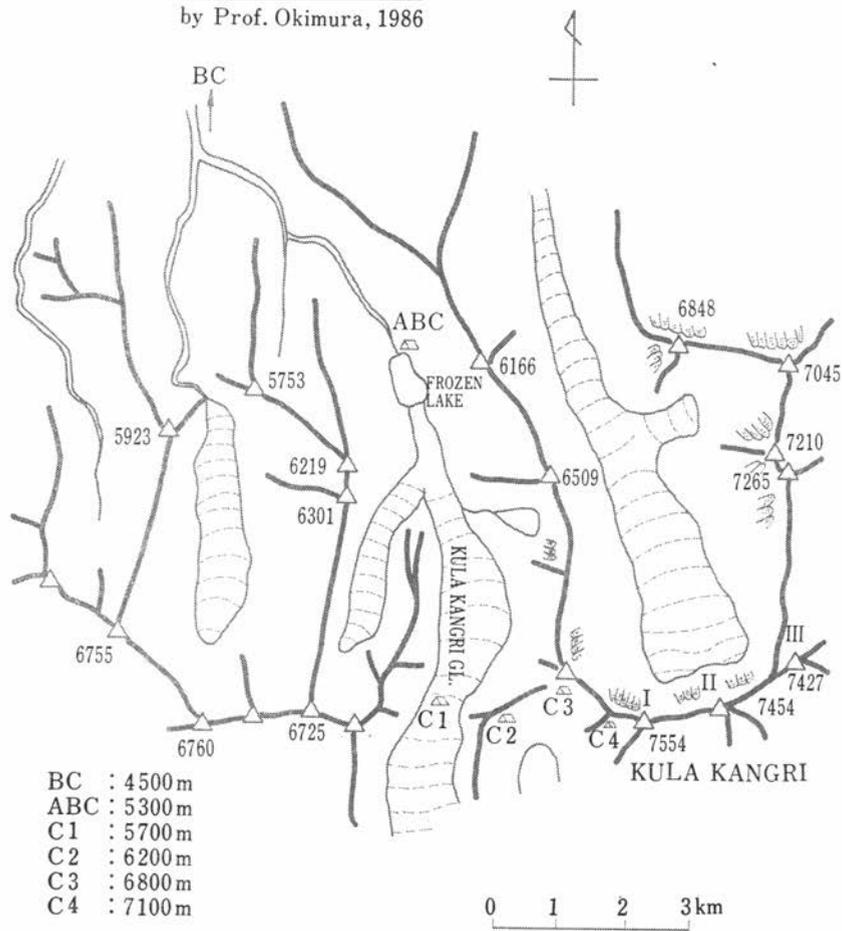
気温は低く、時ならぬ大雪がラサにふるなど、今年は異常気象だという。村では種まきが始まったが、上部では風は依然として強く、やっと作ったC2も、四月四日の夜の強風でテントフレームが折れ、その破片でテントが破れ、計画が一頓座した。またABCでは、張り方の悪かったテントが根こそぎめくれ飛び、中に入っていたものが風で四散するという事件も起きた。

体調をくずして、BCに静養における隊員もふえてきた。風はいつおさまるか、内心焦りを感じる。

アタック

四月十一日、六八〇〇呎の地点にC3が建設された。C3の上部、約七〇〇呎付近に懸案であった問題の黒岩がある。黒岩は堆積岩で、もろく、急峻で、直登はむづかしい。黒岩の基部までは問題はない。ここからブータン側をトラバースしてルートをさがす。幸運なことに、約四十度の傾斜を二五〇呎ほどトラバースしたところに、頂上稜線につきあげる雪の斜面を発見した。そしてこの斜面の基部にアタックキャンプ（C4、七一〇〇呎）をはることにした。しかし、このあたりは傾斜が急で、テントを張る場所がない。緒方登攀隊長は決心し、斜面の雪をけずって、四人用テント一張りをは

Sketch Map around Kula Kangri
by Prof. Okimura, 1986



るだけのスペースを作った。この土木工事に二日費した。四月十六日土木工事を終え、全員いったんC1に終結し休養することにした。四月十七日、私は、ABCにいて指揮をとっていた岡市登山隊長と共にC1にあがる。ドクターも含め、登山隊全員がC1に集結した。

この夜、岡市から登頂隊員の発表を行う。第一次は居谷、坂本、尾崎、大谷の四名、第二次隊は森長、長谷川の二名。これ以外にも登頂隊員としてふさわしい隊員もいたが、サポート熊勢に不安が残り、六名のみとした。緒方登攀隊長は、隊員中一番調子がよく、ルート工作、荷上げなどに大活躍であったが、初登頂のよろこびを後輩にゆずった（彼はシェルピ・カンリの初登頂者である）。

四月二十日、第一次隊がC4に入る。この日は、BC入りして初めてというぐらいの悪天であった。午後から黒雲が山をかくし、雪まじりの風が強く、夜中になっても雪はやまず降りつづいた。雪崩の危険のあるC4の四人のことを思い、私はふたたび帰ってきたBCで、まんじりもしない夜をすごした。

四月二十一日、昨日とうってかわって、快晴が訪れた。C4は零下三十度だ。テントの場所が悪いので、出発に手間どり、四人は十時（北京時間）、テントをあとにした。頂上稜線につきあげる斜面は、氷の上に昨日の雪がうっすらとつもあり、すべり易い。ロープを固定しながら慎重に登高し、十二時三十分、遂に稜線に出る。北側にはり出した大きな雪庇のあるナイフリッジが続く。やがて最後の登りにかかる。

BCからは、ガスに見えかくれする頂上稜線上の四人が望遠鏡を

通してよく見える。刻々と勝利のときが近づく。中国の友人たちが望遠鏡のまわりに集まる。やがてトランシーバーから居谷の声がとびこんできた。彼は全隊員によびかけ、そして登頂成功を知らせる。私は手連絡官と抱き合い、よろこびで頬をぬらす。この一瞬のため、何と長い歳月が流れたことだろう。

頂上は鋭く尖っていて、ひとりが立つのがやっとであった。天気は申し分なく、ブータンヒマラヤの山々がよく見えた。大谷は登頂のすべてをビデオカメラに収めた。処女峰登頂の記録がプロカメラマンによってビデオで撮られたのは、おそらく世界ではじめてであろう。

登頂は午後四時十五分、そしてC4を経由、C3に降りついたのは午後八時三十分であった。

四月二十二日、絶好の快晴にめぐまれて、第二次隊が登頂に成功した。C4出発は午前九時三十分、登頂は午後二時十五分であった。C4にサポートにつめていた山田と船原と共に彼らは午後六時三十分、無事C3に降りついた。

連日吹きあれていた強風が、アタックの二日間だけ、うそのように止んだことは、奇跡としかいようがなかった。

四月二十八日、全員無事にBCに下りた。休養ののち、五月五日、みぞれまじりの強風吹きすさぶBCをあとにラサにむかった。

*

学術隊のうち、内藤ら自然科学班四人は、中国人研究者四人と共に、すでに四月十五日、BCを出発、ヤルツアンポー川沿いに林芝に至り、そこから川蔵公路沿いに成都へ向った。彼らは、林芝から派

まで足をのばし、ナムチャバルワの山麓で調査を行っている。

報道隊は登頂成功後後休むひまなく、ジープ1台で学術隊を追った。そして通表で彼らは合流し、以後行程を共にした。

登山隊と残りの学術隊合計一七名は、バス1台、ジープ1台に分乗し、川蔵公路沿いに成都へ向った。以下の記録はこのときのものである。

ラサから波密へ

五月十日、ラサを出発、ラサ大橋をすぎてまもなく、道路工事のためしばしば悪路を迂回させられる。ジープ、バスとも、数回のパンクや故障が重なり、この日は工布江達泊り、雪をかぶった五千メートルクラスの山がまわりをとりまき、緑もこく、別天地に來たようだ。

五月十三日、林芝県八一を出発、雪の色斉拉（四五〇〇メートル）を越える。楽しみにしてきたナムチャバルワもギャラペリも雲の中で、何も見えない。峠から約三時間、ひた走りに走り、二千メートルほど高度を下げ、東久をすぎた所に「迫龍天険」の難所がある。インド亜大陸が、ユーラシア大陸と衝突した接合部分と考えられ、地殻変動が激しく、土砂崩壊が毎年のようにある。昨年土石流が川をせきとめ、トラック30台余りが川に流された。新しく作りなおされた崖つぶちの道は、たえない落石と土砂崩壊におそわれ、危険きわまりない。学術隊も登山隊も無事にここを通過できたことは幸運であった（帰国後わかったことだが、我々が通過した五月末以後、この道は度重なる土砂崩壊のため、半年以上も通行不可能になった）。

通表（二二五〇メートル）は川蔵公路の中でも、一番高度が低い。氣候

は高温多湿で、動植物の宝庫である。学術隊はここからギャラペリが望遠できた。我々は通表を通りこして、波密まで走った。波密県扎木は東チベットの中心地で、人口六千人、同じチベットとは信じられないくらい自然は豊かだ。豊富な森林、リンゴやクルミの木が村をおおう。人々の生活文化は高く、美人も多い。登高意欲をそえられる六千メートルの処女峰が周囲をとりまいている。

大河の源流をこえて

五月十八日、行程中最初の大河、怒江（サルウィン河上流）をこえる。真っ茶色で、岩をかむ濁流は、今まで見てきた川とは全く様相がちがう。ゴルジュの一番せまい所に二〇〇メートルほどの橋がかかり、解放军の厳重な監視下にある。河を渡ると、車はまだ二千メートルほどジグザグの道を登る。波密で見られた森林はすっかり姿を消し、乾燥地帯が続く。

達馬拉（四五〇〇メートル）から北を望むと、絵にかいたような大高原が広がる。この大高原の北に昌都がある。報道隊のみは、特別の許可を得て昌都まで足をのばした。我々は、昌都へ行く道と別れ、川蔵南路をとる。

五月十九日、残雪の多い東達拉（五〇〇〇メートル）をこえると、再び森林帯になる。断崖絶壁につけられたガードレールもない危険な道をトラバース気味に走り、尾根をひとつ越し、ジグザグをくりかえして下りた所が瀾滄江（メコン河上流）である。怒江同様、真っ茶色の濁流である。ただ川幅は広く、怒江ほどの凄味はない。

やがて車は新緑の柳、桃の花の咲き乱れる集落を通り、アルプ状

の高原を登る。そして四三〇〇呎の峠を越えて芒康に出る。ここから南下すると昆明に出られる。当初の計画はこの南下ルートであったが、許可されなかった。ここで成都からラサに行く乗合いバスとすれちがった。九日間かかるという。

小さな支流に沿って下っていくと、そこが金沙江（揚子江上流）であった。川幅は広く、悠々と流れる様は大河の風格があった。金沙江を境にチベット自治区とは別れ、四川省に入る。巴塘に泊る。ここは川蔵公路の要所で、昔から有名な町だ。緑も豊富で町は活気にあふれている。

五月二十一日、朝暗いうちに出発。海子山峠（四六五〇呎）から朝日に輝く六千呎クラスの山が手にとるように見える。北側の山は氷河もあり、無名峰ながら堂々たるものだ。車は草原を疾走する。軍用トラックがひっきりなしにすれ違う。放牧のヤク、馬、羊、山羊にまじり、道をナキウサギのたぐいが横切る。大草原のかなたには無数の雪山がそびえ、絵画のようだ。この日は横断旅行の白眉であった。四千呎を超える峠を八つも越えた。最後の峠から、遠くミニヤコンガ（七五九〇呎）が見えた。満開のシャクナゲの美しい谷を下ると、そこが雅江であった。一日走った距離としては最長の三五〇^キを走った。日ざしは暑く、川では子供が泳でいいいた。

五月二十二日、揚子江の支流、雅壘江を越え、高時山峠を越えるところで、全山倒木、枯れ木の山を見た。うっそうとした森林が続くという感じをもっていたが、期待に反して、横断山脈は一般に疎林が多かった。

康定への最後の峠、折多山峠（四二五〇呎）で車をおき、ミニヤ

コンガが見えるピークまで歩いて登る。衛星峰を従えたピラミダルの姿に感激して写真をとる。

旅の終り

康定は別名を打箭炉ともいい、東チベットへの玄関口といわれている。その昔、入蔵を志した人の多くが、ここから官憲に追いかえされた。甘孜軍の招待所に泊る。道中、テント、食糧など準備してきたが、すべてこのような招待所や解放軍の宿舎に泊った。食事も味に文句さえいわなければ十分である。なお、道中泊ったすべての場所、時間制限はあるものの電気がある。巴塘からは日本に電話も通じる。文明の波に洗われつつある辺境の地だが、一方で昔ながらの遊牧民の生活があり、その調和を如何にとっていくか興味のあるところだ。

毛沢東の長征の成否をかけた決戦場が洄定である。五月二十四日、ぜひ見たいと思っていた現場に立って、当時四十歳だった彼の偉大さをしのんだ。ここ大渡河の河岸には、サボテンが生育しているほどの乾燥地帯であるが、次の日、二郎山をこえて成都盆地に入ったとたん、高温多湿の森林相となり、その変化のめまぐるしさに驚く。水牛による田植えと、麦の収穫に村人は忙しい。

五月二十六日、先行していた学術隊と雅安で再会。東チベットでは問題にならなかった調査も、四川省に入ってから、いろいろな問題がでて苦労しているとのこと。

登山隊はひと足早く、五月二十八日に成都入りした。学術隊は一
日おくれて成都に着いた。長かった旅は終った。⁽⁸⁾

〔記録概要〕

隊の名称 神戸大学西蔵学術登山隊

主催団体 神戸大学

活動期間 一九八六年三月～五月

目的 (イ) クーラ・カンリ(七五五四^分)の初登頂。

(ロ) クーラ・カンリ周辺および東チベットから四川省にかけての学術調査(外国人としては最初)。

隊の編成 総隊長 平井一正 神戸大学工学部教授(システム工学)

54歳

登山隊 隊長 岡市敏治 (㈱コスモ情報センター代表取

締役 45歳

隊員 緒方俊治 (㈱アマセック勤務 37歳、居谷千春

日本ベイント(㈱勤務 35歳、森長敬 (㈱森長工務店勤務

32歳、山田健 兵庫県北摂整備局勤務(兼学術隊員) 31

歳、坂本淳 セイコーエプソン(㈱勤務 29歳、長谷川浩

名古屋大学大学院理学研究科研究生 27歳、尾崎久純

神戸大学大学院工学研究科院生 27歳、村山誠之 鐘淵

化学工業(㈱勤務 26歳、船原尚武 神戸大学理学部地球

科学科学生 25歳、内井 淳 同上 22歳、柴田隆宏

神戸大学理学部物理学科学生 25歳

学術隊 隊長 内藤親彦 神戸大学農学部助教授(農業

昆虫学) 43歳

隊員 沖村孝 神戸大学工学部助教授(土木工学) 41

歳、北口博教 神戸大学医学部助手(生理学) 41歳、

行動概要

依田博 神戸大学教養部助教授(政治学) 41歳、合田

濤 神戸大学教養部助教授(文化人類学) 39歳、武田

(義明) 神戸大学教育学部助手(植物生態学) 37歳、乙藤

洋一郎 神戸大学理学部助手(地球物理学) 36歳、藤

本一弘 神戸大学医学部助手(耳鼻咽喉科) 31歳

報道隊 隊員 朝日教之 朝日新聞勤務 30歳、大谷映

芳 テレビ朝日勤務 38歳、酒井潮 テレビ朝日勤務

40歳、桜井勝之 (㈱PGC勤務 26歳

中国側隊(通訳、運転手、コックなどを除く)

登山隊 連絡官 于良璞、高処協力員 王勇峰、李致新、

馬新祥、張志堅、陳守建

学術隊 鄭錫瀾 中国科学院地質研究所、黄夏生 同動

物研究所、揚逸麟 同地理研究所、王金亭 同植物研究所

日本側二十五名、中国側十七名、合計四十二名

三月九日に日本出発。三月十二日、北京、成都を経由、

ラサに到着。三月十五日、ラサ出発。三月十七日、高度

四五〇〇^分のBC入り。学術隊はBC周辺の調査および

登山隊支援。三月二十日、ABC建設(五三〇〇^分)。

三月二十五日、C1建設。四月一日、C2建設。四月四

日、強風で、C2およびABCのテントを飛ばされる。

四月十一日、C3(六八〇〇^分)建設。四月十六日、C

4建設。いったん全員C1に集結し休養する。四月二十

一日午後四時十五分、第一次隊、登頂。四月二十二日、

第二次隊の登頂。五月五日、ラサに向かう。五月十日ラ

報告書 注(8)参照

サ出発。五月二十八日、成都着。六月六日、北京着。六月十三日、本隊帰国。

註

- (1) K. Mason, *Ahode of Snow*, Rupert Hart-Davis, 1955 (田辺、望月 訳『ヒマラヤーその探検と登山の歴史』白水社、昭32年)
Bailey: *Geographical Journal*, Vol. 64-4, 1924 2頁 記述あり。
- (2) 中尾佐助『秘境ブータン』毎日新聞社、昭34年
- (3) A. Gansser: *Geology of Bhutan Himalaya*, Birkhäuser Verlag, Basel, 1983
- (4) 平井一正「シュルビ・カンリ登頂(一九七六年)」『山岳第七十一・七十二年』
- (5) チベット自治区東部、四川省西南部、雲南省西部、西北部に南北に平行して走る山脈を総称して横断山脈という。横断山脈には、高黎貢山脈、怒山脈、雪嶺山脈、沙魯里山脈、大雪山脈などが含まれる(『中国登山ハンドブックヘブースポールマガジン社』より)。
なお戦前、成都からこの横断山脈をこえて、ラサに入った日本人がいる。彼の名前は矢島保次郎(一八八二年〜?)で、一九一〇年成都から隊商に加わり、理塘、巴塘を経て、一九一一年ラサに到着した(酒井「ヒマラヤを越えた日本人」帝塚山大学論集、第五十一号〜五十三号、昭和61年)
- (6) 『岳人』昭和61年2月号
- (7) チュービエソンの標高は従来七三二二mとされていたが、今回我々の測量によると七二六五mである。
- (8) 学術登山隊の記録は次の出版物で公表されている。

・神戸大学西蔵学術登山隊公式報告書。神戸新聞出版センター、昭62年11月(予定)。
・楊逸暉「東チベット三〇〇〇+初踏査」、人民中国、一九八七年二月号

・平井、「山と溪谷」、一九八六年八月号
同、「岳人」、一九八六年十月号
同、*Himalayan Journal*, Vol. 43, 85/86
同、*American Alpine Journal*. (Vol. 29, 1987)

東京農大崑崙七トメリ一六七峰

早坂敬二郎

あこがれの地へ

中央アジア、トルキスタン、タクラマカン砂漠、絲綢之路、崑崙山脈、こうして列挙していくとこれらの地に限りない憧憬とロマンを覚える人は多いことだろう。

今回の登山隊の織内信彦総隊長は「崑崙へのみち」(『崑崙山脈七一六七峰登山隊報告書』所収)と題した文章に数十年來憧れ続けたロマンの地での感慨を次のように記している。

「……私がタクラマカン砂漠を中心とする中央アジアへの興味をいだき始めたのは、今から考えると実は随分若年のころに遡るが、ヘディンやスタインの探検記は言うまでもないとして、いちばん最初に読んだのはたしか日野強の『伊犁紀行』、次いでサー・エリック・タイクマンの『トルキスタンへの旅』であったと思う。この本を手にしたのが昭和十五年、神近市子訳の岩波版で、どういうわけか引きずりこまれるように読んでいったのを覚えている。……」

「……ポブラ並木の限りなく続くこの古い都邑のどこかに彼等の残した痕跡はないものかと私は鶉の目鷹の目で、カシガルのバザールからバザールをさまよっていた」。

また、崑崙については「崑崙山脈とややもすれば同一山系として扱われ易い山群に、クングール(七七一九^メ)、クングール・チュビエ(七五九五^メ)、ムズターグ・アタ(七五四六^メ)の諸峰がある。しかしこれらの峰々はヤルカンド河によって崑崙山脈とは完全に山系を分けられているとするのが最近の定説であり、……」。崑崙山脈は長い間閉鎖されていたため、ヒマラヤやカラコルムのように登山隊が華々しく活躍する場面がなかった。それだけに人煙稀なというか、人跡稀な地域であった。中国科学院は一九七六年に崑崙山脈第二の高峰ウルグ・ムズターグの周辺にかなり大規模な調査隊を送り出した。しかし登山らしいことはやらなかった。しばらくおいて一九八五年十月、中国とアメリカカ山岳会の合同隊によってはじ

めてウルグ・ムズターグの未登の山頂がきわめられた。これが崑崙山脈の大きなピークが登頂された最初のことになるのである。……崑崙山脈の最高峰は未登のまま残されていた。

この崑崙山脈最高峰が東経八〇度五五分、北緯三五度二〇分に位置する無名の七一六七峰である。

この未登峰の登山許可が、日本山岳会の宮下秀樹評議員を始めとする会員の方々の好意と協力によって我々にもたらされたのは一八八五年九月のことである。七〇〇峰の未登峰が地球上に残り少ない現在、それは実に幸運なことであった。

計画は、東京農業大学山岳部創部六〇周年記念として進められた。パイオニアワーク、フロンティアスピリッツという農大の学風の中で育ち、「より楽しく、よりおおらかな」山登りをモットーとして国内での山行と自主的な海外登山を積み重ねてきた私達にとつて、この崑崙山脈の未登峰は願ってもないものであった。

登山計画の作成にあたっては、高所登山ゆえのタクティックスの若干の変更と、学生三人と今年卒業した女子を含む全隊員を安全、確実に頂上上げるために登攀用具を多めに持ちこむこと以外は、あくまでも国内の山行の延長であるとの考えを基本とした。

BC 設営

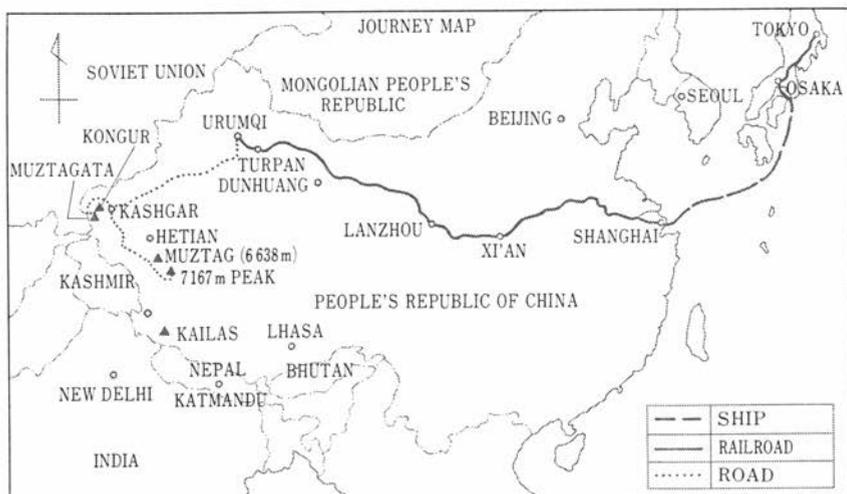
登山隊は六月二十四日、大阪港より出発。同月二十六日、上海に上陸した。汽車と車で大陸を横断したので中国大陸の大きさをじかに肌で感じる事ができた。烏魯木齊、喀什、叶城を経て新蔵公路（新疆、チベット公路）に入る。四〇〇峰から五〇〇〇峰のいくつかの峠を越え、甜水海（四八二五峰）の兵站基地に七月十六日到

着。ここに二日間滞在して体調を整えた後、新蔵公路を離れ、崑崙山脈の南側、アクサイチン高原を東進する。この高原には、チベットノロバ、チベットガゼル、チルル、ヤクなどの野性動物が駆け抜け、いたるところ色とりどりの高山植物が咲きみだれていて、私たちを魅了した。

午後になると崑崙の山々からの雪どけ水で川は増水した。そのため徒渉ができず、予期せぬキャンプを強いられたり、ぬかるみにトラックが埋まるなどを繰り返すことになった。七月二十日、十日余りのキャラバンがようやく終了した。七一六七峰の広大な氷河より流れ出る多量の水が広い河原に幾筋もの流れをつくる里田河、その右岸の台地に大小六張のテントを設営し、BCとした。高度五三一五峰のこのBCは、計画段階のCIに相当する。

車を利用してキャンプをひとつ省略することによって、登山期間を一週間ほど短縮できたことになる。アタック予定が秋風の吹き始める厳しい季節だっただけに、この一週間の短縮は実に効果的で幸先のよいスタートとなった。実際、登頂を終え、各キャンプを撤収してBCへ戻る頃には吹く風も冷たく、未明から朝にかけては、かなりの積雪があった。

BCを予定より上部に建設できたとはいえ、それでもなお、BCから頂上までの標高差一九〇〇峰、直線距離にして二五*という、非常に長いルートワークと荷上が待ち受けていた。しかも、ドクター氷河（仮称）、中峰氷河（中国の地図に名称が記入されている数少ない氷河）が、七一六七峰の前に大きく立ちはだかっている。氷塔地帯を有するこの氷河を越えて、山の懐へいかにスムーズに近づ



けるか否かに今回の登山の成否がかかっていることは、出発前から充分に推察されていた。BCから見ると七一六七峰は、予想どおり遥か彼方にその白い姿を見せていた。

BCでの最初の二日間は、隊荷の整理と食堂作りにて当てられた。五〇個余りのプラパールの箱や、梱包袋があげられ、食糧、装備、薬品などを、再度各キャンプごとにふり分けた。

大テントを食堂及びミーティング・ルームとし、入口近くに炊事場をつくった。真中には梱包用のプラパールの箱を何個かならべ、その上にテーブルクロスがわりの白いシートをかけて食卓とし、少しでもくつろぎやすいBC作りに努めた。

そうしたなかでも、上部ルートの偵察は間断なくおこなわれていた。まず、ドクター、中峰両氷河の横断を避ける方法はないかと考えて、里田河左岸に渡ってから、七一六七峰の南側の六〇〇〇級の丘を越え、二つの氷河の東側の氷河（東面氷河と仮称）の雪原に入り込むルートを探した。しかし、その距離の長いことと、途中の里田河の渡渉が困難であることがわかり、このルートは断念した。

結局、当初の計画通り、ドクター、中峰両氷河を越えて本峰に近づくルートをとることに決定した。

行動開始

七月二十三日、いよいよ本格的な登山活動の開始である。まず、氷河の取付き、および氷河上のルート偵察のため四人が発出した。他の隊員はBCの整備と隊荷の整理に忙しい。

偵察隊は、氷河への取付きをなるべく標高の高いところに求めるべく、里田河右岸ぞいに大小の上り下りを繰り返しながら、左へ左

へと里田河を登った。

氷河の末端も右岸側も四〇分余りの氷壁になっていて、氷河に取
り付ける箇所は限られている。ドクター氷河と中峰氷河を分ける尾
根の末端に最短距離でたどり着くべく、ドクター氷河右岸ぞいに一
*ほどさかのぼってみたが、なかなか適当な取付きが見つからな
い。ようやくドクター氷河にそった南側の尾根の末端付近で氷河に
入り込んでいるルンゼに、やや傾斜の緩い部分をさがし出して取付
きとした。

ひとたび氷河の中の氷塔地帯に入ると、あまりの起伏の大きき
に、しばしば進むべき方向を見失いそうになる。ドクター氷河東側
の丘に登り氷河を一望できる場所から、そのたびに双眼鏡、トラン
シーバーを使って氷河の中のルート工作隊に指示を出す。だいたい
のルートを設定し、フラッグやスプレー式のペンキでマーキングを
する。このルート工作と整備に三日間を費やした。また、氷河取付
点に中継デポ地を設け、これをデポ地Aとした。ドクター氷河と中
峰氷河の間の尾根の末端（ドクター氷河の横断終了点でもある）の
地点をデポ地Bとし、BCとCI間を三段階に分けて荷上げを行な
った。中継デポ地を二箇所も設けたのは、BCとCI予定地の距離
が非常に長く、とくに高度順応が充分にできていない頃はBCとC
Iの往復に十二時間もかかったので、体力の消耗を少しでも軽減し
ようと考えたからである。なお、デポ地Bより中峰氷河右岸にそっ
て、さらに一*ほど登ったところをCI予定地とした。

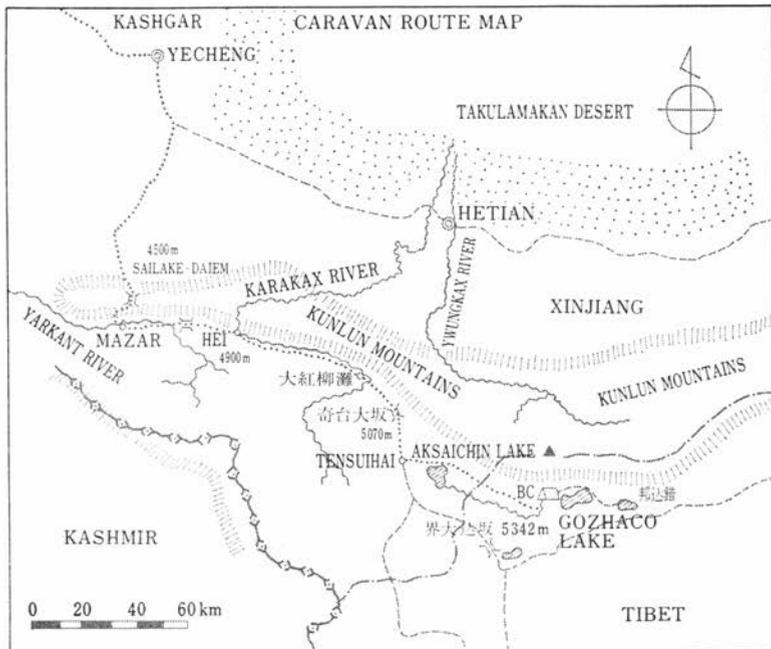
氷河の中は重い荷を背負い、ひたすら忍耐強く、氷塔地帯の登り
降りを繰り返すだけである。この地味で気の滅入るような作業も、

大学山岳部で長期間にわたる合宿を経験した我々には耐え切れない
ほどの苦しさではない。だが、晴天の時の氷塔地帯の中は風もな
く、直射日光は厚手のウールのシャツを通してジリジリと身体を焼
きつけて、さながら炎熱地獄の様相を呈する。また、ひとたび天候
が崩れると気温は氷点下に下がり、寒さにふるえなければならな
い。しかも直線距離にして二*、四時間余り歩いても高度はまった
く変わらないという、なんとも腹立たしい行動の繰り返しを強いら
れることとなった。

もつとも、氷塔地帯に特有の自然の造形美はたまらなくすばらし
い。青い大小の湖がそこかしこに現われ、かなりの水量で川が流れ
ていたりもする。毎日続く、苦しいだけの荷上げのなかで、荷を下
ろしてほっとするのは、こうした広大な景色を目にしたときであ
る。そのようなしばしの休息のとき、さまざまな感興が湧き、その
広大な白い世界の上を、夢は限りなく広がっていくのであった。上
流にたいして高い山があるわけでもないのにこれほど大きな氷河が
あるのだから、まだまだ未知の世界である。まさに大陸最奥部最大
の氷河だということが実感として伝わってくる。

初めのころは、高度の影響もあって、荷上げを終え疲れきってB
Cに戻ってくる頃には、もう薄闇が迫っていたのだが、次第に身体
も慣れ、荷上げに要する時間も明らかに短縮していった。今にして
思えば、五五〇〇分付近での十数日間の荷上げ作業が、我々を高度
に順応させ七〇〇分でもさしたる高度の影響を受けない身体をつ
くったのではないかと思う。

連日のルート工作や荷上げで疲れた身体には、BCでの休養日



が、待ち遠しい喜びの日であった。キャンプの前の小川で洗濯したり、サンヒーターでつくった湯でシャンプーしたり、テントの中で昼寝をしたり、各自思い思いの一日を過ごした。特に休養日の夕食には、肉やタマゴ、野菜を使った豪華な料理がテーブルいっぱいになり、連絡官の雷さん、通訳の王星さん、運転手の刘さんの中国側スタッフも招待し、ビールやワインを飲みながら消灯時間ぎりぎりまで話はずんだ。

八月三日、ドクター氷河を越え、中峰氷河右岸にそって一+ほど登った段丘の平地にC Iを設営。標高は五五四一メートルである。これで、中国側スタッフを除いて、全員がC I入りした。もう登頂して下山するまでBCには戻らない予定である。朝、BCを出発するときには連絡官の雷さんが、わざわざ起きてきて「BCの留守はしっかり守るから、安心して行きなさい。そして登頂を心より祈っている」と、かたい握手で見送ってくれた。

北峰と本峰——どちらが高いのか

C Iには、テント四張を張り、近くの小屋ほどもある大きな岩にビニールシートを張ってキッチンとした。大岩の庇状になったところを倉庫とし、前進キャンプとしての体裁を整えた。食料も、干肉、缶詰、野菜、コーヒード豆と、BCとあまり変わらないほど豊富で、休養日も充分楽しめそうである。

しかし、このC Iから見ると七六七峰と北峰（仮称）はまだまだ遠く、中峰氷河がその前に大きく立ちわだかまっている。

BCに入ってから、常に我々の議論が上がっていたことに、七六七峰（本峰）と北峰の標高の問題があった。地図上では本峰の

ほうが一〇〇ほど高いのだが、どの角度から見ても両峰とも同程度か、もしくは北峰のほうが高いように見える。それは、今回、私たちが登頂する際に、はっきり確認しなければならぬことであり、最終的には両峰とも登頂しなければならないのではないかと考えていた。

頂上に至るルートとしては、二つの方法が考えられた。一つは、中峰氷河を越えて、本峰の西側の氷河（西面氷河と仮称）をつめて、北峰より西側においている尾根（西稜と仮称）に取り付くものである。もう一つは、本峰よりまっすぐ南においている尾根（南稜と仮称）の末端を廻り込み、そのまま氷河（南面氷河と仮称）を登り、南稜より東に派生する稜（東稜と仮称）に取付くものである。ほかにも南稜を末端、もしくは途中から取り付くという方法も考えられた。しかし、そのルートは、下部は雪が少なく急峻で、六五〇〇がぐらいから傾斜が急に落ちるが、そこから頂上までは、雪庇の出した稜線をかかなりの距離登高しなければならぬことが、BCからはっきりと観察できていたので初めから除外していた。

いずれにしても、二ルートの東面、西面を偵察するには、中峰氷河を越えて、南面氷河の雪原に出なければならぬ。八月四日、ルート工作隊は、CIから中峰氷河右岸を二^ノほどさかのぼり、切り立つ氷河の側壁がVの字に切れている箇所から中峰氷河水塔地帯に取り付いた。ドクター氷河と中峰氷河とを分ける尾根に登り、ドクター氷河のルート工作時と同様に、双眼鏡、トランシーバーでルートを指示し、フラッグやペンキでマーキングして、ルートを整備する。

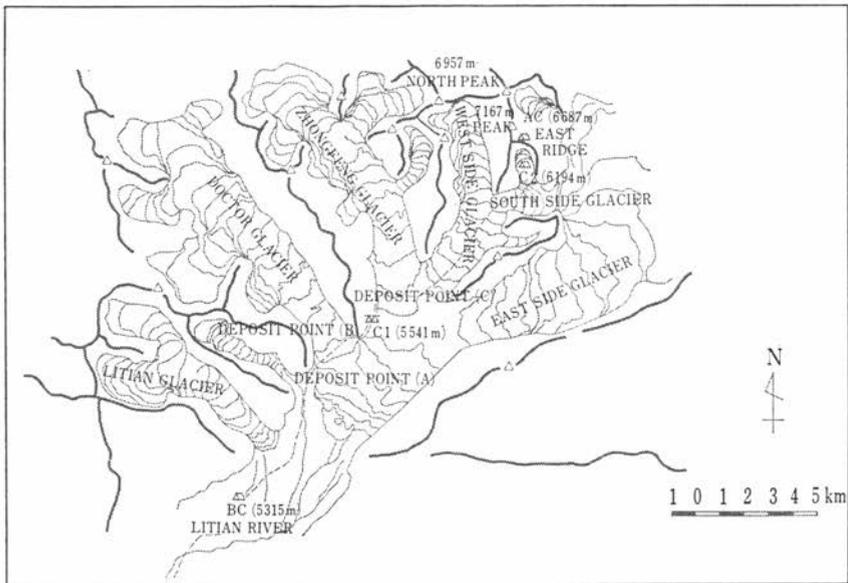
翌五日、水塔地帯のルートを整備しながら、西面氷河と東面氷河の合流する大きな雪原（大雪原と仮称）にキャンプを出し、西面、東面の偵察を行なった結果、西面氷河をつめて西稜に取り付くルートは、西面氷河の距離が長く、傾斜も緩いので高度が稼げないと思われた。そのため、西稜上のかなり下にACを設けなければならぬようなので、我々は躊躇なく西稜ルートを捨てて、南稜末端を廻り込み南面氷河を東稜をめざして進んだ。偵察の結果、東稜に取り付けることと、東稜が頂上近くで南稜に突き上げていて頂上まで登攀可能なことを確認した。

八月七日の夜のミーティングで南面氷河より東稜を経て頂上へというルートが最終決定された。また、南稜と東稜に囲まれた南面氷河上のセラックの手前六一九四がをCII予定地とすることも併せて決定された。

中峰氷河を越えてのCIIへの荷上げは、ドクター氷河と同様、起伏の激しい水塔地帯を横断し、大雪原を経て南面氷河を登りつづける長い苦しい行程となった。距離が長すぎるので大雪原に中継デポ地を設けてデポ地Cとしたが、あまり利用されず、大部分はCIIまで一気に荷上げを行なった。

一日の行動時間が長いいため、行動中の天気の変化も激しく、快晴かと思えば突然吹雪になり、夕刻には雷が鳴って大粒の霰が降るといった天気が毎日のように続いた。それでも全員体調も良く、ゆっくりではあるが着実に七一六七が峰の頂上へ近づいているという実感があつた。

たまの休養日にはCIIの前にそそり立つ中峰氷河の氷でスコッチ



のオンザロックをつくり、メンバーの誕生日を祝ったりした。食糧のスペシャル・パックが開けられ、ホットケーキやお好み焼き、コーヒゼリーなどが出たりして、苦しい荷上げ作業の中にも、和やかなひとときを過ごすことができた。

A C の設営

八月十日、荷上げが完了し、南面水河上、六一九四峰の予定地にC II が建設された。山頂は、C II の頭上に、夕日に染まって雪煙を上げていた。B C 建設以来三週間目にして、七一六七峰がようやく身近なものと感じられるようになった。

ただちにA C へのルート工作が始められた。C II から南面水河を進み東稜に取り付く。東稜への取付きは、雪面の傾斜が比較的ゆるく稜線まで続いている側面にとる。斜度は四五度ぐらいである。この東稜側面の取付点から、フィックス・ロープを三〇〇ほど固定して東稜に出た。東稜はナイフリッジ状のところもあるため、さらに一〇〇ほどフィックス・ロープを張り、やや広いコル状の箇所をA C 地点とした。

八月十二日、六六八七峰の東稜上にA C を設ける。しかし、稜線がかなり狭く強風にあおられるため、テント設営をやめて雪洞を掘ることにした。表面をおおう積雪一層の下は硬い氷となっていたので、稜線が急になった斜面に四人分の雪洞をつくった。そして雪洞に泊るごとに徐々に広げてゆき、最終的には六人が楽に横になれるスペースをつくった。私たちはこの雪洞を「ホテル・コンロン」と名づけた。

このA C から上部ルート工作に二日間を費やして、南稜と東稜の

ジャンクション（六八九二）まで五〇〇級のフィックス・ロープを延ばした。これで頂上まで標高差二〇〇級ほどを残して、アタック態勢が整ったことになる。

当初、アタック態勢が整ったら、いったんC工に戻り、休養後、順次C IIに泊ってA C入りし、アタックするという予定であったが、カメラマンを除いて全員がA Cに一泊以上したことによって頂上までの高度順応ができたと判断し、C IとC II間の距離の長さ故の所要時間、体力の消耗などを考え合せて、C IIよりアタック態勢に入ることにした。

また、アタックは、第一次四名、第二次五名、第三次二名の三回に分けて行なう予定であったが、頂上までフィックス・ロープを延ばす目処がついたことなども考え、五名と六名のパーティーに分け、二回のアタックで全員が登頂できるように計画を変更した。

全員登頂

八月十五日、第一次アタック隊の小林、中嶋、馬場、佐藤、沼野の五名はC IIからA Cの雪洞へと入った。天候は雪であまりよくないが、これまでの天気サイクルで明日は快晴と予想した。登頂への確信が各自にあったためか、それほど高ぶる気持もなく、雪洞のランタンのもと、数々の思い出深い山行を語って過ごした。

八月十六日、晴天、気温氷点下一五度C。九時二五分、第一次アタック隊出発。頂上まで残された四〇〇級に、西壁から吹き上げる強風に凍えながら、フィックス・ロープを延ばす。東側に雪庇が張り出しているため、ルートは岩と雪とのコンタクト・ラインにとる。本峰直下の一〇〇ほどの岩壁は、フィックス・ロープをダブル

で固定した。

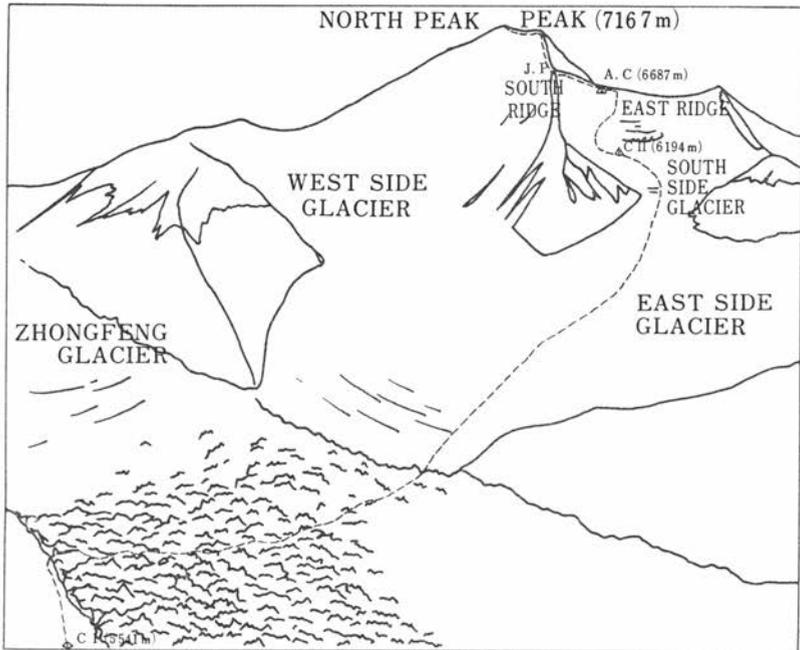
一三時二〇分、念願の初登頂を果たした。しかし不思議と、興奮することも、さして感激することもなく、国内の山行と同じように自分たちがつくった計画を着実に実行し、目的を果たせたという満足感だけがあった。

本峰登頂後、地図上で六九五七級となっている北峰に、ただちに二名がアタックに向かう。トーマンの二台の高度計は両峰とも同程度の高度を示していた。

北峰と本峰を一時間あまりで往復すると、一気にC IIまで下った。途中、入れ替わりにA Cに入る第二次アタック隊とすれ違う時、フィックス・ロープにつかまりながら、手袋をとって握手し、初登頂を祝い合った。

翌八月十七日、九時。A Cでは、早坂、小幡、村田、福沢、須ヶ原カメラマン、増山ドクターの六人の第二次アタック隊が、朝食後のコーヒを沸しながら、外の様子をうかがっていた。風速八・六級、気温氷点下一五度C、吹雪で視界はあまりよくない。しかし、頂上までフィックス・ロープが張ってあることもあり、九時四五分、意を決して雪洞を飛び出す。しばらくすると青空も見え始めた。風は相変わらず強いが、徐々にアタック日和となってきた。

一二時四八分、本峰頂上に第二次アタック隊全員が立つ。付近にはここより高そうな真はなく、北方には六〇〇級の峰々が白雲を押し分けるようにつらなっている。そして南には北部チベット（羌塘）高原が大小の湖を点在させ、ゆったりと広がっている。眼下には、われわれが苦労して越してきた氷河が美しく横たわってい



た。至福のときであった。

唯一の女子隊員である福沢幸子と早坂が北峰を往復した後、すべてのフィックス・ロープを撤去し、全員がC IIにそろったのは午後五時三〇分だった。陽が西の山にかくれるまで、まだ幾ばくかの時間がある。テントの外で頂上を見上げたり、マットを出して横になったり、お茶を飲んだり、皆、それぞれに充足したひとときを過ごした。

こうして我々は、全員で初登頂を果たすことができた。確かに私たち一人一人の力は一流といえない。しかし個々の力を有機的に組織化することによって、それぞれの持てる最高の力を発揮することが可能であることを再認識した。荷上げも登攀も、すべて自分たちの手で行なった充実感がさらに我々の心を満たしていった。

大雪原への下り

八月十八日、早くも晩秋の気配さえ感じる風の冷たさである。C IIのテントを撤収し、四〇Kg余りの荷を背負い氷河をたどって大雪原へと下った。中峰氷河の氷塔地帯の横断では、ふたたび、あのいつ果てるともない苦しさが我々を待っていた。皆が点々と氷河上にザックを降ろして休息している風景が永遠に続きそうに思えた。

それから三日間かけて、C IからBCへとすべての荷を集結し終えた。

C I撤収の朝は、未明から降り続いた雪を踏みしめての荷下げであった。

八月二十二日、BC撤収。早朝、まだ暗いテントの中で朝食をすませます。撤収作業は、雪の降りしきる静寂の中で、手ぎわよく行なわ

れた。一三時、一カ月以上にわたる登山活動を終えて、我々は降雪のペースキャンブ地を後にした。

△記録概要▽

隊の名称 東京農業大学中国崑崙山脈七一六七^ハ峰登山隊

主催団体 東京農業大学山岳部

活動期間 一九八六年六月〜九月

目的 中国崑崙山脈七一六七^ハ峰の初登頂

隊の編成 総隊長^ハ織内信彦(74歳) 昭和七年農芸化学科卒 日本

山岳会名誉会員・東京農業大学理事、隊長^ハ早坂敬二郎

(39歳) 昭和四五年農学部工学科卒・山岳部監督、登攀

隊員^ハ小幡邦夫(32歳) 昭和五十一年農学部拓殖学科卒・

山岳部コーチ、小林新二(30歳) 昭和五十六年農学部林

学科卒・山岳部コーチ、中嶋真也(26歳) 昭和五十七年

農学部林学科卒・山岳部コーチ、馬場哲也(26歳) 昭和

五十七年農学部畜産学科卒・山岳部コーチ、村田岳(23

歳) 農学部造園学科四年・昭和六十年山岳部リーダー

部員、福沢幸子(22歳) 昭和六十一年農学部畜産科卒、

佐藤正倫(22歳) 農学部造園学科三年・昭和六十一年度

山岳部リーダー部員、沼野幸正(21歳) 農学部栄養学科

四年・昭和六十一年度山岳部リーダー部員、カメラマ

ン^ハ須ヶ原光弘(40歳)、医師^ハ増山茂(38歳)

行動概要

六月二十四日、大阪港より出発。七月十六日、甜水海に

到着。七月二十日、BC設営。七月二十三日よりルート

工作。八月三日、CI設営。八月十日、CII設営。八月

報告書

十二日、AC設営。テント設営をやめて雪洞を掘る。八月十六日、第一次アタック隊、一三時二〇分初登頂。八月十七日、第二次隊が登頂。全員登頂を果たす。八月二十二日、BC撤収。

『山と溪谷』86・12

「東京農業大学中国崑崙山脈七一六七^ハ峰登山隊一九八六報告書」一九八六年十一月三十日発行

マシヤブルム北西壁（初登攀）から
ブロードピーク（アルパインスタイル）へ

この計画の発端は一九七七年の夏にさかのぼる。日山協K2登山隊に参加して、その帰路に見たマシヤブルム北稜はあまりに印象的であった。頂上からバルトロ氷河まで一気に三五〇〇^ポほど落ちる。その尾根は、美しさもさることながら困難度においても超一流であった。この尾根の登攀の可能性を見いだすため資料集めが始まった。

マシヤブルム北面からの登攀史は比較的新しく、コンウェイ、デイレンフルト等がバルトロ側を絶望視して以来、長い間試みられることはなかった。一九七六年、武蔵大学・どんぐり山の会合同隊がバルトロ氷河側より初めて西稜を目指したが、北西壁からの雪崩の猛威のため北稜に転進。かなり下部より取り付き、五五〇〇^ポ（C3）に到達したのみであった。しかし彼等は帰路マンドゥ氷河よりイエルマネンド氷河に回り、北稜の東面を写真に収めてマシヤブルムパス経由でフーシエに下山した。

二回目の試みは一九八〇年に、関西登高会隊（石塚彰隊長、賀集信登攀隊長以下十一名）がイエルマネンド氷河より北稜に挑んだ。武蔵大・どんぐり合同隊の写真を参考にして、長大な北稜の下部を省略するため、北稜上の最初のピーク（前衛峰）の手前のコルに直接突き上げる小さな氷河をルートにとった。そしてそのコルにC1をつくり、C2は前衛峰と本峰との細長いコル上に建設。さらにマシヤブルム北面の外堀ともいえる中間部の大懸垂氷河を越えて、北西稜上C3（六六五〇^ポ）を建設したが、雪崩で半壊、前途のめどがたらず敗退した。

翌八一年にアメリカ隊が北面から西稜を試みたが、C2を出しただけで断念。やはり雪崩の猛威には手の打ちようがなかったとのことである。

関西登高会隊に参加した賀集は、北面よりのマシヤブルム登頂の一番近い鍵を握っておきながら、強力な隊員を編成する受け皿がな

いためその母体作りから始めねばならなかった。その頃大阪からはダウラギリIV峰以来注目すべき山行が行われていないため、大阪府山岳連盟の海外委員会を中心に、バルトロ氷河で合宿のようなものを行う計画が持ち上がった。いくつかの山を府岳連で許可取得し連続して登頂したり、また多数参加させ遠征経験者をふやすというものであった。勿論マシヤブルム北稜から八千^ノ峰を連続して登る計画が、この合宿の中心でもあった。しかしせっかく取れたスキヤンカンリからブロードピークへの計画は、参加者不足で立ち消えとなり、マシヤブルムの方も有力な隊員不足に悩まされていた。そんな最中の一九八四年春、日本山岳会カンチエンジュンガ縦走隊に参加した賀集は、重廣、和田、山本という強力な隊員をこの計画に引き込むことに成功した。これで前回の隊員の西堤を含めて遠征経験者が十人中五人となった。

出発・アプローチ

出発直前までの実質三ヶ月間で準備を終え、五月六日、先発隊が成田を出発。五月十三日には本隊がラワルペンディ入りして全員集結する。

五月十五日、バス二台でスカルドに向けて出発。

五月二十日、ダツソを百六十七人のポーターと共に出発する。ラルド河に沿ってキャラバンは進み、アスコーレ、パイユを過ぎバルトロ氷河に入る。ウルドカスを過ぎ、マンドゥ氷河の出合近くに差し掛かると、突然マシヤブルムの北西壁が全容を現わす。大空に翼を大きく広げ、今まさに飛び立たんとする怪鳥コンドルのような姿に一種の戦慄を覚える。ルートを目で追うが、今回予定している

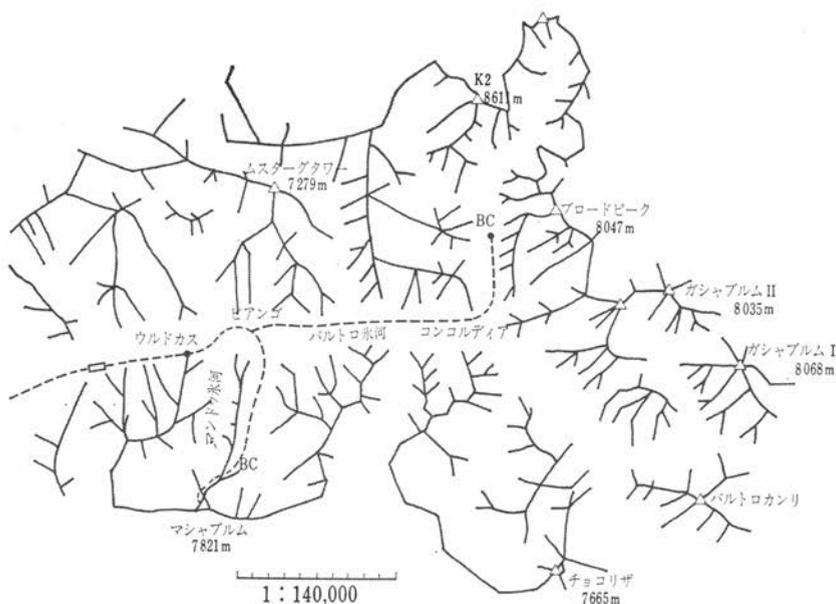
C3からC4への雪の斜面が長く困難が予想される。

五月二十八日にイエルマネンド氷河の出合付近に達し、ブロードピーク用の荷物をデポし、翌二十九日にはイエルマネンド氷河上の四六〇〇^ノ峰にベースキャンプを建設。五月三十一日は全員が集結することができた。

登攀

六月一日よりC1へのルート作業を開始する。それに先立ち隊を賀集、重廣、和田をリーダーとする三つのパーティーに分け、ローテーションで動くこととする。また、キスタン山岳会の会員であるキャプテン（連絡官）は適宜荷上げを行い高度順化をはかる。ルートは前衛峰手前のコルに突き上げるもので、関西登高会のルートと同一である。入口は氷河の支流で広いが、上になるとルンゼ状となり五六〇〇^ノ峰のコルに終わる。六月五日、そこにC1を建設して和田、西堤、菰川が入り、C2のルート作業に当たる。これからの荷上げのことを考えて、C1下のルンゼからはすべてフィックスを固定していく。前衛峰のピーク付近にあるナイフリッジを避け、マンドゥ側をまくようにルートを取り、六月十三日、前衛峰と主峰との間のコル上にC2（六一〇〇^ノ峰）を建設する。途中荒天にかまりながらも、荷上げルートの変更や降雪の中で荷上げなど積極的
に展開を進め、比較的スムーズにC2に到達することができた。

C2から上部は、マシヤブルム北稜を上下に分断する懸垂氷河の左端にラダーをかけて乗り越し、その上に広がるプラトートを右手に大きくトラバースする。その前後は上部からの雪崩に常にさらされており、非常に神経をすり減らされる所でもある。一九八〇年のと



き北稜の最短距離をとるため、プラトリーの左端から急な雪壁を右斜上し、北西稜上部に出ようと試みた。しかし頻発するシャワー状雪崩のため荷上げルートには不適と判断。その後トラバースして北西稜に直接取り付くが、六六五〇にC3をつくった段階で、雪崩にテントを壊され敗退した苦い経験がある。その経験を生かし今回はプラトリーの右端の北西稜上にC3を建設。岩場が少なくルート開拓が容易な北西壁に回り込む予定であった。

C3へのルート工作に入ってから悪天が多くなり、深いラッセル、雪崩によるフィックスやデポ品の流失、そして連日の停滞とルートは遅々としてのびない。

六月二日、和田↓賀集パーティーへと引き継ぎ、やっとC3地点に到達する。しかし降雪のため荷上げが続かず、一度全員ベースキャンプに集結する。既に予定登山期間四十五日のうち半数がたつのに、C4へのルート工作も始まらず少々あせりを感じる。賀集・外山・藪川、重廣・西堤・寺内・山本、和田・伊藤・龍田・キャプテンの三パーティーに再編成し、C4建設までの第二段階への体制をとる。

六月二十九日、賀集パーティーがC3入りする。C3は北西壁に移る稜上にあつて、クレバスの段差を雪崩からの防壁として利用したテント場である。ここは上部へのルート開拓の中心地となる前進ベースキャンプともいえる所で、滞在期間も長く多くの物資が集積された。北西壁のルート工作に入つてからも荒天は続き、一昼夜で一歩以上の降雪の時には上部岩壁からの雪崩のためテントを二度壊される。

七月四日に天候が回復してからはルートは順調にのびていく。北西壁はC3から右斜め上に向かって約十数ピッチトラバースしていき、そこからはまっすぐ北西稜の肩まで登っていく。七ヶ峠に達してから適当なテント地がなかなかみつからず、①左斜上して北西稜の肩にでるルート、②さらに岩壁近くまで登り、バンドを左へトラバースして北西稜にでるルート、③右にトラバースし、主峰と南西峰の間に続くバンドに食い込むルンゼの入口に達するルートの三つが考えられた。しかし結局テント地の関係で③のルートとなり、ルンゼ入口のセラック下をC4予定地とする。

七月六日、頂上への最終段階にそなえて、全員分散してベースに下降を開始する。C2にて突然現われたオーストリア隊に会い驚かされる。彼らは六人でやってきており、当初マンドゥ氷河より北西壁を下部より取り付こうとしたものの雪崩と岩壁に遮られて、北稜の急な側壁をダイレクトにC1へ上がってきたものであった。しかし既にフィックスの大方を使い切り、彼らだけでは登頂は無理な状態であったため、結局は我々のフィックスをたどることとなる。

七月七日、全員がベースキャンプに集まり、頂上アタックに備えて休養を取る。チームを賀集・和田以下の五名と重廣・キャプテン以下六名の二つに分ける。そして七月九日に賀集・パーティー、十日に重廣・パーティーがベースキャンプを出発する。計画は十日以上も遅れているため、上部での食糧が足りず、残り少なくなったベースキャンプ用の食糧をできる限り持つて出る。

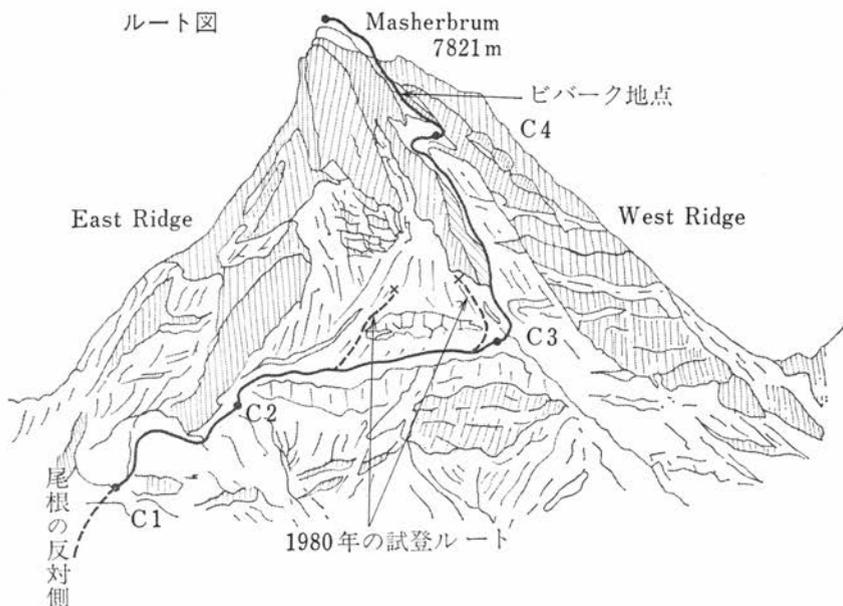
七月十日に賀集・パーティーはC3入りするが、C3直前のトラバース終了地点で盤状雪崩に遭い、賀集と外山が流される。とくに外

山は一〇〇ギも流され、危うく懸垂氷河からダイビングするところであったが、かろうじてプラトリーの端で止まる。

七月十一日、和田、外山がC4に入り、すぐ上のルンゼに取り付く。最も細い部分はオーバーハングしたチムニーで、そこから上の雪のバンドに乗る越す部分が悪い。バンドを左斜上し、雪面をさらに頂上雪田に向かって登る。賀集・パーティー、重廣・パーティーへとルート工作を引き継ぎ、七月十五日、あと四〜五ピッチで頂上雪田という所まで到達する。しかしその夜よりまたしても悪天が始まる。C3とC4に分かれて、丸三日間の悪天をじっと耐える。

七月二十日に天候回復、C4とC3のメンバーが入れ変わり、翌二十一日、賀集・重廣・西堤、龍田、藪川がC4より頂上アタックに向かう。しかし最高到達点から頂上雪田に続くルンゼに移る部分が非常に悪い。一度下降してもろいフェースを登らなければならぬが、数時間かけても突破できない。このルートは無理と判断してルート途中から、主峰と南西峰とのコルへの最短距離を取ることとする。しかしすぐに時間切れとなりC4へもどる。キャプテンは体調を崩し下降していったが、日本人隊員は全員C4へ集結する。

七月二十二日、和田、伊藤、外山、山本の四名は、C4を出発し最後の岩壁帯に取り付く。ハング気味の凹角を直上し左へ乗っ越し、大きなフェースに出る。そして右へ小カントをまわり込み雪のついたバンドをトラバース。そのあとフェース、スラブを直上し、ディエードルを越えるようやく雪壁となる。さらに雪稜を越え、雪のルンゼを登るとや々と稜線に飛び出す。夕闇が迫る中、フィックスを張りながらナイフリッジの稜線を主峰に向かう。しかし頂上



手前に小岩峰が出てきたため、その日の登頂はあきらめ、午後七時下降を開始する。九時すぎに七五〇〇mの雪面まで下降し、そこでピバークに入る。

彼らはその日稜線に出る手前で、約一〇〇m南西峰よりに、一九八一年のポーランド隊のものと思われる遺体と赤いピッケルを発見した。

七月二十三日、曇り空に時折り小雪の舞う天候であるが、ピバーク組、C4組とも同時頂上攻撃を敢行する。物質の面からも気力の面からも、我々にとってこれが最後のアタックであることは明らかであった。頂上岩壁帯でピバーク組に追いつき、相前後してユマールリングを続ける。天候もしだいに晴間が広がってきて、また昨日のフィックスがあるため稜線まで比較的スムーズに進む。頂上手前の岩場はチムニーを強引に登り、フーシェ側から巻くように上に出る。雲の上よりK2、ブロードピークの頂上が見えだすと同時に細長い頂上稜線となり、その中で真中のピークがマシャブルムの頂上であった。和田パーティーは十一時三十分頂上に到達。後続も次々と頂上に立ち全員登頂となった。しかし交感神経障害による左手全体の腫脹と痛みに悩まされていた寺内は、一人遅れ四時に登頂したものの、帰路の空中懸垂で一〇分程落ちる。打撲のみで事なきを得たが、結局以後の下降ができず、七五〇〇mで賀集とともにつらいピバークを行った。

七月二十四日、ピバークの二人もC4に無事たどり着き、全員合流して撤収を開始する。その日オーストリア人三人がC4を出発、我々のフィックスを使用し頂上に立った。

ブロードピークへ

八月二日、イエルマネンド氷河出合にコック一人を残し、十人のポーターと共にブロードピークを目指す。ピバークで凍傷を負った寺内と、彼に付添う伊藤は一足先に帰国することになった。ゴレポロで一泊した後、小雨がそぼ降る中、ゴドウィン・オースチン氷河五〇五〇呎地点のブロードピークベースに着く。すぐ近くには、パキスタン陸軍登山隊のベースがあった。今年は天候が悪く、ブロードピークに登頂できたのは彼らが最初であった。翌日から八日まで雨のため停滞となり、近くのK2ベースキャンプにH.A.J.隊、クルティカ、シャウワリーの隊を訪ねたり、後からブロードピークベースにやってきたバラード隊、ワンダー隊と交歓を行う。

八月九日、やっと晴間が広がり、隊員八名とキャプテンのブロードピーク攻撃が始まった。ベースから高度差三千呎の頂上をアルパインスタイルで一気に落とすため、余分な荷物はすべて置いていく。予定がはるかにずれ込んでいたため登山期間はわずか一週間しかない。試みは一回限りだし、まあ登れなくて元々という気持ちで半分であった。ルート的には問題はなく、各々の力量に合わせてお互いの責任において登り、それでだめだった者は先に下りればよいという考え方であった。

荷上げを行うワンダー隊と前後しながら、取付点のセラック帯から雪壁を登る。さらに急な氷壁を古い固定ロープに導びかれるように五八〇〇呎の第一キャンプ跡に着く。さらに岩稜の中の雪面をぬうように進むが、荒天期間中に積もった雪が深くなり順番にラッセルを交代していく。薄暗くなる頃六四〇〇呎の岩稜上に三つのテン

トを別々に張る。

八月十日、風は強いが今日も晴れわたる。岩稜から雪面にでて古いロープを掘りだしながらやや右へトラバース気味に進む。西稜上にて振り返ると、登ってきたばかりのマシヤブルムが一際鋭く聳え立っている。西稜の七一〇〇呎地点にトップは九時半頃つくが、そこからさらに登り続けるかどうか迷う。この上は主峰と中央峰のころまでいいテント地がなさそうだし、明朝早く出れば頂上まで届くだろうということで早々とここにテントを張る。高度の影響のためか遅れる隊員もみられ、隊員間の力の差が徐々にでてきたことを知る。

八月十一日、零時起床、二時すぎに出発する。一日で十分頂上に立てるだろうという計算で、荷物をさらに削り、寝袋もテントも持たずテントの外張のみで出発する。ヘッドランプをつけ、広い斜面を九人で夢遊病者のようにフラフラ進む。すぐ近くに見えたコルは一向に近づくかず、ラッセルもますます深まる。さすがに八千呎近くの股までのラッセルはきつく難渋を極める。途中中クレバス帯でルートを誤り大幅にロスタイムを取られるが、ようやく一時過ぎに烈風吹き抜ける七八五〇呎のコルに着く。ガスも広がり風も強まってきたので、ここから頂上への往復には早い者でもさらに五〜六時間が必要となるであろう。今日は登頂は無理と判断し、稜線に残る和田以下四名と、下の安定したクレバス帯まで下りてピバークする賀集、重廣以下五名に分かれる。和田パーティーは強風の中でテントの外張を被り、ほとんど寝ることもできず一晚を過ごす。

八月十三日、二時半にピバーク地を出て、五時すぎにコルに着

く。やはり風が強く雲も広がってきて天候が長くもたないことがわかる。和田パーティーの後からナイフリッジを進む。それは一〇〇^{メートル}程で終わり、その後は八〇三〇^{メートル}の前衛峰に上がり、そこからほとんど登り下りのない稜線がブロードピーク主峰へと続いている。

途中藪川が調子が悪く引き返すが、先行の和田、外山、山本は十時すぎブリザートの中頂上に立つ。さらに賀集、重廣、西堤も遅れて頂上に立つも、龍田とキャプテンは嵐のため頂上事前数百^{メートル}であきらめられる。その日和田等三人は七一〇〇^{メートル}まで下降し、その他六人はふたたびセラック帯でピークとなる。

八月十三日、両手に凍傷を負った藪川を引きずり下るすようにして七一〇〇^{メートル}まで下降、全員合流後さらに下降を続けC1地点で一泊。翌十四日夜遅くにベースキャンプにたどり着くことができた。

おわりに

マシヤブルムでは頂上までほとんどフィックスをべた張りにする徹底的な包囲戦術を取り、またブロードピークの方はその後の順化できた状態で、ワンブツシユで頂上を落とすというアルパインスタイルの中でも最もすっきりした形を取ることができた。

マシヤブルムは当初北西壁上部からまわりこみ、北稜最上部を頂上にダイレクトに登る予定であったが、右へ右へと追いやられ、最後のエスケープルートとして考えていた主峰と南西峰とのコルへつき上げるルートとなってしまう。結局はこれが北面からの最弱点となるルートであり、予想以上の悪天などのためこれを取らざるを得なくなった。この山はバルトロ山城で最も南に位置し、また独立峰のため天候が悪く降雪量も多い。ルートのみると、下部は雪崩

の危険性がありショートカットができにくく、また七千^{メートル}前後から頂上までの間に岩壁帯が広がっているため高度での困難な登攀を強いられる。メスナーも言ったとのことであるが、北稜はアルパインスタイルは無理で、我々も頂上を落とすことのみを第一に考えながら余裕のある極地法を採用した。そして曲がりなりにも全員登頂できたのは、十分すぎると思える程の装備、食糧を用意し、悪天のため十日間以上も予定をオーバーしてもねばれたことと、また雪崩による装備流失にもかかわらず対処し得たことによる。勿論一九八〇年の登山により下部ルートをみつけ北西壁への弱点を読めたこと、そして三人の登攀リーダーを中心にヒマラヤ経験者を半数以上確保できたことも成因につながったのであろう。

ブロードピークはマシヤブルム北稜という第一目標が達成されて初めて許される山であったが、そのアルパインスタイルは我々の力を試す登山でもあった。八千^{メートル}の速攻登山が決して超人のものではなく、経験を積んで高度順化さえすれば夢ではないという考え方があった。今回はリエゾンオフィサーを含めて九名でアタックしたが、このような多人数でのアルパインスタイルでは、比較的容易であるが深いラッセルが続くルートにおいて他パーティーのトレースをあてにしなくてもよいというメリットがある。そしてわずかな好天について独自のペースで登頂できた。ちなみに同シーズンにブロードピークに入ったヨーロッパ勢は強力なパーティーであったが、二〜三人の少人数のため頂上を逸した（この年の登頂者はパキスタン陸軍の三人と我々のみ）。その反面多人数で登ると力の差がどうしても出てきて、お互いの足を引っ張ることになる。結果論ではあ

るが我々の隊でも強いメンバー五人程でアタックしていれば四日間（登頂に二日半）で登山を終了でき、凍傷患者（後に両手指八本を切断）も出さずにすんだのではないかと考えている。

もう一点、今回我々がバルトロ氷河での合宿のような形態をとろうとしたが、これはヨーロッパ人達が国籍を越えて多くの山を重複したメンバーで登っている（結果的に登山料も安くなる）のをヒントにした。実現はしなかったが、横浜蝸牛山岳会のガシヤブルム二峰隊のメンバーに登録させて頂いて、ブロードピーク終了後あわよくばという計画もあった。このように少なくとも日本人どうしの隊だけでも登山許可をうまく融通しあつて、同時期に多くの山を登れるようになればと思う。

△記録概要▽

隊の名称 一九八五年関西カラコルム登山隊

主催団体 大阪府山岳連盟

活動期間 一九八五年五月～八月

目的 マシヤブルム北稜からの初登頂及びブロードピークへの

連続登頂

隊の編成

総隊長（日本で指揮）Ⅱ石塚 彰（54）、隊長Ⅱ賀集 信（36）、登攀隊長Ⅱ重廣恒夫（37）、隊員Ⅱ和田城志（36）、西堤理一（34）、寺内悦雄（35）、伊藤博昭（35）、外山哲也（27）、山本宗彦（36）、龍田雅史（25）、藪川洋一（23）、リエンオフイサーⅡアブドゥラ・ジャバル・バツテイ

（27）

行動概要

五月二十日キャラバン開始、五月二十九日イエルマネン

記録発表

ド氷河上にBC（四六〇〇）建設、六月一日登攀開始、六月五日C1（五六〇〇）建設、六月十三日C2（六一〇〇）建設、六月二十九日C3（六五〇〇）建設、七月十一日C4（七二〇〇）建設、七月二十三日マシヤブルム（七八二）全員登頂、七月二十六日全員BCへ集結、先発隊ポーター集めのためビアンゴへ移動、八月二日ビアンゴ出発、八月三日ブロードピークBC（五〇五〇）に到着、八月四日～八日雨のためBCにて停滞、八月九日BC出発、C1（六四〇〇）着、八月十日C2（七一〇〇）着、八月十一日七八五〇のホルに全員到着し、第一次隊はそこでビバーク、第二次隊は七五八〇に下りてビバーク、八月十二日一次・二次隊のうち六人がブロードピーク（八〇四七）に登頂、八月十四日BCへ下山。八月二十四日スカルト到着。

岩と雪一一四号、岳人四六二号、徳洲会病院誌（徳洲）四四号～五四号。

シャハーン=ドク 一九八七

ヒンズー=ラジ山脈に位置するシャハーン=ドクは、一九五七年の「京都大学・パンジャブ大学学生合同スワート=ヒマラヤ探検隊」に参加した本多勝一氏の名著『憧憬のヒマラヤ』によって世に紹介された。以後三十年をへた今日もお未踏峰であるということには私たちにとって大きな魅力であったし、と同時に山のもつ困難性と規模が、今回の私たちのような、登山期間の短い、そして力量からしてさほど強力とはいえない軽登山隊の対象としても似つかわしいものと思われた。

私たちの登山隊は大学山岳部や社会人山岳団体の派遣ではなく、シャハーン=ドク登山に興味を示す、いわば『同好の士』の集まりである。しかも隊員六名の平均年齢四十六歳。これはヒマラヤ登山隊としては高齢に属するだろう。そして奇しくも、前記の本多氏が隊長である。また、かつての京大隊の隊員だった沖津文雄氏も今回のシャハーン=ドク登山の隊員である。

根深 誠

周知のように一九五七年の京大隊は日本におけるかの地域のパイオニアである。それがこうして当時隊員だった両氏が三十年後にかの地域を訪れることは、察するに両氏の胸中は、古いアルバムの写真でも見るような懐旧の念に堪えなかつたのではなかるうか。

じつのところ、ギルギットからジープで出発し、途中で立ち寄ったグピスという村では、かつてのラジャの家に招待されたのだが、その家のアルバムには若々しい隊員たちの昔日の面影を残した一九五七年京大隊の記念写真が納められてあつたのだ。当時のラジャは四年前に亡くなられたということで、三男のアスガール=ハッサン氏が接待してくれたのだが、彼との談話になつかしさを感じたとしても当然であろう。

いふなれば、そのような『青春の郷愁』を秘めた山城への魅力ある今回の山旅なのであつた。もちろん他の隊員にしても、そのあたりの魅力についてはメンバーシップとして理解していたのである。

ベースキャンプへ

一九八七年七月十八日、コック兼ポーター二名とリエゾン・オフイサーを含めた計九名で、手配した三台のジープに乗り込み、荷物とともにギルギットを出発。途中、ガクーチという村に一泊し、翌日シャマラン村につく。ギルギット川上流のガズル（ギザール）川が三股に分かれる所にシャマランがある。このシャマランからロバ八頭、ウマ一頭を荷物を積んで二十日、バフシユターロ谷をさかのぼり、ベースキャンプへ向う。谷間の道はよく踏まれている。ロバの背に薪を積んで上流から下ってくる村人と挨拶を交わしたり、あるいは移牧の夏村でダヒ（ヨートルト）をごちそうになったりしながらのんびりと進む。

昨年と同じ時期に偵察のため広島三朗氏と彼の山仲間を含めた私との三人で入山し、同じコースをたどったのだが、そのときに比べると今年は気温も低く、涼しいようだ。周囲の山々の積雪も多く、谷間の流れの所々にはまだ雪渓の残っている場所も見られる。

キャラバンを開始して二日目の朝、リエゾンのザエド・イクバル氏（二十五歳）は職務を放棄し、下山することになった。パンジャブ平原のサルゴダ出身の彼には山は生まれて初めての体験であるらしく、不安の要素も多かったようだ。「昨夜は寒くて眠れなかった。頭痛がする」と彼はいつていた。

しかしそれにしても軍隊から派遣されたリエゾンたる者が、たった一日のキャラバンで弱音を吐いて下山するなどはまさに前代未聞であり、これ以下のお粗末ぶりもさらにはないものと思われる。が反面において、これはのちに下山してから聞いた話だが、たとえ

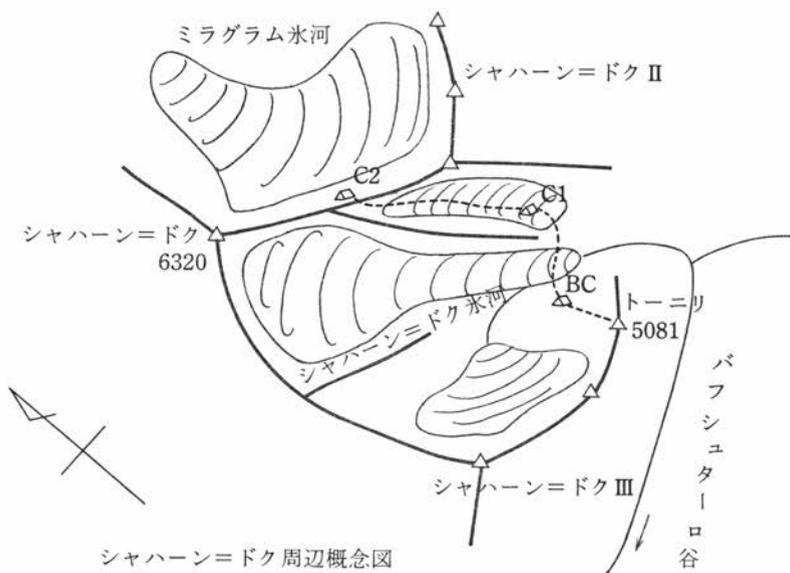
ば登山隊から多額の金を盗んだりするような明大ラカボシ隊の悪質なりエゾンよりは、まだまだましである。

三日目。標高四〇〇〇呎のモレーンの丘にベースキャンプを建設する。白花のサクラソウが一面に咲いていて、そこからはシャハーン・ドク主峰がよく見わたせた。

登攀

七月二十三日。二隊に分かれてルート偵察を行なう。一隊はかつての京大隊のとったアイスフォールのインゼル・ルートをもう一隊は昨年偵察時に目をつけておいた新ルートを偵察した。結果としてルートの安全性という点から新ルートをとったわけだが、どちらも一長一短である。速攻ということでは登攀距離の短い京大隊のルートがすぐれているだろうし、多少の悪天候のなかでも行動ができることや安全性からすれば、アイスフォールを迂回する新ルートがすぐれているように思われる。

ただし、私たちは当初京大隊のルートを踏襲する計画であったのであり、新ルートの採用についてはベースキャンプへ到着するまで考えていなかった。それがアイスフォールの崩壊という危険性を目のあたりにして急遽ルートを変更したわけである。したがって実際にはベースキャンプの位置も新ルートには不適であった。というのは新ルートに取り付くには対岸までシャハーン・ドク氷河をわたらなければならなかったし、しかも高度差にして約二〇〇呎いったん下らなければならぬのだ。それに登攀距離が長い。このため悪天候が続くなかのルート変更は判断としては正解だと思いが、長いルートに見合ったぶんの固定ロープがなく、結果的には悪天候



シャハーン=ドク周辺概念図

と固定ロープの不足がからみ合って敗因となった。

ルート偵察の翌日、荷上げのためのルート工作。そしてそのつぎの日、第一キャンプ建設。翌二十六日はベースキャンプのメンバーが第一キャンプへの荷上げをし、第一キャンプのメンバーは荷上げもかねて第二キャンプ予定地偵察。

ところで私たちは第一キャンプまでの登路になっているサイドモレーンの急峻な支稜を「ガレ場リッジ」と呼んでいた。そしてガレ場リッジの終了点から第二キャンプまで続く緩傾斜の氷河には「鼻歌氷河」と命名した。ガレ場リッジと鼻歌氷河の接点にはベースキャンプから眺めると雪面に丸く露出した岩があるが、これは「アンパン岩」、しかし隊員のなかには女陰のクリトリスに見たてて「クリ岩」と呼ぶ者もいる。ここでは私の趣味によるが、「アンパン岩」と呼ぶ。

さらに鼻歌氷河の源頭の、第二キャンプを建設した純白のピークは「決断のピーク」と名付けた。標高五四〇〇m。このピークから雪庇の発達した岩まじりのナイフリッジを下降するのに勇気が必要としたことがその名の由来だ。そして高度差にして一〇〇mほどだが、その下降すべく鞍部には「恐怖の切戸」という名を付けた。この恐怖の切戸の先で、ルートは京大隊のそれと合流し、頂上へ続く。

私は、頂上へ続くその懸垂氷河の斜面を「青春の壁」と呼んだ。三十年前、頂上直下一〇〇m地点まで迫り、引き返した、その若き日々のほろ苦いであろう経験がわかるような気がして、そのように名付けたのだが、これは当人に失礼にあたるかもしれない。

さて、第二キャンプ予定地を偵察した翌日から天候が崩れた。一日停滞したあとの二十八日、第一キャンプから第二キャンプへ悪天候をつけて荷上げに向うが、途中に荷物をデポし、退却する。翌日停滞。翌三十日、第一キャンプのメンバー二名が雷鳴におびやかされながら第二キャンプを建設し、そのままキャンプ入りする。

だが翌三十一日、悪天候のため、またしても停滞。もはや日数もなくなってきた。ベースキャンプ撤収日は八月五日なのである。明日から連日の晴天が続いたとしても残り五日間。ルート工作、登頂、下山……どう考えてもギリギリの日数であり、これまでの悪天候から判断して登頂は望めそうにない。それに恐怖の切戸用の固定ロープを三〇〇ポンドは荷上げしてあるのだが、目算では二〇〇ポンドほど足りないのだ。それで下部のガレ場リッジの固定ロープを回収して間に合わせようとしていたのだが、その回収のための日数もすでになかった。

どうせ登頂が無理なら、せめて核心部に手もちのロープを固定して終わりにしよう。そうすることで満足感が得られるような気がした。

八月一日。快晴とはいえないが青空がひろがっていた。昨夜降り積った新雪の表面がキラキラ光っている。ヒザまでもぐる。周囲の遠景・中景・近景に群雄割拠してヒンズー・ラジの山々が連なっている。目指すシャハーン・ドク主峰の北側は足のすくむような大岩壁がミラグラム氷河に切れ落ちている。そしてその向こうのヤルフン川の、さらに向こうに見えるのはワハンの山々だろうか。

第二キャンプの数十ポンド先の下降地点にデポしてある固定ロープを

掘りおこし、その先端を体に結びつけてミッチャン(工藤氏の愛称)が下降する。最初のワンピッチは斜面が凸状にカーブしているの
で、下方が見えない。このため恐怖感をおぼえる。雪面がナイフリッジに変化する付近ではミラグラム氷河側に渦巻き状の雪庇が発達し、ルートが大きく右へ曲つてのび、急傾斜で落ちている。その屈曲部にスノーバーを支点にして打ち、体が振られないようにする。ついで鋭いナイフリッジに岩場がでてきたので、その岩場を巻き込むようにシャハーン・ドク氷河側に下降し、基部にハーケンを打つ。さらにナイフリッジにて、岩峰の基部の小さなコルに達する。この頃から雪がちらつきはじめた。ミッチャンが平型のアイスハーケンとロックハーケンを岩場に打ち、雪壁をトラバースしながら固定ロープをのばしてゆく。岩場にまたハーケンを打ち、その先の氷にドベグハーケンを打つ。そして再びナイフリッジにでる。岩の上に氷が張りつき、その上に雪が積っている。カッティングして氷をはがし、岩の割れ目にコの字ハーケンを打ち込み、それを支点到ナイフリッジの雪庇をピッケルでたき落としながら下降する。こんどは岩峰の上の雪面にスノーバーを埋め、一〇ポンドほど岩場を下ると、またナイフリッジだ。ここでも確保用にスノーバーを埋め、シャハーン・ドク氷河側の雪壁をトラバースする。この付近は風向きが一定していないのか、左右交互に雪庇がでている。足場が悪く、微妙なバランスを強いられる。ナイフリッジにできた雪庇をたき落とし、ミラグラム氷河側をトラバース気味に下降すると、傾斜も緩くなり、最底鞍部までは残り二、三〇ポンド。そこから先は、ミラグラム氷河側に雪庇のついた雪稜が緩い傾斜で登っていた。そ

して、その雪稜をたどることには、もはやなんの困難もなさそうだった。ただし私たちの力量からして帰路を考えれば、滑落防止のための固定ロープが必要に思われた。

私たちは、そこから先へさらに行きたい気持はあつたが、諦めねばならなかった。手もちの固定ロープ三〇〇メートルを使い果してしまつたのだ。下降を開始してからすでに七時間がたつていた。トランシーバーをだし、午後四時の定時交信でその旨をベースキャンプの隊長に伝えた。

この間に確保用の支点として使用したハーケン類やアプミのプレートは以下のとおり。アプミプレート4ヶ。スノーバー7本。ドベグハーケン1本。コの字ハーケン1本。平型アイスハーケン1本。ロックハーケン4枚。シュリンゲンは足りなくなつたので、最後はザックの口紐を切断して使用した。

帰路は二時間で第二キャンプについた。

翌八月二日、ミッチャンと私は第二キャンプと第一キャンプを撤収し、ベースキャンプへ下山した。この日、晴れ間を縫つて、ベースキャンプの四名は近くにそびえるトーニリ（五〇八一メートル）に初登頂した。そして夕方、全員が集結し無事を祝い、ヤギをつぶして食べた。

帰路

私たちは三隊に分かれてベースキャンプを引きあげ、八月六日、シャマランに集結した。その間、それぞれが残された日々を楽しんだわけだが、ちなみに本多氏と私はガズル川でマス釣りを満喫し、沖津氏と佐藤氏は荷物の整理をかねてベースキャンプでシャハ

ーンドクを眺め、広島氏とミッチャンはバフシユターロ谷の右股へ入渓したのであった。

△記録概要▽

隊の名称 日本シャハーン=ドク登山隊一九八七

活動期間 一九八七年七月～八月

目的 シャハーン=ドク（六三二〇メートル）の初登頂

隊の編成 隊長・本多勝一（55）、隊員・沖津文雄（51）、佐藤正敏

（47）、広島三朗（44）、根深 誠（40）、工藤光隆（38）

行動概要

七月十八日ギルギット出発。二十日キャラバン開始。二

十二日ベースキャンプ（四〇〇〇メートル）建設。二十五日

第一キャンプ（四七一〇メートル）建設。三十日第二キャンプ

（五四〇〇メートル）建設。八月一日ルート工作のち撤退。

四日ベースキャンプ撤収。七日ギルギット到着。

紀行・記録発表 朝日新聞（一九八七年九月四日付夕刊・九月十一

日付青森県版）本多勝一『山と溪谷』（一九八七年十一

月号）根深誠。

昭和初期の「慶応の山」

——当時在部した一部員の極めて個人的な回想より——

谷口 現吉

つとはみ出して、当日の話にはまったく捉われずに書いてみることにした。

慶応山岳部への入部

私は入部の前年（昭和三年）、たまたま「登高行・第五号」を読む機会があり、特に大島さんと三田さんのお二人が書かれた「山岳会室を中心としての回顧」「会と仲間」に強く惹かれた。当時私も世の常の少年の如く、「人生如何に生くべきか」などと悩むところがあったので、この二章には心を動かされた。

これだ、何としてもこのすばらしい先輩達の中に飛びこんで自分を鍛えたい、先輩に追いすがり、やがてはこれに肩を並べられるように頑張ろう。そうすれば「我如何に生くべきか」などの答はおのずから見出せるに違いないと思った。

この風を慕って、他を省みることもなく、入学志望校さえ変えて、慶応義塾大学の入学試験を受けたのだった。

しかし私が大学に入学したのは昭和四年で、すでに大島さんは前年三月、前穂高岳で逝かれ、三田さんはインドに在勤されて

はじめに

図書委員会から、山岳史懇談会で昭和初期の慶応義塾大学山岳部とその山登りを語れとすめられ、いったん喜んで引き受けたのだが中途半端な話をしてしまった。やがてその録音を活字にしたゲラ刷りが送られて来た。これに手を入れてくれ、今年の「山岳」に載せるのだということであった。

話なら私だけよりも思っただけの金山淳二君をかたらい、二人で話をした。ところがこれも二人の間の話し合いが不足でまとまりのつかないものとなり、結局私の話だけにしぼって「山岳」ということになった。だがゲラ刷りを読んでまことに当惑した。とてもそのまま「山岳」に載せられるような代物ではないのである。

いったん引き受けた軽率を詫び、出来ることなら一年の猶予をもらって真正面から、表題の通りのものを書きたいと申し入れた。しかし、すでに組み上げた編輯の都合でそれはならぬことを知って、当時在部した一部員の個人的な回想を年代的にもず

いて、三田の山ではお目にかかれなかつた。

このように気負った入部志望者であった私だが、当時の山岳部は、たやすく私を迎え入れてはくれなかつた。来る者は拒まないが、諸手をあげて後輩達を招き入れようというかたちは全くとってくれなかつた。

他の運動部は競って新入部員を獲得しようとは大童であつたのに、山岳部は何もしないのである。登校すると必ず体育会専用掲示板を見に行くのだが、山岳部の山の字すら見当たらないのである。

入学して二ヶ月近く経つてようやく見つけたのが、夏期登山一般募集という掲示であつた。一般募集とは一般学生に向つて「山岳部ではこの夏こんな登山を行います、よかつたら一般の学生も連れて行つてあげましょう」というほどの意味である。山岳部入部希望者を募集するとは、ひと言もいっていない。この機会に初心の者でも山に連れて行くが、山岳部員になりなさいとはどこからも誰の口からもいわれないのである。

私は、はなはだ物足りなかつたが、それ

でも山岳部の人達と一緒に山に行けるだけでも嬉しいので、勇んで、立山、剣、葉師の隊に参加を申し込んだ。

中学時代すでに、槍ヶ岳や前穂高岳に登つた経験のある私であつたが、年期の入つた先輩達から教えられるところは多かつた。その最大の賜は、悠々と山を楽しく歩くことの発見であつた。

夏期登山隊、観月天幕行、スキー合宿など当時の山岳部の年中行事にはすべて参加した。二月に行われた卒業生送別会では、平素謹直な先輩達のみことな酔態を見たり、お燗番や会場のあと片づけを手伝つた。当時送別会は部室をそのまま使つておこなわれた。これですっかり先輩達に溶けこめるようになった。

その数日前、一月に北岳で遭難された野村実さんの追悼会が三田演説館でおこなわれた。この時も会場準備を手伝つた。スキー合宿で、風呂場での裸踊りの輪の中に、尻ごみする新人達をごく自然に肩を組んで誘いこんでくれた故人の暖かい風貌を懐しみながら、こんなことでも部の行事を手伝えることが嬉しかつた。

こうするうちにスキーも、アイゼンも、輪標も、ザイルを結んで歩くこともすべて一通り体験するようになった。前年の夏期登山隊一般募集に参加してから八ヶ月たつて、ようやく部員たる自覚と自信を持つことが出来たわけである。

しかし、当時の山岳部には、入部の規約などというものは何もなかつた。部員たるの責任も与えられる資格も有形のものも何もなくあつた。ただ山登りの好きなものが、部室の生活を中心集っているだけのことであつた。それでいてその中にはおのずから秩序も序列もあつた。何かことのある時には、全員の注目がその人に集つてすべてが整々として行われるといつたふうである。当時のその人とは、斉藤長寿郎さんで、昭和四十一年に故人となつてゐる。また斉藤さんの脇役として私達新人を何くれとなく暖かく面倒を見てくださった波木井六男さんも昭和四十七年に亡くなられてしまった。

その頃の慶応山岳部

私は体力には自信があつたし、少しでも

早く難しい山に登りたかったのだが、必ずしも自分の希望する計画に参加出来るというわけではなかった。しかもその計画への参加が自分に許されるか否かも自分で判断しろ、その判断が的確に出来るものほど、おのずと先輩や仲間達に重んじられる、そしてそこに秩序が生れるのだ、という鍛え方であった。

中学の同期で早稲田の山岳部に入っていた須田信太郎が、入部二年目であったのに、その三月、西穂高に登って私を羨がらせたものだった。

しかし行きたい山にそう簡単に参加を許されなかったことに対しては、これがオーソドックスな鍛え方のように思えて、半面決して不満ではなかった。

「山は黙って登ればよいんだ」と孤高を誇っているように見える先輩達には、畏敬と憧れを感じたものである。

ただそうした雰囲気は満ちてか、なじみがたく、理解に苦しむようなこともあった。というのは山で他の学校の連中となれなれしく挨拶したり、新聞社などから話しかけられるのを極端に嫌う先輩の風習であ

った。

私が入部した頃には、未だ国内でも積雪期に関する限り未登頂の山が残っていた。登るに値するバリエーションルートがようやく注目を浴びるようになったばかりであった。

だから冬や春の登山計画は、技術的困難さよりも、誰も登っていない山に向けられた。それを避けて、二番、三番煎じの計画を登山準備会で発表するのは肩身の狭い思いであった。

私が入部して二年目の冬に参加した、秋田駒ヶ岳隊などまさにその典型であった。

秋田、岩手両県の県境に近く、田沢湖の北東にある一六三七呎の山で、地方的名山の一つである。標高も高くなく、技術的困難は何も予想されるものはないのである。

山形県出身の予科三年の岸君をリーダーとして、二年の海瀬、谷口の両名が参加した。

奥羽本線の大曲から岐れる生保内線の終点から、冬には全く無人になる国見温泉まで、土地の猟師に米、味噌などを背負わせて一日がかりで到着した。昭和五年の一月

一日のことである。

深い雪を踏んでラッセルしながら帰途の目印のために要所に赤旗をつけて何回も頂稜の下まで往復した。それから一週間登頂の機会を待ったのだが、頂稜線に達し頂上を指呼数百呎に見ながら、風雪、突風、濃霧などのため引き返し、ついに登頂出来ずに終っている。笑止ともいえる弱々しい敗退だが、濃霧、風雪下での方向維持の不安、隊員誰も体験を超えた烈風など、未知の領域での不安と無力さとをこれほどみじめに思い知らされたことはない。

実はそれから数年の後、これとは全く対照的な体験をした。二月の八ヶ岳で、未明本沢温泉を出発して、硫黄岳、横岳、赤岳、権現岳、編笠山を越して小沢沢に近い村落まで、走り抜けたとでもいえる強行をした。朝からかなりの風雪で、頬その他を凍傷にやられながら連続二十一時間の強行であった。それでもそれまでどこかで体験したことと組合せであったから、少しの不安もなく始終昂然として歩いた。

高さ、寒さ、連続行動時間、風速など、すべてそれまでの自己の体験を超えるもの

が一つでも含まれている山登りこそやるに値すると考えていた当時の私である。しかし内地ではやがてめばしいバリエーション・ルートもほとんどが登りつくされる時期が来た。学生登山者達はまさに前途への曲り角に立たされたのであった。

もちろん日本内地を離れば、まだ未知未踏の領域は無限であり、人類はエベレストでこそすでに八〇〇〇呎を超す地点に達していたが、峰頂としては、八〇〇〇呎はおろか、七五〇〇呎を超す登頂記録はガールのカメット（七七五七呎）ほか数峰に過ぎなかった。

部報登高行・第八号の消息欄

「登高行」の消息欄は、創刊以来、鹿子木先生、楨さんをはじめ大先輩達から寄せられた極めて格調も高く、意義深いものが多かったが、特に昭和六年末刊行された「登高行・第八号」の消息欄は際立っていた。三田さん、本郷さんなどが海外に長期滞留されていたために、その分量も四〇〇字詰めに直すと八〇枚にも達している。

発信者は、三田幸夫、本郷常幸、楨有

恒、中條常七、藤江才介、国分貫一、西川不二男の諸先輩達で、受信者は早川種三、楨、田村、平沢、佐藤久、大賀先輩達で、山岳部ならびに部員を代表する長野清一宛のもの等三五通である。

その中の一つに、次の三田さんからの一文がある。この手紙の示唆こそ、その後数年にわたる慶応山岳部の進路を定めたといっても過言ではない。さらには二十数年をへて第一次マナスル隊の加藤、山田の二名が宿営したノースコル上、七三五〇呎の雪洞に通ずる一筋の歩みの、スタートでもあった。まことに記念すべき一文なのでここに、その全文を転記した。

*

前略 其の後は御無沙汰申上げて居ますが部員諸兄益々御活動の事と存じます。この夏の計畫は如何ですか？此の手紙の着く頃はカンチェンジャンガの連中の愉快な報告を得られるでせう。ヒマラヤも益々多事になりました。吾々の舞臺も日本を離れたものになりたいものです。余りに多くの Seven, Eight thousander がヒマラヤには待つて居り

ます。既に登山界は Drei Tausender の時代ではなくなつて來ました。僕は色々の原因を擧げて Seven のカンチェンジャンガ山峯こそ近くヒマラヤの登山の中心となるべきものだらうと時々仲間の方に言ひました。此れからの數年が Himalaya 登山史初期の活躍時代に入る事とせう。

此の頃の諸兄の傾向は如何です？冬山は？夏山は？濱口、齋藤、國分の連中から手紙を貰つて間もなく野村君の悲報を手に入りました。僕は言ふべき事を知りませんでした。山を志す人のみが一番好く御察し出來ると思ひます。

今も登高行第五年の大島が書いた岩小舎のある夜の事を讀み返して山を登る者のぶつかるある運命について考へさせられました。

然し僕等の仲間は相變らずの氣持で恐らく皆の者が居るでせう。先輩連はやつて來ますか？新しい俱樂部ルームは如何です？僕も東京の地を踏んで一番先に訪ね度いのは山岳部の部屋です。

僕も商賣の事に携はつて居ますが相變

らず山の事は頭から離せません。平地に居る時は只機會の來た時の爲に色々有形無形の準備をして居ます。

ヒマラヤの高峯には雪と、岩と、氷の Combine した技術が絶対に必要です。

日本でも冬や春山で雪と岩の技術は練習出来るでせうが氷はありません。然し冬春の山の経験は非常に役立つ事と思ひます。その意味に於て日本の學生は劔や穂高を持つ事は實に恵まれて居ます。有數な登山家を出した英國人は本國に氷河を持つた山を持つて居りません。然も總てに於て日本アルプスより貧弱でせう。日本の人は瑞西に行く機會は余りない譯ですが練習場としては手頃なものを持つてゐると言つて良いでせう。

日本アルプスの冬春期の登山はどれ程雪や寒さに對する貴重な経験を與へて居るか解りません。此點僕は今以て感謝して居ます。

僕等が始めて立山、劔にスキーを利用して登つた時は雪の信越の山は殆ど未知でした。でどんなに皆が眞面目に緊張して準備したか解りません。Steigleisen も

の二も此の時始めて練習を始めたのでした。

五、六年經た今日の進歩は驚くべきものです。

今後の世界の登山界の中心は勿論此のヒマラヤに集中されるでせう。そして何時誰が急にやつて來る事になるかも知れません。僕等が加奈陀へ行つた時でも余りに突然でした。諸君の撓まぬ鍛鍊を期待します。

ヒマラヤでは Base Camp 以上は殆ど雪中の Camp です。それも一萬呎を遙かに越えたものゝみです。日本の山でも充分な準備を以て天幕を上へ進めたなら隨分面白い事が出来るでせう。同時に非常に好い経験となるでせう。

例へば、一萬呎附近の雪中、露營を數日間續けたならば恐らく驚くべき新しい經驗と知識を得られるでせう。別山乗越、一ノ越、五色ヶ原、槍の北鎌尾根、飛騨乗越、穂高主峯間の鞍部等皆仲々面白いと思ひます。尤も其れには member の充分經驗ある自信あるものたる事は論を俟ちません。

その邊で總ての equipment は大いに改良されるべき點が生ずると思ひます。僕も平地に居て目下其等の點を一生懸命研究中です。諸君の中で新しい經驗を得られたらばどんな事でも是非聞かせて戴き度いと思ひます。

今こんな事を考へて居る人間も居る印度は Gandi の Civil Disobedience の Campaign で大變です。小さな riot が再々起ります。印度も益々多事です。只ヒマラヤのみ依然として永遠の氷の冠を高く持して仲々人を近付けません。苦駄らぬ事を長く書きました。

時節柄諸君の御自愛御健闘を祈ります。登高行は今年はどうしますか？

一九三〇、八、二五、印度にて

三田 拜 (山岳部宛)

*

着信した一九三〇年は昭和五年であつて、私が入部した翌年のことである。ところが私はこの手紙の実物を見ていない。翌六年末に発刊された「登高行・第八号」の消息欄で初めてそれを読んだのである。

これだけの示唆に富む先輩からのアドバ

イスがなぜ当時の部の中ですぐに真正面から取り上げられなかったのか、私は不思議でならない。当時在部して部の中核にあって、後藤、山田、長野、渡辺良、斉藤貞、渡辺英、三井等七先輩が奇しくもことごとくすでに亡くなられていて、その真意を知らずすがとてない。

だが当時はまだ国内にも積雪期末踏跡の頂やルートが残されていて、それに向って全力を傾倒していたので、他のことに向って新しく踏み出して行く余裕がなかったのだと思われる。

この一文を読んで私は興奮した。これこそ私達の行くべき途だと、全く同じことを考えた金山とは、連夜彼の下宿を訪ね深夜まで話をした。同志を得たのである。

ところがずっと後年になって知ったのだが、京都大学では私達よりも早くその年富士山の沢を舞台にして、編隊や露営練習を行っている。まことに敬服に価することである。

高所露営の実践

もうその頃には私も部内でかなり自分の

思うように発言し、行きたい山にどんどん行けるようになっていたから、意識してこのことを提唱した。むしろ在部の先輩達を突きあげるかたちにさえなった。

それから一年たつて、ようやく昭和八年の一月、西穂高岳での露営生活を行うこととなった。当初は高所露営という定義づけもなく、故あって提唱者の金山、谷口は荷揚げを手伝っただけで参加していない。

いわゆる極地法的登山形式の導入は、私達は意識してこれをおこなったわけではない、どこでも、幾日でも、小屋などの存在に全く制約されないで行動出来れば、必然の結果として長いアプローチを計画に導入することが出来る。極地法はその計画を実行する上での、自然発生的タクティクスに過ぎなかった。後年早稲田の関根君達が唱導した、極地法至上的な傾向とは自ずと異なる考えであった。

いささか繰り返していうと、まずどこでも、何日間でも、全く未知のところに泊ることが、どうしても将来の難しい山登りには必要であると気がついたので、内地の山でやれるところまでやってみよう、とい

うのがすべての動機であった。そうして未知の領域への突入に自信を持つことが、ヒマラヤに通ずる第一歩であると本気で考えたままである。

ところが、内地の冬山であっても、とりかかってみると予測を越えたことが多く、まあこれでどうやらよい、と思うのに三年かかってしまった。そしてその経験をひとまとめにして「登高行・第九号」に発表した。

その巻頭に高所露営の高所とは、とあえて定義つけたのは、三年の経験から明白にこう定義づけるべきと思ったからである。三年の経験をへて、同じ雪の中でも森林限界を境にして全くその容相が変わっていて、同日には論じられないことに気づいたからである。

その巻頭の「まへがき」を引用してみよう。

*

此處に高所と云ふのは、一つの山岳の森林限界より高き地帯を意味するのであつて、必ずしも山岳の絶對的高距の大なる所を云ふのではない。積雪期の露營に

於ては森林を利用し得ると否とは凡ゆる點に大なる相違を生ぜしめる。森林を利用し得る露營に於ては又自ら異りたる露營法も生ず可く、その携行す可き裝備、食糧等も、高所に於けるそれとは大いに異なる所があらうと思ふ。即ち此處に敢て高所なる語を冠した所以である。

なほ以下本稿は、日誌・裝備・食糧の三編に分ち、昭和八年の一月西穂高岳山稜上に於て行つた露營生活以來の私達の露營練習に關する記録と研究の跡を部員（既に卒業された方もある）數名が分擔執筆したものである。

抑々當部に於ける積雪期露營の經驗は、昭和八年一月の西穂高岳山稜上に於けるものが嚆矢ではなく、古く大正の年代より森林帯の中に於て、又其の限界に近き所に於て、幾多の尊い經驗が繰返へされて來たのである。併しながら謂ふ所の高所に於ける露營生活は彼の西穂高岳に於けるものがその最初のものであつた。嚴密に云ふならば西穂高岳に於ける露營生活も高所露營とは云ひ難い點がある。併しその意圖とする所が明に將來の

高所露營の研究の第一歩たらんとするにあつたのであるから此處に議論の餘地はないと思ふ。

此の時から私達は或は劔岳に、槍ヶ岳に、又は潤澤圍谷を圍む山稜上等に、その練習場を求めて一意露營生活の練習を勵んで來た。此の間私達は露營生活を眞に身につけん爲に、此等の露營地を足溜りとして、困難なる又興味ある登攀を行ふ事に努めた。露營生活が身につくと、露營地を根據地として今迄私達が小舎より出發して居た時と同様に精神的にも、肉體的にも働ける事である。

併しながら私達は飽く迄露營生活そのものに第一義を置いて、決してそれ等の頂に立たんが爲に該露營地を選んだのはなかつた。即ちその露營地が露營の練習場としてそれ迄の私達の經驗を一步進めた地である事に意義があつたのである。

然らば何故に私達が斯る目的を以て眞摯な努力を拂つて來たかに就いて些か述べておかう。昭和六、七年頃に至ると我が國の山岳に於ける積雪期の初登頂時代

はその終末を告げた。(未だ興味ある又可能なるバリエーション・ルートは幾多残されては居たのであるが)。此處に於て私達は小舎の存在に計畫を制約されず、積雪期の山岳を自由に登り得る力を、自ら養はん事を期し、今後の進む可き道をそこに見出したのであつた。之こそ至高に憧れるが故に凡ゆる精進を誓ひたる私達の登高精神の一つの現はれにすぎないのである。

私達は先づ常に赴くことの出来る練習場の範圍(即ち日本内地の山岳)に於て、到達し得る最高の境地に達す可きであつた。そして現在では未だ經驗せざる幾多のより困難なるものもあらうが漸くそれ等に對しても一通りの見透しはつけ得るに至つたと信じて居る。故に私達の今後の露營生活は必ず他の何等かの明確な目的を以て行はれる事であらう。

併し嚴冬に於ける露營生活はその持つ本來の峻嚴さの爲、自らを鍛へんとする若者にとつて他に於ては容易に得難い好き試練であるから將來も露營生活それ自身を目的として續けられて行く事であら

うと思ふ。

(谷口理吉記)

行文まことに生硬で面映くさえ思うのだが、あえて転記した。

三年の経験を重ねて内地ではまずここが一番難しかろうと思われる厳冬の奥穂高岳頂上直下に、数日間幕営することが出来た。これで一段落であった。更に当初は考えてもいなかった雪洞露営の練習も始めることが出来て、これは予想よりも早く完了した。

私は雪洞露営が実用されるより一日早く卒業して、引き続き軍務に服することが数年に及んだので、その実際の本格的体験はない。

この積み重ねの上に立って後輩達は思う存分積雪期の高処を歩き、必要があれば、いわゆる極地法的タクティクスも駆使してさらにその足跡を上げていった。藍より出でて藍より青しというべきだろう。

登山界は敗戦による空白はあったが、その恢復は意外に早く、戦後八年にしてマナスル隊は出発した。七三五〇以上の雪洞で、

自分達の学生時代の体験をそのまま悠々と実践したのが、加藤、山田の兩名でそれに備する者達であったとはいえ、まことに幸せ者である。

昭和五年八月、カルカッタに在った三田さんからの一通の手紙に啓発された「慶応の山」は、二十三年の後、三田さんが自ら隊長として臨まれた第一次マナスル隊の膝下で、美事な花を開かせたのである。

もう一つの慶応の山

山登りはこのような、未踏への飽くことのない前進がすべてではない、山登りにはもつと他にも拉がりがあり、それがまたすばらしいのだという考えで、山登りを続けるものが我々の時代の山岳部にもいた。

これらの者と、私達のようにひたむきに前に進もうとするもの間に対立が起り、軋轢が生じて不思議なことではなかった。私達の時代には流血の争いもあった。

私自身はそれほど尖鋭的であったわけではないのだが、双方の亜流者達の配慮を欠く言葉の端が原因であった。今ではむしろそのことが無性に懐しく想起される。

それから五十年余りの歳月がたった。今はよくその当時の仲間と、やれ古稀だ、喜寿だといって集ったり、時には低い山にルックザックを担ぎ出したりする。部に居た頃たびたび綱を結んだ者達も、登り方が違うんだと、スキー合宿や懇親天幕行くらいしか、いっしょに歩かなかったものもいるのだが、それが今はもう皆同じなのである。いっしょにいるだけで楽しく安心なのである。

五十年以上も前、早川義郎さんが、我々の部の創立二十周年の記念につくってくださった登高会の歌「旧き友よ」こそがすべてをいいつくしている。

敗戦の後に

敗戦の日、私は戦争の最中よりもずっと愛国者になった。第三回目の応召で皇居の近くに勤務していた私は、終戦の詔勅を二〇〇名を越す部下達と一緒に聴きながら、我にもなく涙を流した。

六年間を越す長い軍務の間に、一度も真剣になって部下に話かけたことのない応召将校であったが、その時は祖国再興の志に

ついでに肚の底から部下達に話しかけた。

不敏な私は、心に何の用意もなく、定見もなく敗戦を迎えたのだが、詔勅の放送が終るのを待っていたように飛來して、皇居の上を超低空で旋回しながら飛び去って行く米空軍機を見て、何としてもこの屈辱をそそぎたいと、部下達に訣れの訓辞を与えたのだった。

それでいて私は敗戦の祖国に何をもちて貢獻すべきか全く判らなかつた。たまたま山登りをしていた仲間達が、戦場に在ってどんな時にも、山登りをしていた者の誇りを捨てず、これを抛りどころにして、強く耐えて来たことに思い当つた。これこそ敗戦にひしがれた若い人達の、一人でも多くに伝えたいことだ、これなら私にも出来ると思つた。こんな気持ちで居るところに松方さんから一片のはがきがきた。

これがきっかけになつて山岳会は再興の一步を踏み出すことになるのである。

しかし、先にもちよつと触れたのだが、私は「山は黙つて登つていれば好いんだ」という孤高の風の中で育つた人間だったのに、戦後気がついてみると何の抵抗も感じ

ずにこの中から飛び出してしまつていた。自分でも不思議に思うほどのことであつた。

省みると、孤高というか、「山は黙つて登つていれば好いんだ」という気風は、ひたむきに山登りをしようと思つて山岳部に入つて来た者にとっては、後光が射すほど魅力的な響きがあつたし、それは今日でもそう思う。

ところが、いつからか、優れた先蹤者のその精神が、形の上だけで踏襲され、かえつて狷介だけが残りつゝあつたのではないだろうか。そんな頃私はその中に足を踏み入れて、いろいろと馴じみにくい思いをしたのだらうと思う。しかもこれが優れた先輩達の業績の上にあぐらをかく姿勢にもなつてしまつていて、私自身慶応山岳部は常に他を抜きんでいて、思つて生長した。これが思い上りであり、井底の蛙の類であつたこともなかなか気づかなかつた。

松方さんの下を集つた、当時は若手と呼ばれた堀田君との交友にしろ、今は亡い、交野（武一）、藤井（運平）など同時代人との交友が、同門の者達と少しも変らぬ親

しさと、心を許せるもの、となつていて、皆で気持ちを合せて一生懸命に会の仕事をするようになつた。

ずつと後年のことになるのだが、私達慶応山岳部は創立七〇周年を迎えて祝賀の催しを持った。当日は列席していただけなかつたが楨さんもご健在だし、故早川義、早川種、三田、小室の諸先輩はすでに卒寿を超え、またはそれに間近に迫つたお年であつたのに皆お元気で出席された。

その席に当時日本山岳会の副会長であつた田口二郎君も出席して祝詞をくれた。談話またま昭和初期の上高地に触れ、自分など、いわば今でいう暴走族みたいなもので、と前置きしながら「……ところが現吉つあん、いつも威風堂々として声もかけてくれない、癪にさわつて何とつき合ひの悪い奴だと睨んだりしたものです……お互いに年を取つて……」と喝破してくれた。よくぞいってくれたと今日でも心から愉快になる。

山崎安治さんと『日本登山史』

近藤 信行

今晩は山崎安治さんの残された『日本登山史』のお仕事と、その周辺について少しお話させていただけたらと思っております。山崎さんのいちばん親しい先輩である早稲田の関根吉郎先生がお見えくださっておりますし、房子夫人、山崎さんのお兄さんもお出で下さいましたので、むしろいろいろとお伺いしたいくらいなのですが、さすが、その前座のつもりですすめさせていただきます。

ついこの間、二月九日の月曜日のことですが、奥様のところへお伺いしてまいりましたところ、山崎さんの書斎はすっかり変わっております。いままで壁面は天井まですべて本で埋まっておりましたが、すっ

かりきれいになりまして、打って変わったような明るい部屋になっていました。主のない淋しさを覚えたのですが、それと申しますのは山崎さんがお亡くなりになりましたから、奥さまが蔵書を日本山岳会図書室に寄託してくださることになりましたので、図書委員会が中心となってその保存の方法、分類の方法を検討してきたわけであります。そこで昭和六十年の秋から何回にもわたって山崎蔵書を図書室に運んでまいりました。約一年半の作業のなかでようやくその全貌がわかってまいりまして、いざそれは山崎安治記念「日本登山史文庫」（仮称）をつくりたいとおもいます。またその全蔵書目録を作成したいと考えておりま

す。奥さまはじめ御遺族の方々に深く感謝している次第でございます。

『日本登山史』の芽生え

山崎さんは世のいわゆる蒐書家、本を集め、なでまわして楽しんでいるような書痴ではありませんでした。あくまで登山史研究者でありました。研究者にももちろん書痴的な一面はありまして、多かれ少なかれおのずとその世界に入ってゆきますが、山崎さんは御自分の主題にかんするものだけを刻明に逐っておられた。それだけに見落してしまいそうな小さなパンフレット類も、古記録も文化史・交通史・人物伝などにかんする本もたいへん貴重であります。今日の「この一本展」では和本類だけを展示いたしました。これは山崎さんの蔵書の一部であります。

このように考えますと、山崎さんが日本の登山史に生涯をかけたということ、を、あらためて痛感するのでございます。山崎さんは軍隊からもどってまもなく入院生活をおくっております。「山岳」の山崎安治追悼の中で関根先生がお書きになり、

私もちょっと書かせていただいたんです
が、あの昭和十年代の激動期、戦争に突入
してからも真剣な山登りをなさった、そし
て繰上げ卒業で軍隊にかり出され、関根先
生の弔辞の中の言葉によりますと、二人は
傷ついて帰ってきた、「片輪の身になって
生きながらえた」のであります。現在のよ
うな平和な時代からは想像もできないよう
な苦難があったわけですが、実はそこから
『日本登山史』の構想が生まれたといつて
も過言ではないとおもいます。

山崎さんは金坂一郎さんと中学校時代ご
一緒でした。横浜二中から早稲田大学に入
られましたから、穂高連峰、劔岳をはじめ
北アルプスを中心に積極的な登山をなさつ
た。極地法研究時代のたいへんすぐれたリ
ーダーだったという点で、登山史の上で大
きな仕事をなさったと思います。その山崎
さんは戦後の療養生活のなかで登山史のノ
ートをとりはじめています。それが登山史
家山崎安治を生んだのであります。

ところで、遺著となりました『新稿日本
登山史』について申しますと、最後の完成
まぢかの段階になって、筆を止められたわ

けでございます。この本の目次で申します
と、第六章「アルピニズムの勃興」で積雪
期の登山をこまやかに書いてから、第七章
「ベリーエーション・ルートの開拓」の第一
節「昭和初期の北アルプス」で中断してお
ります。これから自分の時代にさしかかろ
うとしたところで入院なさったのでありま
す。書きたかったことが多々あったとおも
うと、ほんとうに残念でたまりません。

その原稿を拜見しましたとき、たしか二
千六百一十一枚だったと思いますが、すべて
二百字詰用紙で書かれておりました。それ
も実に丹念に書きこんでいるんです。昭和
四十四年の旧版に手を入れておられるのか
と思いましたが、実は新しく全部、書きお
こされていたのであります。それぞれの節
の末尾に出典や参考文献を明記して注をほ
どこしていただきました。今日、房子夫人が遺稿
を持参して下さいました。これがその原稿
の全部でございます。

一日にペラ（二百字詰用紙）で四十枚書
いたとか、五十枚書いたとか話しておられ
たことがあります。したがって『日本登
山記録大成』全二十巻（昭和五十八年）の

編集をおえてから、かなりのスピードでも
って書きすすめられていたとおもいます。
といっても、この種のような実証的な資料
操作というものは、そう簡単に書き流すわ
けにはいきません。私もすこしはそれと似
たような経験をしてきましたが、山崎さん
の机のまわりとか書齋の様子を想像してみ
ますと、それはおそらく資料の山と闘つて
いたのではないかとおもいます。

亡くなる前の年（昭和五十九年）の十二
月下旬に、私の家へお見え下さって一晩泊
まられたことがありました。そのとき二十
数人集まって忘年会をしたんですが、山崎
さんはふだんとちがってあまり多くを語り
ませんでした。体が弱っておられたのでし
ょうか。しかし自分はいま登山史のまとめ
にかかっている、もうすぐ完成する、君た
ちも大いに仕事せよと激励されたことを思
い出します。

抜群の記憶力と記録蒐集力

山崎さんのお仕事というものは、はつき
り申しまして、記録中心主義と言ったら語
弊があるかもしれませんが、とにかく日本

人の登山の記録を集めて、その背景にあるものを探っていく、ということが主軸であったという気がいたします。その中で私なりに一つ感じたことがあります。たとえば、山崎さんの取材です。それになんとか立ち会ったことがあるんですが、一高旅行部初期の人で、中塚葵巳男さんという方を一緒に訪ねたことがあります。この方は明治四十年代に東京府立三中におりまして、芥川龍之介の友人です。一高へ行っているから一高山岳会、のちの一高旅行部に所属していた山好きの方です。「こういう人がいるが、お前、どうだ」と言われて、昭和四十八年の二月、府中の老人ホームに出かけて行きました。

昭和四十年代、『一高旅行部の足跡』『失われし山仲間』という、回想記が出されています。大木操さん、日高信六郎さん、藤島敏男さんもお書きになって、原稿はその筆蹟のままプリントされている本ですが、そのなかで中塚さんは芥川龍之介と一緒に槍ヶ岳へ登った当時の思い出を書いています。たいへんユーモラスに生の言葉のまま書いてある文章です。山崎さんはそれに

目をつけていまして、芥川の槍ヶ岳登山をたしかめたかったのだとおもいます。というのは、芥川龍之介のそれは明治四十四年とも言われまじし、大正九年とも言われてきました。大正九年にあの「槍ヶ岳紀行」が発表された関係で、大正九年という説があるんですが、これははっきり申しまして執筆、発表年です。しかし実際の登山が明治四十二年か四十四年か、正確にはわからなかったんです。

中塚さんが初めて傍証を出されたので、山崎さんは大きな興味をもったのでしよう。岩波版や筑摩版の『芥川全集』や『芥川龍之介未定稿集』を調べてみますと三つの文章がありますが、その三つを読んでもなかなか決めたいところがありません。というのは、その紀行文は登山の途中までで、頂上のは全然大きく書いてないわけですから、芥川が登ったのか登らないうのか、はつきりわからない。山崎さんは、そういうところに登山史家としての熱意を燃やされたんじゃないかと思えます。そのことは、『登山史の発掘』の巻頭に書かれております。ところで取材に同行して

みますと、山崎さんとはかく頂上に登ったか登らないか、登ったのは何年何月何日であったか、そこを聞くだけでよろしいんですね。そのとき芥川はどうだったとか、その時代の若者のこと、文学趣味とか人間関係などは聞き出そうともしない。芥川の槍ヶ岳登頂が明治四十二年八月十二日とわかったら、もう帰ろうかなんて言い出すんです。この人は本当に記録中心主義なんだなと思ひまして、駅近くの飲屋で一杯飲んで帰ってきたことがあります。

山崎さんのお宅へ上がりしていただいたり、今回の図書の整理でもずいぶんと見ていただいたんですが、書棚には二抱えほどの登山史ノートがございました。ノートといってもスクラップブックなんです、そこへコピーとかメモが入れてあります。それはまだ全部拝見したわけではありませんが、『新稿日本登山史』のために、ことに昭和十年代以降の分を書くために、山崎さんが残しているメモを写してはいないかと、白水社の佐藤英明君と一緒にそれのぞかせていただいたわけでございます。そういうしますと、おそらく書くであろう

と思われる事柄がいくつか出てまいりました。たとえば、関西学生山岳連盟の記録とかそれにかんする手紙類とか、朝鮮の山、北海道の山というふうには、いろんなふうにちりばめられているんですが、山崎さん亡き後、いかんともなしたがたく、山崎さんの旧稿を基にいくつかのものを付け足した、という程度にとどめた次第でございます。

登山史構想の覚書とか目次とか、どこかにありそうにおもえまして探したのですが、いっこうに見当りません。山崎さんはおそらく頭のなかにすべてをつめこんでいて、自在に操っておられたとおもいます。

山崎さんには記録蒐集と記憶にかけて抜群の才能がございました。われわれが話しておりますときにも「それは何年何月何日だ。だれとだれが一緒だった」というようなことまで、さつと言われるんですね。この会でも、毎年三月におこなわれる山岳史懇談会でも司会をなさっておられたんですが、講師が忘れていた事柄でも、すぐ「それは何日です」というふうには正確な補足をなされまして、講師ご本人の方が山崎さんに聞いたりする場面もみられました。そう

いうところから推しはかってみますと、登山史の新稿を書きはじめた時点で、蒐集資料は整理されておりまして、あとは時間の問題だったとおもえてなりません。

山崎さんの第一著作はあらためて申すまでもなく『穂高星夜』（昭和三十三年）であります。御自身の登攀もふくめて「早稲田の山」をまとめ、日本のアルピニズム、ヨーロッパの登山史の概観を書いています。山岳部の先輩書上喜太郎のエッセイにあやかって題名をつけたことには、かなりの思い入れが感じられます。そして『剣の窓』（二十七年）、『山の序曲』（四十二年）とつづき、四十四年の『日本登山史』に至るわけですが、はじめの二冊には「登山史ノート」という副題がついております。五十年代の『登山史の発掘』『登山史の周辺』、これも「登山史ノート」と言っておられたわけですが、そういう意味では、ちっとも気を緩めることなく資料の発掘をかさね、記録を蒐集されていきました。

安川登山史との競合

さきほど申しましたように山崎さんは戦

後、病気をなさって一年半ほど療養生活をされた。そのとき大雪山山岳部の部報とか日本山岳会の機関誌「山岳」を刻明に読まれ、ノートをとられた。それが山崎さんの研究の出発点だったことは御自分で言っておられました。学生時代からの学究的な緻密さがこのような生涯の方向を定められたとおもいます。そのような経過のなかで特に北アルプスを中心に早期登山時代から現代まで、いわば日本における近代登山の生成と発展を調べていかれた。山崎さんの視点からは、初登の記録、またはそれに準ずるものが中心となったわけですが、そこに登場するのは日本山岳会の先輩たちであり、大学山岳部の活躍でありました。ということはご自身が若いころ穂高を中心とした積極的な山登りをなさっていたことから、歴史への追究であり、批評でもありました。自分自身の影をうつしながら登山者の歴史を探っておられた。自分の気持を込めながら研究をふかめていったということができるようにおもいます。

『穂高星夜』にいたしましても、『剣の窓』にいたしましても、初期の著作を読ん

でおりますと、個人的な情感は出さないうちでも、客観的な歴史叙述を通して山崎さんの息づかいが聞こえてくるようなところもごさいます。極端な言い方になるかもしれませんが、山崎さんは自分の山登りのよって来たところのものを探ろうとしていた。それは己れを書くことだった、それが山崎登山史のいいところでもあり、ある意味では自分にたいする厳しさがこめられているのであります。

「山岳」の追悼文の中にも書きましたけれども、登山史に関して申しますと、一人大きなライバルがいたと思います。それは安川茂雄さんです。たまたま私は昭和三十一年、八月ごろ安川さんと『山岳展望』という雑誌を何号か一緒に編集したことがありまして、ちよつとお付き合いがあつたんですが、安川さんから山崎さんのことを聞くし、山崎さんからも安川さんの仕事のことを聞いていました。その二人が、雁行して同じ時期に登山史を書き始めたというのですから、それは山岳ジャーナリズムのなかでの大事件でした。安川さんは学校を出てから出版社に勤めていました。『谷川岳研

究』をまとめるため谷川岳開拓の資料を集めたことがきっかけになって、『日本近代登山史』を書くようになったとおっしゃっています。後の増補版の中でもまた繰り返しそのところを強調されていました。

安川さん、山崎さんの二つの労作をみますと、それぞれの個性、物書きとしての資質、歴史に対する考え方がよくあらわれていて、とてもおもしろい。そこでおもしろいおこすのは森鷗外の「歴史其儘と歴史離れ」というエッセイです。短い文章ですが、ものを書く態度というのを表明したものではないかと思えます。鷗外の後期の伝記的小説、史伝、『伊沢蘭軒』『渋江抽斎』に至るまでの一つの態度であります。

山崎さんが安川さんを批判するのは、その歴史離れでありました。歴史的事実を踏まえながらも、叙述において事実から離れたところへ行ってしまうところです。たとえば、慶応山岳会の創立のとき、日本山岳会の幹部と榎さんとの対話が出てくる。「いったい何人集まった?」「二十人ぐらいだろう」というように書かれている。また、ウエストンが地元の猟師あるいは案内人と

歩いていて、彼がこう言ったであろうと想像力をふくらませて書いている。小島鳥水の「槍ヶ岳」についても、そういうところがあります。資料を基として、その資料を膨らませてイメージとして語っている。これは山崎さんの出来なかつたところなんですね。

私は山崎さんは記録中心主義と申しましたけれども、あくまで資料を尊んだ人だと思えます。安川さんは歴史的事実を踏まえられた読み物として、読者に易しくわかりやすく情景を伝えていく、いわば作家的な素質のあつた方じゃないかなという気がするんですよ。ごさいます。

山崎さんの文章は、丹念に当たってまいりますと、資料に縛られるあまりに、地文にその記録の文章をそのまま使いこむというタイプですね。『日本登山史』の新稿に移る過程で、いくらか変わっておりますけれども、登場する人物の書いたもの、傍証的な素材、研究書の成果をうまくつかいこんで叙述してゆくという方法をとっています。

歴史主義でいくか、物語主義でいくか、

それは本人次第ということなのですが、歴史というものを考える場合、科学的な実証性というものを持たなくてはならない。これはいまに始まったことではなくて、イボリット・テーヌの『文学史の方法』ではありませんが、ひとつの時代を明確にとらえるには多くの条件がかさなってまいります。そういう実証主義がいまはあたりまえになりまして、今度は逆に重箱の隅をつつくようなかたちの、ちっともおもしろくない研究論文ばかりが多くなっちゃったんですが、その根底に、広い視野と文学精神がなければいい作品は生み出せないとおもいます。

山崎さんと安川さんとの間には、同時代人としての非常に熾烈な闘いがありました。山崎さんの『日本登山史』、安川さんの『近代日本登山史』はともに昭和四十四年の六月の刊行です。あるとき、山崎さんに「珍しいことですね」と言いましたら、「彼が出すそうだから、おれは慌ててこの本をつくった」と、実に淡々とおっしゃるんでございます。まさに初登攀争いですね。(笑) はっきり申しまして安川さんに

先を越されまいというお気持ちがあったんじゃないでしょうか。

江戸期の登山を発掘

安川さんは近代に限って、特に戦後まで書かれております。山崎さんは近代を中心に、むしろ日本人と山とのかわり、その始まりから説き起こして、江戸期を加えています。その点で両方とも意味のある重要な本だと思います。しかしその時点から山崎さんの日本の古記録、修験道、旅の記などの文献探索がはじまりました。日本人の山と自然とのつながりに深いものがあることに気づいて、密度の濃い日本登山史をめざしたのであります。

ここに今晚、出品しました目録がございますが、山崎さんは実に丹念に地誌類、紀行文類を集めておられます。それから写本もいくつかございます。徳本上人と思われる人の伝記の筆写本、これは京都の古本屋から買ったという形跡がございます。それから開山縁起、そういったものを通しまして新しい『日本登山史』へのアプローチをなさっていたわけです。個人の蒐集には限

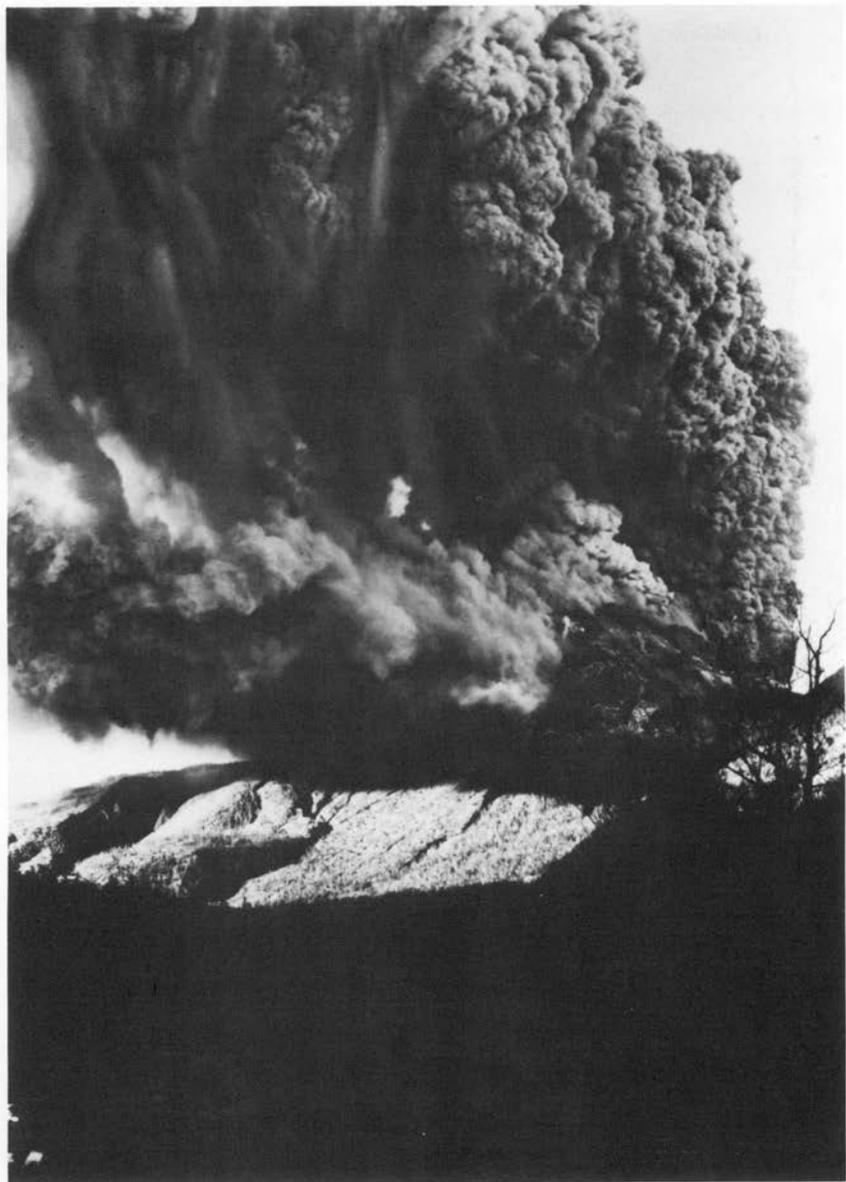
度がありますから、関係文献のすべてとはいかなかったでしょうが、ここには山崎さんの努力の跡がありありとうかがえます。

近世については大きな興味をもっておられたようにおもいます。当時の芸術家、知識人たちの足跡に共感があったのでしよう。池大雅のような精力的に仕事をのこした画家に関しては、参考書を中心にしながら、特に絵の背景にある彼の足跡などを探るうとしております。それから、地理学者、漢学者、儒学者、医者もいますし、江戸中期や文化文政以後のインテリたちの書いた記録——安積良斎という学者の本などは読み下すのに大変だったと思いますけれども、山崎さんの仕事の中に入っていました。古川古松軒、菅真直澄、橋南谿、沢元愷などという人々が諸国行脚をして、その地方地方の山の記録を残しているのです。山崎さんは研究者の所説をうまくこなして簡潔に書きこんでいます。

谷文晁について、山崎さんはいい研究を發表されました。大修館書店で『覆刻 日本山岳名著』を編集しましたとき、たいへん評判がよかったですので第二期を計画した

日本山岳写真の源流

一九八七年七月、東京で開かれた「山岳写真の源流展」
（日本山岳会後援・会報「山」五〇七号参照）から。
解説・杉本誠。



焼岳大爆発／穂苅三寿雄（1891～1966）

1925年（大正14年）6月撮影。大正池ができた時の爆発は1915年（大正4年）。それから10年後の爆発の折のもの。まことに絶好のタイミングで撮ったものだ。後世に残る穂苅の代表作。



千島列島・馬の旅／河野齡蔵(1865～1939) 河野は1932年(昭和7年)7～8月に千島方面、翌年6～7月に北海道、樺太方面へ、寒地と高山植物研究の旅に出ている。千島の記録に馬を使ったことが出ていて、これはその時(1932年)の写真と思われる。

表題不詳／河野齡蔵

上記2回にわたる河野の旅の、いずれかに写した写真と推定されるが詳細は不明。

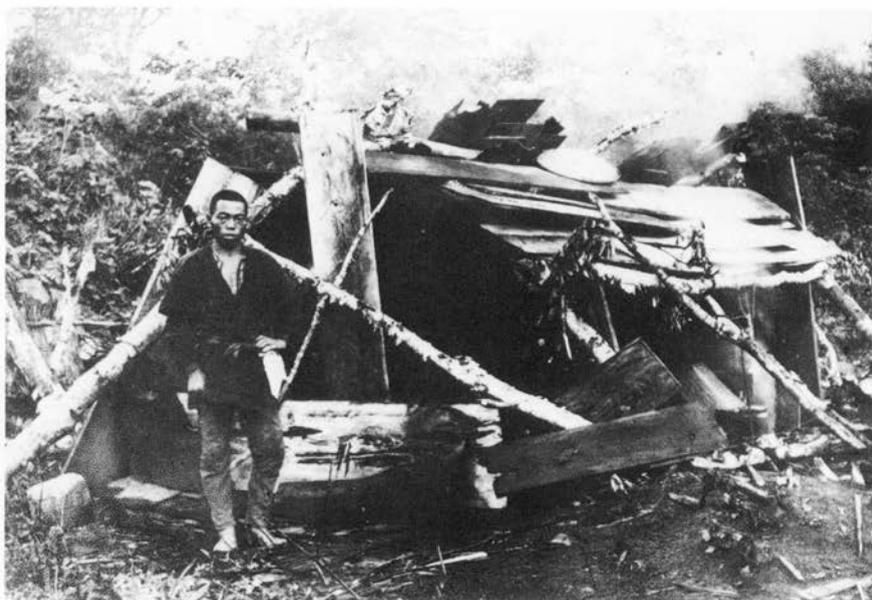




中学生の白馬岳登山／田中薫（1898～1982） 1916年（大正5年）7月撮影。この時、撮影者の田中は、東京高等師範学校付属中学校の5年生だった。

シケノベの野宿小屋／辻本満丸（1877～1940）

1909年（明治42年）7月撮影。左に立つ人物は芦峯寺の佐伯平蔵。





仙丈岳のカール／辻本満丸

1911年（明治44年）撮影。仙丈のカールが知られるようになった、恐らく最初の写真と思われる。

感動するガラス乾板の復元力

私は、ガラス乾板による山岳写真の収集を始めて二十数年になるが、今もって新しく発見するたびに感動するのは、その復元力の強さである。膜面がくっつくような事態になっていない限り、明治時代のもので四ツ切や半切には十分に伸びる。

しかし、同じ写真の原板でもフィルムははるかに弱い。昭和の初めがすでに危い。ここでは明治の末年から昭和の初めまでの山岳写真の中から、七人の作品九点を選んだ。すでに何度か発表された写真もあるが、ほとんど世に知られていないものも含まれている。

これらの写真は、組立暗箱カメラを使い、低感光度の原板で、足場の悪い、しかも絶え間なく風の吹く場所で撮影された。その困難さは、現在の進歩したカメラやフィルムに比べて想像を絶する。

ほぼ六十年から八十年前の写真を改めてプリントしてみても、先人の苦勞が、撮影直後のように鮮やかに再現されるのは、驚くべきことだ。今から同じ歳月を経て、はたして何枚のカラーフィルムが生命を保っているだろうか。



装われし池／石崎光瑶（1884～1948）

撮影年は不明だが、高野鷹蔵の手になる山岳写真集『高山深谷』第5集（大正5年・日本山岳会発行）に発表されている。剣岳初登頂の記念写真を撮った石崎の代表作品。



ミヤマウスユキソウ／志村烏嶺（1874～1961）

撮影年は不明だが、他の同種の写真、著書などから推測して明治末から大正初めのころと思われる。



東京目黒行人坂の富士／武田久吉（1883～1972）
1928年（昭和3年）2月撮影。1000mm強の超望
遠レンズを使って東京から写した冬の富士山。

外苑コーポと錦町向井ビル



昭和39年(1964)8月19日、外苑コーポ開設記念ビール・パーティー。中央、車座には、松方三郎、日高信六郎、神谷 恭氏らの額が見える。



昭和39年12月、外苑コーポでの東京支部クリスマス・パーティー。神谷 恭氏(右端)と宮下啓三氏との間の外国人二人は、英国オックスフォード大学の山仲間。

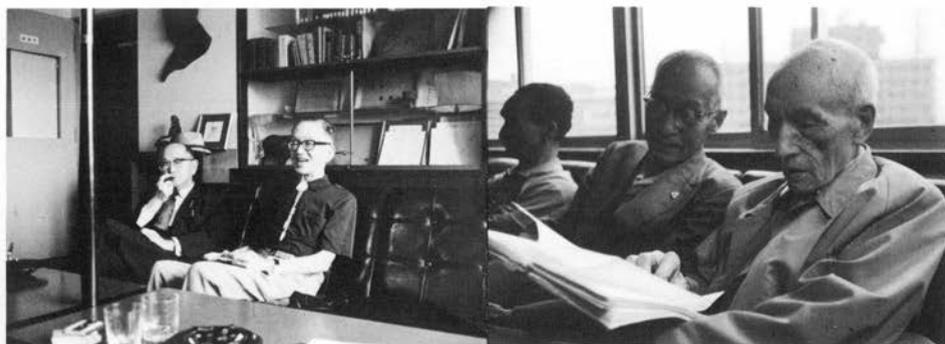
昭和42年（1967）9月
8日、向井ビルでの開
設披露パーティー。松
方三郎氏の元気な姿。



昭和39年12月、外苑コ
ーポでのクリスマス・
パーティー。



横 有恒、藤島敏男、
松本熊次郎、永原輝雄、
田部重治の諸氏（向井
ビルにて、昭和44年5
月24日・土曜会。撮影
・山村正光）



んでございます。第一期は『日本風景論』から始めましたが、第二期は文晁の『名山図譜』にまで溯りました。大修館書店の小川益男さんの熱心な後押しがありました、初刊本の刷りをみてまわっています。

そこで川村錦城という医者や柴野栗山という学者が出てまいります、おもしろいのは、山崎さんの一つの勉強のしかたです。谷文晁はいつたいていどうしてあの八十八図が描けたのかとその周辺を調べていくわけです。そこで川村錦城という人に焦点を当てるわけです。この人は『名山図譜』を編集して発行した張本人で、谷文晁にいちいち山の形を説明してまで描かせたということがわかってくるわけです。さらに『新稿日本登山史』では、肥前の平戸の藩主で松浦静山という文人の殿様の『甲子夜話』という記録がございまして、これはいまま東洋文庫に十冊ぐらい入っておりますが、その『甲子夜話』を引きあいに出して、川村錦城の山登りが花鳥風月の域をこえて山そのものを楽しんでおり、「近代登山につながるもの」があると書いています。「甲子夜話」は林述斎から聞いたという話を書

いているんですが、その記録から『名山図譜』の誕生の裏付けを行っています。覆刻第二期の「解題書」所収の「谷文晁『名山図譜』(のち『登山史の周辺』に収む)」と『新稿日本登山史』のなかの記述をあわせ読むと、山崎さんの研究者としての円熟がうかがえるとおもいます。

これなどは一例かもしれませんが、山崎さんの晩年の仕事は前の『登山史』よりは人文科学的な視野の広いものになっていく。そういう意味からいっても、ガチガチの記録主義だけじゃなくて、むしろ人間というものもその中に見えていこうというところが、お仕事の中に現れているような気がいたします。

新しい『日本登山史』の特徴を一言で申しますと、第一版を軸としながら、多くの資料を基にそういう膨らみをもたせたということが言えるんじゃないかと思えます。中世、近世とたどってきて、佐々成政に代表されるような軍略上の登山とか、領地の見回り、黒部の見回り役とか、政治的な事柄ももちろん踏まえております。それから、殿様に命令されまして、薬草を採りに

入っている連中がいますね。これが本草学の書籍になっているわけですが、そういうものとか、紀行類その他の中で、山が好きで好きでたまらなくて、山を見つめ山に登った人をうまく取り上げている。

そういう江戸期の特徴のうち、講中登山などは簡単に済ませてしまっています。これをやりだしますと、一冊の本になるくらい大きなテーマだと思えますので、初期をその中心に置いて、そのあと概略をとどめたにすぎない。『新稿日本登山史』江戸期の叙述で山崎さんが書きたかったのはここだとおもえるところがございます。「近世の登山」の最後のところです。

「このように江戸時代にはすでに多くの人たちが、山の美しさ、すばらしさを知り、宗教的色彩を持たずに登山を登山として楽しむ風潮が見えはじめているのである。ここに登場する人びとは、医師であり、文人であり、画家であり、また学者であったということも、ヨーロッパにおける初期の登山の歴史と一脈通じるものがあり、しかもそれがまったく外来登山思潮の影響を受けていないだけに注目すべきもの

と思うのである。」

これは山崎さんの仕事のもう一つのステップになったであろうと思われる箇所だともいいます。山崎さんは文章においてはあまり饒舌ではございません。むしろ饒舌を慎しんで簡潔に言い表すというのが、一つのスタイルだったようです。日本の登山史のおこりは宗教登山ばかりじゃなく、ヨーロッパの登山と一脈通ずるものがあるんじゃないか。採葉登山、政治上の登山、文人墨客と、いろいろな人がいましたが、芸術的な人間性の発露、科学的な精神が起こってくる過程にあって、本当に山の美しさを知って山に登ろうという連中もいたんだというのを、江戸期の一つの発見としてお書きになっている。これは山崎さんがもしご存命ならば、あるいはここからまた一つテーマが始まったのではないか、という気がするんでございます。

「われは日本山岳会会員として死なんとす」

山岳会ルームに山崎さんの姿が見えない日はないというくらいに、よくルームに来

ておられましたので、お会いするたびにお話を聞いておりましたけれども、特に和書に関して申し上げますと、力になったのは、浅倉屋の吉田久兵衛さんだったと思います。

久兵衛さんはいへん穏やかな方で、学識もあり、古い本の所在を丹念に教えて下さっていました。山崎さんがお酒を飲んでおりますと、あのにやかな顔で、「こんなものは知ってますか」と聞く。「いや、それは知らない。じゃ、見せてください」というような具合で、山崎さんはそういう先輩からいいものを学んでおられたような気がいたします。

いま酒の話をいたしました、ぼくらは酔っ払うとどうも話の中味を忘れることが多いんですけど、山崎さんに限っては酔っ払っても覚えてるんですね。これは実に驚くべきことだったと思います。ある一時期からそれがなくなりましたので、ぼくらはヘマを言っても安心していましたが、
(笑) いくらお酒を飲んでも大切なものは確実に記憶の底にとどめておくというような、大変な記憶装置の持ち主だったような気がいたします。

蔵書というものがどのくらい役に立つか。全部読む必要のない本もございます。一行だけ役に立てば、それでよしとされる本もございます。いろんな点で山崎さんは多くの書物をご覧になったと思いますが、とにかく山岳書、記録を中心とした細かいものは、完璧に目を通され、自分の登山史ノートにお入れになっているわけです。

もう一つ山崎さんの特徴をあげさせていただきますと、山崎さんにはご自分の経験を踏まえた批評精神が旺盛であつたとおもいます。というのは、何を取って何を捨てるかということです。山崎登山史を批判する人は登山記録の取り上げ方、山城によっては不完全だと言うんですね。なぜ不完全なのかというと、たとえば昭和初期以降の谷川岳を書いていないからであります。『新稿日本登山史』の編集をたのまれたとき、濱野吉生さんと相談いたしました。どうしようかと考えたんです。しかし山崎さんの登山史ですから、山崎さんの書きのこしたもので行くほかはありません。ですからそこには手をつけませんでした。山崎さんは実は自分で、なぜ書かないか

ということを書いております。日本の登山の歴史がこれだけのものとおもわれてもいけないと言つて、日本アルプスに焦点をおいたことをちゃんと書いています。晩年の大きな仕事であった『日本登山記録大成』全二十巻は、近代に限つて北アルプスに十五冊、南アルプスに四冊、富士山と中央アルプスに一冊を当てています。山崎さんの登山史の材料袋はここにあったといえます。「自分の手の内を明かすようである」と言つていましたが、いまになっておもうと、その登山史の資料だったと思います。

早稲田の山岳部に育ち、日本山岳会の伝統を正しく受けついで山崎さんは、日本山岳会を本当に愛していました。森鷗外の遺言の言い方を借りますと、「われは日本山岳会会員として死なんとす」という気魄があったと思います。よく、山崎さんを酔っ払いだとか何だかんだと言つて非難する方もおられましたけれども（笑）、山崎さんほど日本山岳会の将来を考えている人はいなかつたでしょう。また仲間たちにたいする友情、後輩たちにたいする啓蒙という面を考えますと、本当に得難い人だったよう

な気がするんでございます。

山崎さんが亡くなられて、その仕事をしきりに考えることがあります。もし山岳学という学問があるとしたら、山崎さんはその一つの大きなステップをつくられたたのではないか。柳田国男先生は民俗学という大きな学問の方法を示してくれたわけですが、その意味で山岳学というものが可能ならば、山崎さんはある意味で登山史というひとつの礎石をつくつて下さったとおもいます。

山崎さんは本は集めておられましたけれども、好事家ではございません。限定本だけを集めて得々としているというような本マニアではありませんでした。書齋を拝見すれば一目してわかるように、研究者のそれでした。好事家と研究者とは完全に領域を異にしております。山崎さんはもちろんきれいな本、特殊な本も好まれたし、大事にされておりましたけれども、小さな、だれの目にもつかないような本も必要とあれば大事になさつていた方でした。

最後に『新稿日本登山史』の特製本六十五部が刊行されたことを御報告したいとお

もいます。六十五という数は山崎さんの生涯をあらわす記念すべき数でもあります。白水社によって立派な書物にまとめられて、地下の山崎さんはさぞやよろこんでおられることとおもいます。

ところがこの特製本の上梓にあつて、おもいがけぬ事件がおこりました。ある古本屋さんが、第一番から第五十番までを寄せと言つてきたのであります。その上、山崎さんの遺稿を扉だか見返しだかに切り貼りして製本せよということでした。どういふ商売をなさっている人か知りませんが、出版社がつくつているところに口を出して、著者の原稿までばらせという。このことで房子夫人はたいへん心をいためておられました。はつきり断られてうれしくおもいました。

* 図書委員会主催「山岳圖書を語る夕」（昭和六十二年二月十四日・会報「山」五〇七号参照）の談話筆記を近藤氏の校閲をへて収録。

図書紹介

望月達夫

『忘れえぬ山の人々』

茗溪堂 一九八六年八月刊 A5判上製
二二二ページ 定価一九〇〇円

山歩きというタテ糸と山書というヨコ糸で織りなされた山岳交遊絵巻

他を語るといふことは自らを語ることである。それは盾の両面の関係に似ている。中国最大の史家・司馬遷は史記列伝の冒頭に伯夷・叔斉伝を置き、天道是非かと問いかけた。この大命題に対し遷は、聖人君子から市井の博徒まで様ざまな人物の業績を述べ、最後に評を加えることで自らの思想的立場を明らかにし、歴史哲学の壮大な殿堂を築き上げたのである。

望月達夫さんは、『遠い山近い山』『折々の山』などの著作やロングスタツフ博士の『わが山の生涯』などの邦訳で知られ、その流麗な筆致に魅せられた読者も多いことと思われる。その望月達夫さんが最近ものされた本書は、著者の山の人生（山歩きに子供ながら興味を覚えはじめたのが昭和二年頃のこと云々と本書の終章に述べられているのでおよそ六十年間にわたる）で出逢った様ざまな十九の人びとの面影を、追悼録のかたちでつづつたものである。

著者の人柄をしめすように、その交友関係は広い範囲にわたっている。半世紀を越す時代を地に、山歩きという縦糸と山書という横糸で織りなされた山岳交遊絵巻が、広幅な綾を作り出している。最後の章では、著者と山の本とのかかわりが自伝ふうに述べられている。

通覧すると、亡き友人のそれぞれの山岳遍歴が要領よくまとめられているが、同時に著者自身の個人史ともなっている点が興味深い。さらに重要なことは、太平洋戦争をはさむ前後約三十年間の日本山岳会外史にもなっていることである。

本書の冒頭におかれたのはかの「臍曲り居士」藤島敏男さんである。著者に山の手ほどきをしてくれた先輩、藪山を共にする楽しい山仲間でもあった藤島さんの唯一の著作『山に忘れたパイプ』の編集を通して交わされる年齢をこえた尊敬と愛情には妬ましさすら感じてしまう。

「藤島さんというと辛辣な皮肉をとばして、ひどくこわい臍曲りの人のように思われていたようだが、それは藤島さんに反俗の精神が強く、時流に阿ねることを嫌った点と、ホンモノとニセモノの区別がはっきりしていて、容易にものごとに妥協しなかったからで、胸中に流れる友人に対する愛情は、稀にみる暖かさともまやかさの溢れる人であった」と述べられているが、それは深い心の交流があつて始めて言える言葉ではなからうか。

九山深田久彌さんと著者とは山書を通じて特に深く結びついているようだ。もちろん、全国各地にわたる十三回の山行を共にした楽しい山仲間でもあった。深田さんの代表作『日本百名山』を、「日本

の山の名著として今後も末永く多くの読者を持ち、且つ教えるところの多い書物となるであろう」と評しているが、同感される読者も多いことと思う。

ヒマラヤの梁山泊（近藤信行さんの言）となった九山山房形成のいきさつと島田 巽さんの「みごとな散財」として羨望し賞讃してやまなかつた山岳書の蒐集ぶりにはあらためて驚かされる。

深田さんの亡き後、世界に誇りうる九山山房蔵書の核心部が国立国会図書館に収められ、これらをもとに「ヒマラヤ関係図書目録・薬師義美編・一九七二年刊」が作られたことは、日本の山岳界がヒマラヤで成し遂げた業績と合わせて後世に大きな遺産を残したことになる。

「深田さんは心あたたかく、おおらかな、屈託のない人であった。山歩きを共にするときなど、実によい仲間であり、多くの人から愛された。しかし、ものを書かれるときの態度は峻厳で、かりそめにも想像やアテズッポウを許さぬ人でもあった」と評しているが、これは同時に著者自身のそれでもあった。

かつて、深田梁山泊に出入りを許された無卒居士（著者の渾名、あわてず悠揚迫らぬ人という意味か、思うに藤島さんあたりの命名と想像する）の警咳に接している筆者にとっては誠に耳の痛い話で赤面するばかりである。

本書の後半の二編ではイギリス山岳界の巨星、トム・ロングスタッフ博士と著名なヒマラヤニストでヒマラヤン・クラブの創立者の一人でもあるケニス・メイスンにふれているが、短いながらもまとめた評伝となっている。

著者はロングスタッフ博士の『This My Voyage（『わが山の生涯』望月達夫訳 白水社刊）やメイスンの『Abode of Snow（『ヒマラヤ—その探検と登山の歴史—』田辺主計・望月達夫共訳 白水社刊）の翻訳を通して両巨人と真摯な心の交流が生まれ、それは両巨人が亡くなるまで変ることなく続いた。その深さは両訳書に寄せられた原著者の日本語版序文をみればおのずと明らかである。また、「その影響は彼の判断と誠実さとに対する深い尊敬によるものであった。彼の豊富な経験と賢明な忠告とは、彼を求めたあらゆる人々に、いつも自由に与えられた」というシプトン卿のロングスタッフ博士への追悼は、著者ならずとも多くの人びとに深い感動を呼び覚ませずにはおかない。伝統とはかくあるものであろうか。

本書では前記の人びとのほか、岡野金次郎、中村清太郎、神谷 恭、中川孫一、小林義正、伊藤秀五郎、袋 一平、藤井運平、林一夫、山崎安治、小谷部全助、森川真三郎、大塚 武、上條孫人の方がたの山の想い出がつづられている。

このうち、小谷部全助さんは著者とは東京商大山岳部の同期生であり、森川真三郎さんは一年下、大塚 武さんはさらに二年下という関係にある。筆者に生前の面影がしのべるのは、先ごろ北海道の日高山脈で不慮の死をとげられた大塚 武さんだけであるが（北大ダウラギリ厳冬期登攀については大塚さんの大変な御尽力をいただいた）、他の二人は敗戦の年の暮、時を同じくして幽明の境を異にされた。

あの暗い戦争の足音がひたひたと押し寄せる昭和十年ごろから太平洋戦争勃発までの短い間、青春の血を激しい登攀に燃えさせた

たこれら若き群像の雄姿に熱い共感を覚えない人はいないであろう。生前一本の綱を結び合つて北岳バットレスや荒沢奥壁などの困難なルートを切り開いた小谷部、森川兩人のひたむきな生と若い死を語るくんだり北歐の叙事詩『エツダ』を思わせる。彼らもやはり神々の愛でし人々であつたのだろうか。

著者によつてこのようなかたちで刊行された本書は、若くして逝つた岳友にとつてこれに過ぎたる墓碑銘はなからう。

著者は、本書の最後に「ひそかなる心をもりて、をはりけむ。命のきわに、言うこともなく」という寂道空の歌を引いて現在の心境を述べておられるが、積年の義務——若くして逝つた山の仲間に代つてその思いを伝えること——をはたされた今、心も晴やかに人生の来し方を眺めておられることであらう。

最後になつたが、筆者は、第一線で活躍する登山家、特に若い登山家の諸兄に本書を読むことをおすすめる。約五十年前、立教大がナンダ・コートに登頂した直後、浦松佐美太郎さんにあてたロングスタッフ博士の手紙（本書一七六ページ）にある「……日本の登山家達に、高い見識と立派な態度……」を亡き数に入る人々とともに著者もまた強く期待しているからである。（一九八七・七）

（安間 荘）

中島正文

『北アルプスの史的研究』

桂書房 昭和六十一年七月刊 廣瀬誠編（富山市北代二八九―三二 地方小出版流通センター扱い）A5判五九四ページ クロース装
上製函入 定価九五〇〇円

黒部・立山を中心とする古文献研究の、重厚壮大な業績の集大成

日本山岳会富山支部には、かつて異色の豪傑が二人居られた。一人は石黒清蔵氏。剣岳池ノ谷（行けぬ谷）を大正十三年初下降、翌十四年初潮行・初登攀に成功した山男だ。石黒氏は徹底して野人で、どんな権力者に対しても信念を曲げず、堂々と所信を披瀝して一歩も譲らず、黒四ダム建設にも最後まで猛然と反対された。支部の会合などでも、しばしば支部長・委員長に噛みつき、かなり煙たい存在であつた。

その石黒氏にもただ一人頭の上がらぬ人があつた。それが中島正文氏であつた。山岳踏破にかけては余人にひけを取らぬ石黒氏も、古文献を片っ端から渉猟し、解説し、隠れた山岳史を次々に解明してゆく中島氏に対してだけは、自分の力の及ばぬ別世界の開拓者として、頭が上がりなかつたのであらう。

中島氏もまた豪傑肌で、巨眼巨軀、頭のとっぺんから出るような大音声で堂々所信を述べ、一歩も退かず、我が意を得たりという時

には、満座を揺るがしてカラカラと大笑されたものであった。

かつて中田栄太郎氏（故人。やはり日本山岳会員で、富山県教育界の元老格、そして国会議員も務めた名士）が、黒部源流の鷺羽岳・三俣蓮華岳・水晶岳・赤牛岳・黒部五郎岳・野口五郎岳などのたむろする山城を「奥立山」と名づけて講演された。「立山」「後立山」に対する「奥立山」ということで、この命名には自ら満足し、得意満面で、その奥立山の観光開発について述べられた。

すつくと立ち上がった中島氏は「何の根拠があつて奥立山などといわれるのか。勝手な命名はあかん！」と大喝された。中田氏は壇上に立往生して頭を掻かれた。中島氏は、勝手な造語だけでなく、山岳の自然を破壊する恐れのある観光開発構想そのものが気に入らなかつたのであろう。

中島氏が「山岳」三十二年一号から三十四年一号まで三回にわたつて連載された「黒部奥山と奥山廻り役」は計二〇〇ページの大作、氏が若い頃から全力を投入して蒐集された古文書・古記録・古絵図を縦横に駆使して、黒部奥山（黒部峡谷を囲む立山・後立山両山麓から黒部源流地にかけての大山域）の隠れた史実を徹底的に解き明かされた大論文であつた。

それまで人跡未踏と考えられていたこの山城にも、二百年も前から加賀藩の奥山廻り役が毎年登山縦走して巡視を続け、苦勞に苦勞を重ね、踏査記録を残していた事実、奥山廻り役と信州の柚との間に追いつ追われつの角逐がくり返されていた興味深い事実、従つて、無名と思われていた山々谷々にも、れっきとした越中側名称があつて、明治以後命名採用された地名と食い違つている事実、また

江戸時代後期、算学者石黒信由翁が藩命を受けて綿密な山岳測量を行い、精巧な地図を作製していた事実等々も、この中島氏の研究によつて、初めて「岳界・学界に紹介されたのであつた。「山岳」誌上にこのような重厚壮大な山岳史研究が載つたことは空前、そして多分絶後であらう。

つづいて「山岳」三十六年一号に発表された「神河内志」は五六ページ、四十三年号から四十七年号まで連載された「白馬岳志雑攷」は計七五ページの大作で、いずれも山岳史家中島正文の名を不動のものとした力作であつた。

中島氏は、越中砺波郡在住の山廻り役宮永正運の血を引く津沢町の旧家に生まれた。この地からは東天に立山連峰と白馬連峰とが折り重なつて怒濤の如く見え、さらに南東には黒部五郎岳・水晶岳・鷺羽岳などの奥深い山々も峰頭を覗かせて育つた。この大観を眺めて育ち、自家所蔵の山廻り文獻に囲まれて育つた中島氏は、山岳史に深い関心を持ち、やがて富山県下はもとより、長野・岐阜・新潟の諸県まで馳せ回つて、あらん限りの努力を傾けて山の文獻を集めた。まさに蒐集の鬼であつた。

入手し得ぬものは借用して、実物さながらに手写し、これを和装本に仕立てた。その写本の巻末には「借覽ヲ許サル、歓喜踊躍シテ即夜筆ヲ呵シテコレヲ写ス」などと書きつけられているが、稀覯文獻を手にして、夜も眠らず、これと取組んだ中島氏の喜び、意気込みがその筆端に躍っている。「山」と「古文獻」に対する激しい情熱から氏の研究は生まれ、氏の業績は成つたのだ。

氏の山岳史研究は「山岳」の他、「日本山岳会報」「山岳富山」

「山と溪谷」等に発表されたが、いずれも現在入手困難である。主論文「黒部奥山と奥山廻り役」は三回の抜刷を合冊して、小島鳥水翁の序文を添えて昭和十四年刊行されたが、発行部数はごく少数だったであろう。稀本中の稀本である。

中島氏のこれらの論文を一冊にまとめたというものが、かねてからの関係者の念願で、幾たびか話題となったが、採算がとれぬというので、いつもお流れになった。この度ようやく機熟し、鳥水翁の序文を巻頭に据え、研究十五篇を「黒部奥山と奥山廻り役」「針ノ木峠と後立山をめぐって」「白馬岳をめぐって」「上高地をめぐって」「立山史談」「五箇山雑記」の六章に収め、さらに山に関する随筆雑録等九篇を「山岳雑記」「岳辺余録」の二章に収め、付録として「杏子山岳句百八十句」(中島氏は前田普羅の高弟で、杏子と号し、俳誌「辛夷」を主宰した富山県俳壇の指導的人物でもあった)を添え、生前配布の小冊子「山岳古史料蔵目」を加えて一冊となし、桂書房から刊行した。別冊付録として、奥山廻り役浮田家伝来の「黒部奥山絵図」(文化六年、一八〇九)の美麗な原色複製図(原寸九五^ワ平方、複製五六^ワ平方)をつけることができたこともうれしい。

氏は昭和四十三年中風で倒れ、半身不随となりながら、なお山岳史研究に熱意を燃やし、県下俳壇の指導と句作、図書館の振興(氏は富山県図書館協会会長でもあった)等に心を砕き、昭和五十五年、八十一歳で逝去されたが、没後六年目にしてその遺業が総括刊行されたわけだ。故中島氏は地下で、あの大きな目を細くして「よくやつてくれた」と喜んで居られるであろう。中島氏を畏敬してやまな

かった山男故石黒清蔵氏も、わがことのように、この出版を喜んで居られることであろう。
(廣瀬 誠)

西堀栄三郎ほか編

『加納一郎著作集』

教育社 全五巻 一九八六年三月〜一九八六年七月刊 A5判上製函入り 定価三六〇〇円〜四六〇〇円

極地への探検と冒険、氷と雪を語り『世界最悪の旅』全訳を併せ収めたバ
イオニアの展望の著作集

極地の研究を生涯のものとしてされた加納一郎さんの著作集全五巻が刊行された。これらは、極地探検記の翻訳、札幌時代の経験をもとにした雪と氷の研究およびスキーと登山、および随筆集からなり、極地に関する記録はもとより、北海道のスキー登山の黎明期を知る上で貴重な紀行を記したものであり、第四巻の解説にあるように、刊行されるまでには西堀栄三郎氏を始めとする五人の編集委員の大変な御苦労があった。

第一巻「極地の探検」には、「極地集誌」「未踏への誘惑」「極地の探検・南極」「極地の探検・北極」の四編が含まれている。「極地集誌」は、加納さんの極地に関する著作の最初のものである。極地紀行、極地探検における設営上の問題点など、すでにその当時(一九

四一年）出版されていた外国の文献を讀破していなければ書くことのできない内容が盛られている。このなかでも、北極点へ飛行船イタリア号で航行したノビレ隊長の救出についての「隊長は真先に救いだされてよいか」という章は、ノビレ隊長に対する加納さんの考えが明確に出ていて面白い。ノビレ隊長が真つ先に救出されたことについて、英国の生んだ若き天才探検家ジノ・ワトキンスの意見——たとい自分が最初に救われるに値するものであることを知っていても、自分は終わりまで残るであろう——を紹介している。この話は、加納さんが生前、我々に好んで話された極地探検の逸話のひとつである。「極地の探検・南極」には、フックスによる南極横断を始め、戦後の科学調査を目的とした南極探検隊の活動に主点がおかれている。とくに、日本の南極観測については、開始当時——探検か、観測か——の議論が戦わされた際の探検派に属する加納さんの意見がいたるところにみられ、当時を知らない若い世代の人々には興味の湧く文章であろう。南極大陸の将来についての章は——南極が特定の国によって戦略的、経済的に独占されない新しい区域として全人類のために役立つ大陸でありたい——とされ、我々はこれを極地の研究を生涯のものとされた加納さんが残された貴重なメッセージと受けとることができる。

第二巻は、「フラム号漂流記」の題のもとに、ナンセンのフラム号漂流記、アムンゼンのアムンゼン探検誌、ベルグマンの千島紀行など三編からなっている。その風貌も氏によく似たアムンゼンは、加納さんが最も好まれた極地探検家である。その自伝ともいえるアムンゼン探検誌は、彼の極地探検を物心両面から援助したエルスワ

ースとの友情、ノビレとの確執、そして彼が胸をはって「探検家としての予の生涯」という原題のこの自叙伝を書くことのできた北西航路の完航と南極点到達の記録が記述されている。しかし、南極点到達については別の著書があるため、その記述はあっさりしたものとなっているが、犬そりの利用や、ロス氷床を基地に選んだことが成功につながったとし、これと比較して、スコット隊の遭難の原因について冷静な判断を下している。また、一時我国でもよく論議された「探検と冒険」についても、アムンゼンは——冒険への意欲をみくびるつもりはないが、探検のような重要な仕事を成功させるためには、ある一定の厳しい職業的な準備が必要である——と論じている。

フラム号漂流記は、北極探検の父と言われたナンセンが、——自然の力に注意を払い、自然にさからわず、自然とともに動く道を求めるならば、我々はきつと北極点に到達するもつとも安全な道を見つけることができる——との確信のもとに、氷庄に逆らわずに上に押し上げられる構造の船を自ら設計して北極点を目指した探検記である。この探検の出發に当たり、ナンセンは、食料を五年分積み込み、海水の流れとともに船を漂流させ極点を通過しようと考えた。実際に、フラム号は三年間の漂流を余儀なくされた。北極探検記の古典ともいふべきフラム号漂流記を知る上に、また、現在の探検にも通じるアムンゼンの探検に対する考え方を学ぶためにも、これらの作品は山登りや探検を志すものにとって見逃すことができない。

第三巻「北海道の山と雪」には、「北海道のスキーと山岳」「水と雪」「随筆——北の国から」の三編が収められている。随筆を除く

他の二編は、加納さんが身体を悪くされる前の、二十代後半から三十代初期の作品で、その後の氏の著作活動の原点になった作品であれば。この紹介欄の筆者は、昭和二十八年以来加納さんのお宅にしばしばお伺いし、談論を通じ、啓発、啓蒙をお受けしてきたが、その間、ご自身の作品についてそれほど語られなかった氏が、自分が精魂を傾けて表わした著作が『氷と雪』であり、いまま誇りに思っている作品であるという意味の話をされたことを覚えていいる。この書は、当時まだ未成熟であった日本の氷雪学の水準からみて決して見劣りのする内容ではなかったのではないかと思われる。加納さんは、江戸時代に書かれた『雪華図説』の著者、土井利位と同じ心境で、あくまでも素人として、しかし自然のよき観察者としてこの著書を世に出されたのであろう。この著書については、編集委員のひとりである樋口敬二さんが、加納さんの思い出とともに専門家として巻末で解説されている。『北海道のスキーと山岳』は、北海道におけるスキー登山黎明期の記録であり案内書でもある。また、若くして立山で遭難死した板倉勝宣氏の思い出に多くのページがさかれている。板倉氏は加納さんの北大時代の友人であった。

第四巻「自然のなかで」には、『わが雪と氷の回想』『随筆——自然のなかで』が収録され、さらに、松島駿二郎氏による加納一郎年譜が添付されている。わが雪と氷の回想は、加納さんの古希を記念して、加納さんにゆかりのあるものが氏に北極の氷に接してもらおうと計画した旅行の記録が主体となっている。北緯八二度、西経一五七度に浮かぶ氷の島T-3を訪問された氏はその感激を『しあわせの極まるどころここに緯度たかくとぶ探検ジャーナリスト』

と詠んでおられる。

第五巻は、「世界最悪の旅」である。第四巻の随筆集に加納さんはこの本を翻訳するに至る経過——身体を悪くされ四十半ば以前に新聞社を退き著述業に入られたこと、この本の翻訳を勧めた高須茂氏とのかわり——が詳しく述べられている。この本は、スコットが南極点に達しながら、帰途基地にかえり得ず全員遭難死した悲劇に至るまでの記録を、この旅行の支援隊員であり、生物学者でもあるチェリー・ガラードがスコットの死後十年の年月をかけて表わした著作である。著者は極地の自然については極めて冷静にこれを描写しているが、隊員については丹念に、親愛を込めて人物描写をしかつ、科学隊員であったことによるものであろう。加納さんは訳序のなかで、——探検当時の著者の若さから来る生気をも伝えている。深刺たる好著——とされるされている。この翻訳書は、昭和十九年に出版された。その後この翻訳書は幾度か再録されたがいずれも改訂抄録であった。本巻が初めての原翻訳書全訳の再録である。

生前の加納さんのお宅は、理想を抱き登山や探検を志す若者達が夢を発露する場所であり、氏はそのよきアドバイザーであった。しかしそこには、つねにチェリー・ガラードのいう『探検とは知的情熱の肉体的表現である』という言葉に表わされるものを若者達に期待する氏の願いがこめられていた。その氏の著作集は、より困難な登山や探検を志す者にとって勇氣と励みを与えてくれる書物となるであらう。

(安藤久男)

本多勝一編

『知床しれとこを考とえる』

晩聲社 一九八七年四月刊 四六判 三四二
ページ(うち資料四九ページ) 定価二〇〇
〇円

知床だけでなく日本の森林や自然保護問題を考えるための必読書

一九八七年四月十四日、全国的に拡がった自然保護団体の反対の声を押し切って、林野庁は知床国立公園内の国有林に機動隊を導入して、三日間で五百三十本の巨木を切った。

当初、伐採を予定していた八百四十本余りのうち三百本余りを残したとはいえ、伐採強行によって、林野庁に対する同情の声をなくしたマイナス面は大きい。ともあれ知床国有林の伐採問題は、人間と動植物の関係、日本古来の木の伝統文化と森林との関係、人工林と自然林、過疎地域の経済問題、観光と自然保護など、今日の日本の森林をめぐる自然保護の諸問題を圧縮して提供した形である。同時に日本人に森林と自然保護、国有林をめぐる問題に関心を高める役割を果たしたといえよう。

本多勝一氏編集の本書は、知床の国有林に対して一九八六年八月末に、林野庁の伐採準備が終って「あと数日以内に伐採強行」という非常事態を迎えてから、約二カ月間の推移を中心に、さまざまな論点視点による情況説明や評論・資料等を収録編集している。知床

だけでなく日本の森林や自然保護を勉強するための入門書として格好のものといえよう。

また本書は伐採が強行された四月十四日の前日に第一刷が刊行されたため、記録としては完全なものとはいえないが、前年の十月十七日の農林大臣による一時凍結、同十月二十二日の環境庁長官現地視察などで、約四カ月間の休戦に入った、その休戦期間を含めた一九八七年二月までの推移の記録書として読むことも可能だ。

本文二九二ページの情況説明や評論は、五章に分かれており、各章の冒頭に編者による「レチタチーボ」と題する短かい解説がつけられ、各章の内容を示している。レチタチーボはイタリア語で、叙唱と訳されて、主として歌劇に用いられる用語。曲よりも歌詞に重点をおいて劇を解説する言葉という。

いうまでもなく編者は、伐採反対の立場をとっているが、各章には、それぞれ伐採推進派と反対派の論評が載せられていて、できるだけ公平を期する努力が認められる。編者の本多氏の文章にはファンが多いが、一方で抵抗感を持つ人もいる。抵抗感のある人は解説のレチタチーボ抜きで、本文の論評、対談、鼎談だけでも十分に読み応えがある。

本書は一九八六年八月から翌年二月までの出来事を中心に編集しているが、例外として第一章の「知床一〇〇平方キロ運動とナショナル・トラスト」は、大正三年に始まる知床開拓からナショナル・トラスト発足に至る経過と歴史が要領よく纏めてある。また本文では、とくに五章の対談、鼎談が光っている。編者と工藤父母道氏の「新聞記者の無知とゴウ慢」は、工藤氏の自然保護への理解の深さ

と見識が見事である。自然保護に関心ある者にとつて、『自然保護と動物愛護運動』の違いを指摘するなど示唆に富んでいる内容だが、逆説的にいえば、新聞の論説委員でも誤解するほど、中途発端な知識で自然保護運動に入る人間も多いという教訓でもあろう。また「滅亡前夜の宴はやめよう」という鼎談では、畑正憲氏の動物への愛情と知識の深さを知ることが出来る。畑氏の話は『しまふくろう』など知床の動物にとつて択伐といえども致命的な影響を与えない事実を浮彫りさせている。

巻末の資料四九ページは、日本弁護士連合会の「自然享有権の確立と課題」など十三の資料を掲載している。学術的なものばかりでなく、アイヌ民族の自然観に根ざす儀式と祈りに寄せて、アDOI（豊岡征則）氏が作詞作曲した「カムイドラノ」（神々とともに）と題する詩（祈詞）を、本文でなく、あえて資料に含めたことは自然保護哲学に関する編者の見識であらう。

本書は伐採の前日四月十三日に刊行され、二月までの出来事を載せているため、今回の知床伐採のゴースサインとなった（財）北海道森林技術センターの「知床国有林の動物等に関する調査」（昭和六十二年三月）は、資料に含まれていない。また、本書発刊で意図した『伐採中止』は四月十四日の伐採強行で挫折したようにも見えるが、その後の経過をみると一概に自然保護運動の敗北とはいえない希望の萌芽が見えてきている。

知床国立公園内の伐採について、林野庁は「森全体の若返りのため、伐採対象は老齢過熟木である。森全体の六〇七〇を択伐、ヘリコプターで集材するので、貴重鳥獣など自然への悪影響は少な

い。人間の手を加え森の活性化を図る」と世論を伐採賛成にむけさせるべく説得につとめてきた。この論調に対して、伐採反対運動派は「伐採対象の樹齢二〇〇年前後の巨木は老齢過熟木ではない。高く売れる木を選んで伐採の対象としている。人間の手を加えなければ荒廃するのは人工林の場合で、自然林は人間誕生以前から元気に育っている」と林野庁の言い分に真向から対立して、歩み寄る気配はなかった。

林野庁の伐採強行は「知床であきらめれば国立公園で自然林の伐採はできなくなる」という危機感と、あせりのなせる業であった。しかし伐採の後の四月二十六日に地元斜里町長に、知床自然保護協会長の午来昌氏が当選するなど地元まで敵にまわるとは予想しなかったことであらう。地元営林署も「地元が反対する限り、当分の間、伐採は中止する」という思わぬ結果となった。

伐採強行後の五月、当会の自然保護委員も現地を視察したが、地元の林業関係者によると「知床などの寒冷地では、木材の伐採は秋から二月までに行なう。春になると木は芽ぶきを前に大量の水を吸い上げる。四月に伐採した木材は商品としての価値は落ちる。林野庁のやり方を見ると『実を捨てて名をとった』というところだ。伐採の跡地に種を蒔いたのもおざなりだ。種蒔きは七月が最もよい。跡地に笹が多いのも問題で、下刈りなど手入れをしないと種を蒔いても、殆んど芽は出ないし、育たない」と批判している。

時間の経過とともに、伐採強行に対する世論の反対が強まるばかりで、林野庁の予想を超えているようだ。しかし伐採されてしまった以上、知床問題に対する自然保護運動は、択伐跡地に広葉樹が再

生するよう、林野庁の尻をたたたく——など息の長い活動が必要だ。

本書も、伐採後の新しい事態と時間の経過に伴う新しい視点からの続編刊行が待たれる。その内容を、あえて注文すれば、人間と動植物の共存関係や、木の伝統文化と森林保護、過疎地の経済、観光と自然保護、自然林と人造林施行の方向……など、日本の森林が抱えている諸問題について幅広く論評したものであってほしい。

(関塚貞亨)

藤本一美・田代博編著

『展望の山旅——山から見る山・町から見る山——』

実業之日本社 一九八七年二月刊 A5変型
判 二六六ページ 定価一九〇〇円

山々から、そして町から見えるマウンテンウォッチングの醍醐味をいろいろな意味で面白い本である。

その面白さの第一は、この本を生み出させた発想にある。『展望の山旅』という書名が正直に語るように、ひたすら展望を求めて山頂に達することを目的とした人々の産物である。編者二人が山頂からの展望図を描き、あるいは写真を撮った。たいがいの登山者は山頂に至ることを目的とするだろうが、この本の編者たちは山頂から他の山々を見ることを目的とし喜びとした。山頂に達して四囲の山々の眺めに見入った人たちは無数にいたが、視野に入る山々すべて

の名を確かめようとすることはなかった。登山にとまらぬ肉体的苦痛の代償として得る広々とした光景に見とれる幸福感、あるいは、幾重にも波打つ山々の造形と色彩の美しさを鑑賞する楽しみが、多くの登山者に共通する。そのような心情や美学をいっさいかなぐり捨てたところに、この本のいさぎよさがある。徹底した実証主義の精神がこのユニークな本の面白さの第一の源泉である。

顔振峠や高尾山から奥穂高岳や富士山に至るまで計七十二の地点から展望できる山々の姿が、主として克明なスケッチとして、そして、やや少な目ながらも写真として記録されている。首都圏や甲信越のいくつかの都会から見える山々についてのスケッチと写真も欠けてはいないが、この本は「山から見る山」が主役を演じている。たとえば奥穂高岳から日光の山々までも見えるとか、剣岳から秩父の国師岳が見えるなど、思いがけない山々が視野に入ることを知った驚きの気持ちだが、丹念な作画と探求の作業の原点にあったにちがいない。

第二の面白さとは何か。この『展望の山旅』は山岳書には珍しいチーム・ワークの書でもある。主人公である二人の編者に証拠写真を提供する四人（そのうちの「一人」は山岳写真のグループであるから個人あつかいしてよいかどうか）、そして四人の山岳エッセイストたち。つまり、九人と一グループが見事なアンサンブルを形成している。展望図にそえられた短いエッセイは、たんに即物的な記録になりかねないものに心情的な肉づけをおこなっている。仙丈岳に登って眼下の戸台川をゴドウィン・オースチン氷河になぞらえ、北岳をK2とかさねあわせたり、剣岳でカラコルムを連想するとい

う筆者（横山厚夫）の文章が象徴的であるように思われてならない。『岳人』一九八七年五月号で牧潤一が、もし穂高岳がヒマラヤの八千峰であるならば、という前提のもとで想像画を発表しているが、それと一脈通じる発想がここにもある。こうした想像力をかきたてて、登山者は一つの低山を訪れてさえ複数の高山にあいまみえる、贅沢な錯覚に酔う。『展望の山旅』もまた、高い低いの別を問わず一つの山頂や峠からどれほど多くどれほど遠くの山が見えるかを、これでもかこれでもかと示してみせる。もはや錯覚ではなく、現実に見えるものとして。

こうして発見の楽しさ、新しいタイプのピーク・ハンティングの喜びが、本書のあらゆるページからつたわってくる。編者たちの行動範囲が概して首都圏から西、それも北アルプスから御岳につながる線で切れているから、その他の地域の山々でピーク探しの山旅のチャンスが読者に残されている。下界から遠望する山々の戸籍調べにも無限に近い個人的な探索の機会がある。山村正光の、中央線車窓からの山旅は鉄道の線の上での山頂探しのモデルであったとすれば、本書は定点からの視覚的な山勢調査といった趣きがある。

さて、第三の面白さは、いくばくかの淋しさと裏腹の関係にあるように思われる。山岳パノラマ図は、一説には十八世紀末にその芽生えがあったと言われるが、十九世紀のヨーロッパ・アルプスで始まった。観光目的の登山時代の到来がこのジャンルを舞台に登場させた。当初は登山交通機関の発達した、だれもがやすやすと到達できる山頂からの展望の広さを喧伝するためのものとして作られた。スイス中央部の、登山鉄道史の古典に属するリギ山からのパノラマ

図は（登山というよりも、むしろ山頂訪問の）大衆化時代の到来を象徴するものであったと言つてよいだろう。のちに、交通至便の山頂からの展望図のいくつかがスイス観光案内書に折り込まれるようになった。このようにして始まった山岳パノラマの描法そのものは今日に至るまでほとんど変わりはない。

本書の獨創性は、特定観光地点のPRとはちがって、登山する者のだれもが（あまつさえ、下界にいる者さえもが）パノラマ展望のゲームを楽しみ味わうことができるかと教えるところにある。ご丁寧に練習問題まで仕込まれている。読者も知的ゲームに参加できるようにになっている。山岳発見と山座同定の教科書でもあろうとしているところには本書の獨創性がある。東京から見える山々といったテーマで古典的な先例があったり、山岳雑誌に山座同定の技術が開陳されたためしがあったりはしたけれども、これほど多角的で組織的なパノラマ図がこころみられたことはない（五百沢智也の一連のパノラマ画は地形研究を主眼としていたから、趣旨においてちがっていた）。モンテ・ローザ山頂で撮られたシュルテスの三六〇度の展望写真、同じくスイスのベランによるアルプス・パノラマ画集などがこの分野への関心を開拓してくれていなかったとしたら、本書のような書物の出版はもっと遅れていたかも知れない。とは言っても、出現するべくして出現した、新しいタイプの山岳書であることにちがいはない。

ひたすら新しいものを求め、孤高の名譽を求める登山の時代を純文学にたとえてよければ、それらの先人たちに開拓されたルートを歩む多くの人々のつづく現代はさしづめ登山の大衆文学時代である

う。どちらの場合も、登山は個人的な行為である。百名山に登るのも、三角点を涉猟するのも、個人的な動機付けにはじまって、個人的快感に尽きる。これは私小説に似た登山行為である。この点、パノラマ展望によつてはるかな、かすかな山影を探し求めるのは、客観的な証拠がためと緻密な計算を基礎としてのことからして、科学小説もしくは論理本位の推理小説に似ている。そこには情感とか美意識といったものの入りこむ余地がないにひとしい。私が先に淋しさという言葉をするのもそこに原因がある。しかし、そうした感傷の一片を寄せつけないすがすがしさが『展望の山旅』にはある。完成の域に近づいた地図、磁石、高性能の双眼鏡とカメラなど客観的な条件の整ったところにさっそうと現われ出た新種の登山の面白味を啓発し、しかも都会にいてさえ同種の喜びを味わわせる、有難い刺激の書物と評するのが正しい結論であろうと思う。

(宮下啓三)

W・ウェストン、長岡祥三訳

『ウェストンの明治見聞記——知られ

ざる日本を旅して——』

新人物往来社 昭和六十二年四月刊 四六判

二二〇ページ 定価一八〇〇円

W・ウェストンの三番めの訳書、あたたかい愛情の眼で「近代日本」を活

写した文明論

最近になってウェストンの研究がめざましい進展をみせている。それはウェストンの登山そのものというより、その生涯——といっても日本に関わる部分においてであるが——のすべてについてなされているのが特色である。特に、その宣教師としての活躍についての調査が詳細になされている。このウェストン研究はまず川村宏氏、垣内茂氏らによつてはじめられ、一応のまとめとして島田巽氏が略年譜を発表された。その後、彼らのほかに、三井嘉雄氏、安江安宣氏らに加わり、新しい資料が少しずつ発見されている。筆者自身もこの熱心な人びとのうしろからウェストンの人物像を求めていささか調査をしている。

こういう時期に、登山そのものを扱っていないとはいえ、ウェストンの第三の著書が日本語に訳されたことは意義深いと思う。この原書は一九二五年にロンドンで発行された *A Wayfarer in Unfamiliar Japan* (1896), *The Playground of the Far East* (1918) に次ぐウェストンの著書であり、このあとに *Japan* (1926) が発行されている。ウェストンは滞日通算十五年近くにも及んでいるのだから、登山以外の日本についても関心を寄せ、彼なりの日本観を持つていてもふしぎはない。いままでもウェストンについて登山という側面ばかりがもてはやされ、山登り以外のが無視されてきた嫌いがある。その点では今度の訳書はウェストンの日本観を知る上で興味あるものだ。

しかし、『日本アルプス——登山と探検』および『極東の遊歩場』

を読んだ後では、あまり新鮮さを感じなかった。たぶん、それはウエストンがその前の二書においても登山ばかりでなくかなり日本文明論を展開しているからであろう。彼は登山者として地理に深い興味を抱いていたが、それに劣らず民俗にも並々なぬ関心を持っていることで、前の二書も単なる登山紀行ではない内容となっているのである。今度の訳書はその点ではウエストンの日本の民俗や文明に関する興味がそのまま発表された感じである。ここでも彼は近代化されない日本、物質主義に毒されない日本を良しとして紹介している。近代化されない日本こそ、真の日本であるといったげである。これは日本の紹介書としての性格から、やむを得ないことかもしれないが、日本にエキゾチックな面を求めすぎていると思う。もっともこれはウエストンばかりでなく、他の多くのヨーロッパ人の日本に関する著書にみられる。戦後においても、マラーニ氏の『日本との出会い』などにもみられるのである。ウエストンの次の著書『日本』ではなおさらエキゾチックな面が強調されていると思う。ウエストンが日本語の知識がほとんどなかったこと、日本人の友人とあまりつき合わなかったこと（日本山岳会の有力メンバーとは全く山行を共にしていない！）を考えると、よく日本を観察していると思うが、客観的にみると、日本文明論としてはいささか物足りない。日本語の知識がなかったことが、ウエストンの弱点であったのではないだろうか。ただ日本人としては、ウエストンの日本に對するあたたかい愛情が感じられて、心うれしい本である。また、ウエストンの人物像を知るうえには興味ある本である。

訳書の表題「明治見聞記」というのはどうであろうか。この著書

においてウエストンは日本そのものを紹介しようとしたのであって、自分が見聞した明治期の日本だけを扱おうとはしていないからである。だからこそ関東大震災のような、大正末期の出来事にもふれたのである。「明治見聞記」だけでは、大正十四年にもなつて、日本の紹介を書くわけにはいかないであろう。ウエストンは自分の目で見つめた明治の日本だけで判断しようとはせず、他の見聞あるいは資料に基づいてこの本を書いたのである。

（水野 勉）

田淵行男

『山の手帖』

朝日新聞社 昭和六十二年三月刊 B5変型
判 定価四八〇〇円

とっておきの宝物が公開される楽しみ

山岳写真家として、また高山蝶や雪形の研究者として、田淵行男さんはながいこと私には雲表の人であった。その大先輩が、ぐっと身近に思えるようになったのは、私のはじめての本『常念の見える町』に、田淵さんの安曇野の写真をお借りしてからである。それまで一面識もない私のために、貴重なフィルムを提供してくださったご厚意は忘れることができない。

久しく常念山麓牧村に住んでおられた田淵さんは、昭和三十六年、居を豊科町に移された。そこは私が戦中・戦後を過したなつか

しい場所で、そのまま住んでいたら今頃は、ご近所づきあいが生まれていたかもしれない。

勝手にそう思いこんでいる私は、近くを通るたびに田淵家を素通りできないでいる。このところ健康もすぐれないようだし、ご迷惑をかけては……と、いくたびか逡巡したのち、それでもつい、玄関に立ちどまってしまふ。そういう旅行者は私だけではないと見えて、すでに先客があるときもあれば、あとから来訪者が続く場合もある。そのために仕事が中断したり、体調がくずれることがあつても、表面は何事もないうちに欲待してくださるあたたかさに、ついつい長居してしまうのである。

その田淵さんは、このところ『山のアルバム』（講談社）、『黄色いテント』（実業之日本社）など、相ついで写真集や文集を刊行されている。そのたびに、とっておきの宝物が公開されるような楽しみを覚えるのは、私だけではないと思う。

こんどの写真文集『山の手帖』は、昭和のはじめから歩きつづけ、撮りつづけてきた田淵さんの六十年間の成果が収められている。

巻頭に「一山百楽」という文章が載っている。昨年六月、八十一回の誕生日を迎えるに当って、自身の山旅を回顧したものが、その中に次のような一節がある。

……私の山行にはもともと山の博物誌的な指向が強かったので、当然継続的探訪による観察の積み重ねが必要であつた。同じ山でも二度目になると最初気づかなかつたことに気づき、三度目にはそれまで見えなかつたものが見えだし、度重なるごとに山の奥深い部分まで見え、その度に山が高く大きくなっていくように思わ

れた。

こうして常念岳に二百六回という記録となり、高山蝶の生態の究明につながるのである。ちなみに、これまでに登頂した山の数は二百八十五峰——これは二百回以上登った常念も一峰と数えての算定であつて、登行回数にすれば五倍にもふくれあがるはずだという。

I 「麓からの山」では、安曇野に春を告げる小さな花々や、古くからの暮らしの文化である雪形、また三原山噴火の謎を秘めた皿石、地図にもない雑木の山で見つけたもの、ロープウェイ開通以前の飛騨路の残像など、写真・文章ともに忘れ去られようとしているものへの哀惜の思いが伝わってくる。

II 「季節の山」のブログの文章は美しい。『ようやくたかまりはじめた季節の息吹を先取りする歓びと一緒に、季節が落としていくかすかな足音も拾っていく。私は季節の谷間を行く食欲な狩人かもしれない』と。どかっと存在感のある残雪の爺ヶ岳の雄姿から、また雑木山のオレンジ色に光る伐採の切り口からも春が立ちのぼってくるようだ。新緑の陰にひっそりと咲くトガクシシヨウマの気高さ。夏の溜沢・槍ヶ岳のラッシュぶりを紹介して、動物の世界には雌雄色といわれ、雌雄で画然と異なる色調が知られ、進化の所産といわれている。そのセオリーからは最近の山に見る男女のファッションの動向は明らかに進化に逆行しているように思われる。と皮肉っているのは面白い。溜沢といえは、煙霧の中の紅葉をとらえた一枚の夢まぼろしの美しさ。やがて新雪を迎えた山々は、いぶし銀の世界に変つていく。

III 「尾根を行く」では、登山者としての自分を、明らかに一山集

中型で、同時にピークハンティング型に入り、さらに自然観賞派に属している」と定義し、中部山岳地帯の尾根歩きに終始した山行をふり返っている。とくに後立山の稜線から撮った剣岳の明け暮れがすばらしい。同じ剣岳が、北の白馬岳からは「沈思の哲人」の如く孤峰を聳立させ、スバリ岳鞍部からの剣は「半身をのりだしたたくましい巨人」を連想させると書いている。写真とともにカールの残雪を語り、雷鳥の生態を説くあたり、興味はつきない。さらに、逆光で撮った写真がいかに雰囲気描写にすぐれているかを強調しながら、時にそれが「両刃の剣」ともなることを警告している。

IV 「山の博物誌」は、田淵さんならではの作品集。まず稜線の岩を飾る地衣類の美しさに目を見はる。とくにイワブスマが「八重咲きの黒い薔薇」のようだと言っているのを読むと、何度登っても岩肌の装飾に気づくことのなかった自分が恥ずかしくなる。安曇野の蝶類、氷河に磨かれた天狗原の岩肌、上高地のケシヨウヤナギや高山蝶の生態を、ナチュラリストとしてのたしかかな目でとらえている。

V 「山のスケッチ」では、光線・雪・月・日の出・山の量感などを、写真と文章とで解説し、VI 「プラキストン線を越えて」では、通算二十回にも及んだ大雪山での高山蝶生態探究を中心に、花から雪までの季節の推移を追っている。最後に「羅臼の青い星」カラフトルリシジミの幼虫の食草をたしかめるまでの苦労話が、その蝶の美しいルリ色とともに印象に残った。

巻末に「わが未登頂記」として、白山・餓鬼岳・有明山……と数えあげておられるが、この人にしてなおと、しみみりした気持にな

った。しかし、その中に、剣岳を見る絶好の場所として剣十七景を想定しながら、実際に確かめることのなかった毛勝山からの眺望を、近年になって他者の写真によって確認、「宿願を果たした思い」という文章にふれ、その境地には頭の下がる思いだった。

(蜂谷 緑)

堀田 弥一

『ヒマラヤ初登頂』

筑摩書房 一九八六年十一月刊 四六判 二
九二ページ 定価一八〇〇円

恐ろしいほどの眼力で現代の登山を見据えている。

私にとって山の本といえば、これまでリオネル・トレイやヘルマン・ブルあたりが読書対象の限界で、それより古い戦前の登攀記は、ほとんど読んだことがなかった。

そんな訳で、この本の舞台となった、ナンダ・コート、一九三六年といえど今から五十年も前のことで、登山方法も技術水準も現在とは相当な落差があるだろうし、慶応、早稲田、京都といったメジャーな大学山岳部ではない、立教の記録であることから、それ程の期待を抱かずに読み始めた。

当時、部員が十数名で、山岳部としての歴史も浅いと思われる立教大学が、なぜ日本で最初のヒマラヤ登山を敢行できたのかについ

てはいささか興味があつたのだが……。

しかし、堀田さんの手になる、はしがきを読んでいくうちに、すぐ自分の見込み違いに気付かされた。

「困難な山、とりわけヒマラヤのような高所登山において肝腎なことは、実力を備えたものが、いいチームワークで登ることである。本来の山登りは昔も今も変わらないものがあるのだが、世の中の進歩と環境の変化に慣れて、あるべき姿を見失うことがある」

七十七歳という高齢にもかかわらず、堀田さんは恐ろしい程の眼力で現代の登山を見据えているのだ。

「今日では、ヒマラヤ登山の情報や資料も簡単に入手できるし、最新の装備や食糧等が、本来困難な登山を容易にしている。また交通機関の進歩発達が、期間の短縮を可能にし、ヒマラヤをいかに身近なものにしているか。五十年前とは比較にならない程条件に恵まれている」という堀田さんの指摘は、大先輩の後輩への強い励ましとも聞こえるし、また、現代の日本のヒマラヤ登山に対する痛烈な批判とも受けとれ、私は、にわかになんか直してこの本を読むことになった。私は、山登りというものは、人間の持つ勇氣、冒険心、情熱、決断力、夢といったものを山を舞台にして表現するものだと考えているのだが、その意味において堀田さんのナンダ・コートは、上記のすべてが中に含まれ、凝縮された、理想の山行であったように思える。

一九三〇年から三一年にかけての、日本山岳会における二つの小集会、長谷川伝次郎氏の「カシミールの山旅」と、松方三郎、浦松佐美太郎、渡辺漸氏による「カンチエンジュンガの試登に就いて」

をきっかけに、ヒマラヤへの夢をふくらませてゆく。そして黒部をめぐる山々、とりわけ積雪期の剣岳や後立山の登山に、八年にわたる情熱を注ぎ、その登山を基盤にヒマラヤに向うことになる。そして乏しい資金、少ないメンバー、二・二六事件、母親の癌といった幾多の障害を克服し、あくまでヒマラヤに向っていく強い決意。初めて経験する氷河、氷壁、高度に少人数で、貧弱な装備で立ち向かってゆく勇氣。そして全隊員による初登頂の感激。小さな夢から始まってナンダ・コートの頂上に至るまでを描いてゆく軌跡は、実に見事なものだ。

「私の学生時代は他の何事にも増して登山に心身を打ち込んだ。そして最大の意義を見出し得たのは山岳部にあつたことである。山は心の故郷であり、登山は生命の力であり、そして山岳部は私が育まれた社会であつた。……与えられた道は、ただ一筋に突進することであつた。私はすべての煩悶を克服して、心は次第に単純化した。山懐に至る途中の事務上ならびに渉外上の不安はあつたが、心に描いたものは、ただナンダ・コートの頂上であつた」とあるように、ナンダ・コートは堀田さんにとっても立教山岳部の仲間にとっても青春そのものだった。

この本の第Ⅲ部「黒部の白い峰」は、最初、いささか唐突に感じられたのだが、読み進んでゆくと、何故、彼等が五人という少ないメンバーでナンダ・コートを登ることができたのかよく理解できるのである。事実、積雪期、厳冬期の後立山、剣での彼等の活躍は驚くべきもので、剣岳、小窓尾根、早月尾根の初登攀。鹿島槍・天狗尾根、東尾根の初登攀。北岳バットレスの初登攀など枚挙にいとま

のない程で、当時の立教山岳部の技術水準の高さと山に賭ける情熱の深さは、他の追隨を許さぬものがあつたようだ（この章は、昭和初期の日本登山史として読んでもおもしろい）。

堀田さんや立教山岳部にとって惜しむべきことは、戦争が次なる目標を永遠に奪ってしまったことである。もし戦争さえ起らなければ、帰途、トレイルス峠越しに秘かに的を定めていた次なる山、ナンダ・デヴィの東峰において、ナンダ・コートのスタイルを踏襲した、小人数で、コンパクトで機動性のある登山を、より洗練された形——現在のアルパインスタイルにかなり近い形——で展開したに違いない。

長い戦争によって日本のヒマラヤ登山は、約二十年も中断することになり、ナンダ・コートのスタイルや貴重な体験は、その後生かされることなく埋もれてしまった。

戦後の日本のヒマラヤ登山は、英国エベレスト隊をモデルとしたマナスル隊の影響を強く受け、長い間、マナスルという枠の中に封じこめられて自由を失っていたような気がする。とまれ、現在、ヒマラヤに向かう私達は、堀田さんのいう「最新の装備や食糧、情報や資料」などを武器に、少しずつではあるが、より高い高度を克服し、より難しいルートを登るようになってきている。しかし、私達の登山が、装備や食糧、交通手段の発達のレベルと同様に進んでいるのかどうか。堀田さん達の情熱や勇氣に匹敵するものなのかどうか、考えてみる必要がある。「現代の武器を頼りに甘ちよる登山をしてはいかんぞ」という堀田さんの声が聞こえてきそうな気がする。

（坂下直枝）



会報「山」図書紹介一覧

—一九八六年度—

「山岳」は図書紹介欄を重視していますが、スペースの関係その他から、話題図書、寄贈図書のすべてを紹介または書評することができません。そこで、この欄では、過去一年、会報「山」でとりあげられている本をまとめてみました。見落された方、山岳図書を愛好される方の参考になれば幸いです。

- 四月号 (四九〇号)
 - 布施正直著『お花畑——高山の花々』(保育社)
 - 鎌谷緑著『ミズバシヨウの花いつまでも』(佼成出版社)
 - 田淵行男著『黄色いテント』(実業之日本社)
- 五月号 (四九一号)
 - 北大山岳部・山の会編『ダウラギリI峰厳冬期登頂報告書』(講談社出版サービスセンター)
 - 広瀬誠著『立山黒部奥山の歴史と伝承』(桂書房)
 - ウエストンの新資料——垣内茂著『主の御名によりて——横浜聖アンデレ教会百年史』(横浜聖アンデレ教会)
 - 日本自然保護協会三十年史編集委員会編『自然保護のあゆみ』(日本自然保護協会)
- 六月号 (四九二号)
 - 佐藤久編『辻村太郎著作集——第一巻・火山と氷河』(平凡社)
 - 齊藤晋著『尾瀬』(上毛新聞社)
 - 鳥海山の自然を守る会・白神山地のブナ原生林を守る会共編『ブナ林を守る』(秋田書房)

● 七月号 (四九三号)、八月号 (四九四号) 図書紹介なし

● 九月号 (四九五号)

- 『山と峠と氷河——成瀬岩雄遺稿集』(茗溪堂)
- 近藤信行編『天下藤次郎紀行文集』(美術出版社)
- 『日本山岳画協会創立五十周年記念誌』(日本山岳画協会)
- 横山厚夫著『一日の山・中央線私の山旅』(実業之日本社)
- 冬山雷鳥生態研究会編『冬山ライチョウ生息調査報告書』(富山県黒部の衆編『黒部別山』)
- 十月号 (四九六号)
 - 吉阪隆正集刊行会編集委員会編『吉阪隆正集・第十四巻』(勤草書房)
 - R・C・F・シヨンバーグ著、広島三朗訳『オクサスとインダスの間に——中央アジア探検行——』(白水社)
 - 小倉厚著『百山百譜』(岳書房)
 - 美坂哲男著、武藤昭写真『日本百名湯』(上・下巻)。(山と溪谷社)
 - 岡田敏夫著『上州武尊山』(東京新聞出版局)
 - 山本武人著『近江湖北の山』(ナカニシヤ出版)
 - 十一月号 (四九七号)
 - 田淵行男著『山のアルバム——北アルプス回想』(講談社)
 - 新井幸人写真、串田孫一文『尾瀬』(時事通信社)
 - 三宅修写真、串田孫一文『山稜玻璃』(時事通信社)
 - ロナルド・フォークス著、新島義昭訳『高みをめざして——ラインホルト・メスナーの素顔』(白水社)
 - 十二月号 (四九八号) 図書紹介なし
- 一月号 (四九九号)

日本山岳会越後支部編『越後山岳』第7号（日本山岳会越後支部）
岩波書店編『日本の山』（日本の自然シリーズ）（岩波書店）

●二月号（五〇〇号）

女子登攀クラブ編『天山脈托木弁峰——一九八六年夏』（女子登攀クラブ）

周 正著、田村達弥訳『崑崙の秘境探検記』（中央公論社）

藤原優太郎編『秋田の山歩き』（無明舎出版）

●三月号（五〇一号）

北村泰一・堂本暁子・西堀栄三郎・樋口敬二・本多勝一共編『加納一郎著作

集 全五巻』（教育社）

後藤 勲・生玉道雄編『加藤保男追想集』（加藤保男追想集編集委員会）

『稜線——追悼吉野寛一』（吉野あつ子発行）

平凡社編『気象の事典（山の気象）』（平凡社）



辻村伊助とその周辺

辻村 克良

前書き

作家の中里恒子さんが『忘我の記』という辻村伊助を主人公にした実名小説を完結して、すぐ亡くなられた。「文学界」に連載されたのであるが、癌に冒されたことを知って、苦しい中でその完結を急がれたのだときく。執筆の前に私の所にも取材に來られた。『スウィス日記』を基に、それらの取材と作家の創作をあわせて書かれたものである。『スウィス日記』が書かれてから六十五年にもなるのに、なお読者をもつことは私ども血縁につながる者にとつて望外の喜びである。

伊助の家族

伊助とローザのロマンスは一九一四年（大正三）、第一次世界大戦が始まった年であるから、古いことだが、第二次大戦が終つて十七年たった一九六二年（昭和三十七）に、伊助と縁続きになる少女が、或るスイス人とペンフレンドになった。伊助とローザのことを書いてやったところ、そのスイス人がすぐ調べてくれた。そしてローザの妹が八十歳を超えて、フルチゲン Frutigen に存命だということがわかった。マリエ・ヨージ・カレン (Marie Josi Kallen) というのがその名で、サムエル (Samuel, S. Josi であろう) というその夫はすでに亡かった。二人の娘があり、共にチューリッヒに住んでいると

いう。フルチゲンの住所もわかったので、手紙を英語とドイツ語で出したが返事がなく、それきりまた消息が絶えてしまったということがあった。一九六二年は、まだ高度成長が始ったばかりで、日本の経済的地位は低く、今日とは事情が違っていた。ユングフラウの登山電車内で日本語のアナウンスがされる今日の時代を到底予想できなかった頃である。私はその手紙のことを知ったのは一九六九年になってからであつたが、その時もちょうど忙しいさかりで、外国の古い縁者を探す努力を惜しんで、そのままになってしまった。

伊助一家が地震の山津浪で亡くなったとき、子供の梓、春名、秋葉はそれぞれ八歳、六歳、五歳であつた。梓と春名は箱根湯本の小学校の二年生と一年生だつた。観光客としての西洋人は珍しくない土地柄ではあつたが、隣人としての西洋人、ローザと混血の子供達は、今日とは比較にならないほど物珍しい存在だつたであらう。母親のローザの日本語が不自由だつたので、家庭内の会話は英語だつた。しかし子供達は学校では決して英語を口に出さなかつたという。

私の父（彼等の伯父）の思い出話に、或る時、春名が出会いがしらに、思わず英語で叫んだので、春名は英語がうまいねと言つたところ、からかわれたと思つたのか、以来この伯父の前では決して英語を口にしなかつたという。ほぼ同年代のいとこ同志の私達兄弟には、気を許していたのであらう。日本語と英語がごちゃ混ぜになることがあつた。ローザの生地はスイスでもドイツ語圏である。伊助はドイツ語を知らないわけではなかつたが、会話は不得手だつたのであらう。ローザとの会話は英語だつた。ローザにとつては英語も母語ではない。さぞもどかしかつたことであらう。ローザは私達甥には、静かに話しかけるだけだつた（もちろん日本語で）。彼女の日本語は九年たつてもあまり上達しなかつた。兄嫁である私の母は、彼女からスイスの家庭料理やお菓子作りを教わつた。わが家では大正の時代からよそでは食べられないその味に親しんでいた。今でこそ珍しくもない物ではあるが、当時はそうでなかつた。

伊助の生いたち

伊助は七歳の時に父を失つた。伊助の生家は代々の商家であつたが、伊助の父の晩年には店をたたんでいた。商店の生ま



辻村伊助

れなのに、伊助は一高から東京帝大農科大学に進んだ。生家は店をたたんだのちも、資産家としていろいろの事業に関与し、ことに山林を持って植林を盛んにやっていたことと、母方の影響があったのであろう。

父が死んだのち、伊助達兄弟の後見役であった伯父が二人いたが、一人は母の姉の夫熊吉であった。その弟に辻村直四郎・高蔵の二人がいた。直四郎は伊助より十七歳年長だったが、明治二十四年に北海道に渡り、開拓に従事した。もともと農家の生れであるが、駒場農学校に在学中、その農科大学への昇格問題に反発して、役人や学者になるつもりはないと飛出してしまった。アメリカ式の農業を夢見て、アメリカの農家に住込んで学んできたりもしたが、結局、水田開発に転じ、一〇〇haの小作農場の主となった。弟の高蔵も兄の後を追いついて別の土地で、これも水田の地主になった。直四郎の娘で作家になった辻村も子の小説「馬追原野」の主人公のモデルはその父親である。直四郎の死後、農地改革にあつて農地は取られてしまったが、五千㎡の屋敷が残った。直四郎が原始林を伐らずに残したもので、僅か〇・五haながら、今では岩見沢市にとって、開拓前の植生を示す貴重な断片である。そこにはまた農地解放をうけた元小作人達が直四郎を記念して建てた志文開拓の碑がある。志文とはアイヌ語に基づいて直四郎が命名した村の名前であった。

伊助の母の生家は今の伊勢原市の農家であった。その弟、礼三郎も東大農科大学実科（駒場農学校の後身）を出ている。それも伊助の進学に影響したかもしれない。母親の兄弟は五男五女もあつたから、伊助のいとこは大勢いた。その中には、辻村太郎（地理学）・内田清之助（鳥学）・勇三郎（心理学）の兄弟、内田恵太郎（水産学）・昇三（動物学）の兄弟らがいる。伯母の孫だから一世代下るが、吉川春寿（生化学、栄養学）もその仲間である。その中で清之助は伊助より三歳年長だったから、伊助の大学志望に影響

響を与えたであろう。彼は鳥の研究と鳥獣保護行政の草分けとして知られているが、元來は東大農科大学の獣医学科の出身であった。他のいとこ達は伊助より年下で、逆に伊助の影響を受ける側にいた。四歳下の辻村太郎は殊にそうであった。

伊助より五歳年長の兄常助は、東京で中学を終えたのち、大学志望を許されず、家に呼び戻されてしまった。しかし商人にはならず、温室を作つて花の園芸をはじめ、のちに辻村農園を開いた。園芸（花、果樹）は当時伝統的な農業とは別種の、西洋伝来のハイカラなものという感覚があった。三井財閥の戸越農園が開かれた頃である。伊助もヨーロッパから戻つてきてから、大学へ戻らず（大学院学生の籍をおいたままヨーロッパへ行つていた）兄の農園を手伝うことになって、農芸化学とは疎遠になった。当時の辻村農園は東京に二、三の店舗を持つて花を売つており、種子の通信販売もやっていた。本拠の農園は今の小田原駅の所にあつた。鉄道が国府津から小田原に延び、鉄道用地として買収されたので、ずっと山の方に移つたが、関東大震災を契機に営業を事実上中止し、常助は専ら山林経営に當つた。山に移つてからの農園の跡は、現在小田原市の辻村植物公園として梅の名所になっている。

伊助の友人達

伊助は一高在学中から山登りにこつた。農科大学に入つてから、明治四十一年に河田黙、那須皓、川島祿郎と燕から槍・穂高へ行つた記録がある。三人は何れも後にそれぞれ林学、農政学、土壤肥料学の指導的学者になつた人達である。川島祿郎さんとは、私、専門を同じくして、学会では度々お目にかかる機会があつたが、当時私は先生と伊助が山仲間であつたとは知らず、先方も私を旧友の血縁とはご存知なかつたのであろう。伊助の話は出ずじまいだった。

那須皓先生は、山登りはほどほどで終つたが、伊助との友情は深く、終生彼のことを話されていた。私が東大農学部に入學したとき、那須教授の新生活に対する講演が感銘の深いものだった。中味は忘れてしまったが、その名調子と rural civilization（田園の文化）という言葉だけを半世紀たった今も憶えている。学科が違い、学生として教える機会はなかったが、その後個人的に親しくしていたたかよになつた。先生は終戦後吉田首相に見込まれて、農林大臣に引張りだされ

ようとしたが、農地改革に対する考え方が占領軍の左派と合わず、公職追放に引掛けられて、大学を去られた。後FAO（国際連合食糧農業機構）の日本代表、インド大使（ネパール兼任）など幅広い活動をされ、九十五歳で亡くなったが、亡くなるまで頭脳明晰であった。

伊助は明治四十五年に東大農芸化学科を卒業したのであるが、同級生に後に教授になった後藤格次、鈴木文助がいた。私は昭和十年にその同じ学科に入ったのであるが、入ってから叔父の伊助がその卒業生だと父にきいて変な気がした。伊助の仕事とも思い出ともんと結び付かなかったからである。学生時代の伊助は山登りのほかに、ボートの選手でもあり、音楽や芝居見物が好きで、写真にこり唱歌もよんだ。

我はただ荒山を恋う 兎等はみな ありのすさびの人ばかり恋う

雪山讃歌の「おれ達は町には住めないからに」みたいで、子供っぽいのが、伊助の学生時代の作である。よく学びはともかく、よく遊んだらしい。

そういうことは後にきいたことで、両先生から直接きいたことではない。今になってみれば、伊助の学生時代のことを両先生からきいておけばよかったと悔まれるが、当時は生意気盛りで、そういうことにはほとんど興味がなかった。両先生とも私が旧友の甥であることは知っておられたが、そういう話題には到らなかつた。後藤先生からは有機化学を教わつたのだが、話好きな方で、進化論や生命論について若い者に議論を吹掛けられ、こちらも背のびした応答をしたものである。

伊助の学生時代からの友人に加藤完治がいた。農学校の教師を振出しに、後に日本国民高等学校を興した。デンマークの農業協同組合主義を模範とした私立の農民学校であった。彼は満州事変のあと満州移民を推進し、内原訓練所を主宰して、農村青年を満州開拓に送出した。最初の弥栄村開拓団、千振開拓団（七虎力）以来、満州農業移民の精神的指導者だった。そのいかつい風貌と共に、農本主義と日本精神を声高く唱える最右翼のように思われているが、必ずしも偏狭な右翼ではなく、その思想の出発点は少し違うようだ。デンマークはプロテスタントの国であり、協同組合主義の基盤はキリスト教だ。加藤さんはヨーロッパへ留学する前に伊助の家に泊りこんで、伊助とローザから英独会話とヨーロッパ生活のノウハウを習

っていったそうである。満州から命からがら引揚げてきた人達の中から、あいつに煽動されて満州に渡ってひどい目にあったという声ができこえないのは、彼の人徳であろう。引揚者と共に白河の奥の開拓地に入って、そこで亡くなったという。

山登りの仲間の高野鷹蔵の本業は横浜の旅館の主人だった。山登りのほかに飼鳥にこり、私の記憶によれば、昭和一桁の頃には、東京の阿佐ヶ谷で飼鳥の研究に打込んでいた。小鳥の小舎がたくさんあって、子供心にそのお宅へ行くのが楽しかった。ずっと後に、鷹蔵氏の二男で私と同年の男に、久しぶりにばったり顔を合せたのは聯隊の営庭であった。共に赤紙で集められたのだが、私はその前にやった病氣の後遺症で追返されて助かったが、彼は大陸へ出征して、二度と帰ってこなかった。老いた鷹蔵氏がいたいたしかった。

『尾瀬と鬼怒沼』の名著で山好きにはよく知られている武田久吉は、『スウィス日記』に追憶を書いている。また震災の二ヶ月前に箱根湯本の伊助宅を訪れたことを書いている（岳人だより、日本岳人全集月報3 昭四十二年）。

伊助がロンドンを本拠にして山歩きばかりしていたとき、一番の頼りは武田だった。武田は当時キユウ植物園におり、ロンドン理工科大学で講義を受持っておられた。風来坊の伊助と違って、二つの祖国を持つ武田はここではイギリス人そのものであったから、伊助にとってこんな便利で頼り甲斐のある友人はなかったであろう。読者の多くは武田が、幕末から明治にかけての日本の変革の立会人であったイギリス公使アーネスト・サトウの子であることをご存知と思う。

伊助の欧州滞在は自由闊達で、下宿で神経衰弱になったようなその師漱石（一高で教わった）とは大違いであった。本人の性格と会話力にもよろうが、武田の存在が大きかったであろう。伊助が英会話をどこで憶えたのかわからないが、当時はまだ大学で外人教師からも講義をきいた時代であった。そして近藤茂吉を含めて三人ともイギリス人に負けない大男であった（目方はそうでもないが）。喧嘩をすれば負けるという威圧感を感じなかったのであろう。

辻村農園で伊助の高山植物研究に協力した人に、石井勇義と大場守一がいた。石井は後に雑誌「実際園芸」の主幹を永くやり、園芸ジャーナリストの草分けである。園芸大辞典六卷（一九五六年 誠文堂新光社）の編著者であり、恵泉女子園芸短大の教授でもあった。大場は洋蘭の大場農園をおこし、後継者によって今も盛んである。

追記

伊助が亡くなったとき、私はまだ九歳だったから、伊助の友人に関する思い出は偏っていて、伊助の没後もその兄常助と交際のあった方に限られている。小島烏水、近藤茂吉、茨木猪之吉その他多数の方がおられたはずであるが、残念ながらそれらの方々との交際ぶりから伊助を彷彿させることができない。自己紹介をすると、私は伊助の兄常助の子である。東京大学の農芸化学科を出て、その助教教授やら東北大学の教授などを勤めて、定年退職して今日に到っている。叔父と違って大学で学んだことを商売にして、その一生も終りに近づいた人間である。若い頃には山登りもして、田口二郎、高木正孝、渡辺兵力の諸君のあとにくつついて歩いた。その田口さんと雑談した際に今しゃべったことを文章にしるといわれてしまった。『スウィス日記』が再刊されるたびに何度か小文を書かされたが、ここにまた駄文を弄する次第である。中里さんが取材に来られた時に、お話できればよかったのだが、ついに思いうかばず、お話ししそこなったことが多い。



木暮碑以前

小野 幸

なくなられた元会長・木暮理太郎先生の記念碑を奥秩父（先生の言われた「秩父の奥山」）につくればと思ったのは戦後間もなくであった。そこでつとめ先の同僚、石楠花山岳会の市村為孝君に相談したら「会で何とか作りましょうよ」と言ってくれた。ちなみに石楠花山岳会は昭和十七年六月に奥秩父を主として対象にする、都の交通局職員が中心となって結成されたグループで、小生が会長にと頼まれたのであった。早速、木暮先生にこのことを申しあげ、会のご指導をお願いしたのであった。その後間もなく会報にどうかと墨書で「石楠花」とタテ書とヨコ書の表紙文字を書いてくださったので、会報にヨコ書をつかせていただいている。会名も奥秩父にちなんで「石楠花」を選んだのだった。

そこで木暮未亡人にそのことを相談に武蔵野市のお宅へうかがったら、親類の者たちとも考え合ってご返事しましょう、とのこと。間もなく「一同よろこんで作っていただきたいと申しております」とのお知らせを得た。早速、日本山岳会の故・藤島敏男さんと故・松方三郎さんのそれぞれのお宅へ相談にうかがったら「よいことだから協力するよ」と言ってくださったのでホッとしたのである。

石楠花山岳会の例会に取りあげられたのは昭和二十四年九月二十日であった。「木暮先生讃碑建立の件」として決定は「奥秩父金峯山五丈石に建立すること、募金関係は今後決定すること」となった。それからの会は急にいそがしくなった。

募金は主として先生のつとめ先であった都庁関係の方々を主として廻ったり、国立公園法を勉強したり、製作者をどなたにしようかなどテンテコマイの日がつづいた。

製作者は日頃親しくしていた石井鶴三先生にお願いすることにしてはいたが、知人に話すと「先生は依頼作品が十年先までたまっているよ」だったし、墓碑銘をたのんだら三年目にやっと書いてくださった伝説も知っているのであきらめた。藤島さんに相談したら「久ちゃんはどうか」であった。上高地のウエストーン像の作者、佐藤久一朗さんである。佐藤さんは「つくらせてもらいます」と引受けてくださった。

昭和二十五年一月、石楠花の例会で実行委員選定と趣旨書内容の検討が議題となり、委員は実行委員長が小野、委員が市村、八田、一柳、松島の四名となった。ちなみにこの会の例会は総合的な性格もあり、年一回の総会（山神祭）は各地を選んで行われ、主として懇親会が主となっていた。それから、ただちに会では会費から趣意書（ガリ版ずり）と建立についてのご意見書を作り未亡人にお聞きしたりしながら先生の友人、知人と思われる方々に郵送した。会計責任者は市村君、事務取扱所も同君宅とした。碑の概要は「様式、青銅版に故先生の上半身を浮彫する」「製作者、ウエストーン像製作者、佐藤久一朗先生」「建立所、金峯山頂五丈石」「除幕式、未定」「経費金五万円」「醜金、会員並に賛同者の寄付（一口百円）」とした。

その後、東京都では「金銭物品等の寄付募集に関する条例、同施行規則」が公布されたので許可申請書を提出、募金許可書「総地募二二一号」を得た。

*

それから間もなく募金にに応じてくださる方々の送金がつづいた。ところが困ったことが生じたのである。一般の方々はこの計画に賛成です、と言ってくくださる方が大半なのに建立場所が気に入らないとの方が二人おられ、その一方は故・田部重治さん、

「金峯山の頂上にそういうものを作ることは中止して他に方法を考えるのがいいのではないのでしょうか。また、かりにそ

れを五丈石にとりつけるとしても保管をどうしますか。恐らくそれをきずつけ、いたずらする人間がありそうに考えられませんが、それをどうして管理しますか」。

そして、故・中村清太郎さんでした。

「山の天然を損傷することは大小にかかわらず極力避けなければならぬということの持論からでありまして、この場合外ならぬ木暮君のことではありますが、やはり例外には考えられないのです。五丈石のような場所は殊にそうです」。

ところが五丈石大賛成と申される方もあります。故・黒田正夫さん（元会員）です。

「何とすばらしい思い付きかと存じます。奥秩父は木暮さんの山といった思いです。あの中央線からよく見える五丈石が木暮さんの記念碑になったらどんなに喜んで下さるでせう。あのひげの中にあるような小さな眼と大きな平い鼻と口とをほころばして、にこにこ笑って下さるのが眼に浮びます、是非決行して下さい。もしこの企てにじゃじゃを入れる人があるなら、ほんとに有志だけで決行して下さい。出来るだけの御手伝をさして戴きます。上高地にウエストン坊主の碑をたてるのとは意味が違います。木暮さんに五丈石から、いつまでも日本の山を眺めさせて下さい」。

ここで石楠花の仲間からも碑の管理ということも考えるようになった。私は三峯に秩父宮様の碑が完全に保管されているので、ほとんど心配をしていなかったが、それではとなり、先生に関係のある麓の集落、栃本と金山と提案したら会の全員が「金山ですわ」とのこと。会では一年中、合宿に金山の有井宅（有井館）を使っていたからか、すばらしい金峯が仰げるからであろう。早速、それから二、三回、先代有井益次郎さんの案内で露岩のよいのをさがし、やっと有井宅裏山で、金峯の見える独立岩を見つけたのである。その位置は現在の移された場所より上手である。また、栃本は清水武甲さん他の方の希望だった。

その頃のこぼれ話も思い出す。日本山岳会越後支部の藤島玄さんからのお便りに「高頭翁寿像献金と交換にして頂きたく、二百円か三百円の程度で如何でありますか。右寿像は支部に於て約二万円の赤字で実は閉口している次第であります」。これについて会の市村君はどう処理したか忘れてしまったが、高頭さんからはわざわざご献金のあったことはよくおぼえて

いる。

*

昭和二十五年二月はじめだったか、藤島さんにすすめられて、日本山岳会の土曜会に持って行って趣意書を渡してお願いしては、と言われた。当時の日本山岳会はお茶の水にあつて「ルーム」とか「図書室」と呼んでいた。その日も十数名集まつておられ、いわゆる「神谷バー」が開かれ、マスターの故・神谷恭さんもおられた。神谷さんは「この計画に『霧の旅』も入れてくれませんか」と私に言われた。この会は人も知る山岳会で木暮先生と武田博士は深い関係があり、先生の追悼号も出されている程なのだ。早速そのことを石楠花の例会で協議して合同主催を決定した。そこで正式に霧の旅会と石楠花山岳会で協議をすることになった。五月十九日だったか、日本山岳会ルームで夜の六時半から行われ、霧の旅から神谷、野口両氏、石楠花から市村、一柳、松島、山下、小野の五名で趣意書の印刷しなおし（共同主催として）と碑の位置変更を伝えた。

新しく作られた趣意書は霧の旅と合同として副委員長に神谷恭、委員に鶴岡元之助、塚本閣治、野口末延、松本善二の各氏が加わり、「讚碑完成の暁は先生の親まれた日本山岳会に寄贈致し永久に保管保存をお願い致す予定です」を趣意書に加筆した。このことは藤島さんと松方さんには申しあげておいたことであつた。それと賛助員を定め、趣意書に列記することにし、霧の旅は日本山岳会の方々、石楠花は都庁関係者にあつた。

この賛助員は三十二名となつた。その中、都庁関係はすくなく、都山岳部の元部長石原憲治さん、先生のおられた市史編さん室の鷹見安二郎さん、安井都知事を引っぱり出すこともなからうと大木操（上高地でウェストンを写した方）、山田文雄の二副知事に了承していただき、秩父の清水武甲さんと秩父鉄道の吉田浩堂さん、それに山と溪谷社と朋文堂の社長にもお願いした。

募金は思った通り順調に進んで行つた。特に藤島さんと松方さんにはご協力を賜つた。藤島さんはわざわざ御殿場の秩父宮別邸にまで足をはこばれ、白金の朝香家にも行つていただいた。松方さんへは月一回ぐらいつつ、集金状態を報告にうか

がった。集まり具合を気にされていたからである。献金依頼は一度だけで催促はけつしてしないことだよ、と言われ、たりなければ出すからと、集金簿を見ながら二度も献金くださった。

*

いそがしく、あわただしい一年あまりがすぎて、佐藤久一朗さん製作のレリーフも出来あがった。除幕式の期日も決定したが、金峯山麓の山梨県の金山までは行かれぬ方々のために、日本山岳会図書室をお借りして、昭和二十六年四月二十八日(土)に披露会を開くことにし、関係の方々に現地の除幕式のことと共に案内状をさしあげた。この日は除幕式の一週間ほど前である。

四月二十八日のレリーフ披露には思いがけぬ方々も見えられた。なお、これは五月二日まで置かせていただいた。おいでになった主とした方々は、

木暮友枝 木暮美枝子 野田九浦 野田高梧 野田玲子(以上木暮家) 藤島敏男 松方三郎 田部重治 田辺主計 成瀬岩雄 山崎春雄 加藤泰安 佐藤久一朗 堀田弥一 吉田竹志 望月達夫 島田巽 石原巖 楨有恒 日高信六郎 福井正吉 麻生武治 谷口現吉 村井米子 高木正孝 入沢文明 佐久間宏(以上日本山岳会) 石原憲治 原全敬 鷹見安二郎 川崎房五郎 原田幹市(以上都庁) 神谷恭 野口末延(以上霧の旅会) 市村為孝 松島生寿 一柳兵象 金田喜雄 小野幸(以上石楠花山岳会) など。

それから間もなく、五月一日付で木暮未亡人から市村君あてに、

「先日は失礼いたしました。おかげ様にて木暮像立派に出来上り、一同よろこび感謝いたして居り、厚くお礼申し上げます。さて金山行の事は私事小野様にも御通知申しあげました通り乍残念不参と定めました。せめてレリーフ御運び頂きます折を御見送りいたし度、五月四日に御立ちと伺ひましたが確実の時間を御知らせ下されば幸いと存じます。新宿と存じますが幾時で御座いませうか御報らせ願上ます」。

除幕式は五月六日であったが、私は先生が明治二十九年初めてこの奥秩父に入られた時通られた十文字峠(金峯山より梓

山に降りられて、を逆に越え、それより信州峠を越して現地の金山に入ったのが四日だった。金山は梅こそ咲きはじめてが、桜も桃もつぼみは固く、標高一三〇〇のこの草原はようやく初春、落葉松の新芽もやっと二、三分、鈴蘭は見えなかった。また、この日葎崎駅經由で石楠花の市村君達がリリーフを特大のキスリングに入れて金山に着く。五日には石屋が里から登って来て夕方までかかって、やっと岩石に取り付けられた。

明日の除幕式に参加してくださる方々で有井館は超満員、宿屋を開業してはじめての泊り客(百三十名)だそうだ。当夜は「先生を偲ぶ講話会」が開かれ、日本山岳会の藤島、日高、佐藤(久)と霧の旅の松本の諸氏がありし日の先生の面影を語られた。

六日は晴天、宿より五分ほど登った現地で除幕式がひらかれた。次第は次の通りで、進行係は市村君が行なってくれた。

一、開会の言葉

(霧) 野口

二、除幕

(山) 藤島

三、経過報告

碑の出来るまで

(石) 小野

碑の将来について(霧) 神谷

四、来賓のお言葉

日本山岳会

藤島

同 甲府支部

今井

日本体育会

福井

都立九段高校山岳部

徳久

証券取引所山岳部

秋葉

増富村長

五、閉会の言葉

(石) 一柳

この日はサマータイム(夏時間制)の第一日で、晴れた空の下、金峯、瑞牆、八幡、木賊の山々はくつきりと浮んでいた。しかし、冬の面影の残雪はべつとりと山肌にまどついていた。その時私は先生が、あの明治二十九年はじめてこの金峯山頂に登られた時を追想されて記した「菌のようにやわらかいふっくりした青い岩高蘭や苔桃の中に身を埋めて、仰向けに寝転んだまま、経文を誦する人声が入るまで、長い間空を見詰めて考えに耽つていた。そして此時初めて沁々と山を味うことを体得したのであった」の文章を思い浮べるのだった。なお、式への参加の主な方々は、

藤島 今井 早川安 古沢 日高 佐藤久 福井 石川貞 徳久 九段高山岳部員 石原憲 牧野 松本善 野口 神谷
諸岡 楠山 金田 沼田 松島 中川 一柳 林 市村 原田 証券取引所山岳部 小野
などで、特に地元の方々は数多く参加して下さったのはありがたかった。

以上、木暮理太郎先生の讃碑(レリーフ)の建てられるまでの歩みを記した。当時このためにご協力くださった方々の中に多くの逝かれた方を数えねばならないのは世のさだめなのであろうか。終りに、何やかやとご協力賜りました、今は亡き日本山岳会の藤島敏男さんと松方三郎さん、そして佐藤久一朗さんに心から御礼申しあげます。

なお、この碑の除幕式が募金の趣旨書に従った日本山岳会への贈呈式の日ともなったのである。

(昭六二・六)

山本 吉之助氏（一九〇二～一九八六）

山本吉之助さんが昭和六十一年九月十三日午後八時四十五分、療養の甲斐なく死去されました。享年八十五歳でした。

御家族の方はいうまでもなく、山本さんと親しく交っておられた方々におかれましても定めしお嘆きのことと心からお悔やみを致しております。私の親父と同年のせいかな今も哀惜の情で胸一杯です。

山本さんは昭和二十三年に兵庫県山岳連盟の創立に参画し、以来副会長に就任され、昭和五十六年同顧問になられてからも色々連盟運営と後進の指導に尽された努力は、六十年近く今日の連盟発展の礎となっております。

昭和二十九年から私は連盟の役員仲間入りして以来慈父の如く指導を得ました数々は、とても表現出来ない程に多く心に描かれております。

山本さんは豪放、快活、円満な人柄で俠気にも似た人情の持主でした。山とスキーが大好きで大学もわざわざ北海道を選んでの進学でした。卒業後京都大学の大学院を経て朝鮮の京大演習林に直行し、やがて演習林長となりました。

山地経営の優れた専門家としての山本さんは、当時山地改良整備の必要性を痛感していた神戸市が昭和十二年に山本さんを招聘して山地課に奉職されましたが、翌十三年の大水害により歴大な被害を受けた背山の六甲山復旧と緑化には林学者の山本さんの努力でその全域を手掛けられ、現在にいたり緑が豊かに残っております。

エピソードを紹介しましょう。

まず第一に大のビール党を忘れる事は出来ません。山本さんの在るところにビールあり、ビールの在るところに山本さんありと言っても過言ではないくらいでした。酔う程に明朝蘭達そのもので歌は正調木曾節、北大寮歌が必ず聞かれるものと宴席の人々の楽しみの一つになっていました。

大学時代にはフルートを演奏していた由で意外な面を聞かされ、クラシックの音楽談義にも花が咲き登山中ハミングで合奏した楽しさは今も聞えてくるようです。

「笑つてきた」という言葉を御存知ですか（頂戴してくることをいう方言）。かの山本さん、中学時代のこと、たしか西堀栄三郎さんと共に或る夏の日、スイカ畑で収穫をしている農夫のそばに近づいて「ニターツ」と笑ったら、スイカを持って行けと頂戴して来たそう、それ以前に「わらう」ということを聞いた事がないので、新しい言葉が出来たと喜んだそうですが、今でも信じております。

また、先輩の武田久吉さんと木曾路の山旅で、昼食のため農家の縁側を借りて食パンを喰べていると、その家のお婆さんが「お前さん方、そんな風通しのいいものを喰べてよくお腹が持つかねー」と言われたので、山本さんすかさず「だからこうやってバターで目張

りをして喰べるんだ」と。武田さんが「ウーン、目張りか」と絶句したとのことで、なんとユニークな人柄とその一面が偲ばれたものです。

晩年は地域社会のリーダーとして活躍めざましく、地域の浄化のため暴力団の活動を平和的に封じ、その組の動きを静穏に押えた功績は神戸市民の大喝采を得たものでした。

山本さんへの思慕は尽きることなくその片鱗を御紹介しました。

合掌

略年譜

明治三十五年一月十一日 岐阜県に生れる

大正九年三月 京都府立京都第一中学校卒

大正十五年三月 北海道帝国大学農学部林学科卒

同 年四月 京都帝国大学大学院に入学

昭和四年三月 京都帝国大学大学院退学

昭和十二年四月 京都帝国大学助手並びに農学部附属朝鮮演習林林長

昭和三十二年四月 神戸市役所に奉職、山地課長、垂水区長、王子動物園長

等を歴任

昭和三十一年四月 神戸市嘱託

昭和三十七年八月 神戸高速鉄道(株) 参事

昭和四十四年七月 神戸市嘱託

昭和五十年春 勲五等双光旭日章受章

昭和五十一年七月 (株) 都市計画設計研究所顧問、監査役

(川崎泰男)

三谷孝一氏(一八九八〜一九八六)

けたたましい電話のベルで通報をうけたのは昭和六十一年十一月九日午前九時過ぎ、同じ病院にいる内田英夫氏(会員)の奥さんから三谷さんの訃報が入った。数日前から危篤状態にあつて一日でも生命の永からんことを念じていたが、遂にこの日が来てしまい、呆然として方々へ連絡をとった。日曜日で家にいたからよかった。昼過ぎ三谷邸に行き亡き先輩の霊に拝した。葬儀は翌十日敬けんなくリスチャンであつた氏の教会、日本聖公会熊本聖三一教会で行われ、多くの岳友、信徒に見守られて天国に召された。病名は心臓病であつたが、晩年は発作に悩んでいられ、眼の方も白内障が進み急に落ち込んでいられた。まだお元気な頃、自宅の屋根から落ちてその頃から身体の不調を口にされていた。山岳会の集会からいつとなく遠ざかれ、入院して永い闘病生活、かつて元気に汗を流し裸の三谷さんで通つていた氏の面影は、この数年間消え去り、元気なお声、ユーモラスな話は聞けなくなつていった。奥さんも高血圧で容態が悪く、同じ病院にあつて入院されていた。晩年の三谷さんは若い頃からの山登りのせいか肺活は旺盛、心臓発作さえなければ身体は頑強で年齢以上に若く病院でも危篤宣言があつてから生命を幾日か永らえたのは、心臓病ならぬ心臓が案外強かつたことであろうとひそかに思っている。

三谷さんは、明治三十一年七月十九日愛媛県の大洲市に生れた。

本会会員東九州支部の三谷忠一氏（昭和五十六年四月八日故人とならている）とは一卵性双生児。それでよく似ていられたこと。体格といい顔、声までそっくりである。同じ九州なので二人そろっての山行は度々あったが、どちらがどっちだかよくお似合いの二人であった。弟の孝一さんが五年程永く天寿を全うされた。教育者であり、クリスチャンであった両親の影響もあって、二人は早くから洗礼を受けられている。大正七年県立大洲中学校を卒業されると、二人の進路は異なり、兄忠一氏は別府に渡り姉を頼り、その嫁ぎ先である永見醤油店で手伝うことになったが、弟孝一氏は別府に渡り、果樹園を経営していたおぼの家で働き、一時は養子の話も出たが、志あつて間もなく上京され、どなたかお名前を遂に聞き漏らしたが、師に仕え油絵の修業をなされた。関東大震災により別府に帰られたものの、昭和七年熊本に移られるまで別府東京間を行ったり来たりの生活であった。

山への動機は定かに聞いていないが、兄忠一氏の感化もあつて大正期の頃から別府近郊の山に登り、東京にいた関係で富士登山は兄忠一氏より早かつたと聞く。当時は着物姿で富士登山をされ、後世へ語り継がれていたと聞く。熊本へ移られたのは昭和七年、義母が経営する真綿店を継ぎ、以来熊本に定住し骨を埋められた。

三谷さんの本格的登山活動は、昭和八年創立の熊本アルコウ会への入会から始まった（昭和十七年入会、会員番号四六八番）。四十歳歳の時である。手始めは入会直後に開催された健康保険登山指導者養成講習会（県主催）に参加、五家荘でキャンプをはっている。また熊本アルコウ会に入会して若いエネルギーが旺盛だったのか、

当会が昭和十六年から企画していた熊本近郊の山金峰山の百回登山に挑戦し、一日五回登る日もあつて、昭和十七年の終りには二百回を完登するという記録を樹立している。

戦後になって、一時中断していた登山活動は各地で復興し、三谷さんも昭和二十一年一月、熊本アルコウ会の幹事に抜きされ、この頃から例会の活動にも磨きがかかってきていた。また、昭和二十二年六月には戦後初の県山岳連盟が結成され、熊本アルコウ会から委員に選出されている。私が氏を知ったのもこの頃で、山岳連盟の会合でしばしば会っていた。もう一つ三谷さんの活躍がある。戦後熊本でも急速に発展した岩登りが、当時練習していた人達を集め、昭和二十三年七月熊本RCCが結成されたが、三谷さんは当初から入会し、このとき五十歳という年齢で若い者に負けず岩場に向つていられた。昭和二十六年六月には当会所属で県山岳連盟副委員長に就任されている。以来当岳連副会長を辞められるまで県山岳界に貢献された功績は大きい。母体の熊本アルコウ会での活躍は依然と続き、昭和二十七年七月には当会二十周年記念事業として北アルプス槍穂縦走でリーダー役をかい、会の進展に尽くし、会員の信頼を集めた。

三谷さんの登山活動は止まることを知らず、今度日本山岳会への入会となる。昭和二十八年九月の入会である（会員番号四〇九二番、このとき五十五歳）。恐らく兄忠一氏と同様、紹介者は立山で知りあつた沼倉寛二郎氏と、熊本出身の古原和美氏である。兄忠一氏より六年も早く入会しているところをみても、氏の山に対する情熱がいかに先進的であつたかと伺える。山への情熱の一つに団体登

山があげられる。日本山岳会に入られて各地の国体に参加、役員団コースを歩かれている。各地の会員と会われて交際が広がり、そのお返しに昭和三十五年の熊本国体では役員団コースの総責任者として各地の会員を迎えられている。国体登山の一つにこんな話を聞いたことがあった。昭和二十九年北海道に行かれた帰り、かねて乗物に弱い氏は船酔いをされた。嘔吐の際大事な入歯を海中に落とされ、困られた逸話がある。せっかちで人の良い一面があった。

日本山岳会では昭和三十二年熊本支部の結成にあたり、三谷さんはただならぬ尽力と助言をなされ、初代支部長北田正三氏が不慮の死により旅立たれた後、直ちに支部の運営を支えて、第二代支部長として昭和五十三年まで二十年間、私どもの面倒を見てくださった。

三谷さんは山のほかにも趣味が広く、前にもふれたが絵画の方は大した堂に入ったもので、山に登られると必ずスケッチをとられていた。家に帰って必ずその日登った山のスケッチを老母に見てもらうことを欠かさなかった。随分たくさんスケッチを秘蔵されていたが、今はどうなっているか、晩年になってかなり散逸している話も聞いていた。私は三谷さんの家が私の勤務先に近かったので、昼休みによく出かけては山の話の聞いたり、スケッチを見せてもらった。ユーラスな口調で話される三谷さんの話に尽きぬ想い出が残っている。

また、晩年の三谷さんには二つの趣味が生れた。一つは海外旅行であり、一つはスケートであった。海外旅行は奥さんと同伴で、若い頃から信仰の道に入っていた氏は、殊の外ギデオンの教会の聖

書無料販売運動に熱心で、アメリカ、ガラスの集会に出席したほか、アメリカ各地を回り、他年ヨーロッパ、豪州、ソ連にも足を運ばれている。あの頃は本当におそろいでお元気であった。スケートはかなり熱中されて上達し、リンクの中でぐるぐる回る芸ができた。子供のように喜んで話しかけられ、純朴な一面もあった。

山を通し、人生を通し、人の前では控え目で、決して自ら進んで説を通すことはなく、ひたすら相手の意見に従順であった三谷さんは、遂に八十八歳の生涯を閉じた。三谷さんほどはばかることなく好きなことができ、誰からも親しまれた人は少ないと思う。それは自然に接し美しい心と、信仰心の支えがあつてこそ、神から愛せられ、人からも愛せられた人と思う。「心の清い人たちは幸いである。彼らは神を見るであろう」。昇天した三谷さんの霊に聖書の一句を呈し、今度は天の一角から私どもを見つめていてくれることだろう。

略年譜

- 明治三十一年七月十九日 愛媛県大洲市に生れる
- 大正七年 県立大洲中学校卒業
- 昭和七年 熊本市に移住
- 昭和十七年 熊本アルコウ会入会
- 昭和二十三年七月 熊本RCC入会
- 昭和二十八年九月 日本山岳会入会(会員番号四〇九二番)
- 昭和三十年 全日本山岳連盟評議員就任
- 昭和三十三年七月 日本山岳会熊本支部結成
- 昭和三十三年九月 日本山岳会熊本支部長就任(昭和五十三年六月まで)
- 昭和四十四年 熊本県山岳連盟副会長就任

昭和六十一年十一月九日、心不全により熊本厚生病院で死亡（八十八歳）

（西沢健一）

村井米子氏（一九〇一～一九八六）

村井先生が逝かれた。誰に看とられることなく、誰の手もわずらわせずに、静かに逝ってしまわれた。あまりにもあっけない別れである。

大正六年の富士登山以来、戦前戦後を通じて山を愛し、歩き続け、終始自然保護を訴えられた。敬愛する数少ない先輩のおひとりである。

村井先生との山行は、先生が還暦を過ぎられた昭和三十九年から四十年頃がいちばん多く、三十九年二月の日光光徳スキー合宿、五月の八甲田山、四十年四月の笹ヶ峰などが思い出深い。

光徳は、学習院の小屋をお借りして当時の婦人部がスキー合宿をおこなったもの。三日間雪が降り続いたが、小屋の中はおでんと甘酒の大鍋が煮えたぎり、夜はヒマラヤの夢が果てしなく続くといった楽しい合宿であった。先生は例の還暦の、ドンブリ（胸いっぱいポケット）に「JAC」と編み込んだ赤いセーターを着ていらっしやった。スキー練習中は一本杖を披露して下さったが、当時はフランス式ローテーション全盛の時代とあって、皆あんまり熱心に修得しなかったと思う。

先生は大柄でいらっしやった分健啖家で、いつも「先生、おかわりは？」と伺うと、「ええ？ ええ」とちゅうちよされる。三回おすすめすると「じゃあ、」と食器を出されるので、村井先生には、三回おすすめするのが私たちの習慣である。甘酒と、ストープの炎と、女どもの熱気で、目もとを桜色に染めて南アルプスや案内人の話をして下さった先生をなつかしく思い出す。

光徳の帰途ちよとしたハブニングがあった。先生の名誉のために、公開してよいかどうか迷うのだが。それは、立ち寄った湯元スキー場で、気のすすまなかった先生を、「先生、大丈夫ですよ、行きましょう！」と、無理やりTバーリフトにお乗せしたのである。先生は忽ちくちやりと落ちて、次のTバーにぶつからないよう這ってしまわれた。私たちはまっさおになったのである。

八甲田は先生のお顔で菅林署の小屋をお借りして、快適な春スキー行であった。櫛ヶ岳の樹林帯を、ストックを一本に揃えて、斜滑降、ボーゲンでゆったりと下っていらっしやった先生。尻皮とペレ一帽が妙にびったりと調和していた。八甲田山の登りで薄紅色の花の群落に出合い、「これがかたくりよ」と教えていただいた。以後、かたくりの花を見るとスキーをかついだ村井先生の姿が思い浮かぶ。

翌年四月の笹ヶ峰は十数名がテントを持つてのスキー行で、先生も参加された。入山中ずつと吹雪と濃いガスの日ばかりで、第一日目にリングワンディングをやってしまった、どこともわからぬ山の斜面でビバークとなった。先生は雪崩の心配をされ、いろいろアドバイスをいただいた。翌日頂上をあきらめて下山、快適なテント場を

見つけたが、その時の皆のくたびれた顔の写真の中に、先生もヤツケにすっぽり包まれた色メガネ姿（サングラスといった感じでなくやっぱり色メガネといいたい）で写っていらっしやる。先生のスキーはヒッコリーの長い重たいものだったし、六十歳半ばを過ぎられて随分辛い状態だったと思うが、私たちと全く同じに行動された。

婦人懇談会の前身である婦人部は、当時女性会員が少なくルームの出入りが恐ろしいという、今では考えられないような状況を改善するために、村井先生はじめ諸先輩の提案で出来たものときいている。たしかにお茶の水の旧岸体育館の隅にあった山小屋風のルームには、山岳会の錚々たるメンバーが居並び、パイプの煙ももう、といった印象で、下っぱの私たちはそっとのぞいたり立ち聴きするといった感じであった。村井先生といえどもその中では遠慮がおありだったと思う。今では若い女性も何のためらいもなくルームを利用し、参加し、場合によっては圧力団体にもなり得るかもしれない。これも村井先生方のおかげだと思う。

先生はブナや屋久杉の保護、富士山や上高地に計画されたケーブル架設の反対など、終始自然保護を訴えられ、国内はもちろん、インド、ネパール、ヨーロッパまでも行動された。国立公園協会、民俗学の分野にも貢献が大きい。また女子のヒマラヤ登山に際しては文部省、外務省などの関係官庁にリーダーを引き廻して下さって協力を要請された。

明治の女性の気丈さ、高い誇りを持っていらっしやった反面、常に後進を前に押し出して下さった優しさが忘れられない。私たち

は、失礼な申しようながら、村井先生はいつも私たちの仲間です。下さって、変らずお元気でいて下さると錯覚していたのではないだろうか。もともと山へごいっしょして、良き時代の山登りのこと、大切なことどもを伺っておけばよかったと悔まれる。折々にお便りを差し上げると、必ず山旅の途中からとか、山や山の人の人たちの様子をご返事に書いて下さった。今もお電話すると、あのゆつたりしたお声で電話に出て下さるように思えてならない。

山と自然をいづくしみ、それを守るために常に行動される。その気迫を持ち続けることが、残された私たちに出来るかどうか。ご意志を継ぐ難しさを感じるばかりである。

略年譜

明治三十四年十一月二十三日

小説『食道楽』の著者村井弦斎の長女として神奈川県大磯に生れる。母多嘉子も料理研究家。

『お辨当料理』の著書がある。幼少から毎日富士山

を見て暮した。

大正六年八月 はじめて富士山に登る

大正八年八月 女人禁制の立山雄山に弟、友人、書生、女中らと登る

大正九年夏 両親、妹弟、従兄らとはじめて神河内に入り、小梨平で登山生活を楽しむ

大正十年冬 赤倉ではじめてスキーをはく

大正十二年八月 穂高・槍ヶ岳縦走、下山中槍沢の雪渓でスリップし、案内内野常次郎にとめてもらう。

昭和六年四月 前穂高・奥穂高縦走、下山時スキーを使う

昭和六年八月 前穂高・奥穂高縦走

昭和十年夏 冷沢より鹿島槍ヶ岳に登る

昭和二十六年 日本自然保護協会の発起人となりその後評議員、理事を歴

任、他に文部省登山研修所運営委員、国立公園協会評議員
等を引受け、自然保護・女性登山のレベラアップに力を注
ぐ

昭和五十九年十二月 日本山岳会名誉会員

昭和六十年 長年の念願だった父上の著書『食道楽』を梓書房より再版

昭和六十一年十二月十九日歿

(山口節子)

中屋健 式氏(一九一〇～一九八七)

私は中屋さんとは出身学校(私立成蹊学園)が同じで、彼が高等科に入学した年にちょうど私が尋常科(今日の中学)に進学して、一緒に旅行部に入ったという仲であって、齢は数年の先輩であるが、学園生活では私の方が先輩筋ということになり、旅行部での付き合いはむしろ対等に近かった。父上が海運関係の仕事をしておられたので、少年時代には横浜、北海道、東京と学校を移っておられるが、スキーは小樽中学在学中に習得していて、かなり自信をもっていった。二人が旧制の成蹊高校旅行部に入った年(昭和二年)の十二月に、旅行部は山形県五色温泉でスキー合宿をやった。それに二人は初参加した。私も小学生からスキーをはじめ、五色は私のホーム・グラウンドであった。スキー場と呼ばれるところが、五色、赤倉、

関、沼尻ぐらいしかないころの話である。十二月には雪不足の年が度々ある吾妻山系の東面であったが、その年も雪がなく、宗川旅館前の斜面には大根の葉がちらほら見える状態であった。合宿がはじまって三、四日たってもスキー不能がつづき、参加者は三十日に遂に帰京してしまつた。私とナカヤの二人だけが翌日の降雪を信じて踏み止まった。ところが予想が見事に適中して翌朝は吹雪であつた。彼は、ラクビー部にも入つたのか、縞のユニフォーム姿というかわつた姿で滑りだした。私たちは正月の五日ごろまで、二人だけの合宿をつづけ、猛練習をやつた。といってもその頃のスキーは直滑降と斜滑降及び転倒の三種類の組合せのようなもので、より長く一滑りができる奴が上手と認められる時代である。小樽中学仕込みのナカヤはときどき山廻りオープン・クリスチャニアらしきものをやり、私はたまたま地形の良いところに出会うとシユテム・ボーゲンもどきで回れて、その都度「やった!」と絶叫する、といったスキー練習であつた。一日の大半は一滑り三〇～四〇mを稼ぐために登つているという状況であつて、たしかに猛練習である。スキー練習をやればやるほど自から「スキー登行」が上手かつ強くなる頃であつた。

中屋さんは、大学へ入学の年に山岳会に入会した(昭和五年、二四七番)のでかなり古い会員である。私たちは中屋会員の名を使つて虎ノ門のルームに行き、本を読ましてもらつた。とくに、私が高等科に進学した年に谷川岳東面山麓に虹芝寮という山小舎ができたが、その準備期間はスイス山岳会誌などでヨーロッパ・アルプスの山小舎のことなどを知るのに何回かルームを利用してもらつ

た。彼は大学在学中に父君のすすめて北米旅行をやっているが、そのときにマウント・レーニアに独りで登ってきたらしく、帰国後我我後輩はしばしばレーニア物語りに悩まされた。卒業後松本重治さんの紹介であったと思うが、松方三郎さんのおられた同盟通信社（現共同通信社）に入社して、外地駐在記者として活躍していたから、山岳会にはちよつと疎遠であつたらしい。戦後昭和二十五年（二十七年）間もなく松方さんや藤島さんたちが会の復興に努力されていた頃に監事を担当していた。また、昭和四十年代（昭和四十～四十九年）には評議員、理事（常任）、副会長を務め、エベレスト遠征の計画、推進、後始末や、上高地山荘（現「山研」）の再建などに貢献された。また、神田錦町向井ビルにあつたルーム（昭和四十二～四十八年）が御茶の水のさくらビルに移転するという大仕事にも今西会長を助けて尽力された。その功で昭和五十八年に本会名誉会員に推薦された。

年次晩餐会で名誉会員としての挨拶のとき、「私はたいした山登りをやっていないが、清水トンネルを歩いてくぐり抜けたことがあります。とちよつと誇らし気に語られた。この山行はたしか昭和四年の夏に、故成瀬岩雄、故高木正孝会員と共に、赤谷川の支流の金山沢を溯行して仙ノ倉に登り、仙ノ倉谷を下つて土樽に出て、土樽から土合までを清水トンネル経由で、という山旅のことである。仙ノ倉を南から北への谷通しのコースもはじめてと思うが、トンネルくぐりは正に空前絶後の稀有なことで、よく通過を許可してくれたものである。中屋さんの強引な交渉が実つたのかも知れない。そのころの土合には大きな飯場があつた。そこに「カフェ

ー黒猫」があつた。この一行がカフェーに立寄つたかどうかはさだかでないが、「黒猫」の話はあとあとでも語りつがれた。

東大の助教時代（昭和二十八年）に赤倉を拠点とした中屋スキー学校という催しをはじめた。私はお呼びがなかつたので噂でしか承知していないが、友人・知人の子弟を預り合宿してスキー教育をしていたらしい。元々交際が広い方で、スキー学校の生徒たちには有名文化人の子弟が多かつたということである。昭和五十三年には盛大な二十五周年記念を祝つたという話である。ナカヤのスキー術は先刻承知している私である。彼が人にスキーを教えることは到底無理であると了解していたが、スキー学校の開設当初の事情を知っている人の話によると、やはり教え方は極めて不親切であつたそうである。「こうやりや・曲るんだ！」的な教え方をしていたにちがいないのである。しかし、彼は故成瀬岩雄氏の山登りの考え方に私淑していたので、中屋学校の生活は質実剛健の精神を土台にしたある意味では厳しい躰の場であつたと想像できる。生来、罵声と手が早い癖があつたが、筋の通らないこと、いい加減なことが大嫌いであつた。

中屋さんの本業は西洋史とくにアメリカカ史（政治・社会・文化）であつて、日本におけるアメリカカ史の第一人者である。『一六三〇年にマサチューセツツの荒野に移住したピューリタンが、上陸後六年にしてハーバード大学を設立したことはアメリカ人の学問に対する情熱の証明である』という言葉を僕は中屋君の口からしばしば聞いた（『野上素一稿、知識・本年六月号、三二三頁』）。どうやら在学中の北米旅行で得たこの事実認識が彼の勉強の契機であつたらしく

い。大学では史学の今井登志喜先生と法学部の高木八尺先生の指導を受けていた。在学中（大学院を含む）にはアメリカの勉強をしていたが、卒業後はジャーナリストを選び、多面的な海外生活を経験した。その間ラテン・アメリカの文化関係の調査を一年近くにわたって行っている。終戦後、同盟通信社が解散して、今日の共同通信社に代った。松方さんのすすめてただちに入社したが、なにか考えるところがあつたらしく、二年後にジャーナリストから研究者に転向した。昭和二十六年には東大講師の職をえ、ついで助教、教授を経て、昭和四十六年に停年退官、名誉教授に推挙された。ジャーナリスト上りの毛色のかわつた大学の先生であつたので、アメリカ史のプロであつたが到底象牙の塔の中におさまる器ではなかつた。戦後は社会的に各分野に「口と手」をだしてきた。アメリカ学会副会長、ラテン・アメリカ協合理事、日本ペン・クラブ理事、副会長、母校成蹊学園の中学・高校の校長といった実に多彩な分野で活躍してきた彼の足跡がそれを物語っている。

今日の日本はたいへんな状況下におかれている。昔流のいい方をすれば、正に困難に立ち向つているといってよい。これを持ち越えて進むために一番必要なことは、日本人が世界の異文化を正しく理解し、その上で我々の考え、主張を堂々と述べていくことである。アメリカの社会、政治、文化について学問的な造詣の深い中屋さんを失つたことは大きな社会的損失であると考えざるをえない。母校成蹊学園を辞したところから腎臓を患い、八年近く透析生活をつづけてこられた。しかし透析を受けながらも、雑誌『知識』の編集長を引き受けたり、京都外国語大学で教鞭をとつてこられた。ます

ます国際化していく日本山岳会の活動にとつても中屋さんのような国際人の知恵は貴重である。早いご逝去を心から惜しまれてならない。ご冥福を祈る。

略年譜

明治四十三年二月九日 門司市に生れる

昭和二年 成蹊高等学校文科入学。旅行部入部

昭和五年 東京帝国大学文学部西洋史学科入学。日本山岳会に入会（二二

四七）

昭和八年 東京帝国大学大学院入学、スキー山岳部入部

昭和十一年 同盟通信社へ入社

昭和二十年 共同通信社に入社

昭和二十二年 依願退社

昭和二十三～二十五年 戸板女子短大勤務

昭和二十五～二十九年 日本山岳会監事

昭和二十六年 東京大学講師

昭和二十七年 東京大学助教

昭和二十八年 中屋スキー学校開校

昭和三十四年 東京大学教授

昭和四一～四十七年 日本山岳会評議員

昭和四十六年 東京大学退官、東大名誉教授

昭和四十五～四十七年 日本山岳会理事

昭和四十八～四十九年 日本山岳会副会長

昭和四十七年 成蹊大学教授

昭和五十年 成蹊学園中学・高等学校々々長

昭和五十三年 中屋スキー学校二五周年

昭和五十四年 成蹊学園退職

昭和五十五年 京都外国語大学教授
昭和六十二年 京都外国語大学退職
昭和六十二年三月二十八日 逝去、享年七十六歳

(渡辺兵力)

辻 莊 一 氏 (一八九五～一九八七)

辻莊一先生と私

昭和二年、私は、立教大学へ入学し山岳部に入った。予科の頃、辻先生は心理の講義をして居られたが、選択科目であったため、大卒での先生の授業は受けなかった。暫くして一年先輩の逸見が、山岳部部长であった辻先生の御宅へ連れて行ってくれた。このようにして、辻先生との交りをはじめってから六十年間つづいた。晩年の先生は、大変元気だったので、四月二十二日の朝、訃報に接した時は驚いた。

先生と一番密接な関係が出来たのは、昭和六年秋頃から、先生の御宅ではじまったパウル・パウアーのイン・カンフ・ウン・デン・ヒマラヤ (Paul Bauer: Im Kampf um den Himalaja) の訳読会で、それにつづいてのヒマラヤ遠征計画であった。そしてその後、ナンダ・コートの登頂(昭和十一年)が終つての数年間であつた。

その後も、必要に応じては、先生の御宅を訪問したり、立教大学山友会(OBの会)や、日本山岳会の会合等で、折にふれ会談する機会があつたが、淡々としたおつき合ひであつた。ただ一度、先生と山行を共にしたのは、昭和六年五月大倉沢の一晚のキャンプ生活だけで、印象に残る程のものはない。

先生は、大正二年、神戸一中の頃、前穂高岳に登られた。その夜、上河内の清水屋で、ウエストン夫妻と同宿された(会報三七号に掲載されている)。その後、七高山岳部を作られたり、大正十二年、立教大学山岳部(当時旅行部)創立と同時に部長になられた。

先生の山登りについては、詳しくは知らないが、山岳部部长であつた頃は、東京に近い山野を歩かれたようだ。我々のように、困難な山へは体力的にも、また時間的にも参加するのを諦めて居られたようだった。その頃、立教大学山岳部では積雪期のパリエーション・ルートを盛んに開拓していたが、結局、先生の部長時代に一度も遭難事故を起していない。自ら参加しなくても、先生は、我々の行動を充分に理解して、頭の中では共に行動しているような気分で見られたのではなからうか。それを反映して、部報の追想号から九号まで小論文の形で執筆され、当時の他校の学生にも大変受けたようであつた。

察するに、その根底にあるものは、若くして穂高に登つたり、ウエストン氏に会つた誇りが、環境の変化と共に、困難な登山が出来なくなつても、精神は、より高く、より困難な登山を描いて居られたのであろう。パウル・パウアーのイン・カンフ・ウン・デン・ヒマラヤを読んだ躍動を伝えようと、我々のために、自分の勉強の時

間をさいて、長期間の訳誼会を開いて下さった。

つづいて、ヒマラヤ登山の計画からナンダ・コートの登頂まで、つねに、我々の中心をなしておられた。毎日新聞社や外務省等の折衝や募金、ヒマラヤン・クラブやアルモラの Deputy ティ・コンミッションナー (Deputy Commissioner) 等の現地への照会を自ら行われた。体力と環境がゆるせば、自ら隊長としての役割を果したいと思つて居られたに違いない。その故に、成功した時の喜びは大変なもので、恐らく生涯の感激の一つであつたと思う。

立教大学では、支那事変から大東亜戦争にかけて、幾人ものアメリカ人教師が入り替り、立ち替り、日本を去つて行つた。日米の激しい対立の中で、配属将校の態度が、先生方の心を傷つけながら溝をつくつていった。終戦後間もなく、横須賀に上陸したGHQのダイク教育局長の随行将校ポール・ラッシュ (元立教大学アメリカ人教師) は、迎えに行った三人のアメリカ・ミッション関係の先生達の案内でその日のうちに立教大学を視察し、即座に、三辺総長以下十一人の教授を公職追放した。その中に、予科長だった辻先生も含まれていた。このようにして辻先生の立教大学山岳部長時代は終つた。追放時代は、先生が研究して居られた西洋音楽の中から、わずかに許された講演によって生活の援けとして居られたようだ。その後、二、三年して追放解除となり大学に戻られた。

昭和三十年五月から、三十二年三月まで二年足らずの間、私は、会社の勤務で札幌に住んで居た。確か、三十一年の夏だつたと思うが、先生は、グリーククラブの学生をひきいて札幌に來られ、拙宅に一晚泊られた。庭前の、ささやかなバラを喜ばれ、石狩川の河口へ

行つて見たいということであつた。翌朝、私は、覚えて間もない運転で、幌付のシトロエンをかって、人も車にも合わない石狩川ぞいの道の風景を楽しみながら、砂丘のある海岸に着いた。暗い海と、はまなすの咲いている砂丘が対照的で、印象深かつた。特に、先生は、はまなすと沿道のポプラ並木に心引かれ、さまざまの思いに耽つて居られたようであつた。

私は、先生のように、キリスト教の信者ではないし、先生の得意とするパツハの研究に対しても、グリーククラブの活動についても全く無知である。先生は、私と話す時は山登りと、それにかかわる自然と人が中心であつた。従つて、先生の豊富な知識や経験の一面にふれたのみだったが、我々の山登りには、惜しみなく協調された。私が、自分のことを立教大学山岳部卒業だといつても、許容されて居た頃を思い出す。

神により創造された自然と宗教、音楽と芸術、それ等の関連の中の山登りが、広い知識と愛情により一体となつて、九十一歳をこえるまで、健康で豊かな人生を支えて來られたのではなからうかと思われる。

(堀田弥一)

*

音楽と山と薔薇と

— 辻莊一さんを偲ぶ —

さる四月二十一日午後十時、辻莊一さんは入院先の聖路加国際病院で骨髄異形成症候群のため昇天された。享年九十一歳であつた。

昨年十月、立教大学山岳部のナンダ・コート登頂五十年を記念した日比谷・松本樓の会にはお変りない様子で出席された。また、クリスマスには新設されたサントリー・ホールで立教大学の降誕節では恒例となっている、ヘンデルのメサイアの演奏が終り、お開きの前に、聖歌第十八番「神にはさかえ、地にはおだやか、ひとにはめぐみあれ」のタクトをとられ、演奏者、聴衆ともども歌っておられた。いつものとおりのお元気であったのでいくらご高齢だとはいえ、先生(私にとって、辻さんでは収まりが悪いので、先生でゆく)のご逝去は、私にとって心の準備もない突然の悲しみであった。

私は立大山岳部OBで組織する山友会副会長の片桐理一郎さんから、先生の訃報を受け信じ難い気持ちのまま先生のお宅にいそいで伺った。一枝のバラを先生の柩の中へ入れていただこうと思つてである。このバラはライフスナイダー・ホール(立大総長公邸、現在はゲスト・ハウス)のフェンスに見事に咲く木香薷。安政六年(一八五九)中国から輸入されたバラで、春、葉が出て間もなく花卉がのび、香気の高い黄色の小さい花を群がって咲かせる。原種のバラで、今ではほとんど姿を消してしまつてみあたらないが、立教には築地から池袋に移転した一九一八年(大正七)に植えられ、今でも毎年盛んに花を咲かせている。先生は、このオールドローズが大好きであった。先生は庭にたくさんバラを作られ、バラの大家であつた。

立教大学から歩いて十分ほどの目白の閑静なところに先生のお住いがあつて、同じ大学に務めている私は、電話で「先生……:」という「うん」といわれ、いつでもお目にかかることができた。まこ

とに気さくにであつた。目白の聖公会でのお別れも、立教のチャペルにおける大学葬でのお見送りをしても、もう電話口には先生がお出にならないという実感が無い。

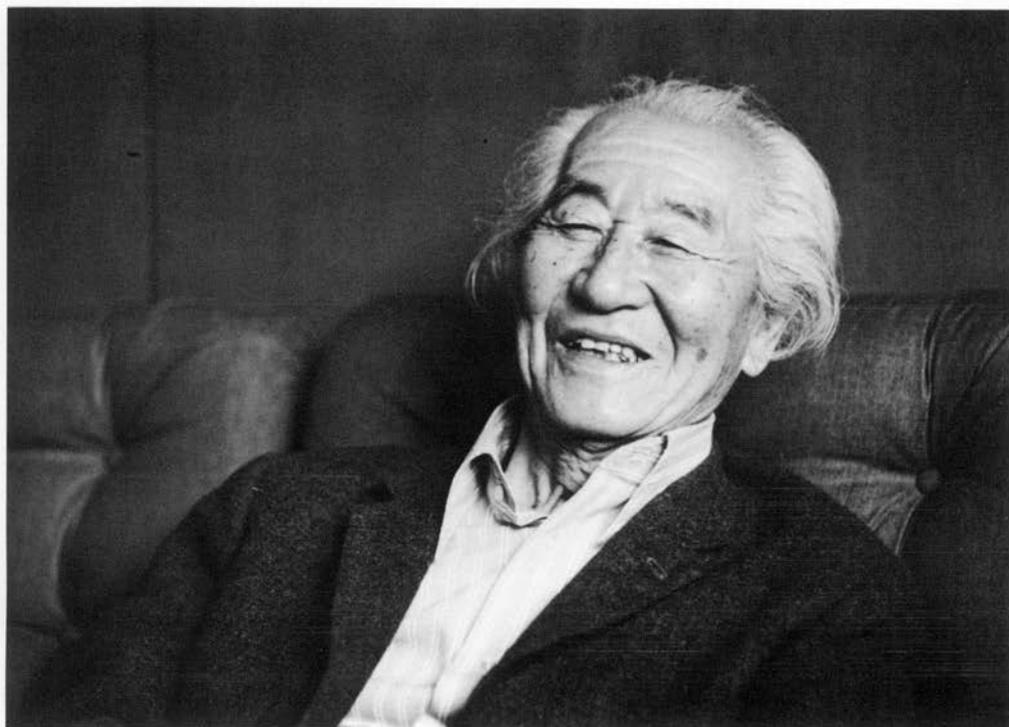
私は、過日先生のお宅に、先生にとつては最後になつたメサイア演奏会の写真とカセットテープをお届けに上つた。立教の「メサイア」生誕二五年、先生が生みの親である。先生が「すくなくとも日本では一大学がこの曲全曲を演奏しているのはわれわれ立教だけであり、これこそ大いにいばつて良いことである」。『メサイア』の全曲がある壮大なアーメンで終つたのち、聴衆が聖歌十八番を歌う。…あの聖歌を歌っている大勢の人たちの顔を見ると、それこそ靈にみたされた顔であることに気がつく、といわれているコンサートの写真、録音・録画したテープをである。

庭のバラは満開であつた。先生はバラを京成バラ園のカタログで注文され楽しんでおられた。昨秋、求められて仲間入りしたバラもご長男の奥様の指差されるところで咲いていた。先生のことだからバラの好みもうるさいのかと思つてご長男の奥様におたずねしたところ、無造作に選んでいらしたとのことで、ちよつとあてがはずれた気がしたものである。

先生は、県立神戸第二中学校、鹿児島第七高等学校を経て、東京帝国大学文学部心理学科に進まれる。本郷西片町にある同志会の寮に入寮。同志会は、一八九二年(明治二十五)立教学校を卒業し三井合名理事となつた阪井徳太郎氏によって、東京帝大の学生に寮生活によってキリスト教的人格の育成を目的として創られ、先生の頃は小林彦五郎、元田作之進、木村重治等、立教と深いかかわりの

追 悼

OBITUARY



名誉会員

辻 莊 一 氏 (Hon. Mem.)

TSUJI Shoichi

(1895~1987)

名誉会員

中屋健弑氏(Hon. Mem.)

NAKAYA Kenichi

(1910~1987)



三谷孝一氏

MITANI Koichi

(1898~1986)



名誉会員

村井米子氏(Hon. Mem.)

MURAI Yoneko

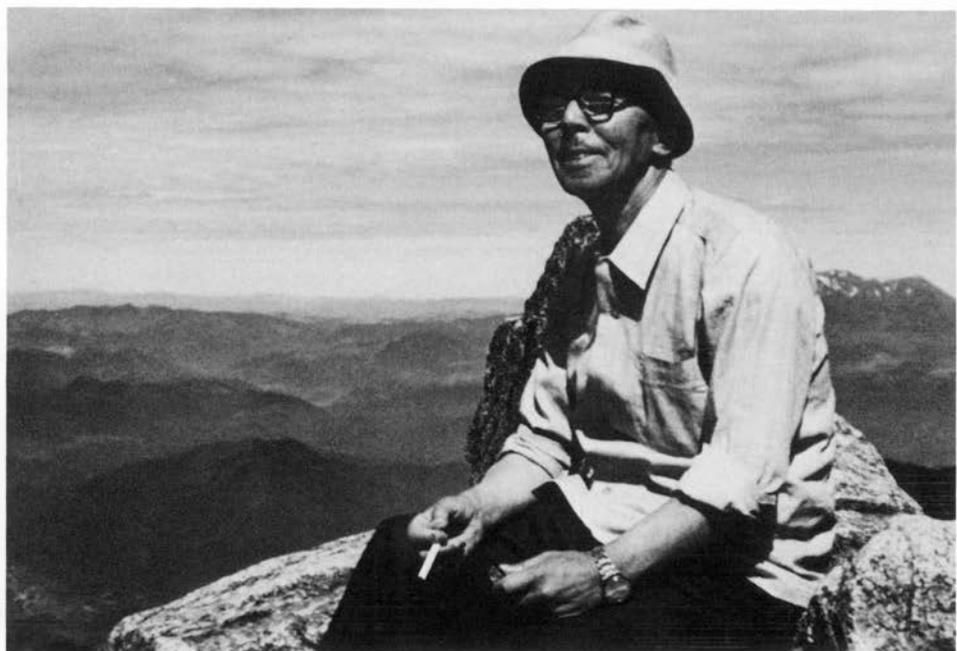
(1901~1986)



山本吉之助氏

YAMAMOTO Kichinosuke

(1902~1986)



早川義郎氏

HAYAKAWA Yoshiro

(1896~1986)

昭和47年木曾駒にて

ある方々に指導されていた。先生は同志会で強い影響を受けられたものと思われる。また、積極的に滝乃川学園で精神薄弱者のための奉仕活動をされる。東大の赤門のところから市内電車に乗って北豊島郡滝野川村までかよわれたのであろうか。滝乃川学園は私立としては日本で最古、最大の精神薄弱者の收容教育施設で現在でもある。先生は晩年この理事長となる。

先生は、一九一八年、滝野川聖三一教会で小林彦五郎司祭より受洗。一九三一年本郷テモテ教会でジョン・マキム主教から堅信受領。

一九二〇年東京帝国大学卒業、一九二二年まで同大学院在籍。一九二二年四月立教大学講師に就任。

先生は、立教のチャペル・ニュース、第三五四号、一九八六年、『メサイア』二十五号」の中に、「おわりに是非書き記しておかねばならぬことがある。今から大体六十年前私が立教の先生になったときの総長は元田作之進先生で日本聖公会の最初の主教になった人物である。この総長から私は特命をうけた。君は音楽と登山が好きであると聞いているが、この両方とも青年教育上非常に有意義なものであるから、学業のかたわらこの趣味を学生のあいだにひろめるよう骨折ってもらいたいというのがその特命である。幸いにして歴代の総長や幹部が人格形成に関してスポーツや文化活動の重要であることをいろいろの面で顕現されたので、おのずからの初代総長の方針が事実となつてあらわれた。私としては音楽部長『はじめはオーケストラもグリー・クラブもいっしょであった』、山岳部長を兼ね、音楽部長としては『メサイア』、山岳部長としては『スポーツ登

山としてのヒマラヤ登頂に関与することができたのを心からよんでいる」。先生の絶筆である。しかし、私は元田先生が「辻君立教に来たまえ。勉強は教えなくてもよいかから学生の遊び相手になつてくれ」。この話を先生から直接伺っている。脱線して、もう一つ。「立教のお蔭で、パツハの研究もできたし、山岳部やグリー・クラブのめんどうもみることができた。立教の学生はのんびりしていて結構だ」。先生、まことにとおらかであった。

先生の本職は心理学、パツハは副業だし山やグリー・クラブはていよくいって正課外教育である。ところが、立教が新制大学となり大学院に組織神学専攻博士課程を設置をするとき、先生は急に心理学からキリスト教学科に移籍された。文部省への申請は、キリスト教芸術(教会音楽)である。いい過ぎであるが、先生の副業の甲斐あつてのドクターコース誕生であつた。

先生を「日本におけるパツハ学の家元」、その著書「J・S・パツハ」を奥義の書と規定したのは先生の愛弟子立大教授皆川達夫氏。ま、それはそれとして先生と音楽となると堅苦しかった。特に教会音楽となると「音楽は信仰に隷属するものである」と、はつきり伺つたわけではないが、当然にそうお考えになつていたと思う。先生は、お亡くなりになるまで目白聖公会のクワイヤーマスターをされており「普段の安息日の礼拝はよそゆきであつてはならない」とされて、歌^歌弥^み撒^さを作詞作曲される。その上、「口語体では高音が歌えない」といわれて、断固文語体を使われた。ハイチャーチのしきたりを墨守されて、面目躍如である。

同志会同期生守屋主一郎氏の想い出の記に、「辻荘の音楽の自慢

をやっつけては辻荘をこまらせた」「辻荘は根っからの形式主義者で、偉そうにしているが、誠に性善良で、世話好き、ヴントの心理学の原書の厚い本をひねくり廻して、貧乏ゆすりをしていた」。守屋氏一九八三年帰天。先生、親友を失う。

先生は、ウェストン祭の歌を編曲されたり、作詞されたりしたほか、日本山岳会の創立八十年に当っては、会報、「山」に「日本山岳会の歌を」、歌うべし、歌うべしと書いておられる。が、残念ながらおせのようには運んでいないようである。

先生の登山歴は古い。一九〇八年、明治四十一年頃、神戸二中の時、徳本峠を越えて上高地から前穂高に登っておられて、その時のことを一九三四年に日本山岳会の会報に「ウェストン氏と嘉門治老との思い出」と題して書いておられる。親爺をだまして鳥水の「日本アルプス」を買い仲間と二人料合して神河内へ向った。松本から円太郎馬車で鳥々に、そこで人夫をやとって鳥々谷に分け入り、大きな桂の木の下にせぐくまる鮎留の無人小屋に辿りついた。そこに笑顔の老翁がいて、「それではあなたが嘉門治さんですか」という具合になった。

翌朝五時神河内温泉の前で勢揃いした。一行は一高の学生の他、何人かいてガイドを連れて行く。一行の中にやせぎすの、その頃としては珍しく鉞靴をはき、太短いストックをつき、リュックをしょった、麻製の服を着た仁がいて、頂上に着くと奇妙な声をあげて怒鳴る。この人はどうも田部重治さんではなかったかと憶測をされる。

この話は後日談がある。先生が一九七八年の山岳会会報に「六十

四年目の名のりあい」として載せておられる。一高生であった大木操氏。同氏は第一高等学校に山岳部を創り、後に貴族議員、東京都副知事となった人で、日本山岳会会員であった。この大木さんから電話がかかり山岳会のルームで六十四年ぶりに名のりあったというのである。「山頂の奇声」の一件は田部さんが聞いて、「自分は山で奇声を発したことはない」とかなりおかんむりで否定されたので、恐縮していたところ、奇声は「ヤッホー」であり、鹿子木員信さんであった。一行の中に茨木猪之吉画伯もいたことがわかった。こうなると前穂登山隊は、名前も名のりない寄合い所帯であったようである。

先生はこうも書いておられる。「立教の山岳部がおどおどしながらナンダ・コットに足をかけるようになったのは、パウワウの『カシノチを繞って』が直接の起爆剤であったが、間接的乃至心情的には鹿子木さんの紀行があったことは否めない。後年私が立教山岳部に関係し、ヒマラヤ踏査に助力するようになった機縁は、この前穂高登りにあったと思っではいけないだろうか。

話を戻そう。前穂登頂を果し意気軒昂たるあまり、翌日朝早くから騒いでいたところ、人がやってくる気配があり障子の外から、妙なアクセントで「あまり朝早くからさわがないでくれ。ことに婦人はねられなくてこまる」とたしなめられる。一言もなく恐れ入って静まりかえった。その日は、田代池や明神池に行ってきた遊び、徳本峠下の牛小舎まで来たところ、西洋人夫妻が嘉門治をつれてやって来る。今朝しかられたのはこの二人からだなと思ったが、今さらあやまれたものではない。片言の英語で登山の模様を話す

「若いのに穂高に登ったとはたいしたものだ」とおだてられた揚句「私はウェストンです。東京へ来たなら山岳会に入りなさい」と勧誘されたというのである。

先生は一九一六年日本山岳会入会。推薦者は高野鷹蔵、近藤茂吉の両氏。会員番号四八七番。先生、最近では「楨有恒さんに次いで若い番号じゃないかな」と「自慢であった。一九五〇年から五二年にかけてと、五四年に評議員。一九六六年、永年会員。一九七三年の年次晩餐会の席上、名誉会員に推薦される。立教大学山岳部の部長などになり、わが国における初期大学山岳部の育成ならびに登山の奨励に貢献したこと、評議員として、小集会での講演、「山岳」への寄稿などを通じて会の運営に尽力したことが評価されてである。

先生は、第七高等学校に山岳部を創る。一九一五年「世紀末の悲哀の余波は遂に日本を侵して来た」に始まる「第七高等学校内に山岳会を設立せんとするの趣意書」を執筆している。趣意書の中で、前穂登山にふれ「山上の痛快な貴族的な感じ」と書いておられるが、私には先生の風貌を表現した感じに思われ、おかしくなった。

先生は、立教に來られた翌年、一九二三年に山岳部を創立、同時に部長、一九四五年までの二十二年間にわたって部の責任者であった。先生が部長だった頃の山岳部は、逸見真雄、堀田弥一、小原勝郎、山縣一雄、浜野正男等々の元氣者がいて、積雪期登山に精を出していた。この記録は「立教大学山岳部報」追想号から第八号にわたって収録されている。先生は部報第二号「山ばなし」に「なるべく雪崩などのないような所へ行くように」「親の心子しらず」「冬山や春山に行くなどとはいわないが、心の中でははらはらしている」。

遂に「部員は駄々っ子であるように思われる。駄々っ子のいうことはきかねばならないが、親は内心冷汗を流していることを記憶して呉れるか、又いつか思い出して呉れば」と訴えておられる。そのうちに、ちっともいうことをきかない駄々っ子の冒険的ともいえる登山の理解者となり、むしろ積極的に支持されるようになられた。先生の部報の毎号に専門の心理学・美学から、日本における登山を信仰登山から近代登山Ⅱスポーツ・アルピニズムへの変遷としてとらえ、新しい思潮を展開されている。あらためて眼をとおすと駄々っ子の行動を思考の糧とされたふしがある。題名だけ拾っておく。

「新生活様式の象徴としての登山」「想山断章」(一号)、「登山意識の消極的内容と積極的内容」「山ばなし」(二号)、「文明史的見地による登山意識の一考察」「山想雜叢」(三号)、「ALPINISTISCHE ORTHODOXIE」(四号)、「山岳をめぐる行為と精神」(五号)、「新しき山岳美論への途」(六号)、「回顧と展望」(七号)、「創設拾五年に際して」(八号)。

堀田弥一さんの「ヒマラヤ初登頂——一九三六年のナンダ・コート」を読むと、先生が若きアルピニストたちの心棒であって、そこに堀田さんたちのナンダ・コートが結晶したことがよくわかる。堀田さん曰く「辻莊一先生が Paul Bauer の『Im Kampf um den Himalaja』が大変面白いと言ったので、さ、そく訳していただくことをお願いした。先生に訳していただいてノートを取り……毎週先生のお宅に集っての二・三時間ずつの講座は数か月間も続いた。……このようにして出来て来た雰囲気は、いつしか立教大学山岳部の中でヒマラヤを合言葉とするまでに育っていった。静観的で山の

自然を深く愛された先生が行動的なわれわれを理解し、……先生との一体感が強くなっていた」。

先生は、毎日新聞社を始めとする対外交渉、大口寄付者にまで自ら出かけられる。夜は夜でおそくまで計画の推進、費用の計算までされる。「ヒマラヤ踏査隊派遣について」と題する計画書の起草は先生の手によるものであった。先生は、ことと次第では、ご自分も出かける所存であったようである。

先生は遠征といういい方をとられなかった。多分、いやしくも主権ある国へ行くのに征ではと考えられてのことであろう。

ナンダ・コートの計画は幸いにして成功する。それからの先生の講義には必ずナンダ・コートの話が入った。一回ではなく何回もある。先生に心理を教わったのか論理を教わったのか、音楽を教わったのかさだかでない、不肖の教え子たちもナンダ・コートの話だけは覚えていた。

先生、立教大学を一九六一年定年退職、定年後も非常勤講師となられ規程によつて全く退職されることになる。私に「キミ、後一年で五十年だよ、一年ぐらいいなかならんかねえ」ほんとうに残念そうにいつておられた。大正・昭和と戦争をはさんで移ろいの激しい時代に教鞭をとられ、戦時中ミツシオン・スクール立教、受難の時期の予科長。私が先生を偲ぶにあたって、あえて題した「音楽と山と薔薇と」ではあるが、先生が心を痛められたことも多かったことと思う。私が知っていることでも、部員の、失恋、病死、家の没落、先生は相談を受けられても、どうにも仕方がなかったことであつた。

先生の嚙咳に接した者たちは、無類の親しみをこめて先生をひそかに「辻公」と呼んでいたのであつた。

立教大学では、一九八七年五月二十三日午後二時、立教学院諸聖徒礼拝堂において、亡き名誉教授辻一氏を大学葬をもってお送りした。私は、すぐれたJ・S・パツハの研究者への敬意と、いつの時代にあつても学生にとつて得難い「友人」であつた人への感謝を表したものと思つている。

(中村太郎)

略年譜

明治二十八年十二月二十日 岐阜県に生れる

大正三年三月 県立神戸第二中学校卒業

大正五年 日本山岳会入会

大正六年三月 第七高等学校卒業

大正九年三月 東京帝国大学文学部心理学科卒業

大正九年四月 東京帝国大学大学院(大正十一年三月まで在籍)

大正十一年四月 立教大学講師

大正十二年 立教大学山岳部長(昭和二十年まで)

大正十三年 立教大学グリークラブ部長(昭和四十六年まで)

昭和二年四月 立教大学予科教授

昭和二十年四月 立教大学予科長

昭和二十二年四月 立教大学文学部教授

昭和二十七年五月 滝乃川学園理事

昭和三十六年三月 立教大学定年退職、昭和四十六年まで同校非常勤講師

昭和三十六年四月 立教大学名誉教授

昭和三十七年 立教大学メサイア演奏会指導、現グリーククラブ、交響楽団

の前身である同校音楽部部长を務める。

昭和三十七年 音楽学会（現日本音楽学会）会長（昭和四十五年まで）

昭和四十三年四月 国立音楽大学教授（昭和五十年まで）

昭和四十五年 勲四等旭日小綬章受章

昭和四十八年 日本山岳会名誉会員

昭和五十八年七月 滝乃川学園理事長（昭和六十一年六月まで）

昭和六十年 日本パッハ協会名誉会長

昭和六十二年四月二十一日 逝去、九十一歳

早川義郎氏（一八九六～一九八六）

早川義郎さんのことども

人生百年を実証するお一人と、よく噂に上っていた早川さんには昨年十月十七日、九十歳を最後に忽焉として他界された。令夫人をその五ヶ月前に亡くされたものの、その後はお独りで以前と全く変わらないご日常とお見受けしていたが。

氏は明治二十九年、山本義郎として東京に出生、幼時母方の伯父で当時日銀小樽出張所長だった早川権夫氏の後を享けて同家を継がれている。大正十年慶応大学理財科を卒えると同時に日本銀行に入り、在職三十年ののち昭和二十六年退職、その後東京鉄鋼（株）の経理担当役員として難しい時代を乗り切ってこれられた。

さて、氏は人も知る多趣味に生き、音楽、絵画、写真、登山にご自身の研鑽と後進の育成に熱意をそそがれ、何れも顕著な業績を残されている。慶応義塾では大正四年創設の山岳部のほか音楽部に在籍し、当時開拓的な登山に専念した同僚たちをよそに専ら静観的な山岳遍歴を愛し、後日の氏の絵画や写真の上にもこの静かな山が一貫して存在していたと思う。従って氏の山とスキーは決して無理に走らず、七十年に及ぶ山歴にも遭難談など聞いていない。一方スキー術はテレマーク廻転を得意とする超戦前型で、昨今その技法がふたたび脚光を浴びているのをご存知だったかどうか。しかし、その雪滑りも戦後は断念のようだった。

前記の慶応義塾山岳部OBのうち大正年代出身者は別に大登会を構え、その世話役を氏が引受けていた。いずれも八十歳を超える顔触れだがその例会には結構面倒な山行もあり、このほどは春の黒姫山頂に立っているなど、何事にも面倒見のよい人でもあった。

在学中の合唱活動は、その後の職場合唱団の育成等に打ち込み、いずれも水準高いものに仕上げている。戦後、山と溪谷社から上梓した『山行歌曲集』に集録した百余の原曲の多くは西欧のものだが、そのほとんどは氏の訳詞か作詞、一部は作曲にかかり、当時の荒さんだ世相の中、登山や合唱の衆徒からいたくもて囃された。

氏の写真歴として昭和初頭、初期のライカ・カメラをいち早く入手し、いうところの早川調の作品に声価を高めてきたが、このころは国産の単純な機種をとことん生かした作画に称賛を呼んでいた。

絵については氏が中学時代からのご執心で、以降の大きな作品も

保存されていて興味尽きない。題材を山に置いたのは当然だが、ほか実に手広く取材されている。特に誰に師事したとも聞かないが、ご自身の風格そのものともいふべき銜のない画風を、主として水彩で表現していた。中でも昭和十七年公務出張中の北京とか、終戦時都下の新島に駐屯中の画帳などは逸品といふべきだろう。

氏は応召で主計士官として終戦間近には新島に在り、資金受領などで度々日銀本店にも顔を見せていた。二十年の春、当時海軍燃料廠に属し、南会津の山村で馬鈴薯や松根油作りをやっていた私宛に届いた葉書には「七月上旬より二週間程東京に出張して其後の模様を具に見て来ました。拙宅近所の学校や前の家も焼け、家には大型焼夷弾の直撃を受けたが焼けずに残っていました」とあった。氏の住いは昭和の初め、親類筋の英文学の耆宿、岡倉由三郎先生の練馬在の屋敷の一隅に建てたもので、前記のように災害に遭ったものの氏の亡き後も、健在で、埋没中の焼夷弾は実害がないからとそのまま眠らせてあった。

晩年退社されてから一層多忙で、塾の合唱団の一員として精励の一方、家に在っては座卓を前に端座し原稿や画業のほか夫人の紅型染めの紙型作りにも精出しておられた。そして終りの半年ほどはお独りでその家に在り、こともなくお過しとお見受けしていた。

ともあれ九十年の天寿を全うされ、その間節を曲げず世の敬慕を集め生を終えられた次第で、むろん財を成したでもないが、いつも幸せな神の庇護の下に在られたことは確かだったと思う。

(坂江善治)

「山岳」の編輯部からはじめは、私に追悼のことばということであったが、会員(一五六五番)坂江善治氏が、日本銀行員としても山登りの上でも、長く広く早川さんの薫陶を受けた方と知って、固辞する同氏を慫慂して前章を得た。

しかし私も追慕の気持ちを盡前に捧げたい微意は捨てがたくこれを書いた。

初めて早川さんの警談に接したのは昭和八年十二月、関温泉における慶応山岳部のスキー合宿であった。自由参加のかたちで、二、三日おかれておいでになった早川さんは、その夜の紅茶会の席でいきなり畳の上で寝ころんで蠅取り紙に足をとられた蠅の「パントマイム」を演じられた。ヤンヤの喝采が終ると立上ってこんどは高い涼しい声で「フィンランドの森」を唱われた。

翌日からはゲレンデで一本立てる(一休みすること)とすぐ「ホイラリラリラ」と声を張り上げてこの歌を教えてくださいとさるのだ。仕上げは風呂場で裸踊りの疲れを休めながら湯舟のふちに腰をかけてであった。今日でも私はこの歌を口ずさむことが多い。

懇親天幕にもよくお出かけくださった。夕食も終って焚火を囲んで一騒ぎという頃、飄然と現われて若い者達の団欒に加わり、翌朝は誰よりも早く起きて朝食が終ると「では」と一人で朝霧の中に消えて行かれる、という風であった。東京での学生の会合にもたいてい出て来てくださった。

しかし何といっても、早川さんと私達との結びつきを生涯のものとしたのは「旧き友よ」を作ってくださいましたことによる。

私が最高学年に達した時、慶応山岳部は創立二〇周年を迎え盛大

な祝典を催した。その時早川さんが作ってくださった歌なのだ。當時は「登高会の歌」旧き友よ、とされていた。これについては後年早川さんご自身が登高会々報（昭和五十四年発行、戦後第十三号）戦前に第七号まで発行されたものは通算せず）にかなり長いものを書かれている。晩年の御心境などまことによく知ることが出来るのでここに掲げることとした。

*

「旧き友よ」の歌は山岳部創立二十周年記念会の際に作ったもので、それから既に四十数年が経ってしまった。中略 あの歌を作った当時、自分は何才位迄生きるかなど考えても見なかった。まして山の仲間がこんなに永く交友を続けられるとは思っても及ばなかった。今私にはあの歌を作った時の情況が懐しく浮んでくる。中略 ただ終りの方で、永き交りを「清らに高く蔽か」な山の姿になぞらえたのは、どうも君子の交友のようでありささか面映い。中略 ついでにもう一言。あの歌には、ケイオウとかトコウカイと云う詞が入っていないけれど、中略 あれは山の仲間が自分たちの心をついに通じあつて歌うのが望ましいのだから、中略 ケイオケイオだとかワセダワセダなどがなり立てるのは苦々しいことだ。節度ある我が山仲間には諒とされるだろう、中略

「旧き友よ」がこんなに永く歌いつがれようとは思ひもよらなかつた。それだけに山岳部に何も記録らしいものを残さなかつた私にはせめてこんなことがお役に立ったかと心の奥で喜んでいる次第である。

山の友人についても書くつもりだったのに「旧き友よ」の話が長

すぎた。山の友人とはほんとに好いものです。中略

旧き山の友はそれとして今度は少し新しい山の友について触れてみたい。私が七十才を越してから知りあつた、後略

として北区の若い理髪業の青年とか、北海道の新得牧場長とのおはなしなど、読む者の心が暖まるようなお話がなお続くのだが、私は新旧を問はず良き山の友をもつことに感謝して交友が生を終るまで続くことを祈るものである。と結んでおられる。

慶応山岳部に縁のあつた者の誰しもが、折にふれて、また時あつて「旧き友よ」を唱うようになってからすでに五十年を越した。幾度か喜びにも悲しみにも、はた決意を秘めた旅立ちの日にも、これを唱和してお互いの友情をたしかめ、登高精進の誓いを新にしたことだろうか。

「旧き友よ」とい語らうは、過ぎし日の旅山の想い、森にさすらい溪を行き、峰に立ちし日を忘れえず、山は心の故郷よ、清らに高く蔽かに、変らぬなれの姿こそ、永き交りのしるしなれ」と。

早川さんは、楨、三田、早川（種）先輩方のように強烈な個性を発揮して私達後輩を叱咤鞭撻してくださるといふふうなことはなかつた。老若を超え一視同仁、来るは何人も拒まず、去るは追わず、淡々として後輩に接してくださつた。それでいて友愛の心厚く我々後輩を大切にしてくださるご厚情がにじみ出ていた。また行きずりの人、旅先で知り合つた青年達との交友も大切にしておられた。

早川さんが私達に遺してくださつたものは、これだけでも随分多いのだが、このほか音楽と絵画とにふれないわけにはいかない。だが私はこの方面の素養に乏しいので、一つは早川さんご自身が書か

れた絶筆ともいえる慶応義塾ワグネルソサイティの後輩に残された「ワグネルの同友諸君へ」をそのまま掲げ、他は太田敬君の言葉を借りることとした。

早川さんは、慶応義塾入学と同時に慶応ワグネルソサイティに入り、ヴァイオリン奏者として活躍された。卒業後同OB合唱団に加わって逝去される二週間前まで、その創立八十五周年記念演奏会に出演されるための練習に励んでおられた。そして逝去二日前に次の手記を送って居られる。

*

ワグネル同友諸君へ

ワグネル同友諸君、八十五年の祝典おめでと。この稀な祝典を同友の皆で大いに祝いませう。

私も是非参加するつもりで頑張ってきましたが、九月になってどうも両鼻の具合が悪く声が出なくなり、何とかして治そうと思ひ努力中にちょっとしたはずみ鼻をぶつけて更に悪化、食欲も無くなり、その為足の力が衰え練習にも出られなくなりました。

私は大正十年卒業してワグネルに七十余年、諸君と交友を重ねてきました。それ故に是非ともこの祝典に参加してその喜びを語り合おうと思つたが、今の状態では如何ともなし難く残念ながら欠席せざるを得ません。

九十才になって一回演奏会に出られたことは、非常に幸わせに思つております。

ワグネルが益々繁栄されることを心からお祈りしております。

昭和六十一年十月十五日

早川 義 郎

*

早川さんは実にこまめにスケッチを描いておられた。仲間の間で絵を好んで描く辰沼、太田両君が、ごく近年に練馬のお宅に伺つて丹念にこれを見せしてきた。太田がその所感を次のように語っている。

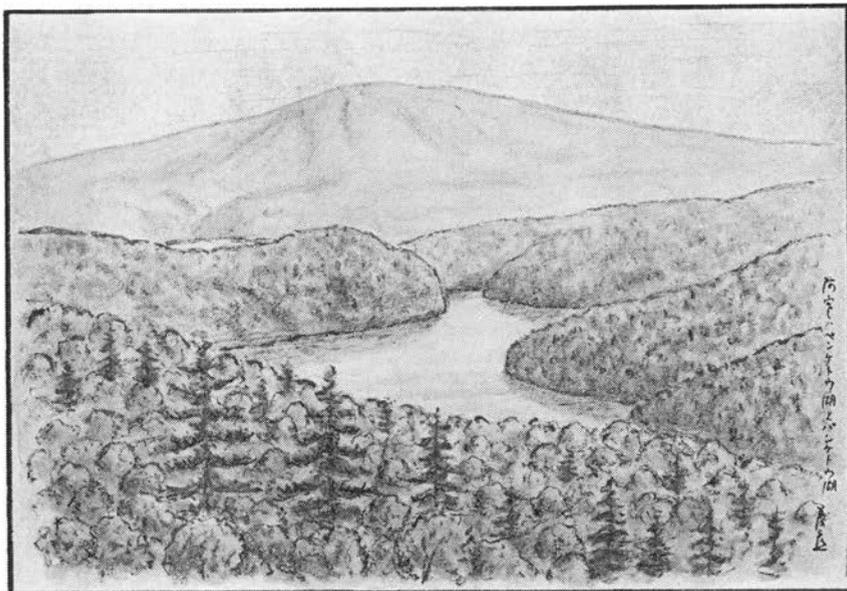
*

早川さんの絵は中学時代のスケッチに始まる。そして成人される過程でも絶えずこれが続けられた。画題は花、草、人もあるが多くは風景で特に山であった。山と旅を好まれたことが作品によく見える。足跡も広く、北海道から九州に及び、終戦当時駐屯して居られた新島のもの、西欧かけ歩き、などは画帳としてまとめられている。

特筆す可きもの一つとして、終戦直後廢虚に近かった都内の焼跡のスケッチがある。当時の虚脱した世相の下、食糧あさりに狂奔する中に、これをものされたことを思うと、そのしたたかさというか、強靱さというか、外柔ながら内に蔵された強い平常心にそのお人柄が偲ばれる。従つてその訴える迫力はニューズ写真などを遙に超すものがある。史的資料としても価値高いものではなからうか。拝見しながら感歎の声を発しても『いやあの時は何もすることがなかったから』と事もなげに云はれたのも早川さんらしい。

晩年になられても、山と旅は益々旺んで健康と健脚は些も衰えるところがなかったことを、残された絵が何よりも端的に物語っている。

早川さんの画業についてどれが最高の作品とか、会心のものなど



阿寒，パンケトウとパンケトウ／早川義郎

いうことはあたらないだろう。生涯休みなく淡々と描きつづけられた全体を通じ、常に臨場感に浸り切って居られることが、余人の追随し得ない境地と申し上げて好いのではないか。

絵と山と歌とが皆早川さんに帰一していた。

*

私は年齢、時代がかなり距っていたのに早川さんとのご縁は色々あった。

「旧き友よ」誕生の瞬間に、練馬のお宅に在った早川さんご夫妻と小森宮、浜口武の両君もすべて亡く、私のみが健在なのだ。「礎固く」の作詞には無様な私の一言を快く淡々とお取り上げ頂くというご縁もあった。私の追慕の念はなおつきない。だが許された紙数はとうにつきている。

早川さんのご葬儀の日、告別を了え出棺の時、山仲間とともに早川さんのご生涯を通ずるもう一つの翼ともいうべきワグネルンサイテイの五〇人を越す人達が、声を合せて「旧き友よ」を唱ってくれた。私達山仲間もちろんこれに唱和した。

稀有というか、達人とでも申し上げたい見事な天寿を終えられた日、これほど感動的で長く人の心に残る瞬間を持った人が、古来はたしてどれほど居っただろうか。

私は新たに畏敬の念を深め、そのご冥福を祈ったのであった。

略 歴

明治二十九年六月十五日、東京山本家に生れ後伯父早川権夫氏の名跡を継ぐ。東京京華中学校を経て慶応義塾大学理財科に入り大正十年卒業。

同年日本銀行に入り、文書局厚生課長、出納局鑑査課長、人事部調査役等

を歴任、昭和二十六年停年により退職。同年東京鉄鋼(株)取締役総務部長に就任、監査役を経て四十五年退任。

昭和六十一年十月十七日逝去。享年九十歳四ヶ月。

登山歴他

中学時代より赤城、尾瀬等を歩く。大正七年慶応山岳会創立第三年目の夏期登山隊、常念山脈縦走隊に参加す。元本会々長三田幸夫氏も同隊に初参加されている。

大正八年夏期登山隊、針ノ木より劔岳、大町隊にリーダーとして参加。

大正九年夏期登山隊、甲斐駒ヶ岳、仙丈岳、北岳隊に参加。

大正八年一月、同山岳会第二回スキー講習会(於新潟県関温泉)に参加。

大正九年三月、第五回スキー講習会に参加。

昭和九年、日本山岳会入会、会員番号一五〇七。

昭和十三年一月、日本山岳会理事となり会報編輯を担当、同年十月熊本転任のため辞任。

昭和十六年日本山岳会刊行の「高山深谷」の編輯委員を務める。

昭和五十九年日本山岳会永年会員に推挙さる。米寿を超しても山歩きを続け、昭和六十年初秋には単独で本会上高地山荘を訪ね秋色を満喫した。同年十一月、老山友と秩父三峰、栃木方面を歩きこれが最後の山行と思われる。

執筆歴

慶応義塾山岳部々報、登高行第一号に常念山脈縦走記を、同第二号に劔岳を縦走してを執筆。慶応山岳部OB会報、登高会々報第七号に「豊辺君の輪廓」を掲載。登高会々報戦後第十三号(登高会々報は戦前と通算しない)に「旧き友よ」山の友、を執筆。

音楽と山のかかわりについての随筆を戦前の「山」等にしばしば執筆した。また日本銀行「日の友」にも山に因む随筆をしばしば執筆した。

音楽歴

慶応義塾入学と同時にワグネルソサィテイに入り学生時代は専らヴァイオリン奏者として活躍、卒業後OB合唱団に加わり、昭和六十一年五月、九十歳にして合唱指揮並びに歌手として演奏会に出演。

昭和十年慶応山岳部創立二十周年を記念して登高会の歌「旧き友よ」を作詞編曲、爾來「ヒマルチュリ登頂」、慶応山岳部創立五十周年記念「想いは遙か」、「思い出の山の調べ」、慶応山岳部創立七十周年記念「礎固く」等を作詞、作曲、編曲す。

昭和三十年、山と溪谷社より『山行歌曲集』を上梓。

絵画歴

中学時代より好んで描いた淡彩画スケッチは尨大な数量に及ぶが、その中から「山岳」本号の口絵及び表紙、本文ページに掲載した。
新島駐屯中と北京出張中のものは画集として纏められている。

(谷口現吉)

富山支部

支部総会 日本山岳会の富山支部総会を無事終えた。支部長に若林啓之助氏を再選、委員長、委員は留任と決まり責任の重大性をくみとった。現在五十余名の支部員で、一堂に会することもない昨今ではあるが二十数名の参会があり、六十二年度の事業計画等を決め懇談の内に終えた。

播隆祭 五月十八日、大山町旧河内にある播隆上人顕彰碑の前で例年のとおり百五十余名の参会を得て播隆祭を催し、播隆の幼少から出家に至るまでの新しい説話や、「槍ヶ岳」開山に漕ぎつけるまでの巡錫の労苦、出家後、里帰りのなかった理由、など播隆の謎の数々が語り合わせ、小雨の降る中での一瞬を新緑の旧河内ですごした。

郷土の人々は偉大な播隆の業績について知らない人が多い。「越中の偉人」に綴られながらも灯台もと暗らしの感がある。ウエストンはどういう人だったのかと質したら「日本アルプス」を世界に紹介した人だと返ってくるが、播隆、そんな人知りませんでした。まあ、山岳愛好者は槍ヶ岳開山者というけれども一般は冷めたいものだ。上高地でのウエストン祭はそれなりに意義があるのだが、河内での播隆祭はそれ以上の深い意義が日本の心に存在するものであ

る。六十三年は顕彰碑建立五周年になる。この年を迎え盛大に記念行事を行いたいと考えている。

深緑の万波高原 この地帯は最近まで県境界線すら定かでない地帯があった。古い地図に、地形図に空白境をみたが、今は解決した。それ程地形複雑、江戸時代からの懸案境界の紛争、点と線の闘いがあったところである。それも森林資源にあったことも一つの種であったと考えられる。「ブナ」の原生林であり、ブナの峰走りが見られたところだったが、今は少部分を残し開発されてしまった。万波自然環境保全地域を含む高原は将来活力を創り出す原動力として二一世紀を生き抜く地域に生まれ変わろうとしている。

白木峰の特殊な植物植生、眺望のよさと共に自然の妙味を活かした地帯となろう。万波峠周辺に開発のためのエンジン音が響き、万波高原活性化の農業開発（六三ha）が進められている。明治三十三年入植以来八十二世帯を数えたこの集落も昭和十四年五〜六戸を残して離散、十一月に至って「社」を残して完全なまでに離村（廃村）した運命の集落があった地帯である。標高千以上の鍋底の高原、雪との闘い、物資の補給は難儀したことであろう。だが時代は再創して機械化農地となって新生万波の声はカッコウの啼き声と共に創られようとしている。高原を歩いた支部員は奇怪な万波の顔を再認識したことであろう（古川宮林署で入山許可証を得ること）。秋には再び植生調査行を続けたい。

焼山山行 これは秋の行事に計画している。二四〇〇以上の山、活火山、昼間山と火打山にはさまれた北面の登高と植生観察を目的としている。日本海から吹き上げる風が特殊な植生を特徴づけている

からである。自然の悪戯とでも言ったらよいのかを改めて観察する山行である。

新入会 会員の新しい増強なくして支部の発展はないものと考え、新しい会員の加入を求め支部活動の原動力を得たいと考えている。会員一人一新加入の線で心掛け協力を願っている。

(石坂久忠)

信濃支部

信濃支部創立は、ウエストン碑が再び上高地の元の岩壁に復元された記念祭をその日とするとなつていきます。で、その記念祭を後日第一回ウエストン祭とし、それが本年第四十回になるわけです。創立四十周年は一年ずれるわけですが、粉らわしいので三十回の時よりウエストン祭の回数年と合わせ祝ってきました。

記念祝賀会は、ウエストン祭前夜祭をかね、五月三十一日、西糸屋山荘大広間で、今西寿雄会長はじめ、友好登山に來日中のポーランド隊のみなさん等二十六氏の接客人を含め、総勢八十七名での大祝賀会でした。

ポーランド隊の受け入れも、松本市長表敬訪問。歓迎昼食会。松本城、エプソン工場見学をして上高地へ送り届ける等お手伝い出来た。

このボ隊一行の参加をえた第四十回ウエストン祭も、好天に恵まれ、大変盛大に挙行できました。

さて、次は前記ウ祭をその幕あけとした国際アルピニスト大会で

す。内容については、「山」第四九七号をみて頂くとして、シンボジウム開催に当たり、本会の大家博美副会長はじめ、鴨原啓佑常務理事、中村純二、松田雄一各常任評議員、そして日山協として神崎忠男、湯浅道男の各氏に企画から講師の招聘まで全般にわたってご指導賜りました。

支部有志主催の講師歓迎会は、西堀、佐々、今西の三歴代会長はじめ多くの先輩方と親しく懇談でき、参加者には大変思い出に残る嬉しい集いになりました。

なお、記念トレッキングは、蒲生支部長が大会組織委員会のトレッキング委員長を務められ、当支部は上高地、西穂の二コースを担当。各々、支部員が引率、予定どおり、他の三コースとも無事下山。参加者に大変好評を得たことをご報告します。

秋の有明山記念登山も好天に恵まれ、楽しい山行でした（「山」五〇一号を参照下さい）。

新年例会、スキー例会、常念岳の春山合宿と年初計画どおりに行事が行われました。

支部の課題 四十周年を終つて思うことは、まず、長いこと会の浮き沈みに耐えて来たものだと、改めて感心し、その時その時に直接会の運営、執行に当たられてきた先輩各位に敬意を表した次第です。

会員現況はメンバー百十名、支部会員として十四名で支部員総数百二十四名。うち団体加盟三団体です。

年齢構成をみると正確に調べたのではないが、壮老年層が目につき、一時的でなく長続きする若手の入会を期待したい。また、長野

県は広域なため、集会参集が大変な人も多い。そして在籍年の長い人、入会十年未満の人などいろいろです。支部の歴史を詳しく書いた「支部三十五年」が発刊されており、それを読んでもらうてあるのだが、もうひとつ、山岳会として個々別々であって、ひとつのものになっっていないような気がする。

ウエストン祭は当支部活動の推進力として意味があったと思う。しかし昨今、支部内外でマンネリ化し、観光行事化している等の声も聞く。そこでこの際、人間でいえばまさに不惑の年であるので、目的、内容を再検討したらと思っているところだ。

まあ「お互いに、楽しい良い山行をせいでいしよう」という信濃支部の大前提は、創立以来、引き継がれていますので、心配は無用ですが。

当面の課題を申し加えて報告とします。

(文責・田中弘美)

岐阜支部

日本山岳会岐阜支部は、一九七〇年に、当時、岐阜大学学長をしておられた西錦司先生によって設立され、その後西先生が日本山岳会長に就任されましたので、支部長は現在の松井支部長に引継がれて現在に至っております。

この間において、大きな行事としては、本部・石川支部・岐阜支部共催で岐阜県側から登り、石川県側を下る白山登山が行なわれました。これには全国各地から多数の参加を得て、極めて盛大であり

ました。次に一九八〇年に岐阜支部設立十周年記念行事として飛騨側濁河温泉からの御嶽山登山が行なわれました。御嶽山は一九七九年秋の有史以来初めての爆発後禁止されていた登山が解禁になったところでした。他の一つの記念行事として山岳講演集の発刊があります。岐阜支部では毎年秋に山岳講演会を開催し、「岐阜山岳」に講演の概要が掲載されていますので、これらを集録したものであります。委員会としては、この発刊については、未経験のことであり、その成否は予断を許さず、赤字覚悟の上で実行にふみきったのでありますが、結果は予想以上の好評で安心いたしました。これもひとえに、無料で講演集出版を快諾して下さった講演者諸氏の御好意と、講演者の知名度とともにその内容の面白さのおかげであると、委員一同深く感謝いたしております。

一九八五年が岐阜支部設立十五周年に当たりましたので、翌一九八六年四月に十五周年記念行事として能郷白山登山を行ない、関東、関西方面からの参加もあり盛会でしたが、天候に恵まれなかったのは残念でした。

京都支部が一九八六年に設立されたのに関連して、岐阜支部会員は従来の約百十名から約六十名へと減少しましたが、その後の岐阜支部山行には、京都支部会員もゲストとして従来のように参加されますので、支部会員の減少という実感は余り感じられません。両支部とも何名かの会員は、会友の資格で相互乗入れをしています。今春、五月三十日三十一日には、京都支部からの申入れにより、京都、岐阜両支部合同懇親山行が、将来ダムで全村水没のため今年三月三十一日限り廃村となった徳山村で行なわれ、両支部からそれぞ

れ三十名以上の参加があり、極めて盛大に行なわれました。

岐阜支部の山行としては、主として一〇〇〇〜二〇〇〇メートル程度の美濃・飛騨の山々へ、時として長野県南部の山へも出かけています。奥美濃の山々には、いわゆる有名な山はありませんが、独得の味があると言われています。一般の交通機関の利用では不便ですが、近頃は林道が発達して、従来よりはアプローチが楽になっています。山麓の宿でいわなや山菜料理で前夜祭を楽しみ、他の登山者とは殆ど出会うこともなく、登山路もないことの多い、静かな奥美濃の山へもお出かけになりませんか。岐阜支部一同お待ちしております。

(松井辰彌)

岩手支部

支部役員改選 支部だよりは、これまで行事がある度に「山」に投稿しているので改めて書くのは、二番煎じになる傾向があるので遠慮申し上げていた。

今年、春の総会は、五月二日、於・遠野市、海老藤旅館で行われた。それぞれ自宅から遠野市までのコースの途中の山々を、ちょっと稼いでから入るのが常だ。私達、盛岡の有志八人は、北上山地の東和町の砥森山のメイド森の二等三角点と古くからの信仰の砥森奥の院のある山頂を登った。

当夜、役員改選が行われ、これまでの委員が支部長を選び、さらに新委員は、支部長を交えて、会員番号七九九九番までの、やや古

い会員が新委員を選ぶという方式をとっている。ちょっと逆行しているようだが、あまり支部の内容が解らない人、古い会員でも、突然出席しても、発言権をもつといった方が、意外とスムーズなようだ。

その結果、支部長には四期目の佐藤敏彦、委員の総務には菊地修身、棚田房男(新)、指導遭難対策には小野寺正英、高橋俊紀、二上純一(新)、科学には石村実、中谷充、自然保護には近藤有慶、松田和弘(新)、地区には鹿野松男、関口宏、渡辺博厚(新)、立花幹雄(新)、宮伸穂(新)、監事には田鎖寿、藤岡知昭(新)が選出され、それが、六月六日七日の第五回東北地区集会の実行委員をかねるということに決定した。

五月三日、近藤有慶氏夫妻の先達で、雨中、枯松峠より愛染山往復。

五月四日、昨年、宮城支部長、庄司駒男氏歓迎山行に登り残しの、ウサギ、コウモリの棲む藪山の大開山登山、参加者十八名。

第五回東北集會 六月六日、七日の第五回東北集會は、会員の七時雨山荘で行った。定員六十名とし、東北地区の各支部および未組織の青森地区の会員を対象として集まった。申込金一万円をそえてと、会報に公示したが、無断欠席が四名みられ、それも当夜判明するという支部間の意志の疎通は、今後担当支部間の連絡を更に密にする必要ありと反省する材料を提供した。今後、支部主催の行事が活性化する上で会員相互の自覚を促すものだ。

集會は、本場仕込のアルフレッド、オルチスの弟子、岩手支部のアルフレッド、本田宏彦の、アルパとケーナ、土産の安代牛の野外

パーベキューが、大快晴、満天の星空、さながらメーランド・アラルーナの体であった。田代平牧野での草原の民俗音楽、夜おそくまで、二次会場のテント内での談笑は、会員手製の岩手川、アサヒビールホップは、この地で生産されたもので、したたか酔った。

六月七日、旧津軽街道の耳ノ走峠からの権現山をへて、北上川源頭の鞍部をすぎ、一等三角点七時雨山頂へ、記念山頂道標建立は、ポパイ二上純一親子の力によるところが大きい。下山時、最盛期のワラビ、行者ネギをしたたか土産に採って家路を急いだ。なお、記念品の文鎮は会員宮伸徳氏の作品である。参加者六十名。

十月初旬に、日本山岳会岩手支部編、佐藤敏彦監修の「かぬか平の山々」北上山地の主な約一三〇座を含む紀行文集を、憚現代旅行研究所から出版する。

(佐藤敏彦記)

秋田支部

当秋田支部は、現岡田支部長就任以来五年目を迎え、支部員数も五十七名に達している。

この間、支部の復興・育成に専念し、事務局・役員・事業等の充実を計り、現在着実に運営されている。

事業内容は、大方の支部員が他の山岳会との二足のワラジ履きとなっており、その上、支部員自身の高齢化と共に若手の入会者も少なく、それ等の状況を考慮し、先鋭的な大きな事業は実施せず、その活動を最少限に留めている。

したがって、山行は年二回程度とし、うち一回は一泊宿りの懇親山行。高さや容姿に惚れず、県内の岳人あまり知られていない山々を対象にし、県南・県北地方を交互に選考している。

本年は寅年に当り、秋には千支に因んで虎の字のつく日本で一番高いと言われる虎毛山を本会会員を交えて実施した。また、春には十和田樹海ラインの現場視察も兼ねて白地山を実施している。

会報の発行は、支部の歴史を後世に伝える重要な仕事であり、年一〜二回の発行を続けているが、予算不足で内容も報告程度に留めている。

四月の年度始めには総会を開催、年二度程度の役員会も開催している。

その他としては、他の団体との交流・親睦等も深めてまいり、地域の発展をも考えた調和のとれた自然保護、それに美化運動等にも力を入れ、会員それぞれ各方面に自主的に活動している。

(佐々木民秀)

京都支部

当支部も設立二周年を迎えて会員が百三十九人(四月一日現在)になった。設立時は九十三人だったので、この一年でざっと三割増である。人数が多いばかりが良いとは言えないが、一応発展の目安にはなるだろう。ところが、どんな会員が支部を構成しているか。いろんな角度から分析してみる。支部の性格がある程度分かるかもしれない。

地域別では、京都府下が百七人、滋賀県十一人、大阪府六人、兵庫県五人、広島県・山口県各三人、岡山県二人、奈良県・高知県各一人。

このうち、女性会員は十五人で、全体の約一割。支部委員は二十人中に二人の登用だから、女性の機会均等法はかなり進んでいるのではない。遠藤京子さんが首都圏へ転居される前は支部役員中三人が女性だった。

会員番号が一番古いのは、一一一七の今西錦司元会長、二番は奥真雄さん（一四三二）、三番が谷博さん（二四八四）で千番台はこの三人だけ。もう一人服部敏一さん（一四二七）がおられたが、四月五日に亡くなった。今西、奥のお二人は旧制三高山岳部時代からの日本の近代アルピニズムの草分け。三高時代、二人は滋賀県の横山岳で遭難したことがある。奥さんが雪崩の下敷きになり、今西さんが救援を求めにスキーで走った。村に着くなり今西さんは「衆議院議長の息子が遭難した！」と叫んだそうである。奥さんの厳父は、当時衆議院議長を務めておられた。谷さんは府立医大の現役のところ、穂高を中心に先鋭的な登山を続けられた。甲南高とのジャンダルムの初登頂争いは、つとに知られる。谷さんは今西さんらの白頭山遠征にも同行しておられる。今西さんと同時期の桑原武夫さんはチヨゴリザ遠征の時に新入会の扱いになったので、会員番号は四六四一と比較的新しい。東京の出身で、関西には知己が少ないが、亡くなった服部さんも若いころ槍・穂高で活躍された。特に殺生の小屋にはなじみが深かった、と遺族は話しておられる。千番台の会員番号からは、紙靴と麻のザイルといった、古い時代の山の香が漂

ってくるような気がする。

ヒマラヤ・カラコルム・中国山域でのサミッターは今西錦司元会長（チュール）、斎藤惇生支部長（サルトロ・カンリ）、岩坪五郎副支部長（ノシヤック）、内田昌子さん（マナスル）、山口克さん（カペリピーク）、内田嘉弘さん（プリアンサル）、平井一正さん（チヨゴリザ）、酒井敏明さん（ノシヤック・ディオチバ）、上尾庄一郎さん（ガネツシユ、カンペンチン）、伊東宏範さん（マサコン）、松林公藏さん（カンペンチン、ナムナニ、マサコン）、須藤建志さん（マンゴグソール）、高橋純一さん（シアカンリ、プリアンサル、ムスターグアタ）、山本一夫さん（ラムジュンヒマール、ガウリサンカール南峰）、宮川清明さん（ボゴダ）など。

仲睦まじいベア会員は五組、親子二代が一組。職業別にみると、医師・歯科医師が多いのが目につく。斎藤支部長が病院長であるのも多少は影響あるかもしれないが、ざっと数えて十七人。全体の割合を超えている。支部長が新年会に持参する四斗だるは、患者である比叡山の山田恵諦・天台座主のお歳暮だそうである。支部委員二十人中にも三人。外科、内科、小児科、歯科……なんでもござれだ。

山と関係の深いスポーツ用具関係も登山靴で有名な高田貿易の高田光政さん、ムラカミスポーツの村上栄次さん、雪と岩の山本一夫さん、あるむの中西俊三さん、ミツイスポーツの千田博之さんなど山やスキーの道具ならなんでもすぐ揃います。

芸能関係では宝塚のヒット作、「ベルバラ」でアンドレ役をやった榛名由梨（本名山下正代）さん。山好きだったお父さんに連れら

れて、こどものころから山に親しんでおられるとか。吉本興業の古賀専太郎（本名大畑恵宥）さんは相棒とコンビで、ギターをかかえ「ザ・ダッシュ」の名前で、舞台上にテレビにと大活躍。地方興行に出かけた時も時間があれば山に登る「変わりもの」。支部の例会でも、漫談や得意のウエスターンを披露してもらえる。

支部委員の上原泰行さんは西本願寺の僧。毎年五月二十一日の親鸞上人の降誕会の前に、本願寺の大屋根を宗門の竜谷大学山岳部員が掃除するのは、同氏の発案である。

このほか、会友が十六人。他支部や首都圏居住者で京都支部にも入会を希望された人たちである。本部のコンピュータに入力されている支部会員簿との整合性から、支部会員外の扱いになっているが、支部会員との差別はない。

日本山岳会は単一の山岳会だから、あまり支部の枠にとらわれないう方がよい。門戸を大きく広げ、各地の皆さんと親交を深めることも大切である。二月には関西支部とスキー山行をやり、五月には岐阜支部と新緑山行をやった。もともと京都には高い山がない。従って、京都の会員は常に全国の山へ出掛ける。その時のために日頃から各地の会員と仲良くしておくのが当支部の戦略の一つである。各支部のみなさん、今後ともよろしく。

（追記 奥貞雄氏は九月二十九日、肺炎のため逝去されました。）

（四手井靖彦）



会務報告

昭和六十一年（一九八六）六月～昭和六十二年（一九八七）五月

一九八六年度役員・評議員・支部長

会 長 今西寿雄

副 会 長 山田二郎、大塚博美

常務理事 嶋原啓佑、橋本 清、大橋 晋、松永敏郎、梅野淑子、浜口欣

一

理 事 高遠 宏、鈴木郭之、太田晃介、長谷川良典、大森久雄、岡沢

祐吉、村木富士、新井陽一郎、関塚貞亨、平井吉夫、絹川祥夫

監 事 金坂一郎、山本健一郎

常任評議員 松田雄一、山口節子、中村純二、宮下秀樹

評 議 員 伊藤紀克、田口二郎、望月達夫、織内信彦、村山雅美、渡辺兵

力、越智英夫、近藤信行、宗実慶子、大森薫雄、中世古隆司、

田中弘美、安間 荘、小西政継、佐々木豊喜、吉田 宏

支 部 長 橋本誠二（北海道）、佐藤敏彦（岩手）、岡田光行（秋田）、村上

勝太郎（山形）、庄司駒男（宮城）、中島正夫（福島）、佐藤一栄

（越後）、蒲生明登（信濃）、大沢伊三郎（山梨）、山本朋三郎（静

岡）、尾上 昇（東海）、松井辰弥（岐阜）、若林啓之助（富山）、

増江俊三（石川）、斉藤惇生（京都）、阿部和行（関西）、港 叶

（山陰）、末松大助（福岡）、野口秋人（東九州）、西沢健一（熊

本）、魚本定良（宮崎）

理事会は、会長、副会長、理事、監事、常任評議員によって構成される。

◇六月（一九八六年）理事会 六月十一日（水）ルーム

出席者 二十名

▽審議事項

一、一九八七年シャハーン・ドック峰登山隊推薦状交付の件

▽報告事項

一、第四十回ウェストン祭の件

二、ポーランド隊の件（六月五日帰国）

三、三国合同登山について

四、各委員会報告

会報「山」四九四号参照

◇七月理事会 七月九日（水）ルーム

出席者 二十二名

▽審議事項 なし

▽報告事項

一、事務職員の件

二、山岳絵画展の件

三、支部懇談会の件

四、各委員会報告

会報「山」四九六号参照

◇八月理事会 休会

◇九月理事会 九月十日（水）ルーム

出席者 二十二名

▽審議事項

一、事務職員後任の件

二、ナムチェバルワ登山の件

▽報告事項

一、三国合同登山の経過

会 務 報 告

二、定款変更認可（六一一年八月六日）

三、日本山岳会九州山の集い'86みやさきについて

四、会員証配布の件

五、国際アルピニスト大会シンポジウムについて

六、近代絵画にみる日本の山・名作展について

七、各委員会報告

会報「山」四九七号参照

◇十月理事会 十月七日（火）ルーム

出席者 二十一名

▽審議事項

一、明治大学カラコルム（ブロードビーク）登山隊一九八七推薦状交付の件

▽報告事項

一、三国合同登山の件

二、年次晩餐会について

三、各委員会報告

会報「山」四九八号参照

◇評議員会 十一月五日（水）ルーム

出席者 宮下秀樹（議長）、松田雄一、渡辺兵力、越智英夫、宗実慶子、

中世古隆司、田中弘美、安間 荘、佐々木豊喜、吉田 宏、今西寿雄、山

田二郎、大塚博美

▽審議事項

一、名誉会員推薦の件

◇十一月理事会 十一月五日（水）ルーム

出席者 二十二名

▽審議事項

一、年次晩餐会の準備について

二、永年会員となる会員について

三、名誉会員推薦について

四、各委員会報告

会報「山」四九九号参照

◇十二月理事会 十二月六日（土）ルーム

出席者 二十名

▽審議事項 なし

▽報告事項

一、三国合同登山関係について

二、各委員会報告

会報「山」五〇〇号参照

◇支部長会議 十二月六日（土）ルーム

出席者 二十一名他執行部八名

▽報告事項

一、六十二年度支部ブロック会の開催期日と場所について

二、三国合同登山の経過について

三、会費値上げに伴う支部助成金について

四、その他

◇一月（一九八七年）理事会 一月十四日（水）ルーム

出席者 二十名

▽審議事項 なし

▽報告事項

一、望月名誉会員よりの寄贈図書の件

二、会旗支部に配布の件

三、年次晩餐会の件

四、三國合同登山の件

五、各委員会報告

会報「山」五〇一号参照

◇二月理事会 二月十二日(木) ルーム

出席者 二十三名

▽審議事項

一、三國合同登山の会員募金について

二、日本山岳学生会生部クスム・カンゴール登山について

▽報告事項

一、三國合同登山関係

二、各委員会報告

会報「山」五〇二号参照

◇三月理事会 三月十一日(水) ルーム

出席者 二十一名

▽審議事項

一、昭和六十二年事業計画承認の件

二、昭和六十二年度収支予算承認の件

三、総会開催日の件

四、三國合同登山委員会、募金委員会メンバーについて

▽報告事項

一、各委員会報告

二、双六谷地域の国立公園編入要請書を環境庁に提出

会報「山」五〇三号参照

◇評議員会 四月十四日(火) ルーム

出席者 松田雄一、中村純二、宮下秀樹、織内信彦、村山雅美、渡辺兵力、越智英夫、宗実慶子、大森薫雄、中世古隆司、田中弘美、佐々木豊

喜、今西寿雄、山田二郎、大塚博美

▽審議事項

一、通常総会付議事項の件

二、役員候補者推薦の件

◇四月理事会 四月十四日(火) ルーム

出席者 二十名

▽審議事項

一、昭和六十一年度事業報告承認の件

二、昭和六十一年度収支決算および財産目録承認の件

三、昭和六十二年・六十三年役員、評議員選出の件

四、総会提出議案について

五、「山岳写真の源流展」後援の件

▽報告事項

一、各委員会報告

二、三國合同登山関係報告

会報「山」五〇四号参照

◇五月理事会 五月十三日(水) ルーム

出席者 十九名

▽審議事項

一、ネパール・神々と舞踏劇展後援の件

▽報告事項

一、三國合同登山関係

二、各委員会報告

会報「山」五〇五号参照

◇支部長会議 五月二十二日(金) ルーム

出席者 二十名他執行部六名

▽報告事項

- 一、三國合同登山についての経過
- 二、三國合同登山募金について
- 三、六十二年度地方ブロック懇談会京都大会の開催について
- 四、支部事務局担当者会議開催について
- 五、各支部報告

◇昭和六十二年通常総会 五月二十二日(金) 於 千代田区九段四―二―

二五 私学会館

出席者 今西寿雄会長以下二〇〇四名(委任者を含む)

▽総会次第 司会 嶋原啓佑

- 一、会長挨拶 今西寿雄
- 二、会務報告 嶋原啓佑
- 三、昭和六十一年度事業報告承認の件 高遠 宏
- 四、昭和六十一年度収支決算・財産目録承認の件 橋本 清
- 五、監査報告 山本健一郎
- 六、昭和六十二年事業計画(案)承認の件 高遠 宏
- 七、昭和六十二年度収支予算(案)承認の件 橋本 清
- 八、昭和六十二年・六十三年度理事、監事および評議員選任の件 次の通り決定

会 長 今西寿雄(再任)

副会長 大塚博美(再任)、村木潤次郎(新任)

理 事 嶋原啓佑、鈴木郭之、大橋 晋、松永敏郎、橋本 清、浜口

欣一、大森久雄、岡沢祐吉、新井陽一郎、関塚貞亨、太田晃

介(以上再任)、織田沢美智子、田部井淳子、西村政晃、早

坂敬二郎、小林政志、勝山康雄(以上新任)

監 事 山本健一郎(再任)、太田 敬(新任)

評議員 松田雄一、近藤信行、宗実慶子、大森薫雄、中世古隆司、田

中弘美、安間 莊、佐々木豊喜、越智英夫(以上再任)、広

羽 清、山田二郎、小倉薫子、大島輝夫、川上 隆、杉野目

浩、日下田 実、山野井武夫、平林克敏、中島 寛、沢村幸

藏(以上新任)

九、昭和六十二年除籍対象者の件

十、議事録署名人選任の件

総会終了後、新役員の紹介があり、引続き懇親会が行われた。

会報「山」五〇五号参照

◇主なる行事と集会

▽昭和六十一年六月一日(日) 上高地

第四十回ウェストン祭

▽昭和六十一年六月一日(日) 聖マリアンナ医科大学

第六回日本登山医学シンポジウム

▽昭和六十一年六月五日(木) ルーム

岩場での遭難救助訓練・机上講習 講師 金子利三、榎本宅司

▽昭和六十一年六月七、八日(土・日) 小川山

岩場での遭難救助訓練・実技 講師 榎本宅司他

▽昭和六十一年六月十四日、十五日(土) 上高地

懇親山行

▽昭和六十一年六月二十一、二十二日(土・日) 苗場山・赤湯温泉

若葉会山行

▽昭和六十一年七月十二日(土) 鳳凰山

懇親山行

▽昭和六十一年七月十二、十三日(土・日) 木曾駒ヶ岳

氷河地形探索山行 講師 有井琢磨

▽昭和六十一年七月二十六、二十七日(土・日)
双六谷電源開発実態調査

▽昭和六十一年八月二十日～二十二日(水～金) 松本市音楽文化ホール
国際アルピニスト・シンポジウム松本

▽昭和六十一年八月二十八日～九月九日(木～火) 上野松坂屋
近代絵画に見る日本の山・名作展

▽昭和六十一年九月十六日(火) ルーム
会員懇談会「エンジェルウォール、ロライマ登頂報告会」

▽昭和六十一年九月十八日～二十三日(木～火) 大阪松坂屋
近代絵画に見る日本の山・名作展

▽昭和六十一年十月十日～十二日(金～日) 袈裟丸山、庚申山
▽昭和六十一年十月十八日(土) 大無間山

懇親山行

▽昭和六十一年十月十八、十九日(土・日) 麒麟山温泉、貉が森山
越後支部設立四十周年記念祝賀晩餐会、記念山行

▽昭和六十一年十月二十一日～十一月三日(火～月) 愛知県文化会館美術
館

近代絵画に見る日本の山・名作展

▽昭和六十一年十月二十五日(土) ルーム
第十九回山岳図書交換会

▽昭和六十一年十一月一日～三日(土～月) 別府市、宮崎県宇目町
第十二回自然保護全国集会

▽昭和六十一年十一月二日(日) 会津ツツケ岳
現地小集会

▽昭和六十一年十一月二、三日(日・月) 高千穂荘、三秀台、祖母山
九州山の集い'86みやさき

▽昭和六十一年十一月八日(土) 有明山
信濃支部設立四十周年記念山行

▽昭和六十一年十一月八、九日(土・日) 寸又峽
第二十九回紅葉会(静岡支部)

▽昭和六十一年十一月十一日(火) ルーム
スライド映写と講演「花と谷とへムクンド・トレッキング」
講師 高本信子

▽昭和六十一年十一月十三日(木) ルーム
東洋大ヌン峰登山隊報告会

▽昭和六十一年十一月十四日(金) ルーム
会員懇談会「東京農大コンロン登山隊報告会」
講師 織内信彦、早坂敬二郎

▽昭和六十一年十一月十五日(土) 東京都教育会館
第四回ヒマラヤのエコロジー・シンポジウム(日ネ協会との共催)

パネラー 川喜田二郎、大場秀章、杉浦嘉雄、小島 寛、千葉重美
▽昭和六十一年十一月十五、十六日(土・日) 道志二十六夜山
懇親山行

▽昭和六十一年十一月二十七日(木) ルーム
雪崩講習会 講師 松永敏郎

▽昭和六十一年十一月二十八日(金) ルーム
講演会「凍傷の予防と対策」 講師 金田正樹

▽昭和六十一年十二月六日(土) 私学会館
年次晩餐会

▽昭和六十一年十二月七日(日) 高麗山
懇親山行

▽昭和六十一年十二月七日(日) 高麗山
懇親山行

▽昭和六十一年十二月七日(日) 皇居周辺

第二十三回学生部マラソン大会

▽昭和六十一年十二月十四日(日) 幕山、南郷山
自然観察山行

▽昭和六十一年十二月二十一日(日) 岩殿山
現地小集会

▽昭和六十二年一月十七、十八日(土・日) 八方尾根
スキー山行

▽昭和六十二年一月二十三日(金) ルーム

講演会「大気の発光現象」 講師 中村純二

▽昭和六十二年二月一日(日) 庚申山
現地小集会

▽昭和六十二年二月十四日(土) ルーム

第二十四回この一本展「山崎安治氏所蔵和本」

▽昭和六十二年二月十四日(土) ルーム

第十八回山岳図書を語る夕べ「山崎安治氏と日本登山史」

講師 近藤信行

▽昭和六十二年二月十七日(火) ルーム

森林伐採と植林に関して林野庁担当官との懇談

▽昭和六十二年二月二十五日～二十八日(木～土) 法大遠見ヒュッテ
山スキー講習会

▽昭和六十二年三月三日(火) ルーム

セミナー「トレーニングとその効果」 講師 堀井昌子

▽昭和六十二年三月十四日(土) ルーム

第十三回新入会員オリエンテーション

▽昭和六十二年三月二十八日(土) ルーム

第十五回山岳史懇談会「昭和初期の慶大山岳部」

講師 谷口現吉、金山淳二

▽昭和六十二年三月二十九日(日) 鹿岳
現地小集会

▽昭和六十二年三月二十九日(日) 若御子山
懇親山行

▽昭和六十二年三月三十日(月) ルーム

講演会「高所登山における自己管理の問題」 講師 高橋和之

▽昭和六十二年四月十九日(日) 高尾山

新入会員歓迎さくらハイク

▽昭和六十二年四月二十七日(月) ルーム

講演会「厳冬期の白頭山を語る」 講師 高橋通子

▽昭和六十二年五月十二日(火) ルーム

講演会「中央アジアを探検した探検家列伝①」 講師 広島三朗

▽昭和六十二年五月十九日(火) ルーム

講演会「中央アジアを探検した探検家列伝②」 講師 田村俊介

▽昭和六十二年五月二十二～二十四日(金～日) 秋田駒ヶ岳、鶴ノ湯
第十一回若葉会山行

▽昭和六十二年五月二十三日(土) ルーム

山岳映画の会

▽昭和六十二年五月二十七日(水) ルーム

講演会「中央アジアを探検した探検家列伝③」 講師 金子民雄

▽昭和六十二年五月二十九日～六月三日(金～水) 名古屋ワキタ・ギヤラ
リー

山岳写真の源流展

◇海外登山界との交流

▽昭和六十一年六月二日(月) 東京・安田生命ホール

ポーランド山岳会来日隊員講演と映画の夕べ 講師 サウアダ他

▽昭和六十一年六月三日(火) 私学会館

ポーランド山岳会隊との交歓会

▽昭和六十一年八月九日(土) 松本楼

サー・エドモンド・ヒラリー歓談会

▽昭和六十一年十一月十一日(火)～二十五日(火) ネパール

マナスル登頂三十周年記念トレッキング

▽昭和六十二年二月二十四日(火) 北京

中国・日本・ネパール三国合同一九八八年チヨモランマ／サガルマタ友

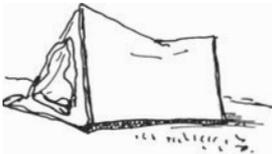
好登山実施の議定書に調印

▽昭和六十二年二月二十八日(土)～三月十五日(日) ニュージランド

「ニュージランド国際アルピニスト集会」に学生部より代表派遣、マウ

ント・クック、タスマン周辺の登山実施

7





SANGAKU

The Journal of the Japaneses Alpine Club

Vol. 82

Issued in December 1987

Contents

In English (also in Japanese, pages in parenthesis)

- The Ascent of Kula Kangri and Crossing from Lasa to Chengdu (1936)
.....HIRAI Kazumasa...A21 (32)
- The International Alpinists' Symposium in Matsumoto
—August 20~22, 1986.....A24 (A78)

In Japanese

- Problems of the Conservation of Nature and Environmental Destruction
in Japan.....NUMATA Makoto..... (7)
- The History of the Clubroom, Part 3.....MATSUDA Yuichi..... (17)
- Tokyo University of Agriculture Alpine Club Kunlunshanmai
7167 m Peak Expedition 1986.....HAYASAKA Keijiro..... (43)
- From Masherbrum Northwest Face (The First Ascent) to Broad Reak
.....KASHU Shin..... (53)
- Shahan Dok 1987 (Pakistan).....NEBUKA Makoto..... (61)
- Activities of the Keio University Alpine Club in the 1930' S.
.....TANIGUCHI Genkichi..... (66)
- Memorial Lecture of the late Mr. YAMAZAKI Yasuji and his work
"History of the Mountaineering in Japan".....KONDO Nobuyuki..... (75)
- Some Memories of Mr. TSUJIMURA Isuke who loved and admired
the Alpes and Switzerland.....TSUJIMURA Katsuyoshi..... (103)
- On the Monumement of the late Mr. KOGURE Ritara, former
president of the Japanese Alpine Club.....ONO Koh..... (110)
- The life and the chronicles in the Japanese Alps of Rev. Walter
Weston.—
A Commemorative Study as the 100 anniversary of his first coming
in Japan.....SHIMADA Tatsumi, KAWAMURA Hiroshi
MITSUI Yoshio, YASUE Yasunori..... (A38)
- The International Alpinists' Symposium in Matsumoto..... (A78)
- < The Frontispiece >
- Reports of the Environmental Destruction in the Shiragami Mountains
and Shiretoko Peninsula.....(16~17)
- Reports from the Expeditions..... (16~17)
- Mountain Photography by the Dry Photographic Plates in the early
times.....SUGIMOTO Makoto.....(80~81)
- Memories of the Clubrooms.....(80~81)
- Obituary.....(128~129)
- Book Review..... (84)
- In Memorial..... (117)
- Reports from the Local Sections..... (139)
- Club Notes June 1986~May 1987..... (146)
- From the Editor..... (A1)

The Japanese Alpine Club

(Founded 1905)

Address : Tokyo, Chiyoda-ku, Yonban-cho, 5-4 Sun-View Heights,

Office Bearers and Committee

1987 (May 1987-April 1988)

President : IMANISHI Toshio

Vice-president : OHTSUKA Hiroyoshi, MURAKI Junjiro

Honorary Secretary : SHIGIHARA Keisuke

Honorary Editor : OHMORI Hisao

Honorary Librarian : OHHASHI Susumu

Honorary Treasure : NISHIMURA Masaaki

Auditors : YAMAMOTO Ken'ichiro, OHTA Kei

Committee

SHIGIHARA Keisuke	ARAI Yōichiro	KOBAYASHI Masashi
HASHIMOTO Kiyoshi	SUZUKI Hiroyuki	ODAZAWA Michiko
OHHASHI Susumu	OHMORI Hisao	HAYASAKA Keijiro
MATSUNAGA Toshiro	OHTA Khosuke	KATSUYAMA Yasuo
HAMAGUCHI Kin'ichi	SEKIZUKA Sadaaki	
OKAZAWA Sukeyoshi	TABEI Junko	

Council

MATSUDA Yuichi	ANMA Soh	HIROHA Kiyoshi
OGURA Nobuko	NAKASEKO Takashi	YAMADA Jiro
YAMANOI Takeo	SASAKI Toyoki	OHSHIMA Teruo
HIRABAYASHI Katsutoshi	TANAKA Hiromi	KAWAKAMI Takashi
NAKAJIMA Hiroshi	KONDO Nobuyuki	SUGINOME Hiroshi
MUNEZANE Keiko	OHMORI Shigeo	HIGETA Minoru
	OCHI Hideo	SAWAMURA Kozo

Chairmen of Local Sections

<i>Hokkaido</i> : HASHIMOT Seiji	<i>Gifu</i> : MATSUI Tatsuya
<i>Iwate</i> : SATOH Toshihiko	<i>Toyama</i> : WAKABAYASHI Keinosuke
<i>Akita</i> : OKADA Mitsuyuki	<i>Ishikawa</i> : MASUE Shunzo
<i>Yamagata</i> : MURAKAMI Katsutarō	<i>Kansai</i> : ABE Kazuyuki
<i>Miyagi</i> : SHOJI Komao	<i>Kyoto</i> : SAITO Junsei
<i>Fukushima</i> : NAKAJIMA Masao	<i>San'in</i> : MINATO Kanoh
<i>Echigo</i> : SATOH Ichiei	<i>Fukuoka</i> : GONDO Taro
<i>Shinano</i> : GAMOH Akito	<i>Higashi Kyushu</i> : NOGUCHI Akito
<i>Yamanashi</i> : OHSAWA Isaburo	<i>Kumamoto</i> : NISHIZAWA Ken'ichi
<i>Shizuoka</i> : ANMA Soh	<i>Miyazaki</i> : UOMOTO Sadayoshi
<i>Tokai</i> : ONOE Noboru	

The Ascent of Kula Kangri and Crossing from Lasa to Chengdu (1986)

Kazumasa Hirai (Kobe University)

Prologue

In 1986 Kobe University sent a scientific and mountaineering expedition to Tibet, whose purpose is to scale Kula Kangri (7554m) and to do scientific investigation in the East Tibet and Si-Chuan Range along the Chuan-Zhan Road. Kula Kangri is located near the border between Tibet and Bhutan and she had been the second highest virgin peak in the world.

We got the permission of Kula Kangri in the end of 1984 after continuous and strenuous effort of 7 years. Immediately we dispatched a reconnaissance party consisting of 3 members, T. Ogata, H. Hasegawa, and H. Ozaki, in April 1985.

By the help of many Chinese friends, the permission to do scientific investigation and to pass through from Lasa to Chengdu was finally given in the end of 1985.

The expedition party consisted of : I myself as the chief leader, 12 climbers (leader : Okaichi), 8 scientists (Leader : Prof. Naito). 4 TV and Newspaper reporters, and, in addition, 17 Chinese including 5 climbers as cooperators and 4 scientists of *Academica Sinica*. All Japanese climbers are selected from the Old Boys and students of Kobe University Alpine Club and scientists are from the staff of Kobe University.

Ascent of Kula Kangri

On 12 March 1986 all members, 25 Japanese and 17 Chinese, gathered together in Lasa. By using 3 trucks, 2 jeeps, and 2 micro-buses, we arrived at the Base Camp at 4,450m on 17 March. It was pretty cold and a freezing wind blew always. By using yaks and horses, the load was transported in the following 5 days to the Advanced Base Camp (ABC) at 5,300m, which was set up besides the frozen glacier lake. In the meantime, some members pitched Camp 1 at 5,700m in the upper basin of the Kula Kangri glacier. The route from ABC to C1 is very long and hard to walk especially on the tongue of the glacier. In this part 5 Chinese young climbers devoted themselves to carry load. It is about 20 km from BC to C1, from where the west ridge begins.

The route up to the west ridge was cut on the steep ice wall of c. 400 m. After 5 days strenuous efforts against violent wind we could manage to negotiate the wall by fixing ropes. Part of this wall was at nearly 70 degrees. Almost

every day a violent wind blew and we could climb only at a short period when the wind lulled. On 1 April C2 was finally pitched at 6,200 m on the west ridge. The west ridge rises stepwise from C2, and it has many steep cliffs and big and small crevases. On 11 April Camp 3 was set up at 6,800 m.

It has been already known by the report of the reconnaissance party that the rock face about 70 m high is located at c. 7,000 m and it would be the most difficult obstacle to the summit. About 300 m up from C3 the rock block rises, which is not sound and seemed to be difficult to climb. Fortunately we could find a traverse route on the Bhutan side and, after traversing 250 m, a steep snow slope to the summit ridge was found. The final camp had to be pitched by leveling the snow slope to make a space at 7,100 m.

On 21 April the assault party consisted of Itani, Sakamoto, Ozaki, and Ohtani, departed from C4 at 10:00 a.m. (Beijing time). The weather was fine, while it was very bad the day before. The temperature was about -30°C . By negotiating the ice slope of c. 40 degrees covered by a little snow, they reached the summit ridge at 12:00. From here the knife ridge continued to the summit. A huge cornice on the ridge threatened them. The wind was gentle. All members in BC, ABC, and other camps watched them and made contact by transceiver. At 4:15 p.m. they succeeded to climb the summit of Kula Kangri, 7,554 m. The summit was so small pinnacle, that they could not stand at the same time. There was no space but a man. They stayed there about an hour. They enjoyed the splendid panorama. Especially the view of Bhutan Himalaya including Ganker-punsum (7,541 m) could be seen. Ohtani, staff of the TV Asahi, took video movie all process to the summit. They returned back to C3 at 8:30 p.m.

The next day, 22 April, the second assault party consisted of Morinaga and Hasegawa, succeeded also to climb the summit again. They reached the summit at 2:15 p.m. and returned back to C3 at 6:30 p.m. Very luckily it did not blow wind and it was fine these two days, while it was not so good weather in the other days. All members returned back to BC on 28 April and to Lasa on 6 May.

From Lasa to Chengdu

On April 15 the natural scientists group, Prof. Naito and other 3 Japanese together with 4 Chinese scientists, had already left BC to Chengdu.

The other scientific members and mountaineers, Japanese and Chinese altogether 17, departed Lasa, May 10 by using a jeep and a bus. The following article is followed by this party.

Soon after starting from Lasa, the road was partly under construction and we

were forced to make a detour. Furthermore, our jeep and bus have a blowout several times. So we stayed at Gongbujianda on May 10. May 13, we passed Seqi-la (4,320 m), from where we expected to see Namcha Barwa and Gyala Peri. However, it was cloudy and snowy and we could see nothing. From Dongjiu to Tongmai, we had to pass the very dangerous place, where there are always a landslide and a rockslide. Traffic in this place is very often blocked. Bomi will be the paradise in the East Tibet. Apple flowers, peach flowers, beautiful forest, and gigantic mountains ca. 6,000 m around here all refreshed us. May 18, after an hour from departure from Basu we crossed the Lu-jian (Salween) by a short bridge. The stream is muddy and violent. After passing Dongda-la (5,000 m), the road branches to the north and the south. We took the road to the south. May 19, we crossed two rivers, the Langchang-jian (Mekon) and the Jinsha-jian (Yangtze). The Jinsha-jian is wide and not so violent compared with other two. We stayed at Batan 2 days. Because of many friendly people, we had a good impression to this town as well as Bomi. May 21, we enjoyed the finest landscape in this route. Many unnamed peaks over 5,000~6,000 m seen from the Litan plane attracted us very much. May 22, many gigantic peaks around Miniya Konga in Daxue mountain range could be seen, and we arrived at Kangdin. May 25, at Yaan we could meet again with the advanced scientific party. May 28, we arrived at Chengdu.

—The International Alpinists' Symposium—

August 20-22, 1986

MATSUMOTO DECLARATION

It has been a century since an Englishman called William Gowland named the mountains situated in the middle of the Japanese archipelago the "Japan Alps". In that commemorative year of centenary, mountaineers from all over the world assembled in the City of Matsumoto, the Mountain City of Japan, to hold the International Alpinists' Symposium. For three days, active discussions were carried out under the theme of "Man and Mountain" with international perspectives. Through the discussions, we have reconfirmed that mountaineering is the best teacher of Nature for the development of our minds and bodies. In the midst of a remarkable progress of the civilization, to learn from the Nature, to challenge difficulties, and to probe the unknown world are the activities which truly belong to the human beings. Towards the 21st century, Mountaineering will assume a greater importance and its revitalization is necessary. With the above in mind, we hereby declare :

1. that, in the age of mass mountaineering, in order for everybody to enjoy safe mountainclimbing with the cooperation of alpinists from the world, education for mountaineering with new perspectives should be promoted and preventive measures for mountain accidents be reinforced.

2. that, for the new development of the world's mountaineering culture, exchanges and cooperations of mountain climbing organizations across the borders be vitalized. Especially those countries which are involved in scientific research on mountains, improvement of mountaineering technology, and prevention of accidents in an advanced manner are expected to play an important role.

3. that, untouched mountain sceneries on the planet of earth be a common treasure of mankind incomparable to others, and that some specific policies be worked out to pass that on to the next generation in compliance with the situations of individual countries as well as protection and harmonious utilization of the treasure.

4. that, with this Symposium as a landmark, Nagano Prefecture be the place of exchanges and training for mountaineers of the world, since the prefecture possesses the "Japan Alps", which enables us to enjoy various types of mountaineering, as well as different research institutes on mountains. As a part of programs of this kind, it is recommended that a general assembly of the UIAA

be held in the City of Matsumoto.

The above four points are to be widely promoted to people.

In commemorating the first international symposium of its kind, we, the participants of the Symposium, call this the "Matsumoto Declaration" and sincerely hope that this declaration is widely understood and is served its purpose among all the people concerned.

August 22, 1986

WAGO Shoji
Mayor of Matsumoto
President, International Alpinists'
Symposium

International Alpinists' Symposium

It has been a hundred years since the name "Japan Alps" was given to these mountains which have been the main stage of modern mountaineering. To commemorate the occasion, the International Alpinists' Symposium was held through August 20th to 22nd here in Matsumoto City in Nagano Prefecture, the gateway to its surrounding Alps. Twenty and more, internationally known alpinists, from 9 countries took part in the symposium as lecturers. Under the theme of "Man and Mountains", the relationship between man and mountains was discussed in depth and treated such aspects as nature conservation, high altitude sickness, education and safety mountaineering, status quo and future prospects of world mountaineering, etc. Since this international symposium was the first of its kind took place in Japan as many as 1,500 people gathered from all over Japan.

At the symposium it was reported that the increased number of climbers and trekkers has caused nature and environmental disruptions and gave adverse effect on inhabitants' lives at Himalayan and other mountain areas. Most of participants have confirmed that the international exchanges were necessary in order to level up world mountaineering.

On the closing day of the symposium "the Matsumoto Declaration" was adopted based on the recognition that "mountain climbing is the best natural teacher which encourages sound development of our mind and body" and proclaimed the promotion of mountaineering education, the prevention of mountaineering accident, the promotion of international cooperation to enhance the mountaineering culture, the protection of nature of mountains as the common property of mankind

to the people of the world.

To commemorate this symposium Sir Edmund Hillary, the first climber to the summit of Mt. Everest, visited Matsumoto on August 10th and gave his special lecture "Himalaya and I" and he deeply impressed the audience.

Special Lecture

Mountaineering History in Japan—In Commemoration of the 30th Anniversary of the Ascent of Manaslu—

by IMANISHI Toshio, President of the Japanese Alpine Club

Mr. Imanishi divided the modern mountaineering history in Japan into following three periods.

1. After the Meiji Restoration to World War I

This period saw active adventure mountaineering in the Japan Alps as the idea of mountaineering for mountaineering became popular.

2. After World War I to World War II

By the influence of Japanese mountaineers who climbed the European Alps, the word of "Alpinism" had become known among mountain lovers and mountaineering in snow season became popular.

3. After World War II

The period mountaineering in Himalaya by Japanese.

He put an special emphasis on the successful ascent of Mt. Manaslu in 1956 by the members of Japanese Alpine Club which enlightened the fire of hope in Japanese mountaineering society. At the time of the Mt. Manaslu expedition, which led himself to the first Japanese climber who reached to the summit of 8,000 meters' facilities and transceivers were not well developed like today. He also introduced his experience through hardships with Himalayan natives, who believed climbing that mountain was to infringe holly mountains.

He further talked about present mountaineering in Japan and said "Japanese climbers are always in action in Himalaya and making expeditions to major high peaks of 5 continents and even women climbers are active at Mt. Everest. Nowadays climbers have come to climb mountains in Alpine style. It looks economical and rational on one hand, but climbers must know their abilities and physical strength and seek for safety in mountaineering. Expedition means to return safely."

Special Lecture

The 30 Year Mountaineering History in China

by Shi Zhan Chun, President of Chinese Mountaineering Association

Mr. Shi reported the modern mountaineering in the People's Republic of China which aimed at expedition and physical exercise has relatively young history of 30 years and Chinese Mountaineering Association was established in 1958.

He pointed out three characteristics of Chinese mountaineering.

1. Challenge to high peaks

Only four years after the modern mountaineering drive had started in China, Chinese climbers conquered the summit of Mt. Chomo Lungma (8,848 m) in 1960. In 1975, 9 attackers including a woman conquered Mt. Chomo Lungma. This is the largest number of climbers who conquered the summit in expedition records.

2. Practical cooperation between scientific research and mountaineering.

In 1959, Mt. Minya Konka-Party a scientist of Peking University participated and made his researches on weather, glacier, and land. At Mt. Chomo Lungma scientist made researches three times and received awards from the central government.

3. Mountaineering among ordinary people is not popular and basic technics are not sufficient. But China has a good future prospect.

In the last stage he stated. "From now Chinese Mountaineering Association will encourage its members' mountaineering activities and promote wide exchanges with mountaineering associations of the world. Now we are promoting the construction of the mountaineering training center out of Peking City. So through the activities at this center we want to contribute to the development of mountaineering in Asia as well as the world over."

Keynote Speech

First Ascent of Kangchenjunga and Comments of Nature Conservation from a World Traveller

by Norman Hardie, Ex-President of the New Zealand Alpine Club

Mr. Hardie introduced his activities at Nepal as a director of the Himalayan Foundation established by Sir Hillary, after he conquered the summit of Mt.

Kangchenjunga for the first time, as a vice leader of the British Party of 1955. He showed slides of destruction of forest in the interland of Nepal and appealed. "In 1954 these slopes were all covered with trees, but trekkers had come to visit there and cut down trees for firewoods and building materials. Thus the supply of lumber drastically decreased. Trekkers should bring oil and gas. And at the same time what we need now is a large scale tree planting program". He also introduced that the beautiful sceneries have been ruined by garbage of travellers.

He spoke his travel experiences to Antarctica, Kenya of Africa, Japan and America with slides.

As a conclusion of his lecture he appealed on the environmental protection as follows ;

"Through my many traveling experiences I saw human beings were destroying environment. We should control the increase of population. We should educate our children to love our motherland. Politicians should build policies based on a long term point of view, not only 4 to 5 years short term, but for 40 or 100 years long term point of view. Those who love mountains and those who climb mountains have much opportunity to be in nature. So I hope such people will work wisely for the protection of animals, plants and the beauty of natural scenes."

Special Lecture

Effects of High Altitude Sickness to Man

by Charles S. Houston (USA), Professor Emeritus, University of Vermont

Dr. Houston introduced an essay a Japanese buddhist priest Kūkai wrote in 814 and other documents on mountain disease till the end of 16th century. The researches on high altitude sickness became active since the opening of this century, thanks to the invention of a depressure room. Especially in these 20 years such researches made a remarkable progress as many parties were sent to Himalaya, Europe Alps, and North and South America. Through his experiments using a depressured tank which were taken place prior to the Operation Everest of 1946 and 1986, he proved for the first time that a man had an enough ability to ride a bicycle at such high altitude as the top of Mt. Everest (8,848 m).

He explained today what we call high altitude sickness will be categorized into following 5;1—acute high altitude sickness, 2—high altitude pulmonary

edema, 3—high altitude cerebral edema, 4—high altitude subarachnoid bleeding, and 5—chronic high altitude sickness. The acute high altitude sickness is found among 15% of people who rushed to climb up to 2,500 meters high. The high altitude pulmonary edema might be found at skiing area of 2,700 meters high and one out of 10,000 caught by this sickness would suffer seriously and might lose one's life. The high altitude cerebral edema is more dangerous, and the high altitude subarachnoid bleeding is found over 5,000 meters high level. He explained the cause of each case and effects and cure measures.

He suggested. "Climb up slowly and if you feel illness, climb down as early as possible." Sick people should consult with a doctor before hand." and he stated. "A person who is healthy at a sea level can adjust himself to 3,000 meters high."

Session 1 Modern Climbing

The Education and the Safety in the Mountain Climbing

On one of the most important subjects of present mountaineering is the safety and the education, Mr. Anselme Baud, a French instructor at Ecole Nationale de Ski et d'Alpinisme, Mr. Akio Yanagisawa, a Japanese specialist at National Training Center of Mountaineering, Ministry of Education, Science and Culture, Mr. Xu Jing, Vice President of Chinese Mountaineering Association, Mr. Nalni D. Jayal, Vice President of Indian Mountaineering Foundation, and Dr. Robert Schoene, Associate Professor at Department of Medicine, University of Washington, Seattle, reported each country's situation and researches. Every authority stressed that the safety came first in mountaineering.

Mr. Anselme Baud explained the development of mountaineering, rock-climbing, hiking, and skiing in Europe from the view point of Alpinism. He warned that the number of such people who love trekking in mountains and skiing tours is much increasing, while their recognition of danger has been insufficient, that the lack of information, and incomplete equipments would threaten the safety, and that the sufficient information, equipment and physical strength were needed. And on Ecole Nationale de Ski et d'Alpinisme, established in 1946 at Chamonix he reported. "This school educates ski instructors and mountaineering guides. There are 8,000 instructors and 600 guides in France. This school also educates nature conservation guides."

For mountain rescue the association of rescue for mountain accidents was

organized in 1910 and later in 1956 the international organization was born. He also introduced the present situation of rescue activities where well trained members and doctors work together using helicopters. He recommended that it was a wise choice to be insured since rescue cost by private rescue would be imposed on a climber.

Mr. Yanagisawa pointed out. "Mountaineering is filled with dangers. Climbers should recognize that man's existence is small." Based on the research and investigation at the National Training Center of Mountaineering, Ministry of Education, he reported that the energy consumed one day schedule of mountaineering club of university under low oxygen density and low temperature would be two times more as that of full marathon. Moreover since one has to climb mountains with a heavy load on one's back, the energy intake will be smaller than usual. So under such conditions even a captain's ability of mountaineering club will become weaker than a member of other sports club. Thus he stressed the importance of educating leaders. In these days from boys to middle and high aged climbers were diversified. So he also insisted the need for a moderate organization and education system for such people.

Mr. Xu Jing stated that the people's Republic of China put priority on the safety of mountaineering based on the idea that people are important property of the nation. Quoting the success and failure of mountaineering activities of Chinese Party he reported the present situation and idea of China. Overcoming the accident of Minya Konka, 1957, he reported how China led its party to the success at Chomo Lungma in 1960 and 1975. He presented several factors as the cause of an accident, i.e., which are technique, adaptability to higher altitude, experience and judgement, namely low technical composition. He also recognized the importance of scientific technology and knowledge and of rules of the party. He insisted that it would be wise to give up mountaineering when one could not find the safety prospect.

At the targets of education from now on he pointed out, 1—to enhance technical composition, 2—to strengthen the party's discipline which enables quick responses to orders 3—to develop a team work in keeping careful watch to help others in a party.

Mr. Jayal explained briefly about the history of mountaineering in India and introduced the Himalayan Mountaineering Training Center which was established at Darjeeling to commemorate the achievement of Tenzing Norgay who succeeded to reach to the top of Mt. Everest with Sir Edmund Hillary for the first time under the British Party in 1953. There are four courses in this center including a course for women which provide climbers with proper education with inexpensive

cost, thanks to the assistance from the government. Such training centers are also built at Kashmir, Garhwal, and West Himalaya. And in 1958 the Indian Mountaineering Foundation was established to provide climbers with equipments, publications and rescue activities. In the fields of rescue and telecommunication, the Indian Air Force, Army, Police, and Training Centers are playing important roles.

Dr. Schoene introduced 5 cases of recent medical researches at higher altitude including the project he participated. Judging from the results of "the Operation Everest" that Dr. Charles Houston directed and the research at Mt. Mckinley of Dr. Peter Hackett and others, he explained that men could maintain their physical mechanism even at high altitude like Mt. Everst. He stated. "I want to deepen the research on the process how men adapt their bodies to a higher place. In next stage I'll try to harmonize the results of these researches and adventurous minds attracted by mountaineering."

Session 2 Mountaineering Situations in the World

Present Problems and Future Outlook

Representatives of 9 participating countries exchanged their ideas from their own view points. The core of discussion was concentrated on the environmental destruction at Himalaya and other places in the world and conservation measures, and on mountaineering accidents and their prevention, and on the importance of international exchanges. So they gave us important suggestions to think about the main theme of the symposium, "Man and Mountain."

Followings are summary of exchanges of opinions of each participant from 9 countries.

Present Situation of Destruction in Nature

At first the representative from Nepal reported the present situations of destruction in nature at Himalayan area. His Highness Kumar Khadga Bickram Shah, President of the Nepal Mountaineering Association, pointed out the bad effects of mountaineering, forest destruction and pollution by the trash at camp sites. Especially due to the increased consumption of firewood by climbers and trekkers over 25,000, the pace of deforestation was doubled. Mr. Tek Pokharel, Secretary General of the Nepal Mountaineering Association, also reported that recently increased trekkers who walked off the rail were stepping into the vulnerable nature of Himalaya and that such situation was mostly was mostly seen among

trekkers who came separately and that even the existence of hotels, inns, and coffee shops would give adverse effects on nature.

Mr. Nalni D. Jayal, Vice President of the Indian Mountaineering Foundation explained with slides. "At high places like Himalaya it takes 6 years for a birch tree to grow by 2 cm and in the case of a needle juniper takes as many as 20 years, and extremely weak to the destruction."

Mr. Cho Sang Tae, President of the Nature Conservation sub-committee of Korean Alpine Federation also reported that in the Republic of Korea, as mountaineering became popular the environmental destruction at mountain areas are increased. His Highness Kumar Khadga Bickram Shah appealed that lessons at Himalaya, 30 years history of the environmental destruction, were common subject to many areas of the world to which some measures must be taken.

Nature Conservation Policies

The representative from Nepal introduced that as a nature conservation policy Nepal established a nature park in Himalayan area and recently adopted a new conservation policy under the cooperation and participation of inhabitants which would bring benefit to them and enhance their living standard. "The typical example of the new policy by the order of the King of Nepal is seen in the Annapurna Conservation Area, national park. Partly assisted by foreign countries a foundation was established for this park." "Based on the foundation multilateral projects are being promoted. Tree planting and building an oil terminal are to develop substitute energy to firewood. People in Nepal are confident that these projects will be good models of development among progressing countries". The representative reported. His Highness Kumar Khadga Bickram Shah also introduced the mountain monitor system on ecosystems sponsored by the government and voluntary groups.

Mr. Jayal from India reported that since 1983 India has been keeping climbers out from the top and its surrounding area of Mt. Nanda Devi, 7,816m as a sanctuary. Dr. Charles Houston, Professor Emeritus at University of Vermont, praised the closing of Mt. Nanda Devi as a "courageous decision."

Mr. Jayal proposed. "Because climbers gather to a limited number of mountains, environmental destruction will take place in those limited areas. There are many attractive middle class mountains in the world. So if limited number of climbers attacked such mountains with the alpine-style of quick and fast, the adverse effect would be mitigated."

Mr. Norman Hardie, Ex-President of New Zealand Alpine Club reported on

his country's management of national parks that each national park has its own committee and it works after discussion. He introduced that each committee consisted of the representatives of mountaineering clubs already formed. He also stated that because Sir Edmund Hillary had been doing various kinds of activities in Nepal, a number of people are willing to cooperate for the nature conservation. Mr. Anselme Baud, Instructor of Ecole Nationale de Ski d'Alpinisme reported. "In France getting the cooperation of mountaineering guides we often go trekking in a small group."

Disaster, Accidents and Their Prevention

Maj. Gen. Ali Mirza, President of Alpine Club of Pakistan expressed condolence to the families of climbers who died of mountain accidents happened continuously at K2 due to the bad weather in summer 1986. He stated. "This year we have lost experienced climbers. Especially I hope that beginners will be given full consideration to their physical strength." Young and promising Pakistan climber Nazil Zabil analyzed that the tendency to rush to 8,000 meter high mountains invited many tragedies. Maj. Gen. Ali Mirza reported that in Pakistan the rescue system by Air Force helicopter has been established.

Accident and Law Suit

Dr. Houston from the United States reported that there were many law suits on mountaineering and skiing accidents and that such situation became more serious. According to him there has been a case that manager of skiing area was forced to pay as much as \$2,500,000 compensation although a skier died, because he ignored the caution of the manager of skiing area and that a person died of heart attack after attending a meeting by the order of the government. But the government was accused by the reason that this accident happened under the sponsorship of the government. There was a trekking company which went bankrupt due to the heavy compensation. And some party had to give up overseas expeditions due to the hike of insurance cost. Dr. Houston said, "I think people should not easily present such cases to the court." He also expressed his fear that such phenomena would spread to other countries.

International Exchange and Future Mountaineering

On the ideal mountaineering in future, Nepal representative, His Highness Kumar Khadga Bickram Shah stated. "It is important to respect the unique culture of its own people." S.R. Sharma, Secretary of Nepal Mountaineering Association said. "King of Nepal will deepen the friendship with climbers and

Nepal will be an international peace zone. He will open the door of mountains in Himalaya."

Maj. Gen. Ali Mirza from Pakistan also stated. "Mountaineering conditions in Pakistan have been moderate and we will warmly welcome no matter how many parties we may have."

Mr. Xu Jing, Vice President of Chinese Mountaineering Association expressed. "We will liberalize mountains in China for climbers. And we want to establish a mountaineering center at outside of Peking to provide youngsters with technique guidance and to promote international exchanges."

Dr. Yasuo Sasa, Ex President of the Japanese Alpine Club stated. "For the nature conservation of high mountains, developed countries should give aids to the countries which have high mountains." He also recommended to establish an international mountaineering information center which will collect various kinds of information related to mountain climbing in the world. Mr. Kamata, President of the Japan Mountaineering Association said. "Since Japan sends many expedition parties to overseas we should cooperate with overseas countries in the field of accident prevention and others."

Mr. Cho Sang Tae from the Republic of Korea stated. "I hope the conquer of K 2 this summer 1986 climbers in our country will be a milestone catch up with mountaineering in world top level countries. For that purpose we want to promote exchanges with other countries."

In addition to the nature destruction, some overseas expedition parties and trekkers are inviting confusions to the lives and customs of inhabitants, while they are bringing wealth to the region, said both Nepal and Pakistan representatives. "We are suffering from the inflation." "Children became to ask candies to trekkers. Educating children is of course important, but trekkers who are adults should be more careful." said a Nepal representative.

"Some party scatters huge amount of money. But they should recognize the difference between their country and a visiting country. Some party violated law at Karakorum. It's a shame as a climber. To attain private person's honor other climbers cannot climb mountains; such problems are also happening. As everyone is able to climb the Japan Alps I hope it will come soon when people can freely climb any mountains." said a Pakistan representative.

Dr. Houston said, "A mountain is no longer a place to die for the honor of a nation or a climber." During the session all the participants offered one minute silent prayer to the climbers who died in mountains.

Session 3 Mountains for the Next Generation The Great Northern Alps

by Kunio Tanaka, Professor of Geology, Department of Liberal Arts, Shinshu University.

Prof. Tanaka explained. "The Northern Alps area which is located just in the center of Japan proper was under the sea through the Paleozoic Era to the Mesozoic Era, 400 million to 100 million years ago. Piled up clayslates, cherts, and other sedimentary rocks upheaved by tectonic movements formed the basis of the Northern Alps. Through the latter half of the Mesozoic Era to the first half of the Cainozoic Era, various kinds of igneous rocks were newly created. The upheaval of the Northern Alps started during the Quarternary of the Cainozoic Era, that is about 600,000 years ago."

He emphasized. "The attractiveness of the Northern Alps is derived from the volcanic activities, glaciers, animals and plants which have academic importance, such as snow grouse and alpine plants. The distribution areas of such animals and plants are limited. We should preserve these natural environments and hand them to our next generation."

Session 3 Mountains for the Next Generation Mountaineering in the 21st Century

by Tsuneo Shigehiro, Member RCC II

Mr. Shigehiro told the audience how he started mountaineering, first he was collecting insects. He found his interest in rock-climbing in Europe when he was in high school. Thus he challenged rock climbing at Mt. Hotaka of the Japan Alps and others when he was university student.

As a member of 1973 Everest Party he visited Himalaya for the first time. Later he participated in major expeditions to Nanda Devi, K2, Kangchenjunga and so on. With such abundant experience as a climber he stated. "To join to an expedition over high peaks in Himalaya one should have physical strength and strong will power. But at the last stage his strong will power to stand at the top of the peak is the necessary support. Of course we need a right judgement based upon our daily training and experience. There is nothing more important than to know and to overcome oneself."

Referring to the mountaineering of the 21st century he said. "Even in the next century there will be no major change in mountaineering, because the mountaineering is basically the sports of experience, based upon the accumulation of experiences one can reach to the certain level." "The more I face to the nature, the more I know the greatness of the nature and the more the excitement of my mind to the mountains will be enhanced. I will continue to climb mountains finding interests on various things."

Memorial Lecture about "Nature"

by Eizaburo Nishibori, Ex President of the Japanese Alpine Club

"In order to train weak mind and body since childhood I started mountaineering, rockclimbing, and skiing. And then I wondered why a mountain attracted people. Finally I reached to the conclusion that a mountain is an only remaining thing in our nature that has never been changed and has been a symbol of the great nature." Mr. Nishibori explained his involvement in mountaineering.

His basic attitude to climb mountains is not to fight mountains but to live with mountains, believing that mountains will train man's mind and body, namely climbers are living with mountains.

What drive him to mountains is his strong spirit of inquiry. There had been new discoveries and joys wherever he visited; first in the Japan Alps and Himalaya, later in Antarctic. The uncertainty which we will have to the unknown world can overcome by the courage based on the creativity and the belief that someone is always supporting us. He has realized the unknown in nature have been proved by the theory of science encouraged by the strong spirit of inquiry.

As to the nature conservation he once faced a dilemma because he was a technologist who put artificial factors into nature. But finally he noticed. "There is nature even in a small experimental tube. And technologies owe to the benefits of great nature. Resources are the blessings of great nature, and the technologies that make them worthwhile for useful practices only become a reality when it abides by the law of great nature."

Therefore he said. "It's a shame for technologists to destroy nature. It can also be said to climbers. Climbers should be brave enough to make good models in protecting our nature." Lastly he appealed. "Do not climb mountains because

there exist mountains but climb mountains because we are a good humankind.”

International Alpinists’ Symposium Special Lecture “Himalaya and I”

**by Sir Edmund Hillary, First climber to the Summit of Mt. Everest.
(New Zealand)**

Sir Hillary first talked about mountaineering and said. “Mountaineering has been the happy experience throughout my life. Of course I was faced with fear. But mountaineering gave me more ability and courage than usual, not only to conquer the mountains but also I learned the method to overcome such fear.” He showed his view of life and told us the attractiveness of mountaineering.

As to the first ascent of Mt. Everest on May 29 th, 1953, he explained in detail with slides of ice walls, crevasses, and others that people could never approach. The first ascent of Mt. Everest under such hard conditions gave different meanings to each member. His idea was just to do something for the people of the Everest area. He made the Himalayan Foundation and so far built 25 schools, 2 hospitals, and 12 clinics. He told that he had been educating youngsters there to be doctors and making efforts to propagate the basic medical knowledge. He concluded his lecture saying. “I am most proud of them.”

In reply to questions from the audiences, he commented on the new view that G. Mallory was the first ascent of Mt. Everest in 1924 as follows, “He was a great hero for me. It was not certain whether he reached to the summit, but I myself want to believe that he was the first person who ascended to the summit. The most important thing is to climb safely and come down safely.” He recalled the moment he stood on the summit together with Tenzing Norgay and said. “When I extended my hand to shake his hand, he opened his arms to my shoulder. We threw ourselves into each other’s arms.”

ウェストン年譜の作成について

島田 巽

ウォルター・ウェストン師の日本初来日が、1888年（明治21年）4月1日、神戸入港—大阪到着と確定できたので、昭和62年のこの日に満100周年を迎えることになる。その機会に新しい資料に依據して「ウェストン年譜」を作成しては……との考えが、私たち会員有志の間で急速にたかまり、とりあえず前半期分だけではあるが、本誌に載せてもらうことになった。その間の若干の経緯だとか、新資料発掘の興奮、年譜執筆の苦労などについて、世話役的な立場から記させていただきます。

* * *

日本山岳会でウェストン年譜が最初につくられたのは「山岳」第28年第3号（昭和8年11月刊）に掲載された黒田孝雄氏執筆の「ウェストン氏の杖の跡」であった。いかにも丹念な黒田さんらしく、当時として手のとどくかぎりの内外の資料に眼を通して編まれたものである。

それから42年後の昭和50年、本会の創立70周年記念事業として、山岳名著の覆刻を行うにあたり、その解題書用にウェストン略年譜を作る役割を、私自身が担うことになった。その際これまで一定していなかった聖職歴も調べておきたいと考え、日本聖公会史の研究者で、ウェストン師について関心を抱かれる垣内茂師を訪ねることになった。このときは、同師が英国国教会人名辞典“Crockford Clerical Directory”によって、ウェストン師の1883年から1911年までの聖職歴を確かめられた直後であったので、いくつかの教示を受けることができた。

ところが、その略年譜を公けにして7年後に垣内師から、また新資料が現れたので、修正が必要だとの連絡があった。このとき一番こまったのは、さきのCCDには、ウェストン初来日が1887年となっていたが、翌88年1月に離英前の説教を行ったという記録が出てきたから、やはり来日は1888年と判断するほかないことだった。なんとか早い機会に訂正したいと思いながら、ようやく昭和60年に小著『山稜の読書家』を公刊する際に、新規まきおしのつもりで、新しく略年譜を作成して、いくつかの誤りも同時に正すことができたのであった。その時よかったなと思ったのは、ウェストン師の初来日をはっきり正しく記載できたことである。

顧みて不思議とも思えるのは、私が新しい略年譜づくりを考えていた昭和60年ごろ、熱心な有志たちの手によって、つぎつぎに新資料が発見されていたのであった。その発見第一号が、この初来日の事実確定で、これは大阪府吹田市在住の川村宏氏の努力によるものであった。このニュースも私は垣内師を通じて、昭和60年

の2月に教えられ、早急な私の問い合わせに、川村氏から同氏が探し出された一世紀も前の長崎発行の英字紙“The Rising Sun and Nagasaki Express”のコピーが届けられた。入港船舶の一等船客名簿に、たしかに Revd. W. Weston とあるが、よくもこの小活字を探し出されたものと、その見当の鋭さに、私は舌をまかずにはいられなかった。

川村氏は、さらにもう一押し、当時の神戸又新日報で乗船の神戸入港を確認され、1888年4月1日、初来日と定められたわけである。これは大切なニュースなので、当時さっそく私は「山」(478号)で速報するとともに、私の略年譜にも記入させていただいた。川村氏は、関西テレビの報道第一線にありながら多忙の中で「近代登山の父W・ウェストンと神戸」を「神戸の歴史」第12、13号に寄稿され、新しい資料も提示された。

新資料の発見は、これで終わるのではなかった。つづいて川村氏は、同じ長崎発行の英字紙で、ウェストン師が同年10月17日長崎着のアンコナ号に神戸から乗船していた記事を見つけられた。これが重要な手がかりだということは、これまで捉えどころのなかった同師の九州とくに熊本滞在時代を解く、有力なカギと考えられたからである。

果たせるかな、翌61年3月、会員の安江安宣氏から、相呼応するような新資料の発見が伝えられた。岡山大学名誉教授の安江博士と私は、前年の秋に横浜のウェストンゆかりの地を訪れ歩いたことがあり、熱心な研究者だとは承知していたが、新たな発見は、これまた第一級の確定的資料であった。その内容については、安江氏みずから「山」491号に「ウェストンの来日第一報など」と題して詳しく報告されている。

安江氏が発見された資料は、ウェストン師自身が1889年1月3日付けで熊本から、英国聖公会・教会伝道協会(C・M・S)本部へ来日以来の活動状況を報告した、署名入りのものである。さきのアンコナ号での長崎着という点とも、ぴったり結びついて、これまで本会の熊本支部を煩わしても全く不明のままであった同師の熊本時代が、師自身の筆で明らかにされたのだから、これ以上の好資料は望めまい。C.M.S.機関誌“The Church Missionary Intelligencer and Record”という資料に標的を定められて探索された安江教授の学究的眼力に、私は驚き入った次第である。この機関誌は、関東大震災で全焼した東京大学中央図書館復興のために英国政府から寄贈された文庫のなかにあったという。

* * *

川村、安江両氏の資料探究の熱意に煽られながら、今こそこれらの成果を一つにまとめあげる好機ではないか、それには、どのような形にすればよいのか、と私も考えずにはいられなかった。折よく川村氏から62年1月末に上京するとの連絡があった。

川村氏には、その前に本会への入会をすすめ、会員杉田博氏の熱心な口ぞえもあって、すでに今西会長と私の紹介で入会申込みを頂いていたし、この機会に安江氏

をも加わえて、三人で相談してはどうかと考えた。幸いこの歓談が実現して 100 年記念の年譜作成の大筋が決まり、安江氏は詳細な調査成果を記したカード全部を川村氏に委ねられ、川村氏が年譜案を作成、それを一同で検討することになった。

次は、その年譜の掲載について担当の大森久雄理事の意見を聞くのが、当然の筋であった。これも問題なく同意され、細目については大森・川村両氏の直接話合いということで年譜作りは軌道に乗った。6 月いっぱい締切りというので、第一線の川村氏にはお気の毒であったが、5 月末には再び東京の国会図書館で、長時間にわたる最後の検討会議を持つことができた。これにはウェストンの足跡探索に永年努められ、貴重な発見をされてきた三井嘉雄氏にも、松本から出馬していただいた。

年譜の内容は、ご覧の通り詳細な註を加えて、私などの予想をはるかに超えるものとなった。そのため、掲載上の都合もあり、時間の制約もあるので、本号には、ウェストンの出生（1861 年）から最初の著作『日本アルプスの登山と探検』出版（1896 年）までの 35 年間を掲載することにした。

本会には私たち以外にもウェストン師に関心を抱かれ、調査研究を進められている会員諸氏が多い。この年譜について、それらの方々から、ご教示が得られれば幸甚である。

来日 100 年記念

W・ウェストン年譜

(文久元年<1861>—明治 29 年<1896>)

お読みになる前に

1. この年譜は、ウェストンの誕生した文久元年(1861)から、第1回の来日後に最初の著書を刊行した明治29年(1896)までとし、没年までは次号以下に譲ることとした。
2. 年譜は、すでに公開されている資料と、新しく発掘した資料を出来る限り集大成したものである。現時点での中間報告と受けとって頂きたい。
3. 日時や行程は「Mountaineering and Exploration in the Japanese Alps」(「日本アルプスの登山と探検」明治29年刊)を中心に、その他の著作や資料によって編纂した。
4. 解説は、出来るだけ新しい事実を紹介することとし、登山の状況など著書に述べられているものは割愛した。また、周辺資料に基づいて推論したケースも多々あるが、煩雑を避けるためその過程は省略あるいは略記し、資料名も省略した。
5. 重要な新事実については、出典を明らかにするため参考資料名を()内に記した。さらに『 』内は論文名とし、著者、書誌名、刊行年月の順に列記した。ただし、ウェストンの著作については、著者名を省略した。また、〇〇資料、書簡と記したものは、未公刊の個人資料である。
6. この年譜の作製に当たっては、ウェストンの事績を探究している編者3人の収集した資料を中心に、川村が執筆した。資料の読み違い、推論の誤り等の責任は全て川村が負うものである。
7. 全体にわたって、名誉会員島田巽氏の監修を受けたほか、「山岳」編集担当の大森久雄氏にも貴重な助言を頂いた。また、日本聖公会会史の研究者である垣内茂牧師は、快く未公開資料を提供して下さい。そのほかさまざまな形で協力頂いた方々に、厚くお礼申し上げたい。

昭和62年7月15日

編纂者 日本山岳会会員 川村 宏

同 三井 嘉雄

同 安江 安宣

文久元年 (1861)

12月25日……ウォルター・ウェストン (Walter Weston) 出生。

* ウェストンは、イングランド (England) 中部のダービー (Derby) 近郊にある、マイル・アッシュ・ハウス (Mile Ash House) で、工場経営者ジョン・ウェストン (John Weston) の6男として誕生した。

(Who was Who, 1929-1940) (Who's Who in Japan, 1914)

* ウェストンの家族関係については、これまで殆んどわかっていなかった。最近、日本聖公会歴史研究会の垣内茂牧師がダービー市に照会され、入手された資料からほぼ明らかになった。

それによると、父親のジョンは、嘉永2年 (1849) にエマ (Emma) と結婚した。夫妻の子供は、ジョン (John=推定 1851 生)、マーク (Mark=推定1852生)、ロバート (Robert)、チャールズ・フレデリック (Charles Frederick=1859-1884)、アルフレッド・ロレンゾ (Alfred Lorenzo 推定 1860 生)、ウォルター (Walter=1861-1940)、ウィリアム・アーサー (William Arthur=1863-?) の男児ばかり7人である。しかし、この後に弟妹があったかどうかはわからない。

* 父親ジョンは、ダービーのパラメント街 (Parliament Street) で、“弾力性のある帯紐 (elastic webbing)” を作る工場を経営し、明治4年 (1871) には150人の職工を雇っていた。ジョンはまた、慶応3年 (1867) から明治10年 (1877) まで市会議員を勤め、明治11年 (1878) に亡くなっている。しかし、一家の会社は「ウェストン・トンプソン会社」(Weston and Thompson Ltd.) として、明治25年 (1892) にはまだ存続していた。

* マイル・アッシュ・ハウスは、それほど大きくないヴィクトリア王朝風の館で、比較的近年にダービー市域となった Duffield Road, Darley Abbey に現存する。ウェストン一家は代々この館に住んでいたのではなく、ジョンの時代に他所から移って来たものらしい。そして、明治7年 (1874) までには、Uttoxeter New Road, 24 のハヴェロック・ビラ (Havelock Villa) に居を移している。

(Derby City Museum and Art Gallery 資料)

(明治4年 <1871> 人口調査, ダービー州図書館資料)

明治10年 (1877)

1月……ダービー校に入学。

(The Derby School Register)

* この時、弟のウィリアム・アーサーも一緒に入学している。

明治 11 年 (1878)

月日不明……1 マイル競走でダービー校の学校記録を樹立。

(The Derby School Register)

(Derby City Museum and Art Gallery 資料)

* ウェストンはダービー校で、クリケット、サッカー、漕艇に親しんだ。1 マイル競走のタイムは4分47秒で、このタイムはそれまでの学校記録を更新したものである。

月日不明……初めてスイス・アルプスを訪れる。

(『My Swiss and Japanese Mountaineerings』山岳 第五年一号
明治 43 年)

明治 12 年 (1879)

この年……Strutt Classics Scholar に選ばれた。

(Derby City Museum and Art Gallery 資料)

ストラット奨学金受給生と思うが、学業成績も優秀だったようだ。

明治 13 年 (1880)

月日不明……ダービー校を卒業。(The Derby School Register)

6 月 12 日(土)……ケンブリッジ大学 (Cambridge University) のクレア・カレッジ (Clare College) に入学した。(Clare College 資料)

明治 16 年 (1883)

月日不明……ケンブリッジ大学、クレア・カレッジ卒業。

(The Crockford's Clerical Directory, 1892)

10 月 25 日(木)……文学士 (B.A.) となる。(Clare College 資料)

10 月……リドレーホール (Ridley Hall) 神学校に入学。

(Ridley Hall Library 資料)

月日不明……スイス・アルプス再訪。

(『My Swiss and Japanese Mountaineerings』山岳 第五年一号
明治 43 年)

明治 18 年 (1885)

6 月……リドレー・ホール神学校卒業(Ridley Hall Library 資料)

月日不明……オックスフォード教区 (Oxford Parish) の聖ジョージ教会 (St. George's Church) で『執事』(The Deacon) となる。

(日本聖公会教役者名簿ほか)

月日不明……パーク州・レディング (Reading, Berkshire) の聖ヨハネ教会 (St. John's Church) 副牧師に任命された。
(『In Memoriam : Walter Weston』 By T.A. Rumbold, The Alpine Journal, Vol. 52, 1940)

明治 19 年 (1886)

月日不明……オックスフォード教区で『司祭』(The Priest) となる。
(日本聖公会教役者名簿ほか)

月日不明……兄ロバートとスイス・アルプスで本格的な登山を始める。
マッターホルン, プライツホルンに登頂。
(『My Swiss and Japanese Mountaineerings』 山岳 第五年一号
明治 43 年)

明治 20 年 (1887)

5 月 12 日(木)……文学修士 (M.A.) の学位を取得。
(The Crookford's Clerical Directory, 1892) (Clare College 資料)
* クレア・カレッジによれば『ケンブリッジでは、文学士 (B.A.) は手教科を払うことで、3 年後に文学修士 (M.A.) になれる』とある。

月日不明……ベルナー・オーバーラント初訪。ヴェッターホルンに登頂したが、アイガーとユングフラウは悪天候に妨げられて不成功。再びマッターホルンに登頂し、ツィナールとツェルマットを結ぶトリフトヨッホを越える。
(『My Swiss and Japanese Mountaineerings』 山岳 第五年一号
明治 43 年)

この年……「英国国教会伝道協会」(The Church Missionary Society=以後 CMS と略称) の宣教師として、日本伝道を決意。
(『In Memoriam : Walter Weston』 By T.A. Rumbold, The Alpine Journal, Vol. 52, 1940)
* この追悼文には『1887 年に彼は生涯で最も重要な決断を下した。CMS に所属して、宣教師として日本へ渡ることにしたのだ』とある。だが、なぜ故国を離れる決心をしたのか、伝道のためなら何処の国でもよかったのか、あるいは日本だから行く気になったのか、このあたりの動機はまだ謎である。

明治 21 年 (1888)

1 月 22 日(日)……聖ステパノ教会 (The St. Stephen's Church) で、

離英前の最後の説教を行なった。

(The St. John's Church 礼拝記録)

* 聖ステパノ教会は、聖ヨハネ教会が管理する姉妹教会であった。礼拝は聖ヨハネ教会の聖職者によって執行されていた。この日ウェストンは、マタイ伝第5章を引用して説教している。

- 2月10日(金)……宣教師バンコム (Rev. W.P. Buncombe) 夫妻とロンドンを出発し、訪日の途に就く。

(The Church Missionary Intelligencer and Record, March, 1888)

- 3月29日(木)……香港から英国汽船ロンバーディ号 (S.S. Rombardy) で長崎着。

30日(金)……同船で長崎出港。

(『Passengers』The Rising Sun and Nagasaki Express, Apr. 4, 1888)

- 4月1日(日)……ウェストン、同船で神戸着。(初来日)

(The Church Missionary Intelligencer and Record, May, 1889)

* ウェストンは「英国国教会伝道協会」の宣教師として、同僚のバンコム夫妻と日本へ旅立った。2月10日にロンドンを出港しているが、3月末の長崎着は当時としても時間が掛かり過ぎる。CMSの極東での本拠地だった香港に一時滞在していたのではないだろうか。

ともあれ、ウェストンが日本での第一歩を長崎に印したことは間違いない。港町をピンクに染め上げた満開の桜に迎えられ、美しい日本を心に焼きつけて、翌日神戸へと出港した。だが長崎はあくまで寄港地に過ぎない。初来日は目的地の神戸に着いた4月1日としたい。

* 神戸港に到着したウェストンは、ただちに大阪の川口居留地に入った。日本でのCMSの拠点は大阪だったからである。英国国教会系の伝道団体は、CMSのほか「英国福音伝播協会」(The Society for the Propagation of the Gospel=以後SPGと略称)、「英国海員伝道会」(The Mission to Seamen=以後MTSと略称)、それに「米国プロテスタント監督教会伝道局」(The Protestant Episcopal Church in the United States of America=以後PEと略称)が各地に拠点を築き、CMS、SPG、PEの3者は伝道の効率化を図るため明治20年に「日本聖公会」を組織していた。

* ウェストンは熊本へ赴任するまでの6ヵ月間、バンコム夫妻の住宅に厄介になっていたという。川口居留地36区画のうち、CMSは6区画を占めており、教会、神学校、宣教師の住宅などがあつた。バンコムの住宅は居留地18番となっている。この区画は大阪聖三一神

学校で、校舎の一部を居住区にしていたのであろう。

(Church Missionary Intelligencer and Record, May 1889)

* 当時、新任宣教師の日本語学習には日本人教師を雇うのが普通で、ウェストンも語学教師との会話や先輩宣教師の経験談から、日本の地理、生活や習慣、仏教とキリスト教の現況などを学んだと思われる。

6月16日(木)……大阪土佐堀青年会館で開かれたキリスト教演説会で講演。
(基督教新聞 明治21年7月4日)

* この演説会は、第8回三一神学校生徒宗教演説会で、聴衆はおおよそ500人だった。ウェストンは「無言の書」(Wordless Book)と題して英語で講演した。

6月30日(土)……神戸で居留民対抗のクリケット試合に出場。

(The Hyogo News, July 2, 1888)

* このゲームは、The Club 対 Scotland and Professions で、The Club の方は神戸居留地に結成されていたクリケットクラブであろう。ウェストンは S & P のメンバーとして出場しているが、チームの構成はよくわからない。得点は106対82で、S & P の勝ちである。ウェストン自身は、1得点を挙げているだけで、このゲームではそれほど活躍していないようだ。

10月15日(月)……神戸から英国汽船アンコナ号(S.S. Ancona)に乗船して長崎に向かう。

17日(水)……長崎着。

21日(日)……長崎から海路熊本へ。百貫港沖で下船、徒歩で熊本着。

(The Church Missionary Intelligencer and Record, May 1889)

* ウェストンは長崎でブランドラム(Rev. J.B. Brandram)と落ち合った。同じCMSの宣教師ブランドラムは、姉(Miss E. Brandram)と明治17年(1884)に来日、熊本を中心に宣教活動をしていた。九州地方に派遣されたウェストンも、熊本での宣教を命じられたのである。

任地へブランドラムと同行することになったウェストンは、長崎で天候の回復を待ち、熊本へ船で向かった。しかし、この日も海は荒れ、8時間の船旅の後、はしけに乗り換えたり、浅瀬を歩いたりして百貫港に上陸した。さらに7~8マイル歩いて、やっと熊本に着いたとその苦労を記している。百貫港は坪井川の河口付近にあった。

* 当時、熊本区紺屋今町四十六番地に「聖十字教会」が建設されていた。ブランドラム姉弟は、公立学校で英語を教えながら宣教に当たっていたのである。
(熊本聖三一教会百年史、長崎聖公会略史)

* ウェストンは熊本での最初の6週間をブランドラム姉弟の住宅に同居、その後小荷物運送会社の2階で寝室、居室2部屋の住居を見つけて移った。そして、ブランドラムが英語を教えている学校で、その授業を分担することになったと、翌年1月3日付けでCMS本部へ報告している。

(The Church Missionary Intelligencer and Record, May 1889)

月日不明……ウェストン妻帯。

(『Alphabetical List』The Japan Directory, 1889)

* 「The Japan Directory」(以後「日本年鑑」とする)1889年版の人名索引に、次のような記載がある。

Weston, Rev. W. Kumamoto

Weston, Mrs. W. Kumamoto

「日本年鑑」の1889年版は、1月中旬に発売広告が出ている。逆算すると、明治21年の11月末頃までに妻帯していたことになる。この記載は1893年版まで、住所は大阪、神戸と替わりながら5年間続いていた。「日本年鑑」の誤植とは思えない。

しかし、「日本年鑑」以外には、ウェストン自身の著書を始めとして『夫人』は全く登場しない。さまざまな形で夫人が出て来るのは、第2回来日時の明治35年(1902)に結婚したフランセス夫人(Mrs. Frances Emily Weston)だけである。今のところ最初の夫人が、外国人か、日本人かを確認出来る資料を見出せない。もし外国人とすれば、ウェストン来日の動機を解明するひとつの手がかりともなり得るだけに、興味は尽きないのだが……。

明治22年(1889)

- 1月3日(水)……CMS本部へ教務報告第一報を熊本から発信。
(『ウェストンの来日第一報など』安江安直著 山第491号, 1986年5月20日)
- 2月9日(土)……神戸から日本郵船の神戸丸に乗船し、横浜へ向かう。
10日(日)……横浜着。

(『Passengers』, The Japan Daily Mail, Feb. 12, 1889)

* この頃に、神戸・横浜間を汽船で往復する記録が散見するが、その目的は不明である。後の状況から見て、この時は横浜か東京の眼科医の治療を受けるためだったと推測している。この年7月1日から東海道線が全面開通し、神戸・横浜間の汽船を利用する外国人も多くなった。船を利用した場合、船長は乗船者名を税関に届け出る義務があ

り、これをもとに旅客名簿が英字新聞に掲載された（時に省略されることもある）が、汽車に乗った外国人の名前はわからない。片道にしかな前のないのは、帰途に汽車を利用したためであろう。

4月27日(土)……日本聖公会第二総会に出席。

（日本聖公会第二総会議員住所録）

* 第二総会は、4月27日(土)から5月4日(土)まで、東京の築地にあった立教大学で開かれた。東京、大阪、熊本、函館などから日本人聖職者と CMS, SPG, PE の宣教師が出席している。議員の名前は71人に上るが、ウェストンは東京部の最後に記載され、彼だけ住所欄が空白である。後述するように、眼の治療のため横浜か東京に滞在し、休職状態にあったのかも知れない。

5月7日(火)……CMS 大阪地方に転任を申請。

（日本聖公会横浜教区所蔵史料）

* 前年秋、熊本に着任し、新年早々に教務報告第一報を CMS 本部へ送ったウェストンが、その4ヵ月後には大阪地方へ転任を申請している。ピカステス (E. Bickersteth) 主教に『私ウォルター・ウェストンは、日本教区大阪地方の宣教師の任に就くことを希望する』と、5月7日付けて申請・誓約書を提出した。CMS の宣教上の理由ではなく、眼の病気というウェストン個人の理由によるものだった。

6月8日(土)……立教大学で幻燈を用いて講演。

（基督教新聞 明治22年6月12日）

* 講演のテーマは、“聖地エルサレム近辺の状況と聖書のたとえ”という宗教的なものであった。スライドはウェストン自身が数年前に撮影したもので、それを写しながら詳しく説明を加えた。『別けて十字架の上に於ける主耶蘇基督及びエルサレム宮城衰頹の有様杯は実に人をして当時の有様を追想せしめたり』と基督教新聞は記している。この夜の来会者は立教大学と立教女学校、それに神学校の学生、生徒らおよそ100人だった。

記事の最後に『ウェスタン氏は眼病の爲め暫時東京に滞在し再び九州へ向け出発せらるゝの都合なりと聞く』とある。転任申請がまだ受理されず、場合によっては熊本へ帰ることを考えていたのだろうか。

月日不明……大阪聖三一神学校の教授に就任。

（『大阪聖三一神学校』日本聖公会百年史、昭和34年4月8日）

* ウェストンの転任は認められ、大阪地方の所屬となった。神学校教授に任命したのは、英語で授業が出来る上、眼病治療のための時間的余裕を与える便宜的措置と推測される。

- 9月1日(日)……英国汽船ヴェロナ号(S.S. Verona)で横浜出港。
(『Passengers』, The Japan Weekly Mail, Sep. 7, 1889)
- * 眼の治療を受けて神戸へ戻ったものであろう。
- 12月……神戸に定住し、居留地48番にあったユニオン・チャーチ
(The Union Protestant Church)のチャプレン(Chaplain)に就任。
(『Correspondence』, The Japan Weekly Mail, Aug. 23, 1890)
- * ユニオン・チャーチは、明治5年(1872)に英米の居留民が協力して建設した外国人専用の教会である。最初は、組合教会系(The American Board Mission)のアメリカ人宣教師が、聖公会の礼拝も執り行なっていたが、明治6年(1873)から組合教会と聖公会の礼拝を、隔週でそれぞれのチャプレンが行なうようになった。ウェストンはこの年に聖公会のチャプレンとなり、明治27年まで在職した。

明治23年(1890)

- 1月24日(金)……日本郵船の西京丸で横浜着。
(『Passengers』, The Japan Weekly Mail, Feb. 1, 1890)
- 1月頃……眼病のため、CMS宣教師を辞任。
(The Church Missionary Intelligencer and Record, Feb. 1890)
(Japan and the Japan Mission, Fourth Ed. 1905)
- * 1月下旬に船で横浜に着いている。前年に引き続き目の治療に通ったと推測される。この頃に、眼病が悪化したためか、あるいはその治療のために十分な宣教活動が出来なかったのであろう。彼は宣教師の職を辞任した。

病氣のために宣教師を辞任すれば、帰国して治療を受けるのが普通で、英国に帰った方が良い医者も多い筈だ。宣教師としての給与もなくなり、本国からの仕送りが無い限り、教会の献金だけの不安定な生活を強いられる。にもかかわらず、ウェストンは帰国しなかった。それが何故かを解明し得る資料は、今のところ見出せない。

しかし、ウェストンは日本の山々を探検し、その標高や動植物、登路などを外国人に紹介するようチェンバレン(B.H. Chamberlain)に勧められていたようだ。そのためには、CMSの組織を離れて、より自由な立場を得たかったとも思える。中部山岳地帯には、外国人未踏の高山が数多く残っていた。翌明治24年から始まったウェストンの精力的な登山では、槍ヶ岳や御岳など少数の例外を除いて“初登”に執着し、出来るだけ科学的な登山を心掛けていることも、その現われと見たい。

8 月頃……須走口から初めての富士登山。

(『In Memoriam : W. Weston』, By T.A. Rumbold, The Alpine Journal, Vol. 52, 1940)

* 最初の富士登山について、ウェストン自身は年月を明らかにしていない。しかし、英国山岳会誌の追悼文などから見て、ほぼ間違いないと思われる。須走口と推定したのは「Mountaineering and Exploration in the Japanese Alps」(以後「日本アルプスの登山と探検」とする)に記述した夏の登山の様子からである。

8 月 13 日(水)……軽井沢から「ジャパン・メイル」に投書。

(『Correspondence』 The Japan Weekly Mail, Aug. 23, 1890)

* 8 月の初め、神戸でコレラのために外国人の母子が死亡し、その葬儀に聖職者が誰も立ち会わなかったという“事件”が起きた。地元紙「ヒョーゴ・ニュース」(The Hyogo News) は、『コレラの恐怖から、牧師が神戸を逃げ出した』と、暗にウェストンを非難する記事を掲載した。この記事を転載して『やむを得ない事情があつて違くない』と、ウェストン擁護の記事を掲げた「ジャパン・メイル」に、その間の事情を訴えた投書である。

投書の中で、彼は前年の 12 月に神戸のユニオン・チャーチのチャプレンに就任したこと。目の病気でしばしば横浜の眼科医に通わねばならず、不幸な出来事はたまたまその留守に起きた。後事を托した牧師も、止むを得ない事情で葬儀に立ち会えなかったのだらうと釈明している。

* もうひとつ目をひくのは、この投書が軽井沢から出されていることだ。“事件”の経過から見て、ウェストンは 8 月 5 日頃に神戸を出ている。横浜で眼の治療を受けたあと、富士山に登ったと推定される。

11 月 6 日(木)……(九州) 河内—五ヶ所—祖母山 [外国人初登頂]—五ヶ所—河内

[かじや]

(五ヶ所村庄屋矢津田鷹太郎日記)

(『本を歩く〜ルート 63〜』毎日新聞(宮崎版), 昭和 54 年 11 月 29日)

* ウェストンは、最初の任地熊本での同僚ブランドラムと行を共にした。「日本旅行案内」第 3 版(明治 24 年刊)から推定されるルートは、熊本から白川沿いに立野へ出て、栃木温泉あたりで一泊。翌日は、阿蘇山の南麓をぐるっと回って、高森から河内に出て泊り、3 日目に河内から祖母山を往復した。登り 5 時間、下り 4 時間半であった。その後は、三田井を経て五ヶ瀬川沿いに延岡へ出たのであろう。

ウェストンとブランドラムの祖母山登頂は、当時五ヶ所（宮崎県西臼杵郡高千穂町）の庄屋だった矢津田鷹太郎の日記に記されていた。行き帰り共に矢津田宅に立ち寄って休息し、河内に泊まることも告げている。河内の宿は『かじや』（字不詳）である。

* ウェストンがいつ九州に来たのかはわからない。しかし、彼は祖母山を始め、桜島、霧島山の2つのピーク、阿蘇山、金峰山（熊本）に登り、それを翌年発刊の「日本旅行案内」に執筆している。このとき、祖母山以外にもその幾つかを登ったと考えられる。

11月 17日(月)……日本郵船の横浜丸で長崎から神戸に向かう。
(『Passengers』, The Rising Sun and Nagasaki Express, Nov. 19, 1890)

19日(水)……同船神戸着。

(神戸又新日報 明治23年11月19日)

* 祖母山登山から11日後に、ウェストンは神戸へ戻る船中にあった。同じ船に上海から神戸に向かうミラー医師(R.S. Miller)が乗っていた。2年後の明治25年(1892)に乗鞍岳、槍ヶ岳へ同行したパートナーである。同船したのは偶然であったろう。ミラー医師は神戸で開業するため、単身で来日する途中だった。夏の富士登山や紅葉の祖母山登山をミラーに語り、中部山岳へ一緒に登ろうと約束したのもこの時ではないだろうか。

月日不詳……兵庫国際病院の管理委員に就任。

(Japan Directory, 1891)

* ウェストンはこの年から神戸の兵庫国際病院(The Hyogo International Hospital)の管理委員に就任している。兵庫国際病院は外国人専用の病院で居留民の寄金によって建設され、選ばれた管理委員が運営していた。彼は明治27年(1894)まで、その職に就いていたと見られる。

明治24年(1891)

2月 9日(月)……横浜チームとのフットボール(Football)試合に出場。

(『The Interport Football Match』, The Japan Weekly Mail, Feb. 14, 1891)

* インターポートマッチは、当時外国人居留地のあった横浜、神戸、長崎のスポーツ対抗戦である。函館や新潟は、外国人の数が少なかったためか、独立して参加することはなかったようだ。春、秋には

五大港對抗戦もあり、中国の上海、香港のチームが加わった。

このフットボールマッチは横浜と神戸の定期戦で、横浜で行なわれた。ウェストンは神戸チームのメンバーとして、ボックスで出場している。はっきりした得点は記されていないが、横浜チームが勝った。彼は2年後の明治26年春に、バクストン(N. Buxton)、オーラーク(W.H.L. O'Rorke)と富士山に登ったが、その時膝をフットボールで傷めていたと書いている。ダービィ校で培ったスポーツマンぶりを遺憾なく発揮していたようだ。

6月30日(火)……結婚式を司式(予定)。

(『Marriage』The Japan Weekly Mail, June 6, 1891)

* 新郎は香港在住、新婦は神戸の英国人である。式は神戸の英国領事館とユニオン・チャーチで行ない、エンスリー(J.J. Enslie)領事とウェストンがそれぞれ司式すると伝えている。

7月18日(土)……3ヵ月間の旅行免状を交付される。

(『外国人姓名留』伊原運漕店資料)

* この旅行免状は『神戸ヨリ汽車ニテ三河ニ到リ夫ヨリ順路美濃飛騨越中越後信濃上野下野常陸下総武蔵上総安房相模伊豆駿河甲斐遠江経歴汽車ニテ神戸ニ帰ル』となっている。後述する実際の経路とは、かなり違う。どちらかと言えば、翌明治25年(1892)のルートに近い。実際の山行は、同行者の都合に合わせてものと見られる。

7月28日(火)……日本郵船の近江丸で横浜着。

(『Passengers』, The Japan Weekly Mail, Aug. 1, 1891)

30日(木)……横浜—〈汽車〉—横川—〈鉄道馬車〉—軽井沢

(萬松軒)

31日(金)……軽井沢—浅間山登山—追分?

(宿不明)

8月1日(土)……追分?—〈汽車〉—上田—浦野—保福寺峠—保福寺—刈谷原—松本—〈上田から松本まで人力車〉

(信濃屋)

2日(日)……〈安息日〉

(同上)

* ウェストンは、来日後初めて飛騨山脈に向かった。パートナーは、私鉄山陽鉄道(現在のJR山陽本線)の雇い技師ベルチャー(H. W. Belcher)であった。横浜へは船で来ているが、ベルチャーは同船していない。横浜で落ち合った2人は、汽車で横川に着き、鉄道馬車で碓氷峠を越えたのである。軽井沢の宿は萬松軒(『萬松館』は間違い)だった。

* 横浜から一番近い活火山浅間山は、富士山と同様に山好きの外国人が一度は登る山となっていた。ウェストンが登頂した同じ日に、反

対側から登った2人のアメリカ人は、道に迷って小諸に出たあげく、汽車も故障したため未明に宿に着いている。また、ウェストンらの翌日にもアメリカの自然学者が杓掛から登った。この時、下山する巡礼の団に出会っている。夏の山開きの時期には、浅間信仰の登拝者も相当あったらしい。偶然にしても2日間で5人の外国人が登っている。彼らが如何に火山に興味を持ち、レジャーを兼ねて登山していたかを窺わせるものだろう。

* 翌日、上田で汽車を降りたウェストンらは、上田橋を渡り、一部開通していた二線路（現在の国道143号線にほぼ同じ）を保福寺峠へと向かった。峠の頂上から『オパールの夕空に紫の輪郭を浮かび上がらせた“日本アルプス”のパノラマ』に、初めて見とれたのである。

- 8月3日(月)……松本—<人力車>—森崎—橋場—島々谷
〔出シノ沢小屋〕
- 4日(火)……島々谷—徳本峠—明神 〔山番小屋〕
- 5日(水)……明神—横尾谷—横尾本谷—坊主岩小屋—檜の肩—
檜沢 〔赤沢岩小屋〕
- 6日(木)……檜沢—横尾—明神—徳本峠—島々谷
〔出シノ沢小屋〕
- 7日(金)……島々谷—橋場—森崎—松本—橋場から人力車—
〔信濃屋〕

* ウェストンは、檜ヶ岳の第3登を目指したと書いているが、これは外国人による第3登であろう。

彼は「日本旅行案内」の記述などから、ガウランド(W. Gowland)が檜ヶ岳に登ったことを知っていた。これを初登とすれば、第2登は誰を指すのだろうか。現在明らかにされている限りでは、ジョルジュ・アペール(Georges Appert)の記録だけしか見当たらない。司法省雇いのフランス人アペールは明治19年(1886)に檜ヶ岳を目指した。8月11日に東京を出発して、横川、碓氷峠、上田、保福寺峠、松本、島々と、ウェストンと全く同じルートで上高地入りしたアペールは、横尾から檜沢を遡った。檜ヶ岳の頂上直下200歩まで登ったが、岩崩れのため登頂は不可能という案内人の言葉に、それ以上登るのを断念して下山したのである。

この登山記は前年の明治23年(1890)の「フランス地理学評論」に掲載された。ウェストンがこの雑誌を目にした可能性は残るが、厳格な性格からみると登頂として容認したとは思えない。「第2登」は

アペール以外の人物ではないだろうか。

このほか、日本人ではあるが、ガウランド以降の槍ヶ岳登山者としては農商務省地質局二等技手の坂市太郎がいる。坂は明治18年(1885)に槍ヶ岳から薬師岳へと縦走し、槍ヶ岳の高度を3,531mと記録している。彼はまた穂高岳を3,498mと報告しているが、これを前穂高岳あたりとすれば、登山史的に非常に興味深いものがある。(『ジョルジュ・アペールと槍ヶ岳』安江安宣著 学鑑 第83巻第12号 昭和61年12月5日) (『飛騨四近地質報文』坂市太郎著、地質要報第3号、明治20年9月)

* 橋場の清水屋で3人の猟師を案内に雇ったウェストンらは、前年から改修の始まっていた徳本峠への道を急いだ。往復に泊まった〔出シノ沢小屋〕は農商務省山林局の伐採監督詰所である。「出シノ沢」は、「木出しの沢」の意である。明神付近の小屋は、山林局の山番小屋だったろう。翌々年の前穂高岳登山の際、この小屋まで同行した中沢弥惣右衛門の日記『山林局ノ小屋守曾根原哥吉方ニ宿ス』から、この時も山番小屋ではないかと推定した。

* ウェストンのルートは、横尾谷、本谷、右俣、横尾尾根のコル、坊主岩小屋と推定される。雨の中、槍の穂の取り付き付近まで登ったが、案内人に説得されて登頂を断念し、赤沢の岩小屋へ下った。

8月8日(土)……松本—桔梗ヶ原—村井—塩尻—洗馬—桜沢—奈良井
〈ここまで馬車〉—鳥居峠—藪原—福島 〔益田屋〕

9日(日)……〈安息日〉 〔同上〕

10日(月)……黒沢口から御岳登山—王滝—橋渡 〔茶屋〕

11日(火)……橋渡—上松 〔宿不明〕

* 松本から1日で福島へ出たウェストンらは、益田屋(松田屋はない)に宿をとった。日曜日に休息したあと、月曜日には福島から御岳に登頂し、その日のうちに上松まで下ろうとしたようだ。全行程徒歩とすれば、一見不可能なほどで、その健脚に驚くほかない。さすがに上松までは出られず、橋渡の茶店で一夜を過ごした。橋渡の茶店は三岳村の常盤橋畔にあって、御岳講の人たちがよく利用していた。

8月12日(水)……上松—遠見場—頂上下の小屋—駒ヶ岳登頂—巡礼小屋—伊那部 〔間屋〕

13日(木)……伊那部—〈人力車〉—時又 〔梅の屋〕

14日(金)……時又—天竜川下り—舟—中野町—〈人力車〉—浜松 〔宿不明〕

15日(土)……浜松—〈汽車〉—神戸

* 木曾駒ヶ岳登山のルートを推定すると、上松から駒ヶ岳神社里宮を通り、滑川の川床に出、敬神ノ滝から尾根に取り付く。遠見場、木曾前岳、玉窟小屋を経て登頂。下山道ははっきりしないが、将基頭山から権現ゾルネ、観現山を経たものと推定しておきたい。巡礼小屋は、現在の西駒山荘付近にあって、伊那の小屋と呼ばれていた小屋を指すのだろうか。

* 伊那部の宿〔間屋〕については、まだ多少の疑問が残っている。江戸末期から明治初期の町並図に〔とんや〕という宿はなく、中馬の荷継ぎをしていた〔間屋〕の名があった。経済・交通体系の変革で、中馬の需要が少なくなった間屋が屋号をそのままに宿屋を兼ねたと見たのだが……。

* 天竜川下りには、はっきりした史料が残っている。時又の伊原運漕店に残されたウェストンらの旅行免状の写しと出船のメモである。2人の旅行免状を写したあとに、次のように記されていた。

『右外国人ノ附添人なし

同氏ノ請求ニ依リ当天竜川河岸仲ノ町マデ特別仕立川小伝馬船入金式十式円也 八月十四日 龍丘村長田辰弥舟積』

(「外国人姓名留」伊原運漕店資料)

つまり、2人は案内人や通訳を連れていなかったこと。要求に応じて、中野町(現浜松市)まで小伝馬船を特別に仕立て、22円を受け取ったこと。8月14日に、龍丘村の長田辰弥が船頭となって舟を出したことがわかる。

* この夏の旅は、7月27日(月)に神戸を出て、8月15日(土)に再び神戸に帰るまで20日間であった。その間に、浅間山、槍ヶ岳(登頂出来ず)、御岳、木曾駒ヶ岳に登り、天竜川を下っている。交通機関の発達した現代でも、同じルートを辿ろうとすれば10日間では難しいかも知れない。

槍ヶ岳では頂上直下まで登ったものの、荒天と夕暮れに登頂を阻まれ、翌日の再挙を考えようともせず下山している。御岳では、日本人の信仰行事に興味を抱きながら、ゆっくり観察することもなく、単に登頂しただけというスピード登山を行なった。また、木曾谷から伊那谷へと、1日で駒ヶ岳を越えている。聖職者らしく、日曜の安息日だけは行動を慎んでいるが、それ以外には1日も休養していない。翌年からのウェストンの登山では考えられない強行軍だった。

原因は同行したベルチャーのスケジュールに合わせたためと思われる。ベルチャーは、この時山陽鉄道から解雇通告を受けていたか、あ

るいはすでに解雇されていた。彼は10月初旬まで東北地方へ旅行し、10月20日に神戸を去っている。帰国の荷物整理や東北地方への旅の準備に、出来るだけ早く神戸へ帰る必要があったのだろう。

- 11月2日(月)……神戸でビカステス(E. Bickersteth)主教らと会食、ともに裏山へ登る。

(Japan As We Saw It, By M. Bickersteth, 1893)

* ウェストンが神戸近郊の山を登った数少ない記録である。裏山は諏訪山の通称で、神戸居留地、雑居地に住む外国人が健康のためによく歩いていた。布引の滝から再度山、六甲山あたりも盛んに登っており、明治末にはMGCK(The Mountain Goats Club of Kobe)が発足している。MGCKは、外国人の登山クラブだったが、日本人も何人が加わっていた。トウエンティクロスやアイスロードなど、外国人の名づけた場所や登山道の名が残っている。また、こうした山好きな外国人に啓発されて、日本人による神戸徒歩会(最初は神戸草鞋会と称した)が生れ、会員の藤木九三氏らによってRCC(The Rock Climbing Club)が育った。

- 11月頃……岐阜近郊で、濃尾地震の被災者への救援活動を行なう。

(Mountaineering and Exploration in the Japanese Alps, 1896)

* 濃尾地震は10月28日の早朝に発生し、マグニチュード8.4の規模と見られる。死者は7,000人余、全壊家屋80,000戸以上と記録されている。ウェストンは岐阜に在住していたカナダ聖公会系の宣教師チャペル(A.F. Chappell)と共に、被災者の収容されている病院などを見舞い、救援食糧の配布に当たった。チャペルの住居も倒壊したが、庭に建てた仮小屋に寝泊りしながら被災地を巡回したのである。

- 12月15日(火)……英国汽船エンプレス・オブ・インディア号(S.S. Empress of India)で横浜着。

(『Passengers』, The Japan Weekly Mail, Dec. 19, 1891)

- 12月中旬頃……大宮を経て村山口から富士宝永山に登る。

* 濃尾地震による崩落で、富士の山容に変化があったとする新聞記事を確かめるため、白糸の滝を訪れる途中で案内人を説き伏せて登ったと、自著に記述している。船を利用したのは、東海道線が一部不通になっていたためであろう。クリスマスまでに神戸へ帰るとすれば、登山は17、18日頃と推定される。

しかし、ウェストンの記した動機にも不自然な点がある。11月21日の新聞(The Japan Weekly Mail)は、吉田の富士浅間神社の神

主が6合目まで登ったが変化は認められず、崩落はデマに過ぎないとの記事を掲載している。濃尾地震の救援活動で岐阜に出向き、この記事を見ていなかったためだろうか…….

明治 25 年 (1892)

- 1 月頃……大阪川口居留地で、濃尾地震の孤児を養育しているアメリカ聖公会系の婦人伝道師に、2回分の献金 75 円を贈る。

(The Spirit of Mission, 1892)

- 1 月 30 日(土)……横浜チームとのフットボール (Football) 試合に、フルバックとして出場。

(『The Interport Football Match』The Japan Weekly Mail, Feb. 6, 1892)

* 去年と同じ、横浜との定期戦である。今回は1対0で神戸チームが勝った。得点は僅差だったが、試合は一方的に神戸優勢のうちに終わった。横浜に攻め込まれたとき、ウェストンらがよく守ったと述べられている。

- 5 月 6 日(金)……日本郵船の西京丸で、ジョン・ウェストン夫人 (Mrs. John Weston) とその子供 (and Child) が横浜着。

(『Passengers』, The Japan Weekly Mail, May 7, 1892)

17 日(火)……ジョン・ウェストン夫人、コンスタンス・ウェストン (Miss Constance Weston) と3人で、箱根宮ノ下の富士屋ホテルに投宿
(富士屋ホテル レジスターブック)

* この2人が父親ジョンの夫人、つまりウェストンの母親と妹なのか、兄ジョンの夫人とその娘なのか判然としないが、船客欄に“子供”とあるのは未成年だったからだろう。とすれば、娘の年齢から後者のように思われる。

西京丸は4月29日に上海を出港、長崎、神戸を経て5月6日に横浜に着いている。2人の乗船地が何処かはわからないが、ウェストンとは神戸で再会し、横浜か箱根で再度合流したのではないだろうか。

3人は20日までの予定で、富士屋ホテルに投宿した。

* 一方、積雪期の富士登山を熱望し、パートナーを求めているフォーダム (M. Fordham) も、偶然17日に同じ富士屋ホテルに投宿した。彼は富士を周る旅を終えて、身延から箱根に着いたのである。

- 5 月 18 日(水)……箱根宮ノ下—乙女峠—御殿場—<人力車>—茶屋—太郎坊
〔太郎坊小屋〕

19 日(木)……太郎坊小屋—六合目小屋—宝永山から頂上への稜線

—登頂—六合目小屋—茶屋—<人力車>—御殿場 [宿不明]

20日(金)……御殿場—乙女峠—箱根宮ノ下 [富士屋ホテル]
(『Fuji-yama in May』 The Alpine Journal, Vol. 16, No. 119, 1892)

* 18日の朝、フォーダムは登山家として名前を知られていたウェストンが、同じホテルに泊まっていることを聞いた。初対面のフォーダムから富士登山を誘われたウェストンは、一も二もなく同行を承知し、数時間後に2人は日本人のボーイを連れて出発した。ウェストンは幸いにもピッケルを持っていたし、2人とも色つき眼鏡を持っていたが、それ以外に特別な装備は何もなかったとフォーダムは記している。

(『An Ascent of Fuji in May』 By M. Fordham, 倫敦日本協会雑誌四之巻 1900)

* その夜は太郎坊小屋に泊り、ボーイを残して御殿場で雇った案内人3人と登り始めた。しかし、案内人は次々と落伍し、六合目の小屋からはフォーダムと2人だけで雪面を登り、午後3時半に火口壁に達した。はるばる来日した肉親をホテルに残しての登山は、ウェストンが積雪期の富士登頂になみなみならぬ意欲を持っていたことの証明である。それは、彼がこの登山を外国人による積雪期の初登と信じていたからに他ならない。

* 5月の富士を『積雪期』とするには、現在の感覚では疑問がある。しかし、アイゼンやピッケルなどの登山用具、防寒装備、それに雪上技術にも格段の相違があった当時、ウェストンらは5月を積雪期と表現していた。このため敢て『積雪期』で通すことにした。

6月20日(月)……3ヵ月間の旅行免状を交付された。

(外務省外交史料 外国人内地旅行関係雑件, 第三)

同日……英国地学協会(The Royal Geographical Society=以後RGSと略称)の会員(Fellow)に推挙された。

7月4日(月)……RGS理事会で会員として承認された。

(RGS調査資料)

* RGS会員への推薦者は、フレッシュフィールド(D.W. Freshfield)とデント(C.T. Dent)であった。Fellowは一般会員(Member)に対して、特別会員の意味があるらしい。

8月1日(月)……<汽車>—岐阜—<人力車>—関 [宿不明]

2日(火)……関—殿村—金山—下原—保井戸<全行程人力車>

[宿不明]

- 3 日(水)……保井戸—久々野—宮峠—高山 〔谷加屋〕
 4 日(木)……高山—日面—旗鉾—平湯 〔小林右衛門三郎の宿〕
 5 日(金)……平湯—平湯鉾山 〔平湯鉾山〕
 6 日(土)……平湯鉾山—乗鞍岳登頂—平湯
 〔小林右衛門三郎の宿〕
 7 日(日)……〈安息日〉 〔同上〕

* この夏はウェストンにとって、2度目の飛騨山脈入りであった。一昨年秋、長崎から神戸へ戻る船中で会った医師ミラーがパートナーである。東海道線を岐阜で降りた2人は飛騨街道を人力車で高山へ向かった。中央線開通以前まで、この飛騨街道は善光寺参りの人たちで賑わっていたという。関での宿をウェストンは「よろざや」と記しているが、関町に万屋という地名はあったものの宿の名としては見当らない。また、高山の宿も「たねかや」とし、「日本アルプスの登山と探検」の邦訳では、何れも「田中屋」とされているが、これも「谷加屋」が正しい。

* 平湯は少し前まで、夏だけ人の住む湯治と出作りの村だったが、鉾山の盛況で人々も定住するなど賑わっていた。ウェストンらは小林右衛門三郎の宿に泊まった。当時の屋号は「よもさ」と言っただけだが、確認できない。飛騨に「宮で角助、平湯でヨモサ」という俗謡がある。ヨモサは右衛門三郎のことで、かなりの資産家だったが、安房峠を松本へ抜ける道の改修に私財を投じ、家産を傾けたという。ご子孫は現在も「湯元館」を経営されている。

* 乗鞍岳はガウランド(W. Gowland)によって登られていたが、その登路は東側の野川にとられていた。ウェストンは、外国人による西側からの初登を狙ったのである。ルートは、平湯から大滝川沿いに滝見台へ出て、鉾山跡から硫黄岳、大丹生岳を経る現在の登路とほぼ同じであった。いま鉾山跡になっている平湯鉾山は、当時最盛期を迎えていた。平湯鉾山の発見は寛永16年と伝えられ、断続的に採掘が続けられていたが、慶応3年にいったん休山したあと、明治の鉾山開発ブームに乗って21年から採掘を始めていたのである。ウェストンの登った明治25年には、1,200~1,300人が働き、鉾夫長ら幹部住宅3戸、工作飯場7棟、鉾夫長屋6棟があった。産出量も1ヵ月に銀40貫、銅100貫、鉛70貫余で、今の平湯スキー場にあった製錬所まで、鉾石を木馬道で運び降ろしていた。(北アルプス乗鞍物語、長沢武編著 1986年8月25日)

- 8 月 8 日(月)……平湯—蒲田 〔松下甚兵衛の宿〕

9日(火)……蒲田—平湯 [小林右衛門三郎の宿]

* ウェストンは、この年初めて笠ヶ岳の登山を企てた。蒲田で案内の猟師を求めたが、区長に斡旋をきっぱり断われている。3年目に登頂するまで、毎年ウェストンが笠ヶ岳にこだわったのは、外国人初登を狙ったものに他ならない。

8月10日(水)……平湯—安房峠—大野川—橋場 [清水屋]

11日(木)……橋場—島々谷—徳本峠—明神—横尾付近 [野 営]

12日(金)……横尾付近—赤沢—槍ヶ岳登頂—赤沢 [赤沢岩小屋]

13日(土)……赤沢—徳本峠—島々谷—橋場 [清水屋]

14日(日)……<安息日> [同上]

15日(月)……橋場—松本—浅間温泉—松本 [信濃屋]

* 平湯から安房峠を越えて大野川に出たウェストンは、村長の家で休息し、昼食をしたためた。白骨温泉を経営し、農商務省の地方官吏だったと記されている主人は齋藤丹次郎で、この年5月まで安曇村の村長だった。

* 橋場の清水屋に宿を取ったウェストンらは、翌日3人の猟師を案内に徳本峠を越えた。峠の頂上から見た穂高岳の岩峰に登りたい気持ちを抑え、目標の槍へ向かった。雨天と夕暮れで断念した去年の失敗に懲りて、明神付近の小屋に泊まらず、槍ヶ岳に一歩でも近づこうと横尾付近まで足を延ばして野営したのである。ルートも、時間のかかる横尾谷を敬遠して槍沢にとった。2年がかりで槍ヶ岳登頂という宿願を果たし、頂上からの眺望を楽しんだ2人は赤沢の岩小屋で満ち足りた夜を過ごしている。

* 松本に出たウェストンらは、浅間の温泉で旅の疲れを癒した。入浴したのは梅の湯らしいが、夜は再び松本の信濃屋に戻っている。

8月16日(火)……松本—<馬車>—塩尻—<馬車>—松島—高遠

[近江屋]

17日(水)……高遠—市之瀬—分杭峠—市場(鹿塩) [大丸屋]

18日(木)……市場—大河原—小渋の湯 [小渋の湯]

19日(金)……小渋の湯—赤石岳〔外国人初登頂〕—下山途中の峡谷

[ビパーク]

20日(土)……ビパーク地—小渋の湯—大河原 [今井滝次郎の宿]

21日(日)……<安息日> [同上]

22日(月)……大河原—市場(鹿塩)—市之瀬—高遠 [宿不明]

23日(火)……高遠—御堂垣外—金沢峠—台ヶ原 [宿不明]

24日(水)……台ヶ原—甲府—鯉沢 [宿不明]

25 日(木)……鯉沢—富士川下り<舟>—岩淵—<汽車>—東京方面

* 松本でミラーと別れたウェストンは、信濃屋の若主人笹井元治とともに赤石岳に向かった。彼は高遠の宿を池上屋としているが、池上は姓で、正しくは〔合近江屋〕である。翌日泊まった市場は、鹿塩の小字で塩川地区の通称だった。大丸屋の建物は、昭和 36 年の災害で流失した。

* 大河原の旅人宿今井滝次郎宅で休息したウェストンは、案内人を求めた。長谷川巡査の斡旋で来たのは、大河原の猟師森下瀧弥と、仲間の 1 人である。森下は、前年に陸地測量部の関大之一行を案内して登っていた。

(『Mountaineering in the Japanese Alps』 The Japan Weekly Mail, Dec. 3, 1892)

* 小沢の湯では、管理の老人を“真の意味の紳士”と激賞している。この老人は湯主の五島勘平で、明治 31 年 9 月に洪水による上沢の崩落のため小屋もろとも流され亡くなっている。上沢は小沢川に流入する支沢である。勘平の家族や湯治客合わせて 10 人が死亡する惨事だった。

(大鹿村誌〔中〕 昭和 59 年)

* 赤石岳への外国人登山については、山崎安治著「山の序曲」に『明治 16 年ドイツ地理学者ナウマン、大河原口より赤石岳登山』とある。しかし、出典は不明で、その他の資料からも『ナウマン登山』の痕跡は見当たらない。このため、ウェストンの登山を“初登”とした。

ウェストンらは、大河原から大聖寺平を経て、小赤石岳を通るルートをとったらしい。天候が悪くなり始めた帰途は、避難の洞穴を捜して、大聖寺平から北東の台地へ下った。恐らく現在の荒川小屋方面ではなかったろうか。この時のピバークで、ウェストンはピストルを 1 発撃って見せた。リボルバーの連発式である。ちょっとした悪戯心か、寝る前の座興の心算だったのだろう。だが、森下猟師たちは峡谷にこだました轟音に驚き、2 度と撃たないで欲しいと頼んだという。

(『Mountaineering in the Japanese Alps』 The Japan Weekly Mail, Dec. 10, 1892)

* 大河原へ戻ったウェストンは、今井滝次郎の宿に 2 泊した。滝次郎の息子の嫁の話として、アケビを採って来てあげたら大変喜んで 1 両のお金をくれたので、それで帯を買ったこと。布団を何枚も重ねてベッドを作ったこと。風呂を沸かして入れたら、風呂桶に入らず、

「ヒシヤク、ヒシヤク」と叫ぶので、何のことかと思ったら柄杓のことで、ウェストンはそれで湯を身体にかけて洗っていたことなどのエピソードが残っている。

(『ウェストンと伊那』柿木憲二著 伊那路 第16巻第2号)

* 親切な今井家の人たちに別れを告げたウェストンは、再び高遠から金沢峠を越え、台ヶ原、甲府を経て鯉沢に着いた。ここで笹井元治とも別れて、1人富士川を下り、東海道線の岩瀬駅から午後0時7分発の上り列車に乗った。彼がどこへ向かったのかはわからない。

11月12日(土)……「ジャパン・ウィークリー・メール」が、積雪期富士初登の登山記を批判。

(『Ascent of Fujiyama in Snow』The Japan Weekly Mail, Nov. 12, 1892)

同日(土)……謝罪と弁明の投書を「ジャパン・メール」に送る。(『The Ascent of Fuji』The Japan Weekly Mail, Nov. 19, 1892)

* ウェストンは5月の富士登山を積雪期初登と信じて、英国の新聞と山岳会に登山記を送った。これが9月頃の「ペル・メル・バジェット」(The Pall Mall Budget)に掲載された。これに対して「ジャパン・メール」の編集者ブリンクリー(F. Brinkley)が、ウェストンらの登山は少なくとも第3登であり、初登は明治3年(1870)の英国の砲兵将校らによるものだと批判したのである。この登山記は、英国山岳会誌にも「5月の富士山」として掲載されたが、同様に初登と考えている記述がある。

(『Fujiyama in May』The Alpine Journal, Vol. 16, No. 119, 1892)

* この批判に対しウェストンは、積雪期の富士登山がすでに行なわれていたのなら申し訳ないと謝罪すると共に、チェンバレンらの「日本旅行案内」(第3版)にも、そうした記録は記載されておらず、知る術はなかったと弁明している。

「ジャパン・ウィークリー・メール」に記事が掲載された日と、ウェストンの投書した日が同じなのは、何日か前の「ジャパン・デイリー・メール」に、同文の記事が出ていたためであろう。

* 一方、登山史として興味があるのは、外国人による積雪期富士の初登の記録が書き換えられるのではないかという点である。登山史では、明治4年(1871)のベイアード大尉(Capt. Baird)が初登、明治8年のジェフリーズ(A.F. Jeffreys)が第2登とされている。ブリンクリーの挙げた砲兵隊将校の登山の様子とベイアード大尉のそれとは、雪の状態や人数などが明らかに違う。しかし、明治3年(1870)

の登山記録は、今のところこの記述以外何も見出せず、これを初登と断定するのは早計であろう。

- 11月26日(土) } 『日本アルプスの登山』と題して、槍ヶ岳、赤石岳
 12月3日(土) } —の登山記を3回に分けて「ジャパン・ウィークリ
 10日(土) } ・メール」に寄稿。

(『Mountaineering in the Japanese Alps』 The Japan Weekly Mail, Nov. 26, Dec. 3, Dec. 10, 1892)

- 12月24日(土)……RGS理事、フレッシュフィールドに書簡を送る。
 (RGS 所蔵 ウェストン書簡)

* この書簡の内容は、「ジャパン・ウィークリ・メール」に連載した紀行文の英国地学会誌への掲載を打診し、会誌用に書きなおすために省略・修正すべき点をお教え願うとしている。この紀行文は、RGS 誌ではなく、翌年の英国山岳会誌に掲載された。フレッシュフィールドの裁量であろう。

- 月日不明……神戸の「シーメンズ・ミッション」(The Seamen's Mission)のチャプレン (Chaplain) となる。 (The Japan Directory, 1893)

* この「シーメンズ・ミッション」は、日本聖公会系の「ミッション・ツウ・シーメン」(The Mission to Seamen) とは別である。アメリカのアライアンス・ミッション (The Alliance Mission=現在の日本アライアンス教団) 宣教師、ルドロウ (Rev. J.P. Ludlow) が2年前に創設した海員伝道会で、病気のためこの秋に帰国した彼の後を引き継いだものらしい。ウェストンは翌年までチャプレンをつとめている。

明治 26 年 (1893)

- 2月7日(火)……英国山岳会 (The Alpine Club) に入会。
 (『In Memoriam : Walter Weston』 By T.A. Rumbold, The Alpine Journal, Vol. 52, No. 261, 1940)

* タケット (F.F. Tuckett) とフレッシュフィールド (D.W. Freshfield) の推薦によるものであった。「極東の遊歩場」(The Playground of the Far East, 1918) の中で、ウェストンは『故タケット氏は、神戸の西やそのほかの若干の低い山を私と一緒に歩いていた時……』と記しているが、それがいつだったかは不明である。フレッシュフィールドとは、この時まで面識はなかった。

- 2月9日(木)……3ヵ月間の旅行免状を交付された。
 (『外国人姓名留』伊原運漕店資料)

* この旅行免状の行先は、「神戸ヨリ淡路へ夫ヨリ 汽車ニテ 姫路奈良京都府名古屋ヲ経テ横浜ニ至リ夫ヨリ 順路武蔵安房上総下総常陸上野信濃相模伊豆駿河遠江経歴前路神戸へ帰ル」となっている。これから読み取れる 目的は、関西一円と箱根、日光あたりへの旅だったろう。取得の日付けや行先から見て、5月の恵那登山を計画していたとは思えない。

3月27日(月)……RGS 理事フレッシュフィールド宛てに書簡を送る。

(RGS 所蔵、ウェストン書簡)

* 内容は、山の高さを測定するため、RGS に水銀気圧計の貸与を依頼するとともに、フレッシュフィールドの英国山岳会長就任を祝ったものである。ウェストンは山の高度を正確に計るために、RGS 所有の水銀気圧計を貸与して欲しい。あるいは、補助金を頂ければ横浜で購入したいと記している。貸与の願いは容れられて、この夏の登山から RGS の水銀気圧計で高度測定を行なっている。

5月8日(月)……京都—<汽車>—岐阜—加納—太田—<岐阜から人力車> [岩井屋]

9日(火)……太田—<馬車>—釜戸—<人力車>—中津川

[田丸屋]

10日(水)……雨天のため滞在

[同上]

11日(木)……中津川—恵那神社—恵那山[外国人初登頂]—中津川

[同上]

12日(金)……中津川—神坂峠—駒場—<荷車>—中村—<馬車>—一時又

[梅の屋]

13日(土)……時又—天竜川下り<舟>—中野—浜松—<汽車>—鈴川

[宿不明]

14日(日)……<安息日>

[同上]

* バクストン (N. Buxton), オーラーケ (H.W.L. O'Rorke) を案内しての旅であった。ウェストンは恵那山の登山ルートなどを「日本旅行案内」(第4版)に執筆するよう、チェンパレンから依頼されていた。この機会に、3人で恵那山に登って外国人初登頂の記録を分かちあい、天竜下りで峡谷美を楽しむ。そして最後は、秀峰富士の積雪期登山で締め括る。遠来の客を迎えての突然の旅だとしても、何と素晴らしい計画だったことか。

* 太田では、[岩井屋]に泊まった。ウェストンの記した [いわや] という宿はない。岩井屋は、槍ヶ岳の開祖播隆上人が病没した脇本陣から、およそ70~80メートルのところあり、墓所の祐泉寺も近くで

ある。本人は知らなかったが、槍ヶ岳をめぐる信仰登山と近代登山の開祖が、時代を隔てながらも太田の町で擦れ違った。奇しき縁であろう。

* 中津川では〔田丸屋〕に泊まっている。田丸屋は明治30年代に廃業し、現在は全く無関係の方の住居である。しかし、ウェストンの泊まった座敷は障子がガラス戸に変わったくらいで保存され、その美しさを褒めた庭も当時の面影を十分に留めている。ウェストンや岩倉卿が泊まれたことを知って、保存に心を配っておられる現住者のお陰である。当時の建物や庭が残っているのは、ほかに常念岳登山の際泊まった岩原の山口家など極めて少ない。

* 恵那山へのルートは、恵那神社以降が判然としない。が、ともかく登頂に成功し、翌日は神坂峠をこえて時又に出た。天竜川下りでは、伊原運漕店の記録にはウェストンの旅行免状を写したあと、次のようなメモがある。

『右 英国人三名ノ附添人

兵庫県神戸市居留地拾番方

紺谷 安平 路四十年

同氏ノ請求ニ拠リ東海道ニ到ル特別仕立船委嘱発帆ス

明治廿六年五月十四日午前六時発舟ス

龍丘村時又 渡辺音次郎船』

紺谷安平は、ウェストンらの連れていた料理人であろう。神戸居留地の10番はアーレンス商会(H. Ahrens & Co.)で、火災、船舶、生命などの保険代理店である。ガイド兼コックの日本人を抱え、求めに応じて旅行者に斡旋もしていたのだろうか。

- 5月15日(月)……鈴川—<鉄道馬車>—大宮—村山—馬返し—<大宮からここまで馬車>—女人堂跡—おおもみ小屋〔おおもみ小屋〕
 16日(火)……荒天のため滞在〔同上〕
 17日(水)……おおもみ小屋—火口壁—剣ヶ峰登頂—御殿場口—下山—太郎坊小屋—御殿場〔宿不明〕
 18日(木)……御殿場—乙女峠—箱根・宮ノ下〔富士屋ホテル〕
 同日(木)……「郵便報知新聞」に『洋客富士山に姿を失ふ』の記事。
 19日(金)……滞在〔同上〕
 20日(土)……宮の下—国府津—<汽車>—神戸

* 明治23年に開通した鉄道馬車で大宮に出た一行は、おおもみ小屋まで登り、荒天のため翌1日そこに滞在した。登山道がすっかり変

わってしまった現在、その位置は確認出来ない。また、富士山古道図に「大もみ」の地名はあるが、そこに小屋はなく、少し上の「横渡」に行小屋があったようだ。確認出来ないまま、記述通り〔おおもみ小屋〕とした。

* 村山口から富士に登ったウェストン一行が御殿場へ下山したため、18日の新聞に“外国人遭難”の記事が載った。『16日の嵐で吹き飛ばされたか、食も尽きて凍え、歩けなくなったのだろう。どこの国の人かはわからないが、危険を冒してその勇気を誇る風のある英国人に違いない』との内容であった。これが英字紙に転載されて、神戸に帰る汽車の中で読んだとウェストン自身も書いている。この嵐は、気圧752ミリメートル、現在の1003ミリバールの低気圧であった。

* 富士登山を終えたウェストンらは、御殿場で一泊したあと箱根へ出て疲れを癒した。富士屋ホテルのレジスターブックに、18、19日の宿泊を予定した3人のサインが残っている。バクストンとオーラークは、このあと英国公使館員ライス（Spring Rice）と共に吾妻山にも登った。吾妻山は5月19日に噴火したばかりだった。

（『Mountaineering in Japan』By Noel Buxton, 倫敦日本協会雑誌四之巻 1900）（Travels and Reflections, by N. Buxton. 1929）

5月29日(月)……“富士で遭難した外国人”について「ジャパン・メール」に投書を送る。

（『The Foreigners “Lost” on Fuji』The Japan Weekly Mail, June 3, 1893）

* ウェストンは、嵐のために下の小屋で停滞したものの、好天に恵まれて登頂した。しかし、反対側の御殿場へ下ったことから、大宮の人たちには遭難と思われたのだろうと、その経緯を記し遭難の事実を打ち消している。

遭難記事が英字紙に転載されてから10日も経って投書したのは、生還の記事が出なかったためだろうか。

5月……「日本アルプスの登山」を英国山岳会誌が掲載。

（『Mountaineering in the Japanese Alps』The Alpine Journal, Vol. 16, No. 120, 1893）

* 去年「ジャパン・ウイークリー・メール」に連載し、フレッシュフィールドにも送った槍ヶ岳と赤石岳の登山記である。英国山岳会会長でもあった同氏がRGS会誌よりも山岳会誌の方が適当と判断したのだろう。英国山岳会に入会したウェストンへのプレゼントだったかも知れない。

- 8月 3日(木)……? —〈汽車〉—横川 [宿不明]
 4日(金)……横川—〈汽車〉—長野(善光寺、長野測候所)—新
 橋—矢の尻峠—新町 [三好屋]
 5日(土)……新町—日名—左右—大町 [山 長]
 6日(日)……〈安息日〉 [同 上]
 7日(月)……大町—野口—大出—籠川谷 [牛小屋跡で野營]
 8日(火)……扇沢雪溪—針ノ木峠—針ノ木谷—黒部川—平
 [平の小屋]
 9日(水)……平—ヌクイ谷—ヌクイ谷峠—ザラ峠—湯川—立山下
 [立山温泉]
 10日(木)……〈休 養〉 [同 上]
 11日(金)……立山下—松尾峠—弥陀ヶ原—姥石—室堂—立山登頂
 室堂—地獄谷—松尾峠—立山下 [同 上]
 12日(土)……立山下—原—小見—上滝—〈荷車—人力車〉—富山
 [木 屋]
 13日(日)……〈安息日〉 [同 上]
- * 3度目の中部山岳入りは単独行であった。ウェストンの目標は、
 記録上アトキンソン(R.W. Atkinson)とディクソン(W.G. Dixon)
 が明治12年に越えて以来、外国人が誰も成功していない針ノ木峠の
 通過、去年案内人が見つからずに登れなかった笠ヶ岳、それに穂高岳
 に外国人として初登することだった。針ノ木峠は、ウェストンが外国
 人として14年ぶりの通過であった。立山温泉に泊まって立山にも登
 ったが、眺望を述べた中に剣岳について何も触れていない。大町の案
 内人が剣岳を知らなかった筈はないし、立山の頂上で神主に聞いても
 分かったろうにと思える。結局、彼は3度の来日で1度も剣岳に登ろ
 うとしていないようだ。縁がなかったと言えばそれまでだが、ちょっ
 と不思議である。
- 8月 14日(月)……富山—笹津—猪谷—茂住—土—船津—〈全行程人力
 車〉 [渡辺の宿]
 15日(火)……船津—田頃家—今見—蒲田 [松下甚兵衛の宿]
 16日(水)……蒲田—平湯 [小林右衛門三郎の宿]
 17日(木)……平湯—安房峠—梓川畔—檜峠—大野川—橋場
 [清水屋]
 18日(金)……— [宿不明]
 19日(土)……— [信濃屋]
 —どちらの日に松本まで出たか不明。

20 日(日)……<安息日> [同 上]

* 富山から船津(岐阜県神岡町)を経て蒲田に來たウェストンは、笠ヶ岳に登る案内人を求めたが、この年もその願いは素気なく断わられた。猟師たちはみんな雨乞いの旅に出ていると言うのが理由だった。再挑戦も失敗した。蒲田の宿、松下では甚兵衛が亡くなっていた。前年ミラーが診察し、薬を送った主人である。しかし、甚兵衛は戸籍上明治 23 年 1 月に死去している。どうもわからないが、ウェストンの言う甚兵衛は次代の次右衛門で、村人たちが「甚兵衛さんの宿」と言いならわしていたための間違いではないだろうか。

* 失望を温泉で洗い流したウェストンは、安房峠を越えるべく平湯に來て右衛門三郎の宿に泊まった。主人は去年プレゼントされたナイフと人形を出して改めて礼を述べた。ウェストンに人形を貰った 8 歳の娘はトミと言い、本人は東京へ嫁いだが、人形の話だけは平湯の小林家に伝えられている。

8 月 21 日(月)……松本—森崎—洩東—橋場 [清水屋]

22 日(火)……雨で滞在 [同 上]

23 日(水)……雨で滞在 [同 上]

24 日(木)……橋場—風呂平—出シノ沢—岩魚留—徳本峠—明神 [山番小屋]

25 日(金)……明神—前穂高 [外国人初登頂]—嘉門次 小屋—明神 [同 上]

26 日(土)……明神—徳本峠—風呂平—橋場—松本 [信濃屋]

27 日(日)……<安息日> [同 上]

28 日(月)……松本—青木峠—上田<松本から馬車>

* 前穂高岳を狙ったウェストンは、いったん松本に出て手紙と食糧を受け取った。信濃屋の若主人笹井元治の紹介で、松本からは中沢弥惣右衛門が同行している。中沢は保福寺峠の西麓にある錦部村刈谷原の人であった。通訳兼渉外係りとして、笹井が推薦したものが見ているが確証はない。21 日にウェストンは中沢と名刺を交換した。この名刺によって彼が「神戸市中山手通 3 丁目 14」に住んでいたことがわかるなど、中沢の日記から穂高登山以外の行動が詳しくわかった。

この中沢の日記や前穂高岳への登路については、すでに「山岳」などに発表されており、本稿では省かせて頂く。

* ウェストン自身は、前穂高岳の登山を『手に汗をにぎる面白さだった』と述べているが、彼の最も印象に残ったのは中沢の「まじない」だったようだ。この「まじない」は下山途中、蜂に 12 ヲ所も刺

されたウェストンの痛みを癒そうと中沢が行なったもので、後の講演などで何度もそのことに触れている。

それはさておき、蜂騒動のウェストンと嘉門次の話の食い違いと、嘉門次の語ったその時の状況描写がちょっと面白い。

ウェストンは、「嘉門次が突然おどけた格好で跳び回り始めたので、駆け寄って見ると真相がわかった。嘉門次は黄蜂の巣を踏んだのだ」と書いている。

ところが嘉門次の話は少し違う。「或る時ウ氏は蜂の巣に打突かって蜂がワンワン騒ぎ出し、ウ氏の顔と云はず手と云はず刺したことがある。其時ウ氏はメロメロと声を立て、泣いたさうである。爺さん後で人に語って曰く『外国人と云ふものは大人でも子供の様に泣くものだナ』と。」

(『嘉門治爺さんの事ども』信濃毎日新聞 大正6年10月23日)

* 前穂登山を終えたウェストンは、翌日一気に松本まで出て、日曜日は浅間の湯で休養している。月曜日は午前3時に起きて上田への馬車に乗った。この馬車は、松本と上田の間を青木峠越えて結んでいた。当時二線路と呼ばれていた現在の国道143号線である。

ウェストンが何処へ行こうとしていたのかはっきりしないが、笹井元治とのやりとりから見ると、2度目の浅間登山を目指していたようだ。

9月13日(水)……RGS 理事フレッシュフィールド宛書簡発信。

(『The Monthly Record』The Geographical Journal, Vol. 3, No. 1, 1894)

* この書簡の中でウェストンは『恵那山は夏を除いて日本人にも登られたことはなかったと聞いている。また、針ノ木峠はこの10年ないし14年の間に、外国人が1度だけ越えているらしい。明神岳(前穂高岳)は、外国人による初登頂で、日本人でも2週間かそこら前に陸軍省の測量官が1度登っただけである』と述べている。

さらに、夏の登山ではRGSから貸与された水銀気圧計を使って高度測定を行ったが、この測定が役に立つことを願っていると記し、最後に『あなたの助言通り、日本アルプス全体を出版するための記事をまとめます』と結んでいる。明治29年(1896)に出版した「日本アルプスの登山と探検」が、フレッシュフィールドの勧めによるものだったことがわかる。

9月29日(金)……神戸の聖ミカエル教会定礎式に列席。

(『聖ミカエル教会史』神戸聖ミカエル教会百年史物語 八代欽一著)

1981年9月27日)

* 明治24年に隣家の失火で類焼した聖ミカエル教会の再建定礎式が、この日執り行なわれた。聖ミカエル教会は、SPGのフォス(H.J. Foss)が創設した教会だが、再建の定礎式はCMSのワレン(C.F. Warren)が司式し、ワレンとウェストン、フォスの3人が説教をした。

12月18日(月)……英国山岳会年次総会で、フレッシュフィールド会長が、ウェストンの日本に於ける活動を紹介。

(『Proceedings』The Alpine Journal, Vol. 17, No. 123, 1894)

* これは冒頭の挨拶の中で、その年の興味深い登山活動を紹介したものである。ウェストンについては『日本の高地における一連の遠征がウェストン師によって成された』と述べたに止まっている。

明治27年(1894)

1月……RGS会誌に『ウェストン氏は来年早々に帰国する』との記事。

(『The Monthly Record』The Geographical Journal, Vol. 3, No. 1, 1894)

* 前年9月13日付のフレッシュフィールドに宛てたウェストンの書簡を紹介したあと、上記の言葉が添えられていた。

6月12日(火)……東京地学協会の会員となる。

(『東京地学協会録事』東京地学協会報告第十六年第一号, 明治28年6月)

* 同報に『一、アール、ウォルター、ウェストン氏ハ会員チャンパーレン氏ノ保薦ニヨリ入会ヲ申込マレタルニ付之レヲ承認スル事』とある。

7月17日(火)……?—東京・上野 [名倉屋]

18日(水)……上野—<汽車>—長野(長野測候所訪問)—<汽車>—直江津 [古川屋]

19日(木)……直江津—<小蒸気船>—糸魚川—親不知子不知—青海—糸魚川 [古川屋]

20日(金)……糸魚川—山之坊 [中倉村長の家]

21日(土)……山之坊—大所—木地屋—八丁坂—蓮華温泉

[蓮華温泉]

22日(日)……<安息日> [同上]

23日(月)……蓮華温泉—蓮華鉱山—大蓮華岳(白馬岳) [外国人]

初登頂]—蓮華温泉	[同 上]
24 日(火)……蓮華温泉—八丁坂—木地屋—大所—山之坊—下里瀬	[銭 屋]
25 日(水)……下里瀬—千国—塩島—神城—大町	[山 長]
26 日(木)……滞在	[同 上]
27 日(金)……滞在	[同 上]
28 日(土)……大町—東穂高—豊科—松本	[信濃屋]
29 日(日)……<安息日>	[同 上]

* この年は、ウィリアム・コンウェイ (Sir William Martin Conway) の「アルプス・端から端まで」のひそみに倣って、日本アルプスの縦断を試みたのである。名古屋にいたカナダ聖公会系の宣教師、ハミルトン (Rev. H.J. Hamilton) と、同志社出身の浦口文治が同行した。長野測候所を訪れ、気圧計を調整したあと、直江津、糸魚川と泊りを重ねた。どちらにも「古川屋」という宿があった。糸魚川では“親不知子不知”を探勝し、絶壁に道を拓いた青海の人、富岳磯平を訪ねている。

* まず白馬岳を目指したウェストンは姫川谷の松本街道を廻り、山之坊の中倉利忠治の家に泊まった。中倉利忠次は、当時小滝村の村長であり、後に西頸城郡会議員も勤めた。現在から考えると、何のために山之坊まで遠まわりをしたのか疑問に思うが、当時は小滝と平岩間の姫川沿いに道はなかった。姫川をはさんで両側に道があり、小滝—大峰峠—山之坊—大所が西側のルートだったと聞くと、納得出来る。

蓮華温泉に着いたウェストン、ハミルトンの2人は熱を出した。月曜日になっても熱の退かないハミルトンを残して、ウェストンは浦口、山崎巡査、案内人の4人で大蓮華岳(白馬岳)に外国人として初登頂した。大町に着いたウェストンらは、山長で2日間何もせずに滞在している。浦口によれば、ウェストンは針ノ木から槍への案内人を頼んだという。しかし、丁度お蚕の時期で案内する者がなく、諦めざるを得なかったらしい。では、この「針ノ木から槍」の「槍」は何処を指すのだろうか。針ノ木峠から、船窪岳、烏帽子岳、野口五郎岳、三俣蓮華岳、双六岳、槍ヶ岳と縦走する心算だったのか。あるいは針ノ木峠から鹿島槍を目指したものなのか。これは浦口の推理通り、鹿島槍を狙ったものようである。ウェストンは、大町で農商務省の出張所を訪ね、役人と雑談をしている。そこで誘われた黒岳への遠征を断わっていることから、縦走の意思はなかったと推測したい。

(『ウェストンと歩んだ頃』浦口文治著 山岳第二十九年三号 昭和10

年1月28日)

* ウェストンは大町から松本への途次、北徳高の薬屋兼宿屋〔とふしや〕で昼食をしたと書いている。これは東徳高の間違いで、〔とふしや〕は現在も薬局の経営を続けられている。しかし、宿屋は明治末期に廃業し、ウェストンに関しては何も伝えられていない。

7月30日(月)……松本—波田—橋場—稲核—大野川〔奥田喜一の宿〕

31日(火)……大野川—平湯〔小林右衛門三郎の宿〕

8月1日(水)……平湯—蒲田—中尾

〔蒲田の不明の家から中島宇右衛門家へ〕

2日(木)……中尾—穴毛谷—笠岳〔外国人初登頂〕—穴毛谷—中尾

〔中島宇右衛門の家〕

3日(金)……中尾—中尾峠—焼岳〔外国人初登頂〕—上高地温泉—明神〔山番小屋〕

4日(土)……明神—徳本峠—橋場—松本〔信濃屋〕

5日(日)……〈安息日〉。松本で礼拝〔同上〕

* 笠岳を目指したウェストンは、3度目の正直でついに登頂に成功した。中尾の猟師頭中島宇右衛門と山本竹次郎、栃尾の奥村市次郎の協力によるものであった。「日本アルプスの登山と探検」に載せた猟師らの写真が、中尾の山本家に残っている。写真の裏に「大日本飛騨国高山城阪写真師瀬古」と印刷されていた。当時、写真師瀬古の本店は岐阜にあった。名古屋と岐阜で伝道続けていたハミルトンが、高山に支店のある瀬古を通じて3人の猟師に送ったものだろう。

* 蒲田の人たちを刺激しないようにという、ひよんなことからウェストンは初めて中尾峠を越え、焼岳にも登った。焼岳登頂は、記録上外国人の初登である。登山史上で『明治8年、マーシャル焼岳登山』とされているのは、同年のガウランド(W. Gowland)による焼山(新潟県)登山の誤伝であろう。マーシャルは明治11年に「日本の火山」と題して、日本アジア協会で講演しているが、焼岳(硫黄岳)については一言も触れていない。当時は、その存在すら外国人の間に知られていなかったと思われる。

ウェストンが、後年しばしば訪れて楽しむことになった上高地温泉の湧出を見たのも、この時が初めてであった。嘉門次小屋の近くで、去年雇った案内人の1人に会っている。これは上条嘉門次とともに前穂高岳へ同行した上条万作だったのだろうか。

* 5日の安息日には、松本六九町の覚前政蔵宅で礼拝をした。日本聖公会の地域分担では、愛知、岐阜、長野、新潟がハミルトンの属

するカナダ聖公会の管轄であった。カナダに留学していた覚前執事 (Deacon …, Priest=司祭の一つ下位の位) が、この年から自宅を講義所にして伝道を始めていたのである。当時、信徒は5人と記録されている。

- 8月 6日(月)……松本—豊科—〈人力車〉—岩原 〔山口村長宅〕
 7日(火)……岩原—一ノ沢—横通岳との鞍部 〔野 営〕
 8日(水)……野营地—常念岳〔外国人初登頂〕—岩原
 〔山口村長宅〕

9日(木)……岩原—松本 〔信濃屋〕

* 大蓮華岳(白馬岳), 笠岳, 焼岳と3つの高山に外国人として初登頂したウェストンは、4つ目の初登頂を目指して常念岳へ向かった。

岩原の山口吉人村長宅に泊まった一行は、藤原啓太を案内に、山口琢松, 岩牧多聞次を連れて出発した。山口村長の息子も加わったが、この息子というのは娘婿の真喜治であった。一行7人は一ノ沢を登り、頂上まで1時間の常念乗越で野営している。登山者と案内人の心の通い合ったよき時代のキャンプを、ウェストンの著書や浦口の講演から酌み取ることが出来る。

(ふるさと常念 常念岳研究会編・発行 昭和57年3月17日刊)
 (長野県堀金村 山口なを女=吉人村長の孫の嫁=の書簡)

- 8月 10日(金)……松本—贄川 〔宿不明〕
 11日(…)……贄川—福島 〔俵 屋〕
 12日(日)……〈安息日〉 〔同 上〕
 13日(月)……福島—黒沢—松尾小屋—千本松小屋—女人堂—御岳
 登頂 〔榎山小屋〕
 14日(火)……山頂—金剛童子小屋—田ノ原小屋—中小屋—王滝
 〔滝神主の宿〕
 15日(水)……王滝—鞍馬橋—橋渡—福島 〔俵 屋〕
 16日(木)……〈休 息〉 〔同 上〕
 17日(金)……福島—権兵衛峠—

* 日本アルプス縦断の最後として、ウェストンは2度目の御岳を目指した。福島では、4年前とは別の俵屋に宿をとった。俵屋は木曾川と旧中山道にはさまれた当時の場所で、現在も営業されている。しかし、昭和2年5月の大火で全焼し、宿帳などの記録は何も残っていない。ウェストンが明治24年に泊まった益田屋は、この大火の後再建されなかったようだ。

* 明治24年の登山も黒沢口から登り、頂上から王滝に下って常盤

橋の畔にある橋渡の茶屋に泊まっている。健脚に驚くほかはないが、巡礼の様子や御岳講の神事をゆっくり見る時間はなかったに違いない。今回は頂上と王滝で泊まった。精進潔斎の水行や御岳信仰独自の神がかりの神事、御座立ての様子を興味深く詳細に記している。登山よりも、こうした宗教儀式の調査・探究が主な目的だったように思える。ウェストンは頂上小屋の主を『神主の棚山』としているが、棚山は神職ではなかった。また、王滝の神主の家は現在の滝旅館で、里宮の神職と行者の宿を兼ねていた。当時の神主は第十九代の滝亀松である。

* 上松近くでハミルトンと別れて、福島に戻ったウェストンと浦口は翌1日ゆっくりと休息をとった。松本から送られて来た新聞で、日清戦争の記事を読み、日本人の愛国心を驚きをこめて著書に書きとめている。

* このあとの旅程は、あまりはっきりはしていない。福島から権兵衛峠を越え、甲州街道を通って身延に出、富士川の急流を下って神戸に帰ったと、ウェストンは書いている。これに対し浦口は、岩瀬から箱根の本宿に落ち着き富士登山を希望したが、ウェストンに断われたとしており、浦口の記述通りいったん箱根で休養したあと神戸に帰ったものだろう。

10月12日(金)……日本郵船肥後丸で朝鮮から長崎着？

(『Passengers』The Rising Sun and Nagasaki Express, Oct. 17, 1894)

* 中部山岳の長期登山を終えてからのウェストンの動静は殆んどわからない。ただ、「日本アルプスの登山と探検」の中で、『戦争中、朝鮮を訪れた』ことがあったと記している。日清戦争は明治27年8月1日に宣戦が布告され、翌28年3月30日に休戦条約が調印された。この間に朝鮮を訪れたことは間違いないが、いつかははっきりしない。記事中の名前もRev.でなく、Mr. Westonで、ウェストン本人とは断定できないことをおことわりしておく。

10月29日(月)……エンプレス・オブ・インディア(S.S. Empress of India)で横浜出港。

(『Passengers』The Japan Weekly Mail, Nov. 3, 1894)

* ウェストン帰国の日も確認できない。この船は神戸、長崎を経由しての香港行きだが、ウェストンが何処まで乗船したかも不明である。

「日本年鑑」の明治28年版などから見て、明治27年中に帰国し

た公算が強いと考えられるが、翌年だったのかも知れない。明治 28 年 3 月現在として東京地学協会報告に記載された住所が、神戸市居留地 94 番館となっているためだ。この住所は明治 25 年に槍ヶ岳などへ同行したミラーの医院所在地である。

明治 28 年 (1895)

6 月 11 日(火)……英国山岳会の例会で『日本アルプスの登山と山岳信仰』と題して、初めて講演。

(『Mountaineering and Mountain Superstitions in the Japanese Alps』The Alpine Journal, Vol. 17, No. 128, 1895)

* この例会では、山岳会長フレッシュフィールドが議長となり、日本の駐英公使加藤高明を始め、ガウランド (W. Gowland) やバクストン (N. Buxton) も出席していた。ウェストンの講演はスライドを映写して行なわれた。講演後にガウランドは、地質学上の目的で日本の“アルプス”の旅をしたが、山々はその形状や 8000 ないし 10000 フィートという高さからも“山岳”であり、熟考の末“アルプス”という言葉を用いたと、自分がその命名者であることを明らかにしている。“日本アルプス”という言葉は、明治 14 年の「日本旅行案内」(初版)が初出であるが、後年この命名者をめぐって論争が起こった。ウェストンが『日本アルプスの語源』を「山岳」第 13 巻 3 号に寄稿して論争にピリオドがうたれたが、その解答はこの時すでにガウランド自身によって、命名の理由を含めて語られていたのである。

(『Proceedings of the Alpine Club』The Alpine Journal, Vol. 17, No. 128, 1895)

7 月頃……日本の人々や風景の写真 21 葉を RGS に寄贈。

(『New Maps』The Geographical Journal, Vol. 6, No. 2, 1895)

9 月 16 日(月)……英国学術振興大会で『日本アルプスの探検』を発表

12 月 9 日(月)……RGS で『日本アルプスの探検, 1891-1894』と題して講演

(『Exploration in the Japanese Alps, 1891-1894』The Geographical Journal, Vol. 7, No. 2, 1896)

* この例会にもガウランドやミルン (J. Milne) が出席していた。ガウランドは RGS の会員ではなかったため、RGS 書記ケルティ (S. Keltie) に例会への出席許可書を送って欲しいと依頼している。

講演後の意見陳述でガウランドは、日本での登山を始め、鉱物、動植物、それに古代遺跡にまで言及した。登山では、明治 6 年 (1873) に、当時大阪造幣寮の同僚だったディロン (E. Dillon) と御岳に登

ったこと、2年後に立山と焼山（新潟県）に登り、その後も槍ヶ岳、爺岳、五六岳、乗鞍岳に登ったと自身の登山歴を明らかにしている。（『日本アルプス探険の先駆者W・ガウランド』三井嘉雄著 岳人 8月号 昭和60年8月1日）

月日不明……ロンドン港の「ミッション・ツウ・シーメン」で、アシスタント・チャブレンを勤める。

(The Crockford's Clerical Directory, 1923)

* ウェストン自身は、「海員協会」(The Seamen's Institute) のアシスタント・チャブレンに就任したと述べている。

住所は East India Dock Road, London であったが、これは海員協会の所在であろう。MTS には翌年まで在職した。

(RGS 所蔵, ウェストン書簡)

明治 29 年 (1896)

3 月 31 日(火)……英国人類学研究所で『日本中央高地の慣習と迷信』と題して講演。

(『Customs and Superstitions in the Highlands of Central Japan』
Journal of the Royal Anthropological Institute of Great Britain and Ireland, Vol. 26, 1897)

* 信州や飛騨の人たちの生活の中に生きている慣習や迷信について、スライドを映写しながら講演した。『トンビが夕方に鳴くと翌日は晴れ』など、お天気に関する云い伝えを始め、雨乞いの迷信や御岳山の巡礼による信仰行事を自身の見聞に基づいて語っている。

8 月……スイスのエギッシュホルンに滞在。

(『Preface』*Mountaineering and Exploration in the Japanese Alps*, 1896)

* 著書の序文に、日付と上記の場所が記されている。詳細はわからない。

秋頃……「日本アルプスの登山と探検」(*Mountaineering and Exploration in the Japanese Alps*) を、ロンドンのジョン・マリー社から出版。

* この著作については、明治 26 年 (1893) のフレッシュフィールドへの書簡の中で、『あなたの助言通り、日本アルプス全体の原稿をまとめます』と述べている。しかし、翌明治 27 年 (1894) 2 月 27 日付のジョン・マリー社への手紙では、ビショップ夫人 (Mrs. Bishop = Isabella L. Bird) の勧めによって出版したいと申し出ている。刊

行に当たっては、マリー社の専属紀行家ビショップ夫人の縁に頼ったらしい。定価は 21 シリング、1000 部が刊行された。

そのうち合わせて 80 部が寄贈本で、売れ行きは年末までに 445 部、残り 475 部は翌年末で 30 部を残すだけという成績だった。

(『日本アルプスの“発見”』前田司著 一九世紀日本の情報と社会変動 昭和 60 年 3 月)



国際アルピニスト・シンポジウム ('86 松本)

日本山岳会 信濃支部

会期 1986年8月20日(水)―22日(金)
会場 松本市音楽文化ホール
主催 松本市・松本市教育委員会・松本商工会議所・
(社)松本青年会議所・信濃毎日新聞社
後援 (社)日本山岳会・日本山岳会信濃支部・(社)日
本山岳協会・長野県山岳協会ほか
主管 国際アルピニスト大会組織委員会

プログラム

8月20日(水)

13:00 開会式
14:10 特別講演(1)
「日本の登山史とマナスル登頂 30周年」
今西寿雄
15:15 特別講演(2)
「中国登山 30年の歴史」 史 占春
15:45 休憩
15:55 基調講演
「世界の自然保護活動について」
——カンチェンジュンガ登頂とその後——
ノーマン・ハーディ
17:30 終了
19:00 日本山岳会信濃支部主催 歓迎会
(於:しづか)

8月21日(木)

9:30 特別講演(3)
「山に挑む医学」
——高山病が身体に与える影響——
チャールズ・ハウストン

10:30 休憩

10:40 セッション I

「現代の登山」——安全と教育——

アンセルム・ボー

(フランス国立スキー登山学校教官)

柳沢 昭夫

(文部省登山研修所専門委員)

許 競

(中国登山協会常務副主席)

ナルニ・ジャヤール

(インド登山財団副会長)

ロバート・シェニー

(ワシントン大学医学部準教授)

12:30 午前の部終了

13:30 セッション II

「世界各国の登山事情」

——現在の問題と将来の展望——

佐々 保雄

(日本・第 14 代日本山岳会会長)

鎌田 久

(日本・日本山岳協会会長)

趙 相泰

(韓国・大韓山岳連盟・自然保護分科会
委員長)

クマール・カドガ殿下

(ネパール・ネパール山岳協会会長)

テク・ポッカレル

(ネパール・ネパール山岳協会事務局長)

S・R・シャルマ

(ネパール・ネパール山岳協会秘書)

ナルニ・ジャヤール

(インド・インド登山財団副会長)

アリ・ミルザ

(パキスタン・パキスタン山岳会会長・
UIAA 副会長)

ナジール・ザビル

(パキスタン・登山家)

ノーマン・ハーディ

(ニュージーランド・元ニュージーランド山岳会会長)

チャールズ・ハウストン

(米国・パーモント大学名誉教授)

17:30 終了

19:00 組織委員会主催 歓迎レセプション

(於・松本東急イン)

8月22日(金)

9:30 セッションⅢ

「山を次代へ」

——北アルプスの誕生と魅力——

田中 邦雄

10:30 フィルム・ショー「穂高は生きている」

11:00 「山を次代へ」——21世紀の登山——

重廣 恒夫

11:40 フィルム・ショー「ヤルンを滑る」

12:10 午前の部終了

13:00 記念講演

「自然を語る」

西堀栄三郎

14:00 閉会式

15:00 終了

付 特別記念講演

「私とヒマラヤ」

エドマンド・ヒラリー卿

付 「松本宣言」

国際アルピニスト・シンポジウム

日本の近代登山発祥の舞台である「日本アルプス」の命名100年を記念した国際アルピニストシンポジウムが、1986年8月20日から22日まで、日本アルプス山麓の山岳都市である長野県松本市で開催された。基調テーマは「山と人間」で、シンポジウムには九ヶ国から世界の著名なアルピニスト20人余が講師として参加、3日間にわたり、登山の歴史、自然保護、高所医学、登山の安全と教育、世界の登山界の現状と将来

展望などの問題をめぐって講演や活発な討論を繰り広げた。日本としては初めての国際的な山岳シンポジウムで、全国各地の登山愛好者や市民ら延べ約 1500 人も参加して討論に熱心に耳を傾けた。

シンポジウムでは、ヒマラヤをはじめとする世界の山岳で、登山者やトレッカーの増加による自然破壊、環境汚染が急速に進み、住民生活までおびやかしている実態が報告された。また世界の登山界発展のために国際交流がいつそう進められる必要があるとの意見が相次いだ。

シンポジウムは最終日に、「登山は人間の心身を鍛えるうえで、またとない“自然の教師”である。シンポジウムのまとめとして、登山教育の推進と山岳遭難防止の強化、世界の登山文化発展のための各国の積極的な役割、山を人類共通のかけがえない財産として保護することなどを世界の人々に呼びかける」との「松本宣言」を採択した。

このシンポジウムを記念して、世界初のエベレスト登頂者のエドモンド・ヒラリー卿が 8 月 10 日に松本市を訪れ特別講演「私とヒマラヤ」を行い、世界最高峰登頂成功の瞬間を再現、聴衆の深い感銘を呼んだ。

特別講演

「日本登山史とマナスル登頂 30 周年」

今西 寿雄

(日本山岳会会長)

日本の近代登山史について、①明治維新以降、第 1 次世界大戦まで——「登山のための登山」の思想が普及し、日本アルプス探検登山が盛んになった。②第 1 次世界大戦以降、第 2 次世界大戦まで——日本人のヨーロッパ・アルプス登山などを契機に、アルピニズムの言葉とともに積雪期登山が広まった。③第 2 次世界大戦終結以降——日本人のヒマラヤ登山時代——に分類した。とくに「1956 年の日本山岳会のマナスル登頂成功は日本の登山界に希望の灯をともした」と述べた。自身が日本人として初の 8000 m 峰の登頂者となったマナスル遠征にあたっては、装備や無線機が今日ほど良くなかったこと、ヒマラヤでは「山を汚す」と入山を現地住民から拒否されたことなど、苦労があったことも披露した。

今日の日本の登山界にも言及し、「日本のクライマーがヒマラヤや世界の 5 大陸の高峰に遠征、女性もエベレストなどで活躍している。最近ではアルパイン・スタイルで登る時代となった。経済的で合理的だが、クライマーは自分の体力の限界を知って、安全に登るべきだ。探検とは無事に帰ってくることだ」と強調した。

特別講演

「中国登山 30 年の歴史」

史 占春

(中国登山協会主席)

探検と体育を目的とする中国の近代登山運動は、始まってから 30 年と比較的新しく、中国登山協会は 1958 年に創立された、と報告。

中国登山運動の特徴として次の 3 点を挙げた。

第 1 は高峰への挑戦で、運動スタートからわずか 2 年後の 1960 年に、世界最高峰のチョモランマ (8848 m) に登頂した。1975 年には女性 1 人を含む 9 人がチョモランマに登り、最多人数登頂記録をつくった。

第 2 は、科学調査と登山運動を緊密に結びつけたこと。1959 年のミニヤ・コンカ登山隊に北京大学の科学者が参加し、気象、氷河、地質などの調査を行った。チョモランマでも 3 回の科学調査をし、国家から表彰された。

第 3 は大衆登山や基礎的な技術がまだ不十分であること。しかし将来展望では、広びろとした前進がある。

最後に、「今後、中国登山協会は、自らの登山活動の発展とともに、世界の登山界と広範な交流を進める。現在、北京市郊外に登山研修センターの建設をすすめており、このセンターで、アジアおよび世界の登山活動の発展に貢献したい」と述べた。

特別講演

「山に挑む医学」

——高山病が身体に与える影響——

チャールズ・ハウストン

(米国・パーモント大学名誉教授)

高山病について、まず、古代の日本の僧侶空海(弘法大師)が 814 年に書いたエッセイをはじめ、16 世紀末までの世界各地の記録を紹介した。高山病研究は減圧室が開発されたことなどにより、今世紀に入って本格的に行われだし、とくにこの 20 年間にヒマラヤ、アルプス、北・南米などに多くの遠征隊が送られて研究が進んだ——と説明。自らが指揮し、減圧タンクを使用しての研究(1946 年と 1985 年のエベレスト作戦)で、人間がエベレストのような高度(8848 m)でも自転車をこぐことができるなど十分機能が働くことを初めて証明した——と画期的な成果を報告した。

今日では、高山病が、①急性高山病、②高所肺浮腫、③高所脳浮腫、④高所網膜出血、⑤慢性高山病——の5つに分類されている、と説明。急性高山病は2500mほどの高さに急に登った人の15パーセントに起こり、高所肺浮腫は2700mぐらいの高度にあるスキー場では1万人に1人の割合で重度の症状が出て、死に至ることもある、高所脳浮腫はもっと危険、高所網膜出血は5000m以上でよくみられる——など、それぞれの原因や症状、治療法を解説した。

登山者への注意として「ゆっくり登り、異常があればとにかく下山すること」を挙げ、病気の人は医師と相談するよう助言。「海拔のレベルで健康な人は3000mぐらいまでは十分適応できる」と述べた。

基調講演

「世界の自然保護活動について」

——カンチェンジュンガ登頂とその後——

ノーマン・ハーディ

(元ニュージーランド山岳会会長)

1955年の英国カンチェンジュンガ隊副隊長として初登頂した後、ヒラリー卿のヒマラヤ財団理事としてのネパールでの活動などを紹介。その中で、ネパール奥地の森林破壊のスライドを示しながら、「1954年には、この辺の斜面はすべて木で覆われていたが、トレッカーが訪れるようになり、薪や建築材として伐採されて、木材の供給量は大幅に減った。トレッカーは灯油やガスを持ち歩いてほしい。同時に大がかりな植林事業も必要だ」と訴えた。また、美しい風景が観光客の捨てるゴミで損われていることも紹介した。

続いて、南極での活動、アフリカのケニア、シベリア、日本、アメリカなどへの旅行の体験をスライドで映しながら、まとめとして、自然保護について次のように呼びかけた。

「多くの旅行で、私は人間が環境を破壊していることを見てきた。われわれは人口の増加をコントロールしなくてはならない。国土をもっと大切にしよう子供たちに教育しなくてはならない。政策をたてる政治家たちは4年や5年でなく、40年、100年という単位でものを考えるべきだ。山を愛する人びと、山に登る人びとは、日ごろより多く自然に接触しているのだから、ぜひ賢明に行動し、動・植物や自然景観の美しさを保つため働いてほしい」

「現代の登山——安全と教育」

現代の登山における最も重要な問題のひとつである安全と教育について、アンセルム・ボー・フランス国立スキー登山学校教官、柳沢昭夫・日本文部省登山研修所専門職員、許競・中国登山協会常務副出席、ナルニ・ジャヤール・インド登山財団副会長、ロバート・シェニー・米国シアトル・ワシントン大学医学部準教授が、それぞれ各国の事情、研究などについて報告。各氏とも「安全な登山が第一」と強調した。

ボー氏は、欧州を中心とした登山、岩登り、ハイキング、スキーの発達の経過を、アルピニズムの観点から説明。この中で、「近年愛好者が増えている山の散策やスキーツアーなどでは、危険があまり認識されておらず、情報と装備の不足が安全をおびやかす。十分な情報、装備、体力が必要だ」と警告した。また、国立スキー登山学校（E.N.S.A. = 1946年にシャモニーに創立）について、「スキーのインストラクター、登山ガイドを養成しており、フランスにはインストラクターが8000人、ガイドが600人いる。自然保護にあたるガイドも養成している」と報告。山岳救助のために1910年に遭難救助協会が設立され、1956年には国際的な組織も生まれたこと、医師の乗り込んだヘリコプター、ベテランの隊員による救助活動の現状を紹介するとともに「民間救助隊による救助費用は登山者にかかるので、保険をかけておくべきだ」と忠告した。

柳沢氏は、「登山には本来危険が含まれている。登山者は常に人間は小さい存在だと覚えておやことが必要」と指摘。文部省登山研修所での研究、調査をもとに、低酸素、寒さなど異常な環境下での登山では、大学山岳部の1日の行動はフルマラソンの2回分のエネルギーを消費するうえ、荷物を背負っての行動であることから摂取するエネルギーも通常の時より少なく、大学山岳部リーダーの体力も他の運動部の学生と比べ劣る、との結果を明らかにした。このため、指導者の養成が大きな問題だ、と指摘した。また、近年登山者が青少年から中高年者まで多様化しているので、これらの人びと向けのゆるやかな組織や指導体制が必要と提唱した。

許競氏は、「中国は人間は国家の大切な財産との考えから、登山の安全を重視している」と前置きし、中国登山隊の登山活動で成功した例、失敗した例を引用しながら、中国の実情や考え方を報告した。ミニヤ・コンカの事故（1957年）を乗り越え、チョモランマの成功（1960年、1975年）につなげた事例などを通して、遭難の原因のひとつとして技術、高所順応など体力、経験と臨機応変の状況判断などを含む技術構成の低さがあるとした。また科学的技術や知識、組織の規律も重要といい、「安全の見込みのない登山はやめるのが賢明」と述べた。今後の教育の目標として、①厳しい訓練で技術構成を高める、②命令にすぐ従うなど組織の規律性を高める、③集団の中で心を配り合うためチームワークを養う——ことを挙げた。

ジャヤール氏は、インドの登山の歴史に触れたあと、1953年の英国隊でヒラリー卿とともにエベレスト初登頂に成功したテンジン氏の功績をたたえてダーズリンに設立さ

れたヒマラヤ登山研修所を紹介。登山訓練のため4つのコースがあり、女性専用コースもあって、政府の援助で安い費用で研修できると述べた。同様の研修所はカシミール、ガルワール地方、西ヒマラヤにもあるという。また1958年にインド登山財団が設立され、登山チームへの装備の援助、国内外の登山者のための刊行物の出版、救助活動をしており、遭難救助や通信部門ではインド空軍や陸軍、警察、各地の登山研修所が大きな役割を果たしていると語った。

シェニー博士は、最近の高所医学研究のうち自らが加わったプロジェクトを含む5つのケースを紹介。ハウストン博士の指揮した「エベレスト作戦」やピーター・ハケット博士らによるアラスカ・マッキンリー山での研究などで、エベレストなどの高所でも人間の機能が十分働くことなどを説明した。そして「高所に人間がどう順応するか、さらに研究を深めたい。今後はこうした研究と登山にみられる冒険心をうまくかみ合わせることだ」と述べた。

セッション II

「世界各国の登山事情——現在の問題と将来の展望」

参加9カ国の代表が、それぞれの立場から報告・討論を行った。論議は、ヒマラヤをはじめとする世界各地の自然破壊と保護対策、遭難や事故防止、国際交流などに集まり、シンポジウムの基調テーマである「山と人間」を考えるうえで貴重な手がかりを提供した。

以下は、各国講師の発言からまとめたセッションのあらましである。

自然破壊の実態

まず、ネパールの代表が、ヒマラヤ地域の自然破壊について報告した。ネパール山岳協会会長のクマール・カドガ殿下は、登山の悪い副産物として森林破壊やキャンプ場のゴミによる公害が進んでいることを指摘。とくに年間25000人以上の登山者やトレkkerによって薪の消費量が増え、森林の伐採が従来の2倍以上のスピードで進んでいると指摘。ネパール山岳協会事務局長のテク・ボカレル氏も、「最近増加しているトレkkerがルートをはずれて傷つきやすいヒマラヤの環境に足を踏み入れている。とくに個人で来るトレkkerによる自然破壊が目立つ。ホテル、旅館、ティーショップも自然に悪い影響を与えている」と報告した。

インド登山財団副会長のナルニ・ジャヤール氏は、「ヒマラヤの高山ではカバの木が2cm伸びるのに6年もかかり、トショウの木にいたっては20年もかかって、非常に破壊に対して弱い」とスライドを使用して説明した。

韓国の大韓山岳連盟・自然保護分科会委員長の趙相泰氏も、韓国でも登山の大衆化に伴って山の自然破壊が進んでいることを報告。カドガ殿下は「ヒマラヤでの30年間の自然環境の悪化に対しては、各地に共通する課題として対策に取り組んでほしい」と強

く訴えた。

自然保護対策

ネパールの代表は、自然保護対策として、ヒマラヤ地域に自然公園を設けていることを紹介。最近では、住民への恩恵、生活の発展も考えて、住民の協力・参加による保護策を進めている、と報告した。具体的な例が、国王の命令によるアンナプルナの保護地域（国立公園）で、海外の援助も得て基金を設立、植林、灯油基地の建設など薪の代替エネルギー確保など多角的な事業に取り組んでおり、「発展途上国のモデルとなろう」と期待を表明した。また、カドガ殿下は政府と任意団体による生態系などの山岳モニター制度を紹介した。

ジャヤール氏は、インドのナンダ・デヴィ（7816 m）の山頂付近を1983年から入山禁止とし、サンクチュアリとしていると報告。米国バーモント大学名誉教授のチャールズ・ハウストン博士もナンダ・デヴィ閉山を「勇気ある措置」と強い賛意を表明した。

また、ジャヤール氏は「限られた山に登山者が集中するので自然破壊も集中する。中級でも魅力的な山が多いので、少数の登山家が短期速攻のアルパインスタイルで登れば悪影響も緩和される」と提案した。

元ニュージーランド山岳会会長のノーマン・ハーディー氏は、自国の国立公園の管理について、各公園に委員会があってそれぞれ話し合いながら活動しており、既存の山岳会の代表が委員会を構成していると紹介。また、ヒラリー卿がネパールでいろいろ活動していることもあり、ネパールの自然保護などに喜んで協力する人が多いと語った。フランスの国立スキー登山学校教官のアンセルム・ボー氏は「フランスでは自然保護のため、山のガイドの助けを得て、ミニ・グループでトレッキングに行くことが多い」と報告した。

遭難・事故と対策

パキスタン山岳会会長のアリ・ミルザ氏は、1986年夏季に悪天候のためK2で続発した遭難について、それぞれの死亡者の遺族に弔意を表すとともに、「今年は経験豊かな登山家を失った。とくに初心者には自分の体力を十分考えて登山の機会を与えてほしい」と呼びかけた。同じパキスタンの若手登山家のナジル・ザビル氏も「最近では8000m級に皆が競って登ろうとする傾向から悲劇（遭難多発）が起きている」と分析した。また、ミルザ氏はパキスタンでも、軍のヘリコプターなどによる救助体制ができている、と報告した。

事故と訴訟

米国のハウストン博士は、米国で登山やスキー事故をめぐって訴訟が続出し、深刻な状況になっていることを報告した。それによるとスキーヤーがスキー場側の警告を守らずにスキーをして死亡したのに、スキー場側に責任があると250万ドルもの賠償金を払ったケース、政府の職務で会議に出席したあとスキー場で心臓発作を起こして死亡したのに、政府の管理下で死亡したとして訴訟を起こしたケースなどがある。賠償金の支払いで倒産に追い込まれたトレッキング会社も出ており、保険料の高騰から海外遠征をやめてしまうケースもあるという。ハウストン博士は「私は、そうした提訴は安易にす

るべきでない」とし、「今後、各国に広がる恐れがある」と懸念を表明した。

国際交流と今後の登山

今後の登山のあり方について、ネパール代表は「民族の文化を大事にすることが大切」（カドガ殿下）、「ネパール国王は、ネパールが登山家の友情を育て、平和の地帯であるために、ヒマラヤの山を開放していく考えている」（シャルマ氏・ネパール山岳協会秘書）と表明した。パキスタンのミルザ氏も「パキスタンは入山条件が寛大であり、どんなに多くの遠征隊が来てもあたたかく迎えたい」と述べた。

また、中国登山協会常務副主席の許競氏は「中国の山を開放し、北京郊外に登山センターをつくり、青少年への技術指導と国際交流を進めたい」と表明した。

前日本山岳会会長の佐々保雄氏は「多くの高い山の自然保護のためにも、先進国は高い山をもつ国へ援助をするべきだ」と語るとともに、世界の山岳情報がすぐにわかるような国際的な登山情報センターの設立を提言した。日本山岳協会会長の鎌田久氏は「海外遠征隊の多い日本は事故防止などで海外各国と協力していきたい」と語った。

韓国の趙相泰氏は「今夏（1986年）のK2登頂成功を機に、韓国登山家を世界のクライマーと肩を並べられるようにしたい。そのためには、各国との交流を深めていきたい」と抱負を述べた。

また、自然破壊のほかにも、心ない外国遠征隊やトレッカーが、富をもたらす一方で、現地の人びとの生活、習慣などを混乱させているとの指摘もネパール、パキスタンの代表からあった。「インフレに悩まされる」「子供たちがトレッカーにキャンデーをねだったりする。子供への教育も必要だが、大人であるトレッカーが気をつけてほしい」（ネパール）、「やたらにお金をばらまく遠征隊がある。本国との事情の違いを理解すべきだ。カラコルムでは法律違反もあったが、これは登山家としてはずかしいことだ。個人の名誉のために他の登山家が山に登れなくなるという問題も起きている。日本アルプスが誰でも登れるように、どこの山も自由に登れるような日が来ることを願っている」（パキスタン）などだ。

ハウストン氏は「山は国家や登山家の栄光のために死をとげる場所ではなくなった」と語った。セッションの途中で、山の遭難者の霊をいたみ全員が1分間の黙とうをした。

セッション III

「山を次代へ——北アルプスの誕生と魅力」

田中 邦雄

（日本・信州大学教養部教授）

日本の中央部に位置し、3000 m級の山が連なる北アルプスの地域は、古生代から中

世代ごろ（約4億年から1億年前）まで海底であり、そこへ堆積した粘板岩やチャートなどの岩類が造山運動で隆起し、北アルプスの骨組みとなった。中生代後期から新世代前期にかけて、各種の火成岩類ができて、肉付けされた。北アルプスが高くそびえるようになったのは、新生代第4紀に入ってからで、約60万年前から隆起が始まった——と日本の近代登山発祥の舞台となった北アルプスの成り立ちを解説した。

北アルプスの魅力について、「第4紀の時代の火山活動や寒気の襲来による氷河の形成など、その地形も見逃せない。高山植物やライチョウなど氷河時代の名残りの動植物は、分布が限られていて、学術的に貴重である。これらの自然を破壊しないよう、次の世代に残していかなければならない」と強調した。

セッション III

「山を次代へ——21世紀の登山」

重廣 恒夫

（日本・RCC II 同人・日本山岳会会員）

山登りを始めたのは昆虫採集からで、高校時代からヨーロッパの岩登りに魅力を感じ、大学時代は日本の北アルプスの穂高岳などの岩場に盛んに挑んだ——と、登山家としての生い立ちをまず語った。

1973年に日本エベレスト登山隊の一員として初めてヒマラヤへ出かけ、続いてナンダ・デヴィ、K2、カンチェンジュンガなどの遠征に参加した、と豊富な海外遠征の体験を語った。

それらの体験から、登山家への助言を次のように述べた。

「ヒマラヤの高峰登山には、体力と気力が必要だが、最終的には頂上に立ちたいという意欲が支えとなる。的確な判断力も必要で、これには日ごろの訓練や体験がものをいう。そして何よりも自分を知り、自分に打ち勝つことだ」

21世紀の登山については、「次の世紀に入っても、登山に大きな変化はないと思われる。それは、基本的には登山家一人ひとりの経験の積み重ねがあって次のレベルに到達するというのが登山だからだ」とし、自身では「自然と向かい合い、自然の強さを知れば知るほど、山に向かっていく気持ちが高まってくる。いろいろなことに興味を持ちながら山を登り続けたい」との抱負を述べた。

記念講演

「自然を語る」

西堀 栄三郎

(元日本山岳会会長)

子供のころ弱かった心身を鍛えるために登山を始め、岩登り、スキーをやっているうちに「なぜ山が人を惹きつけるのか」を考えるようになり、「山は昔から変わらない大自然の残された唯一の場所、大自然の象徴である」との結論に達した、と山とのかかわりについて、まず語った。

山に登る態度については、「山と闘うということではなく、山は人の心を鍛えてくれる場で、登山者は山と共に生きているのだ」と述べた。

自分を山に駆り立てるのは探究心で、初めて入った日本アルプスやヒマラヤ、後に行った南極でもそれぞれ新しい発見（ディスカバリー）があり、喜びを感じたという。その中で未知の世界に感じる不安は、創意工夫と誰かが支えてくれると信じることで勇気がわき、克服できること、人が遭遇する「不思議」を科学（サイエンス）の力で解明することは探究心のおかげであることなどが分かったとも述べた。

自然保護問題については、自らが自然に人工の手を加える技術者であることからジレンマに陥ったが、結局「試験管の中にも自然がある。技術も自然の恵みを受けている。大自然の恵みである資源を有用なものにする技術は、大自然の法則に従ってこそ初めてすべてが可能になる。人は自然にそむいては何もできない」と気付いたという。

したがって「技術者が自然を破壊することは恥しいことで、同様に山男は自然保護ということでは毅然とした態度で模範を示すべきだ」と助言。最後に「そこに山があるから登るというのではなく、自分たちは良い人間だから山に登るというようになってほしい」と強く呼びかけた。

国際アルピニスト大会特別記念講演

「私とヒマラヤ」

エドモンド・ヒラリー卿

(エベレスト初登頂者・ニュージーランド)

ヒラリー卿は、まず登山について、「私の生涯で大変に幸福な経験だった。恐怖もあったが、ふだんの能力を越える力を発揮させ、勇気をふるい立たせるものであった。山を征服することだけでなく、恐怖心に打ち勝つ方法を学んだ」と、人生観と重ね合わせ

ながら、その魅力を語った。

1953年(昭和28年)5月29日のエベレスト初登頂については、当時のカースライドを使って、人間を寄せつけないような氷壁やクレパスの状態などを詳しく紹介。苦闘の中で頂上に立ったことは「(隊員)一人ひとりに違った意味があった」とし、「私にとっては、エベレスト地区の人たちのために何かしたいと考えたことであった」と述べた。

その決意の通り(ヒマラヤ財団をつくって)、これまでに学校25、病院2、診療所12を建設してきたという。現地の若者を“医師”として養成、簡単な医療の普及に努めている様子なども話し、これらは「私が一番うれしく(誇りに)思っていることです」と締めくくった。

会場の質問にも答え、最近話題になっている英人マロリーのエベレスト初登頂(1924年)説について「彼は私にとって大変な英雄だ。頂上に達したかどうか分からないが、私自身は最初の登頂者であってほしいと思っている。しかし一番大事なことは安全に登頂して、安全に下りることだ」と述べた。シェルパのテンジンと頂上に立った時の瞬間を「彼の手を握るために手を差し出したら、彼は両手を私の肩に広げてきた。私たちは両手でしっかりと抱き合った」と再現した。

<付記>

それぞれのご講演を、要旨として議長団でまとめさせて頂きました。

セッションⅡでは、討論があり活発なものでしたが、時間も少なく割愛しました。

本シンポジウムは、中村純二氏、鳴原啓佑氏、松田雄一氏、湯浅道男氏、神崎忠男氏の五岳兄に特別にお世話になりました。またE.ヒラリー卿の特別記念講演につきましては、吉沢一郎、中村テル両名誉会員のご尽力によって開催でき、本大会に大変良い意味で大きなインパクトを頂きました。

ご後援とご支援に、あらためて御礼申し上げます。

1987年3月

国際アルピニスト大会組織委員会

文責：武田 武・田中弘美

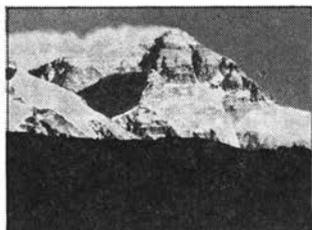


ATLAS TREK

陰になり日向になり.....



Manaslu



Qomolangma



Everest



Nanda Devi



Qomolangma/Sagalmatha



Kangchenjunga

成功を祈りつつ...

特別企画

パンフレットを御覧下さい

1988年4月23日(土)～5月10日(火) 18日間 チョモランマ ベースキャンプ訪問

1988年4月23日(土)～5月14日(土) 22日間 サガルマータ ベースキャンプ訪問

1988年4月29日(金)～5月8日(日) 10日間 ヒマラヤ横断飛行 ネパール～中国

(PHOTO BY GOTA ISONO)

株式会社アトラスレック 〒160 東京都新宿区三栄町7番地 TEL: 03-341-0030 FAX: 341-9200

ATLAS TREK Co., Ltd. 7, Sanei-cho, Shinjuku-ku, Tokyo 160 Japan TELEX J26620 ATREK

日本通運株式会社・東京海上火災保険株式会社代理店 運輸大臣登録一般旅行業代理店業第5084号

大修館書店

小島烏水全集

全14巻
別巻1

編集委員=島田 巽・串田孫一・山崎安治・近藤信行
〈第14回配本〉好評発売中!

12山の風流使者^{ほか}

山と芸術に生涯をかけた烏水の遺著に、晩年の随想および講演等を収録
山の風流使者(風流漂泊の第一歩 心を鍛へる草鞋の旅 欧州アルプス最初の邦人登山者
山の画家茨木猪之吉 登山家マムと日本山岳会の人々 山の因縁五十五年) 阿佐谷文草
私の山谷放浪 山と人の素描 本邦の山岳文学 過ぎにし旅のことも 越中山川譜 芭蕉の旅と句碑 山へ帰らう 他
菊判・上製 648頁 定価9,800円

全巻の内容構成

- 1 初期文集 8,800円
- 2 「文庫」時代(一) 8,800円
- 3 「文庫」時代(二) 9,800円
- 4 山水無盡蔵 不二山ほか 8,800円
- 5 日本山水論 山水美論ほか 8,800円
- 6 雲表 日本アルプス(第一巻) 6,800円
- 7 日本アルプス(第二巻・第三巻) 7,200円
- 8 日本アルプス(第四巻)ほか 8,800円
- 9 氷河と萬年雪の山ほか 8,800円
- 10 書斎の岳人 アルピニストの手記ほか 8,800円
- 11 優松の匂ひほか 8,800円
- 12 山の風流使者ほか 9,800円
- 13 浮世絵と風景画ほか 9,200円
- 14 江戸末期の浮世絵ほか 8,800円

図説百科山岳の世界

N.ディーレンファース
T.ヒーペラー他著
日本語版監修 西堀栄三郎
宮下啓三

本書は、600枚におよぶ美術的にたのしめ、かつ科学的に貴重な写真・図版類をもとに、地球上の山岳の全体像を多角的にわかりやすくまとめたスタンダードワーク(基本図書)である。
B4変型判・上製函入・310頁 18,000円

遥かなり エヴェレスト

——マロリー追想——

島田 巽著

半世紀余り前、エヴェレスト初挑戦の英国隊の一員に選ばれ、その第三次遠征時に頂上を目指したまま還らぬ人となった若きアルピニストG・L・マロリーの素顔を、多様な人々との出会いや英国の社会背景を通して描いた追想記。
四六判・292頁 1,500円

●日本の近代アルピニズム史上に燦然と輝く不朽の山岳名著

覆刻日本の山岳名著 全18点22冊 付・解題書1
特別資料 日本山岳会「會報」第1号—第100号
企画・編集=日本山岳会 ■現金価格190,000円(分売はいたしません) 内容見本呈

●近代登山の黎明を告げる先蹤者たちの限りない“山への讃歌”

新選覆刻日本の山岳名著 全20点29冊 付・解題書1
特別資料2点
企画・編集=日本山岳会 ■現金価格175,000円(分売はいたしません) 内容見本呈

〒101 東京都千代田区神田錦町3-24 振替/東京9-40504 電話(03)294・2221<大代表>

アルファ米

お湯を注いで10分、
ホカホカのご飯ができあがり

姉妹品 アルファ赤飯

装備を
へらせ

時間を
かせげ



お求めは全国有名スポーツ用品店で……



尾西食品株式会社

本社 東京都港区三田4-15-36 メゾン・ド・聖坂内
TEL 03-452-4020 FAX 03-456-3783
大阪 大阪市淀川区新高1-15-41
TEL 06-391-5995 FAX 06-396-6156

世界中の名だたる名峰の航空山岳写真集！

空撮・世界の名峰

山田圭一作品集

文 佐貫亦男
杉本 誠

二十数年來、三〇〇回以上のフライトを重ね、
ヒマラヤ、アンデス、アルプスなど、世界中
の名だたる名峰の空撮に成功した著者の作品
集大成。アルビニストには必見の書。

●最新刊発売中

B5変型 一五二頁 定価四八〇〇円

普及版 深田久弥著 望月達夫・諏訪多栄蔵・雁部貞夫・池田常道編

ヒマラヤの高峰 全5巻

四六判 各巻定価一七〇〇円

ヒマラヤ文献目録

薬師義美編

B5判 定価一九〇〇〇円

《新書版》 山岳名著選

処女峰アンナプルナ 最初の エルゾング／近藤等訳 定価二〇〇〇円

星と嵐―六つの北壁登行 レビュファ／近藤等訳 定価一〇〇〇円

大いなる山の日々 ボナツティ／横川文雄訳 定価二二〇〇円

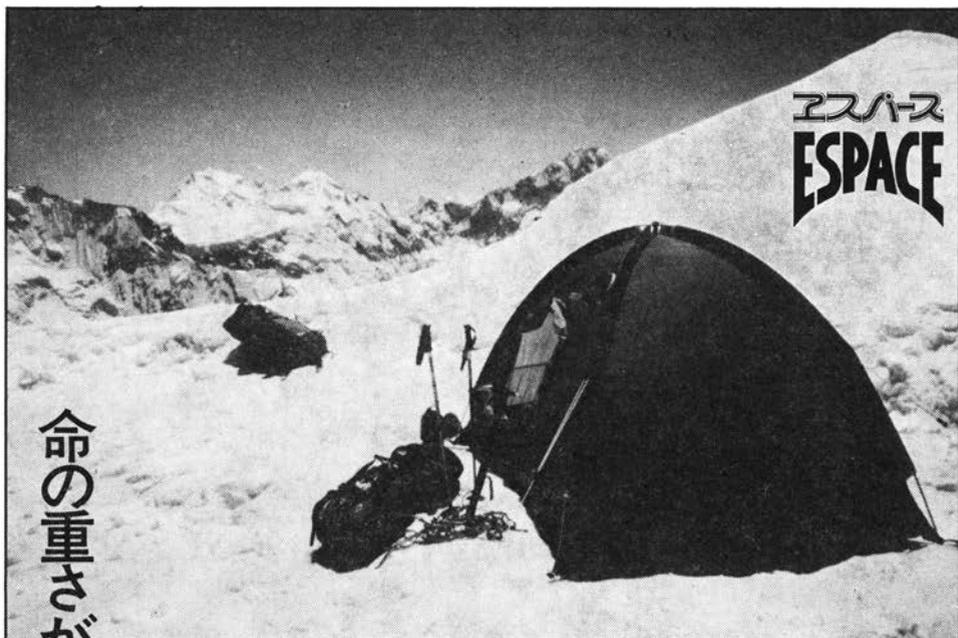
ジャヌー北壁 小西政雄 定価二二〇〇円

可愛い山 石川欣一 定価一〇〇〇円

101 東京都千代田区神田小川町三―二一四
振替東京九―三三三二八／電二九一―七八一一

白水社

エスパース
ESPACE



命の重さが、**テントを軽くした。**

理想のテントを語る時、設営面での機能は言うに及ばず、重量と収納の問題も大きな争点になる。重量の問題は登行時の疲労に、収納の問題は食料や衣服の携帯に、それぞれ大きな影響を与えるからだ。

「エスパース・マキシム」は、「理想のテント」としてクライマーの厚い信頼を得ている「エスパース・シリーズ」の最新作。従来以上に軽量化・コンパクト化を目的として設計され、独自の生地とフレームの使用により、600g~900gの軽量化、収納スペースも $\frac{1}{2}$ 以下のコンパクト化に成功。最も軽くコンパクトなプライベート・テントが、ここに誕生した。

●エスパース・マキシム

〈生地〉：細い糸が密度濃く打ち込まれており、従来のテントには見られない、軽さとしなやかさを実現。

〈フレーム〉：軽合金中空フレーム(U.S.A.製)の開発により、従来の日本製フレームでは実現できなかった、細く、軽く、強いポールを実現。設営も非常に簡単です。

ミニ(1~2人用) ¥35,000：本体210×110×110cm/1.72kg

2~3人用 ¥39,000：本体210×150×125cm/1.96kg

4~5人用 ¥46,000：本体210×210×145cm/2.38kg



●軽さのオールシーズンを選ぶ。

ESPACE MAXIM

エスパース・マキシム(オールシーズン)



●カクログご希望の方は、住所、氏名、年令、職業、掲載誌名を明記。切手170円分を添えてご請求ください。

本店 / 東京都新宿区高田馬場3-3-3 平160
03-371-4333代 営業時間/AM10:30-PM
8:30(平日) AM10:30-PM7:00(日・祭)



栄光はここに確かに語り継がれる。

そして、私たちの胸に、
しっかりと刻みこまれる。

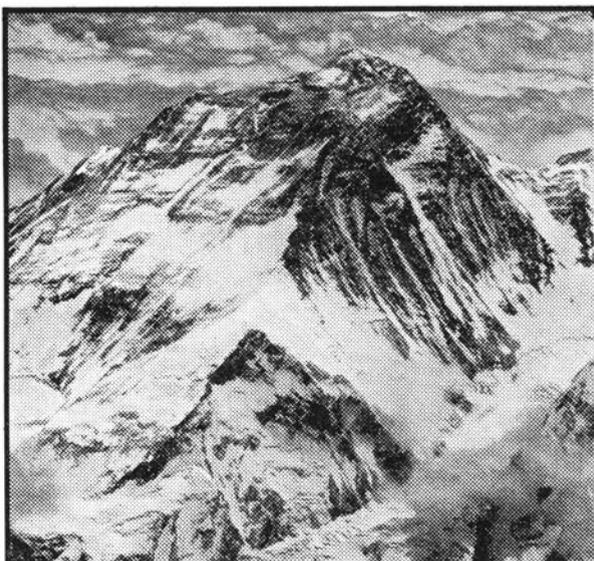
近代アルピニズム開花期のすべてを記した

「マウンテン・ワールド」。

第Ⅱ期 全5冊、

待望の「ヒマラヤ編年誌」を加えて

いよいよ、刊行です。



栄光の時代を語り継ぐ「幻の名書」
遂に邦訳。

THE MOUNTAIN WORLD
スイス山岳研究財団編
マウンテン・ワールド
総19巻(本巻17巻・別巻2巻)

小学館

第Ⅱ期

●七四〇〇m以上の世界の著名山岳リスト●エヴェレスト山頂に立った9人●南極の高峰●マルセル・ルイ・クルツを悼む●ロシユ・ゴル谷からの三つの登頂●極大雪山登山隊はか

15巻〜17巻 (1964〜1969)

別巻 ヒマラヤ編年誌1 / ヒマラヤ編年誌2

全5冊セット / 12月上旬刊行

〈第Ⅰ期5冊セット価格〉現金価格(定価)125,000円
分割払価格 130,000円

●支払期間10か月 支払回数10回 ●実質年率8.8% (均等払の場合) 分前払は手数料なし
B5判(257ミリ×182ミリ) / 平均310頁 / 平均写真頁64頁
日本語版監修: 近藤等 / 福田宏年 / 望月達男 / 葉師義美 / 吉沢一郎

【第Ⅰ期】8巻〜14巻(1953〜1963) 全7冊 / 好評発売中!

〈第Ⅰ期全7冊セット定価〉現金価格(定価)175,000円 / 分割価格182,000円

【第Ⅲ期】1巻〜7巻(1946〜1952) 全7冊 / '88年秋刊行

詳しい資料を差し上げます。〒101 東京都千代田区一ツ橋2-3-1 小学館宣伝部「マウンテン・ワールド」係までおハガキで。

実業之日本社の山と旅の本

若き日の山

串田孫一 ● A5変型判 / 定価15000円

心の歌う山

串田孫一 ● A5変型判 / 定価18000円

山と別れる峠

串田孫一 ● A5変型判 / 定価16000円

山を考える

本多勝一 ● 四六判 / 定価15000円

黄色いテント

田淵行男 ● A5変型判 / 定価38000円

常念の見える町

安曇野抄
蜂谷 緑 ● 四六判 / 定価13800円

アルプス青春記

朝比奈菊雄 ● A5変型判 / 定価16000円

御嶽の見える村

木曾開田高原日記
澤頭修自 ● 四六判 / 定価15000円

展望の山旅

山から見る山、町から見る山
藤本一美・田代博編著 ● A5変型判 / 定価19000円

車窓の山旅：中央線から見える山

山村正光 ● A5変型判 / 定価19000円

関東百山

100の山へのガイド・エッセイ
浅野孝一・打田鉄一・楠目高明・横山厚夫
● A5変型判 / 定価18000円

一日の山・中央線私の山旅

横山厚夫 ● A5変型判 / 定価17000円

カメラの山旅

山の写真と
カメラハイイク12カ月
川口邦雄 ● A5変型判 / 定価18000円

さよなら国鉄 最長片道きつぷの旅

種村直樹 ● 四六判 / 定価13000円

東京付近の山

ブルーガイド編 ● A5変型判 / 定価18000円

ブルーガイド海外版 ⑬

ヨーロッパ・アルプス ● 定価12000円

ブルーガイド海外版 ⑭

ヒマラヤ・トレッキング ● 定価13800円

ブルーガイド海外版 ⑮

アフスカ ● 定価8800円

ブルーガイド海外版 ⑯

ニュージージーランド ● 定価9300円



山と山スキーの専門店

クレッターザック
キスリング
夏冬用テント
カナダ、カウチン・
オリジナルセーター

片桐

東京都文京区湯島3-38-9
〒113 片桐盛之助
電話 東京(831) { 1794番
6680番

信頼されて60年

山とスキー用品専門店



山友社 たかはし

四谷本店 〒160四谷1-20 相田ビル TEL (351)7432・1912
八重洲口店 〒103中央区八重洲1-5-11 TEL (271)1560・8575

新宿駅ビル山友社 〒160マイシティ5番街 TEL (352)6564

岳人

創刊40周年

記念出版

ラインホルト・メスナー著

横川文雄訳 定価6,300円(〒350)



ÜBERLEBT

生きた、還った 8000m峰14座完登

無酸素・軽装備・少人数・短期間——信じられない過酷な状況をことごとく征服。ヒマラヤの巨峰に登りきった鉄人メスナーの偉業と人間像を浮き彫りにする。

極限状態に自らを投げこんだ男の驚異の記録。



大好評 東京新聞の山岳書

関東ぶらり山歩き

迷わず遊べる、関東の山60コース。

岳人編集部・編 定価8000円

関西ぶらり山歩き

だれでも登れる関西の山60コース。

岳人編集部・編 定価8000円

40歳からの山歩き

熟年世代の入門コース精選60関東編

岳人編集部・編 定価8000円

山の雑学ノート

山の楽しさ、山の知識がいっぱい!

岳人編集部・編 定価6800円

登山三三三百科

登山に関するノウハウを徹底網羅。

岳人編集部・編 定価6800円

岩場ルート図集

日本六大岩場ルートを重点的に取材。

小森康行・監修 定価2300円

日本の岩場

日本の代表的岩場をルート図で解説 定価3200円 小森康行・著

ヨーロッパの岩場

本場アルプスの岩場を克明に紹介。 定価3800円 小森康行・著

登山の医学

J・A・ウィルカソン・編 東大スキー山岳部医学部OB・訳 野外スポーツに必携の「救急解説書」。定価2000円

岳人事典

編集委員 徳久球雄・塚本珪一 登山家待望の「山の総合事典」。 定価5000円

新岳人講座全九巻

監修 徳久球雄 塚本珪一が 登山の知識と技術をシリーズで網羅。定価各3000円

雲表のわが山々

山岳俳句の重鎮が綴る「わが心の山」。 定価1500円 岡田日郎・著

LABO (株)電算ラボラトリ

日本山岳会 様向
公益法人会計・
会 員 管 理
シ ス テ ム
受 託
会 社

次代のソフトウェアをリード

当社のモットー

- お客様に誠意を尽くし、行動で献身する。
- 最新の技術で、ユーザー本意のシステム作りを心掛ける。
- 社員の尊厳と権利を尊重するよう努力する。

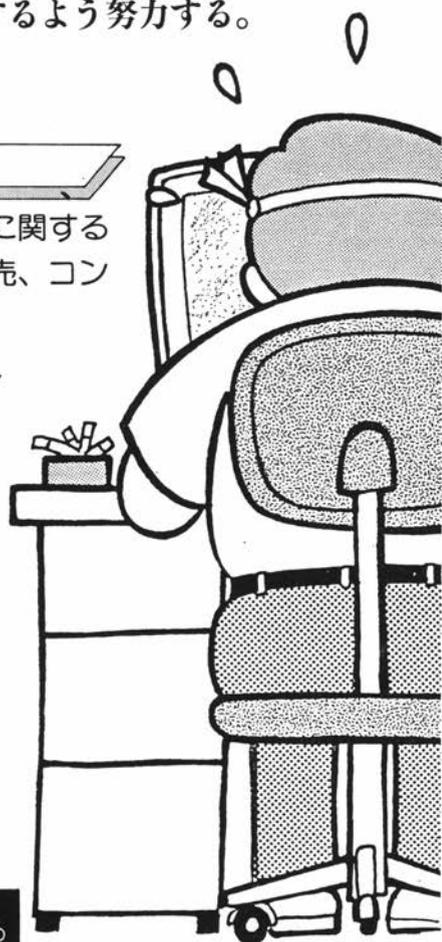
業務内容

電子計算機及びその周辺機器に関する
ソフトウェアの開発、機器販売、コン
サルト、教育等

概 要

設 立：昭和56年9月
資本金：400万円
社員数：20名
所在地：〒160 東京都新宿区西新宿
7-18-12 新都心ビル4F
TEL 03 (371) 1151
FAX 03 (371) 1154

代表取締役：松永 昭洋



全国どこでも御伺いします。

○山岳名著選集 最新刊!

スイス山案内人

の手帳より

岡澤 祐吉著 / 定価2,200円

日本人名士登山家とスイス山案内人との美しい友情とロマ
ン。登山家と山案内人、自然対人との交流を通して真の友
情と人生の喜びを伝える、すべての人に必読の書!!

「山案内人手帳」に記された、登山者と山案内人の信頼と彼らの山に対
する真摯なまでの情熱——人間から人間へと清い友情を通じる美しい
登山者魂——は、山愛好家だけでなく、万人に訴えるものがある。

スイス山岳会報(一九八四年)に掲載された著者の手紙
「前略」私の考えでは、純粹で真実の友情を認識することは、また、人類の文
化の出発点でもあり、もし全ての登山者が仲間の死に出会わずに真実の友情を
識ることができれば、神秘的な思想の「無」だけでなく、神を貫いて神性、無ま
で行こうとしたマイスター・エックハルトの思想も悟ることができると思うの
である。」
あとがきより抜粋

○スポーツ・ノンフィクション・シリーズ

雪に生きる上・下

いがやくにお 猪谷六合雄著 / 新書判 / 各定価740円

雪に生き、スキーに明け暮れながら全国を転々と
して刻みつけた、著者と
工夫と忍耐の生活ぶりを
浮き彫りにする。

山岳名著選集

A5判

好評既刊

氷山雪嶺二千年 定価2200円

周 正著

ナンガ・バルバート回想 定価1900円

カール・ルンツィンガー著

北アルプス白馬讃歌 定価1900円

大谷定雄著

スイスの山々 定価1900円

オレル・フュスリー社編

アムネマチン初登頂 定価2400円

上越山岳協会編

プロモ・リ 世界で最も美しい山 定価2500円

ゲルハルト・レンザー著

「遠い頂」ヌプツェ 定価2500円

登歩渓流会編著

遙かなる天山 定価2500円

Aアルド・セモニンフ著

パミール シルクロードの城塞 定価2500円

田村俊介編著

エヴェレスト登頂記 定価2500円

ジエムス・アルマン著

ダウラギリ登頂 定価1500円

マックス・アイゼリン著

冬のアイガー北壁初登攀 トニー・ヒーパー著 定価1200円

登山ハンドブックシリーズ

(全6巻)

山岳研究会編 A5判 / 各定価980円

1. 登山教本

2. 登山技術

3. 世界の山岳

4. 山の心

5. 山の自然科学

6. 山の資料

豪華写真集 天山

中国新疆人民出版社編 / 定価6900円

アムネマチン 上越山岳協会編 / 定価4800円

中国登山ハンドブック 上越山岳協会編 / 定価1800円

中国人民体育出版 監修 ● A5判

スポーツ・エッセイ・シリーズ ● A5判上製箱入

山に生きて 小島二郎著 定価3500円

スキー 須貴伊・屋磨・加波 ヤマカワ 編 / 定価2800円

高橋半左工門

豊かな

生活環境を築きあげる……………

(建 材)

- カーテンウォール
- サッシ・ドア
- 改装サッシ
- 省エネルギーサッシ
- クリーンルーム設備・関連製品
- 用途別サッシ・ドア
- アルミ発色NKカラー

(機 器)

- 工業用フィルター
- 水処理装置
- 熱交換器
- 温度ブースタ
- フィンチューブ
- 真空凍結乾燥装置
- 各種精密金型

(電 機)

- 電気洗濯機
- 衣類乾燥機
- ウォータークーラ
- 冷凍・冷蔵ショーケース
- 各種ショーケース
- 業務用冷蔵庫
- 産業用保冷庫

日本建鐵株式会社

取締役相談役 早川 種三

東京都千代田区大手町2-6-2 〒100

TEL 東京 (03) 270-6511(大代表)

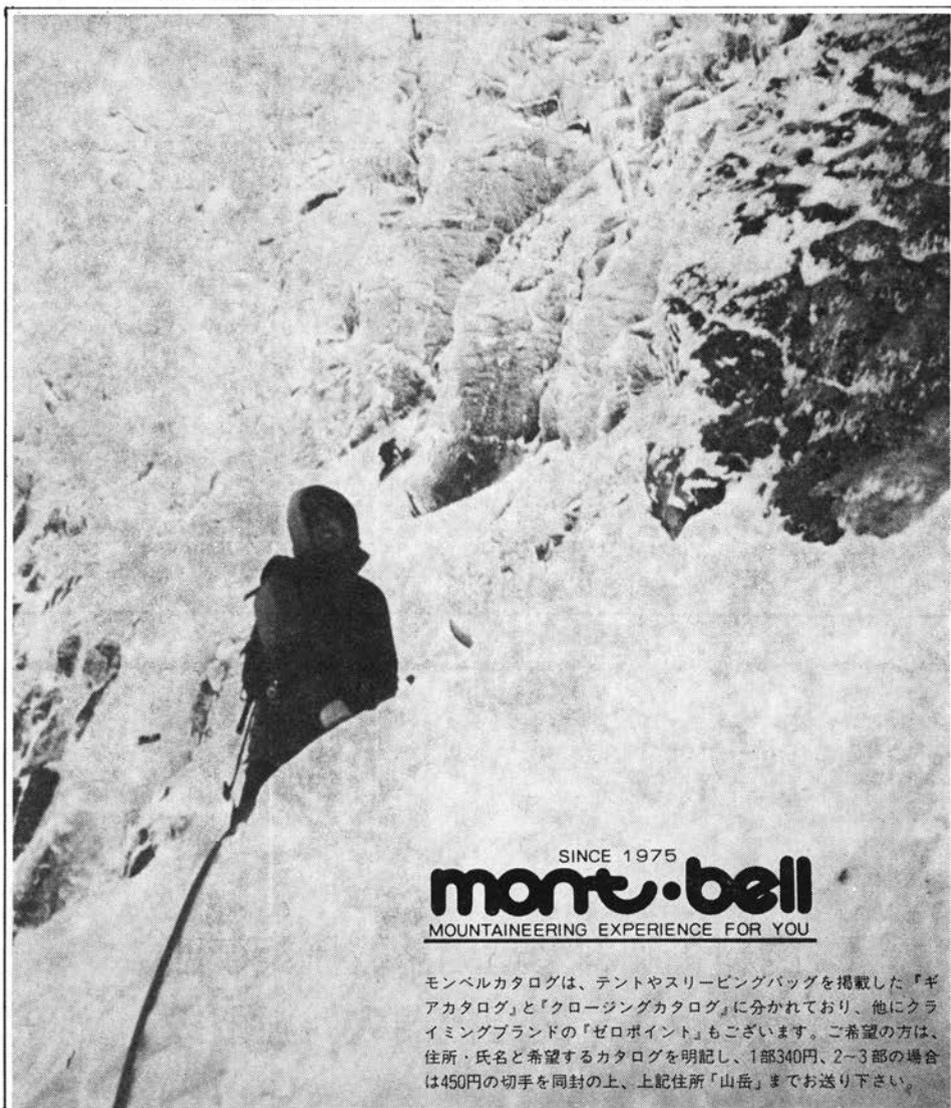
飼料・肥料配合プラントのコンサルタント

飼料・肥料製造用諸機械及び部
品の販売・関連機器の斡旋取扱

株式会社橋エンジニアリング
名古屋市中区橋一丁目27番8号
〒460 ☎名古屋052(321)1501(代)

モンベル

本社 ● 大阪市西区立売堀1丁目6-17 ☎(06)531-4761(代)/〒550
東京営業所 ● 港区芝大門1-15-8布萬スカイビル ☎(03)437-9391(代)/〒105



SINCE 1975
mont·bell
MOUNTAINEERING EXPERIENCE FOR YOU

モンベルカタログは、テントやスリーピングバッグを掲載した「ギアカタログ」と「クローギングカタログ」に分かれており、他にクライミングブランドの「ゼロポイント」もございます。ご希望の方は、住所・氏名と希望するカタログを明記し、1部340円、2-3部の場合は450円の切手を同封の上、上記住所「山岳」までお送り下さい。

MBクラブに入会しませんか!

入会金無料、年会費として切手1500円分ご同封いただければ、「モンベル」「ゼロポイント」「パタゴニア」などのカタログを定期発行の都度、無料配布致します。また、アウトドア情報やイベントへの案内、コーステッカー、エマージェンシーカード兼用の会員証をお送りします。お申し込み、お問い合わせは下記の住所まで氏名、住所、電話番号、職業を明記の上お申し込み下さい。(有効期間1年)

MBクラブ 〒590 堺市南瓦町2番16号 堺市郵便局内私書箱30号 Tel.06-536-5740

ニッチ

“グリーン”の表紙に衣替え”

定評ある著者陣容!

登山・ハイキングシリーズ

全56巻

定価各600円

※登山・ハイキングシリーズにはこれだけの仲間が揃っています。

- | | | |
|--------------|----------------|---------------|
| ① 奥武蔵 武甲・雲取 | ②③ 蔵王連峰 | ④⑤ 金剛山 葛城・岩湧山 |
| ⑥ 奥多摩 大菩薩 | ⑦ 八幡平 岩手山・駒ヶ岳 | ⑧ 六甲・摩耶 |
| ⑨ 奥秩父 | ⑩ 霧ヶ峰 白樺湖・蓼科山 | ⑪ 比良連山 |
| ⑫ 陣馬・高尾 秋川溪谷 | ⑬ 雲ノ平 | ⑭ 大峰・吉野 |
| ⑮ 丹沢山塊 | ⑯ 妙高・戸隠 野尻湖・黒姫 | ⑰ 大台ヶ原 大杉谷 |
| ⑱ 富士・五湖 ミツ峠 | ⑲ 南アルプス北部 | ⑳ 赤目・青山 室生寺 |
| ㉑ 箱根 熱海・湯河原 | ㉒ 中央アルプス | ㉓ 鈴鹿連峰 御在所・伊吹 |
| ㉔ 奥日光 奥鬼怒 | ㉕ 南アルプス南部 | ㉖ 大山・霧山 |
| ㉗ 尾瀬 銀山湖 | ㉘ 北アルプス | ㉙ 三瓶山 帝釈峽 |
| ㉚ 軽井沢 妙義山 | ㉛ 加賀白山 白川郷 | ㉜ 秋吉台 三段峽 |
| ㉝ 伊豆半島 大島 | ㉞ 飯豊・朝日 | ㉟ 九重山 久住高原 |
| ㊱ 三浦半島 鎌倉 | ㊲ 大雪山 層雲峽・然別湖 | ㊳ 英彦山 耶馬溪 |
| ㊴ 美ヶ原 霧ヶ峰 | ㊴ 槍・穂高 アルプス銀座 | ㊵ 阿蘇山 |
| ㊶ 谷川岳 | ㊶ 立山・剣 黒部溪谷 | |
| ㊷ 八ヶ岳 蓼科山 | ㊷ 東海自然歩道Ⅰ | |
| ㊸ 那須・塩原 鬼怒川 | ㊸ 東海自然歩道Ⅱ | |
| ㊹ 登梯・吾妻 安達太良 | ㊹ 東海自然歩道Ⅲ | |
| ㊺ 志賀高原 草津白根 | ㊺ 入笠山 守屋山・高遠 | |
| ㊻ 上高地 乗鞍岳 | ㊻ 苗場・鳥甲 清津峽 | |
| ㊼ 黒部・白馬 鹿島槍 | ㊼ 越後三山 奥只見・巻機山 | |
| ㊽ 房総半島 | ㊽ 御岳 木曾路 | |
| ㊾ 浅間・菅平 | | |

地図の本
尾瀬

白旗史朗著
総ページ
地図とカラー
980円

全改訂!
日本登山図集
総集篇

第1線級の登山家総執筆

A4版 216頁

5色×2色

定価5,800円

書店にてごらん下さい。



地図の 日地出版

本社 東京都千代田区西神田2-2-15

東京 03 (261)5126

支店 大阪市南区南船場2-11-23

大阪 06 (252)7421

山の本屋



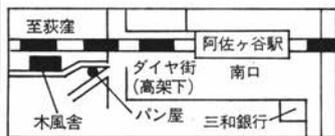
山のエッセイ、記録、ガイド、地図、技術書、自然観察、鳥、動植物、エコロジー、自然と共生するための暮らし……

山と自然のたくさんの本たちが、

あなたとの出会いを待っています。(新刊書籍・雑誌BN)

山岳会誌などの持込みも歓迎!

通信販売も承っております



11:00AM-7:00PM

東京都杉並区阿佐ヶ谷南3-45-4

03(398)2666

JR阿佐ヶ谷駅徒歩3分

木風舎

山と溪谷社創立55周年記念出版

「日本の名峰」シリーズ・全28巻

全国の名だたる名峰がオールカラーで勢ぞろい!!

北は利尻島・利尻山から南は屋久島・宮之浦岳まで、全国の名だたる名峰たちがオールカラーで全員集合! 著者は各山域をホームグラウンドとする第一線のカメラマンたちで、数年にわたって撮り下ろした魅力たっぷりの口絵写真と、代表的登山コースを詳細なカラー写真とガイド文、地図で案内するグラフィック・ガイドとの二本立てです。また各山域のワイドな折込航空写真も付いています。

- | | | | |
|----|-------------|------------|------|
| 別巻 | 28 | 霧島連峰と屋久島の山 | 足利武三 |
| 別巻 | 27 | 阿蘇・九重・祖母 | 足利武三 |
| 26 | 大山と中国山地 | 吉田昭市 | |
| 25 | 大峰・台高・石鎚 | 吉田昭市 | |
| 24 | 白山・奥美濃・伊吹 | 吉澤康暢 | |
| 23 | 穂高連峰と乗鞍岳 | 内田修 | |
| 22 | 槍・常念・燕岳 | 花畑日尚 | |
| 21 | 雲ノ平・笠・裏銀座 | 小池潜 | |
| 20 | 立山・剣・薬師 | 西田高生 | |
| 19 | 白馬岳と後立山連峰 | 近藤辰郎 | |
| 18 | 中央アルプスと御岳 | 新妻喜永 | |
| 17 | 荒川・赤石・聖岳 | 今野岳志 | |
| 16 | 北岳・甲斐駒・塩見 | 中西俊明 | |
| 15 | 八方岳連峰と蓼科山 | 新妻喜永 | |
| 14 | 富士・御坂・丹沢 | 荒川紀一 | |
| 13 | 秩父・多摩・大菩薩 | 渡辺千昭 | |
| 12 | 浅間・上毛三山・西上州 | 新妻喜永 | |
| 11 | 妙高・戸隠・志賀 | 内田修 | |
| 10 | 谷川連峰・越後三山 | 小川清美 | |
| 9 | 日光・足尾・南会津 | 花畑日尚 | |
| 8 | 尾瀬・力原・燧・至仏 | 花畑日尚 | |
| 7 | 磐梯・吾妻・那須 | 岩沢正平 | |
| 6 | 飯豊・朝日連峰 | 岩沢正平 | |
| 5 | 鳥海・蔵王・月山 | 加藤久一 | |
| 4 | 八甲田・八幡平・早池峰 | 高寺志郎 | |
| 3 | 日高・夕張・増毛 | 梅沢俊 | |
| 2 | 大雪・石狩・十勝 | 市根井孝悦 | |
| 1 | 利尻・知床・阿寒 | 岡田昇 | |

●定価各1700円 千不要(別巻『日本の名峰五〇〇』のみ定価1200円)

B5判変型(245×182ミリ)/オールカラー108頁/略装丁

*全巻お買い上げの方に別巻『日本の名峰五〇〇』をプレゼント致します。

〒105 東京都
港区芝大門1-1-33



山と溪谷社

☎03(436)4055
振替・東京8-60249



中川 武

バッジ・タイ止・ループタイ・美術造型看板

〒102 東京都千代田区1番町4 TEL262・0525

よりよきテントの最高峰を めざす吉田テント!

- 1978年 植村直己北極点単独旅行
- 1978年 日本大学北極点遠征隊
- 1980年 植村直己アコンカグア登山隊
- 1981年 北海道大学バルンツェ登山隊
- 1981年 植村直己冬期エベレスト登山隊
- 1981年 明治大学エベレスト登山隊
- 1981年 早稲田大学K2登山隊
- 1984年 第26次南極観測隊
- 1985年 和泉雅子北極点遠征隊
- 1985年 第27次南極観測隊
- 1987年 風間深志北極点遠征隊



夏山用テント

冬山用テント

テントの専門メーカー

小さな店の大きな自信! 吉田テント 〒167 東京都杉並区桃井1-3-3
☎03(399)2548・FAX03(395)4655

山の 本 茗 溪 堂

☎一〇一
電話 〇三二九一
振替東京八二四七三三
東京都千代田区神田駿河台三一

山稜の読書家
島田 巽 3,900円

山・人・本
島田 巽 2,400円

山なみ帖
小谷隆一 3,200円

わが登高行 上巻 3,800円
三田幸夫 下巻 4,500円

静かなる山 正編 1,700円
川崎精雄ほか 続編 1,800円

登山史の周辺
山崎安治 3,800円

登山史の発掘
山崎安治 2,500円

快晴の山
織内信彦 2,500円

森林・草原・氷河
加藤泰安 2,500円

山に忘れたパイプ
藤島敏男 3,200円

忘れえぬ山の人びと
望月達夫 1,900円

折々の山
望月達夫 1,900円

山を見る日
川崎精雄 2,900円

山は満員
渡辺公平 2,200円

すこし昔の話
初見一雄 1,200円

我がスキーシュプール
麻生武治 3,400円

小さな頂
一原有徳 2,900円

北の山 続編
伊藤秀五郎 2,700円

詩集 山の風物誌
伊藤秀五郎 1,400円

原野から見た山 画文集
坂本直行 4,200円

わたしの草と木の絵本
坂本直行 1,200円

雪原の足あと 画文集
坂本直行 3,800円

坂本直行 淡彩画絵はがき
2集、3集 各300円 4集 400円

山旅の足音
渡辺兵力 1,400円

ランタン紀行
エーデルワイス・クラブ 1,500円

エーデルワイスの詩
坂倉登喜子 3,800円

カンチェンジュンガ縦走
カンチェ登山隊 5,000円

ナンダ・デヴィ縦走1976
ナンダデヴィ登山隊 3,900円

マナスル1974
日本女子マナスル隊 3,400円

登頂ゴジュンバ・カン
高橋 進 900円

遙かなる未踏の尾根
日本山岳会東海支部 4,800円

グリンデルヴァルトの山案内人
ブラーヴァン 3,800円

続ブータン感傷旅行
小方全弘 1,500円

山岳 日本山岳会
62年~81年(1986年)

2,000~3,500円
山岳総索引 1,000円

低山高蹤
神谷恭遺稿と追悼 2,900円

山ひとすじ
中村謙遺稿と追悼 3,400円

川内山とその周辺
笠原藤七 1,500円

青空と輝く残雪の山々
山田、横山共著 1,300円

句集 雷鳥
小林碧郎 2,200円

幻の山岳部誌・原裝復刻300セット刊行!!

登 高 行

(全17冊／別冊索引付)

(大正8年第1冊～昭和49年第17冊)
揃定価98,000円

本書の特色

- 本書は一慶応大学山岳部の部誌の域を超えて岳人たちに多大な感動を与えた憧れの名著です。
- 本書で活躍した著者の中から鹿子木員信・大島亮吉・横有恒・三田幸夫等の大くの山岳名作家が出現しました。
- 総頁約4800頁、写真など200面からなる本書は入手はもちろん閲覧すら困難な“幻の本”です。



発行 出版科学総合研究所 東京都千代田区神田神保町1丁目47番地大森ビル2F 〒101
電話 東京 (03) 233-3241~3

内容見本送呈

一流アルピニストがVTRで実施指導!!

最新VTR登山技術シリーズ (全六巻)

現代 登山技術集成

全巻そろい 定価15万円(マニュアル付)

全巻内容

- | | |
|--------------|----------------------|
| 1 無雪期登山 …… 1 | 5 ロッククライミング |
| 2 無雪期登山 …… 2 | 6 フリークライミング |
| 3 積雪期登山 …… 1 | 企画監修 (社)日本山岳協会 |
| 4 積雪期登山 …… 2 | 制作 (株)オートスライドプロダクション |
| | 製作協力 (株)カモンカ |

既刊四巻好評発売中 昭和63年3月全巻完結

総発売元 株式会社 日本専門書販売 〒101 東京都千代田区神田神保町1-16 三京ビル3F
TEL (03) 295-0466 代

編集後記

* 昭和六十二年度の総会で報告された会員総数は四二一〇名。そのうち通常会員は四〇九七名です。東京麴町の本会ルームでは、各種会合や行事がおこなわれていますが、どの集まりも、収容能力の関係もあって、三、四十名の参加者があれば大盛況というのが現状です。ということは、どんなに内容の濃い集まりでも、その恩恵を享受できるのは全会員のわずかにすぎず、残りの、なんと九十九分の会員は、会の活動の大きな核の一つであるそうした集まりに参加できず、内容も正確にはわからず、会の動向も充分理解できないことになってしまふわけです。そこで「山岳」では、そうした行事の中から特に重要と思われるもの、記録として残しておきたいものを重点に内容を紹介しようつとめています。

* いうまでもなく「山岳」は、特定の趣味や目的を持つ一部の人のものではありません。なによりもまず、歴史や文芸、科学的研究、高峻山岳での尖鋭的な実践や幅広い自然との対話など、多角的、多面的に山とかかわりを持つそうした四〇〇〇人の会員のためのものです。今号でもそうした方々のうちから助言や提案をいただき、誌面を構成することができました。九十九分の会員各位にも喜んでいただけたら幸いです。

* 今号でもまた、前項のような意図に反して賛同を得られず掲載できなかつたものがありました。残念です。

* 永年つづいてきた表紙のローマ数字による号数表示は、趣きも愛着もあるのですが、会員数の増加などから不都合な面もあるようなので、今号からアラビア数字に変更しました。

* 今号でも高遠宏、松家晋両氏の協力を得ました。

(編集担当・大森)

山岳 第八十二年(通巻一四〇号)

一九八七年十二月二十日発行

価三五〇〇円

発行所 社団法人 日本山岳会

東京都千代田区四番町五一四

サンビュウハイツ四番町

(〒一〇〇二)

電話 東京二六一局四四三三番

振替口座 東京三一四八二九番

発行人 今 西 寿 雄

編集人 大 森 久 雄

印刷所 株式会社 技 報 堂

発売所 株式会社 茗 溪 堂

東京都千代田区神田駿河台二一一

電話 東京二九一局九四四二番

振替口座 東京八一二四七二三番

本誌掲載の記事、写真および地図の無断転載を禁じます。

世界の山旅



総合ツアーカタログご請求下さい。

トレッキングからエクスペディションまで



アルパインツアーはヒマラヤからカラコルム、ヨーロッパアルプス、アラスカ、カナダ、USA、南極、アンデス、パタゴニア、ニュージーランド、中国、アフリカ、北極圏その他の山岳地帯・辺境地帯への主催ツアーやインフォメーションを用意しております。

もちろん日本国内の山旅も企画しております。トレッキングのパッケージはもとより登山隊のための航空便や地上手配などに関し、私達は豊富な知識と経験をもとにご相談に応じることが出来ます。ぜひ、お問合せ下さい。

運輸大臣登録一般旅行業第490号 / 日本旅行業協会正会員 / ロイヤルネパール航空代理店



アルパインツアーサービス株式会社

東京 / 〒105 東京都港区新橋2-2-2 (川志満ビル7階)

☎ 03(503)1911(代表)

大阪 / 〒541 大阪市東区備後町5-15 (東洋ビル4階)

☎ 06(227)5194(代表)

名古屋 / 〒450 名古屋市中村区名駅3-23-6 (第2千福ビル4階)

☎ 052(581)3211(代表)

福岡 / 〒810 福岡市中央区大名2-9-25 (わこうビル3階)

☎ 092(715)1557(代表)

The Journal of
The Japanese Alpine Club

S A N G A K U

Vol. 82

1987